愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第139集

島崎遺跡
伝法寺本郷遺跡
中之郷北遺跡

2006

（財）愛知県教育・スポーツ振興財団

愛知県埋蔵文化財センター





巻頭写真１　遺跡遠景１

１：島崎遺跡と伝法寺本郷遺跡（南上空から木曽川方面を臨む）
２：伝法寺本郷遺跡と宇福寺遺跡（北上空から伊勢湾方面を臨む）





巻頭写真２　遺跡遠景２

１：宇福寺遺跡と中之郷北遺跡（南上空から木曽川方面を臨む）
２：中之郷北遺跡と朝日遺跡（北上空から伊勢湾方面を臨む）





巻頭写真３　伝法寺本郷遺跡の遺構と遺物

１：Ｃ区小区画水田（古墳時代に帰属すると推定）
２：Ｄ区古代出土遺物（折戸10号窯式期の典型的な組成、金属製品生産関連遺物が伴う）

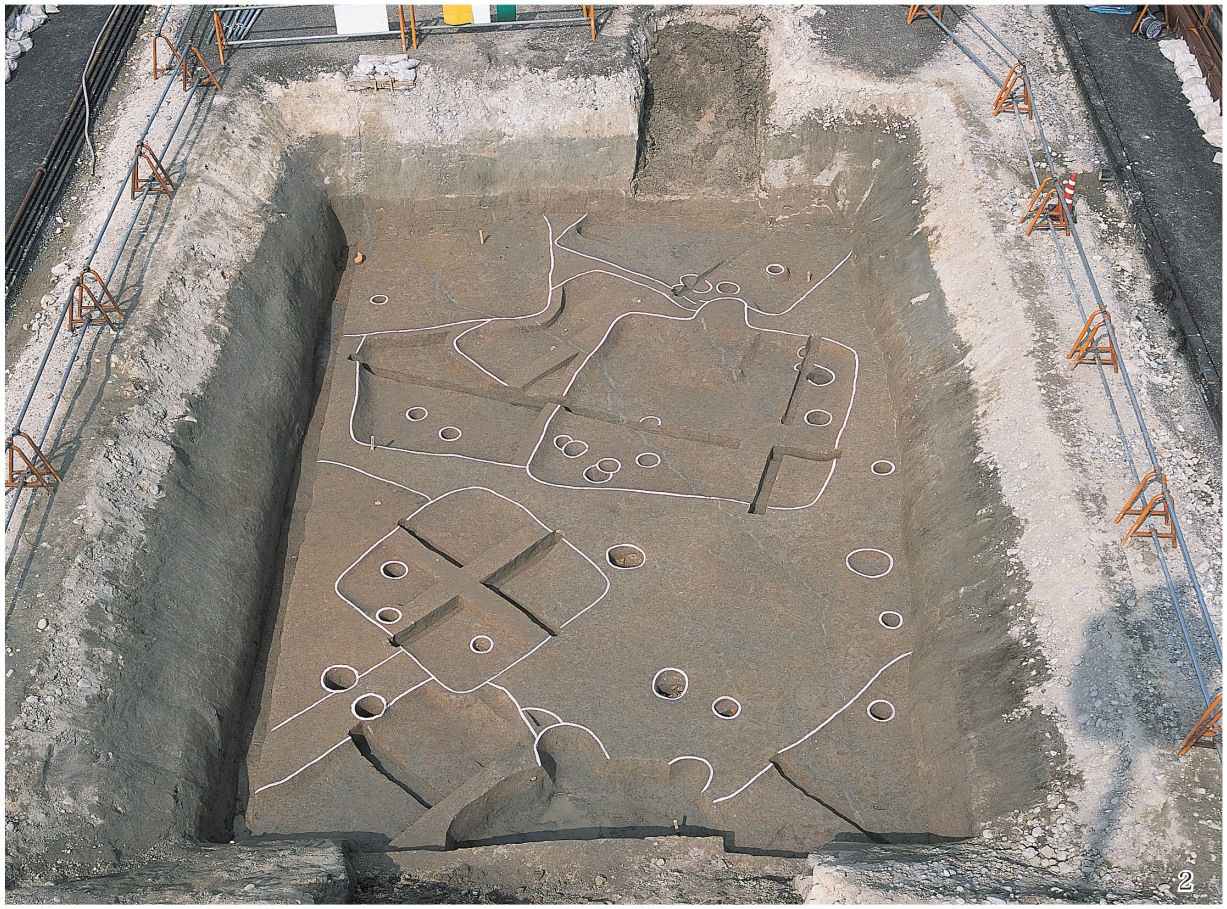




巻頭写真４　中之郷北遺跡の調査

１：A区NR01の調査（南北に縦断する河川と杭列、７世紀に急速に埋没）
２：C区堆積状況（現地表からⅤ層までの堆積状況）





巻頭写真５　中之郷北遺跡の遺構

１：H区SU04全景（Ⅳｄ層で検出、松河戸Ⅰ式の良好な一括資料が出土）

２：Ⅰ区古墳時代中期～古代竪穴住居群（５世紀前半、５世紀後半、７世紀前半、８世紀後半の竪穴住居が重複）



1



2

巻頭写真６　中之郷北遺跡の遺物１

１：各調査区Ⅳｂ・Ⅳａ層出土遺物（松河戸Ⅰ式後半～松河戸Ⅱ式前半の土器に鍛冶関連遺物が伴出）
２：Ｈ区Ⅳｄ・Ⅳｃ層出土土器（松河戸Ⅰ式前半の良好な層位資料）



1



2

巻頭写真７　中之郷北遺跡の遺物２

１：Ⅰ区から出土した古墳時代中期の土器（松河戸Ⅱ式～宇田Ⅱ式の資料）
２：古代の出土遺物（D・Ⅰ区から出土した８世紀の資料）



巻頭写真８　宇福寺遺跡の土器

立会調査時に採集した集合資料、月影式の器台、箱清水式の甕、線刻土器、大型壷など特徴的な個体が多い

序

濃尾平野を南北に縦断する国道22号線は、愛知と岐阜をつなぐ幹線道路として近代以降重要な位置を占めてきました。また過去においても美濃街道や岐阜街道などとして、尾張と美濃との関係だけではなく、この地方全域にわたっての物資や情報の主要動脈としての役割を担ってきました。

今回これらの役割をさらに推し進める目的で、名古屋高速3号線（県道高速清州一宮線）の建設が行われることとなりました。それを受け私ども（財）愛知県教育・スポーツ振興財団　愛知県埋蔵文化財センターは、愛知県教育委員会の委託事業として、平成12年度には島崎遺跡、平成13年度には伝法寺本郷遺跡と中之郷北遺跡の発掘調査を行ってまいりました。一宮市から西春町までという広範囲での調査ではありましたが、島崎遺跡では中世の集落が、伝法寺本郷遺跡では古代から中世の集落・水田が、中之郷北遺跡では古墳時代の集落が見つかるとともに、濃尾平野における遺跡の形成過程や地形環境の変化が明らかになりました。今後、本書の成果が学術的に活用され、ひいては埋蔵文化財の保護につながることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査にあたり、地元住民の皆様をはじめ、関係者及び関係諸機関のご理解とご協力をいただきましたことに対して、厚く御礼を申し上げます。

平成18年3月

財団法人　愛知県教育・スポーツ振興財団

理事長　**古池　庸男**

例　言

1．本書は、愛知県一宮市に所在する島崎遺跡（県遺跡番号 02107：愛知県教育委員会 1994『愛知県遺跡地図（Ⅰ）尾張地区』)、伝法寺本郷遺跡（県遺跡番号 02108)、愛知県西春日井郡西春町中之郷北遺跡（県遺跡番号 19016）の発掘調査報告書で、西春日井郡西春町・一宮市宇福寺遺跡（県遺跡番号 19017・02114）の立会調査概要も同時に収録した。

2．発掘調査は、県道高速清洲一宮線建設にかかる事前調査として、名古屋高速道路公社より愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター（当時、現財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター）が実施した。なお、発掘調査にあたって、株式会社四門（島崎遺跡)、リメックス株式会社（当時、現テイケイトレード株式会社、伝法寺本郷遺跡)、佐伯建設工業株式会社（伝法寺本郷遺跡・中之郷北遺跡）より支援を受けた。

3．調査期間と調査面積、調査担当者は、別表に示した（Ⅰ—第２章—第２表)。

4．発掘調査にあたっては、次の各関係機関のご指導とご協力を得た。
愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室・愛知県埋蔵文化財調査センター　名古屋高速道路公社
一宮市教育委員会　西春町教育委員会

5．報告書作成にかかる整理作業には、次の方々の助力を得た。
河合明美・安達崇子（調査研究補助員）　伊藤弘江　黒川陽子　時田典子　水野留香（整理補助員）
なお、出土遺物の写真撮影は、金子和久氏（写真工房・遊)、福岡栄氏（スタジオ・ピュア）に委託した。

6．発掘調査、報告書作成の過程で、次の各氏をはじめ、多くの方々からご指導、ご協力を得た。
青木一男　青木勘時　岩原　剛　加納俊介　小池香津江　城ヶ谷和広　鈴木とよ江　田口一郎　土本典生
原田　幹　藤澤良祐　北條献示　森　泰通　若狭　徹

7．本書の執筆は、Ⅰ、Ⅲ—第１～３・５章、Ⅳ—第１～３章・第４章（８）～（10)、第５章、Ⅴを早野浩二（本センター調査研究員)、Ⅱを宮腰健司（本センター主査)、Ⅲ—第４章（１)、Ⅳ—第４章（１）を山形秀樹（株式会社パレオ・ラボ)、Ⅲ—第４章（２)、Ⅳ—第４章（６）を植田弥生（株式会社パレオ・ラボ)、Ⅲ—第４章（３）を鵜飼雅弘（本センター調査研究員)、Ⅳ—第４章（２）を馬場健司・辻本裕也（パリノ・サーヴェイ株式会社)、（３）をパレオ・ラボＡＭＳ年代測定グループ、（４）を藤根久・長友純子（株式会社パレオ・ラボ)、（５）を小村美代子（株式会社パレオ・ラボ)、（７）を森勇一（愛知県立津島東高校）が担当した。

8．遺構番号は原則として発掘調査時に用いたものを踏襲した。なお、使用する遺構記号は以下のとおりであるが、厳密な統一性はない。
ＳＫ；土坑、ＳＥ；井戸、ＳＢ；建物、ＳＡ；柵、ＳＴ；耕作地（水田・畑地）
ＳＤ；溝、ＳＵ；遺物集積、ＮＲ；自然流路、ＳＸ；その他不明遺構

9．発掘調査および本書で使用した座標は、国土座標第Ⅶ系に準拠した。ただし、旧標準の「日本測地系」で表記している。

10．本書で使用する土層の色調については、『新版標準土色帳』を参考に記述した。

11．発掘調査の記録（実測図、写真等）は、財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターで保管している。

12．出土遺物は、愛知県埋蔵文化財調査センター（愛知県海部郡弥富町前ヶ須新田字野方 802-24）で保管している。

13．本書の編集はⅠ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴを早野浩二、Ⅱを宮腰健司が担当した。

目　次

巻頭写真

Ⅰ　前章 1

第１章　調査の経緯 2
第２章　調査の経過 4
第３章　周辺の環境 6

Ⅱ　島崎遺跡 11

第１章　遺跡の環境 12
第２章　調査の概要 12
第３章　遺構・遺物 15
第４章　まとめ 49

Ⅲ　伝法寺本郷遺跡 55

第１章　調査の概要 56
第２章　基本層序と検出遺構 58
第３章　遺構と遺物 60
第４章　分析・考察 92
第５章　まとめ 104

Ⅳ　中之郷北遺跡 107

第１章　調査の概要 108
第２章　基本層序と検出遺構 110
第３章　遺構と遺物 114
第４章　分析・考察 220
第５章　まとめ 294

Ⅴ　宇福寺遺跡の調査 299

第１章　調査の経緯 300
第２章　立会調査の概要 304
第３章　採集遺物の概要 310
第４章　考察 331
第５章　まとめ 348

報告書抄録

巻頭図版目次

巻頭写真１　遺跡遠景１
巻頭写真２　遺跡遠景２
巻頭写真３　伝法寺本郷遺跡の遺構と遺物
巻頭写真４　中之郷北遺跡の調査
巻頭写真５　中之郷北遺跡の遺構
巻頭写真６　中之郷北遺跡の遺物１
巻頭写真７　中之郷北遺跡の遺物２
巻頭写真８　宇福寺遺跡の土器

挿図目次

〈Ⅰ　前章〉
第 １ 図　遺跡の位置
第 ２ 図　試掘地点と調査遺跡
第 ３ 図　権現山遺跡の縄文土器
第 ４ 図　伝西大門遺跡の須恵器
第 ５ 図　周辺の遺跡分布
第 ６ 図　遺跡周辺の地形
〈Ⅱ　島崎遺跡〉
第 ７ 図　遺跡周辺地形図
第 ８ 図　調査区位置図
第 ９ 図　Ａ区 SD04・05・06・07 土層断面
第 １０ 図　Ａ区第１面遺構図
第 １１ 図　Ａ区第２面遺構図
第 １２ 図　Ａ区東壁・南壁土層断面図
第 １３ 図　Ａ区出土遺物実測図
第 １４ 図　Ｂ区 SX01 土層断面
第 １５ 図　Ｂ区第１面遺構図
第 １６ 図　Ｂ区第２面遺構図
第 １７ 図　Ｂ区東壁・南壁土層断面図
第 １８ 図　Ｂ区出土遺物実測図
第 １９ 図　Ｃ区第１面遺構図
第 ２０ 図　Ｃ区第２面遺構図
第 ２１ 図　Ｃ区東壁・南壁土層断面図
第 ２２ 図　Ｄ区第２面遺構図
第 ２３ 図　Ｄ区東壁・北壁土層断面図
第 ２４ 図　Ｄ区 SK14、SK09・47・51・52 土層断面
第 ２５ 図　Ｄ区 SK30、SK05、SK34 土層断面
第 ２６ 図　Ｄ区出土遺物実測図
第 ２７ 図　Ｅ区 SK04、SK05 土層断面
第 ２８ 図　Ｅ区第１面遺構図
第 ２９ 図　Ｅ区第２面遺構図
第 ３０ 図　Ｅ区東壁・北壁土層断面図
第 ３１ 図　Ｅ区出土遺物実測図
第 ３２ 図　Ｆ区 SK51・52 土層断面
第 ３３ 図　Ｆ区第１面遺構図
第 ３４ 図　Ｆ区第２面遺構図
第 ３５ 図　Ｆ区東壁・北壁土層断面図
第 ３６ 図　Ｆ区出土銭貨拓本・Ｘ線写真
第 ３７ 図　Ｆ区出土遺物実測図
第 ３８ 図　Ｇ区出土遺物実測図
第 ３９ 図　Ｇ区第１面遺構図
第 ４０ 図　Ｇ区第２面遺構図
第 ４１ 図　Ｇ区西壁・北壁土層断面図
第 ４２ 図　Ｈ区出土遺物実測図
第 ４３ 図　Ｈ区第２面遺構図
第 ４４ 図　Ｈ区西壁・南壁土層断面図
第 ４５ 図　Ⅰ区第１面遺構図
第 ４６ 図　Ⅰ区第２面遺構図
第 ４７ 図　Ⅰ区第３面遺構図
第 ４８ 図　Ⅰ区東壁・北壁土層断面図
第 ４９ 図　Ⅰ区 SD01 土層断面
第 ５０ 図　Ⅰ区 SD02・03 土層断面
第 ５１ 図　Ⅰ区出土遺物実測図１
第 ５２ 図　Ⅰ区出土遺物実測図２
第 ５３ 図　Ｊ区第１面遺構図
第 ５４ 図　Ｊ区第２面遺構図
第 ５５ 図　Ｊ区東壁・南壁土層断面図
第 ５６ 図　Ｊ区出土遺物実測図
第 ５７ 図　明治 17 年地籍図
第 ５８ 図　加工円盤分布図

第 59 図　島崎遺跡主要遺構配置図
〈Ⅲ　伝法寺本郷遺跡〉
第 60 図　試掘調査の所見
第 61 図　伝法寺本郷遺跡調査区配置図
第 62 図　伝法寺本郷遺跡検出遺構の概要
第 63 図　伝法寺本郷遺跡調査区土層断面柱状図
第 64 図　A区東壁土層断面図
第 65 図　A区下面遺構図
第 66 図　A区古代出土遺物実測図
第 67 図　A区遺構土層断面図
第 68 図　A区上面遺構図
第 69 図　A区中世～近世出土遺物実測図
第 70 図　A区出土金属製品生産関連遺物実測図
第 71 図　B区東壁土層断面図
第 72 図　B区遺構土層断面図
第 73 図　B区遺構図
第 74 図　B区出土遺物実測図
第 75 図　C区東壁土層断面図
第 76 図　C区遺構図
第 77 図　C区出土遺物実測図
第 78 図　D区東壁土層断面図
第 79 図　D区遺構図
第 80 図　D区 SB01 遺構図・遺物出土状態図
第 81 図　D区 SB02 遺物出土状態図
第 82 図　D区 SB02 土層断面図
第 83 図　D区 SK02 遺構図
第 84 図　D区出土遺物実測図
第 85 図　八王子遺跡出土鋳型（内型）実測図
第 86 図　D区出土金属製品生産関連遺物実測図
第 87 図　E区遺構図
第 88 図　E区東壁土層断面図
第 89 図　E区出土遺物実測図
第 90 図　F区西壁土層断面図
第 91 図　F区出土遺物実測図
第 92 図　F区遺構図
第 93 図　G区東壁土層断面図
第 94 図　G区下面遺構図
第 95 図　G区上面遺構図
第 96 図　G区出土遺物実測図
第 97 図　伝法寺本郷遺跡調査区と地籍図の照合
第 98 図　丹羽郡伝法寺村絵図
第 99 図　春日井郡宇福寺村絵図
第 100 図　伝法寺本郷遺跡の景観復原
〈Ⅳ　中之郷北遺跡〉
第 101 図　試掘調査の所見
第 102 図　中之郷北遺跡調査区配置図
第 103 図　中之郷北遺跡検出遺構の概要
第 104 図　中之郷北遺跡調査区土層断面柱状図 1
第 105 図　中之郷北遺跡調査区土層断面柱状図 2
第 106 図　A区東壁土層断面図
第 107 図　A区 NR01 遺構図
第 108 図　A区 NR01- 3 層杭列遺構図 1
第 109 図　A区 NR01- 3 層杭列遺構図 2
第 110 図　A区 NR01 遺物出土状況
第 111 図　A区 NR01-4 層出土遺物実測図
第 112 図　A区 NR01- 3 層出土遺物実測図
第 113 図　A区 NR01- 3 層出土木製品実測図
第 114 図　A区Ⅰ層・SD04 出土遺物実測図
第 115 図　A区中世～近世遺構図
第 116 図　Ba区東壁土層断面図
第 117 図　Ba区 NR03・01 遺構図
第 118 図　Ba区中世～近世遺構図
第 119 図　Ba区出土遺物実測図
第 120 図　Bb区古墳時代初頭遺構図
第 121 図　Bb区東壁土層断面図
第 122 図　Bb区古墳時代中期遺構図
第 123 図　Bb区 SU01 遺物出土状態図
第 124 図　Bb区出土遺物実測図
第 125 図　C区西壁土層断面図
第 126 図　C区古墳時代初頭遺構図
第 127 図　C区古代遺構図
第 128 図　C区近世遺構図 1
第 129 図　C区出土遺物実測図
第 130 図　D区西壁土層断面図
第 131 図　D区古墳時代初頭・古墳時代後期遺構図
第 132 図　D区古墳時代出土遺物実測図
第 133 図　D区古代遺構図
第 134 図　D区 SB03 遺構図

第 135 図　D区 SB03 竈遺構図
第 136 図　D区 SB03 支脚
第 137 図　D区 SB01・02 遺構図
第 138 図　D区 SB04 遺構図
第 139 図　D区 SB05 遺構図
第 140 図　D区 SB06・07・08 遺構図
第 141 図　D区中世遺構図
第 142 図　D区古代出土遺物実測図
第 143 図　E区西壁土層断面図
第 144 図　E区古代遺構図
第 145 図　E区Ⅳ層・Ⅱ層出土遺物実測図
第 146 図　E区出土石製品実測図
第 147 図　E区中世～近世遺構図
第 148 図　F区西壁土層断面図
第 149 図　F区古代～中世遺構図
第 150 図　F区近世遺構図
第 151 図　F区出土遺物実測図
第 152 図　F区北壁土層断面図
第 153 図　D・E・F区古墳時代水田遺構全体図
第 154 図　D・E・F区古墳時代水田遺構図
第 155 図　G区西壁土層断面図
第 156 図　G区古墳時代中期／中世遺構図
第 157 図　G区近世遺構図
第 158 図　G区出土遺物実測図
第 159 図　G区出土金属製品実測図
第 160 図　H区西壁土層断面図
第 161 図　H区古墳時代初頭遺構図
第 162 図　H区 SU04 遺構図・遺物出土状態図
第 163 図　H区 SU01 ～ 03 遺構図・遺物出土状態図
第 164 図　H区 SU04・Ⅴ層出土遺物実測図
第 165 図　H区Ⅳc層・Ⅳb層・SU01 ～ 03 出土遺物実測図
第 166 図　SD44 土層断面図
第 167 図　H区古代遺構図
第 168 図　H区中世遺構図
第 169 図　H区近世遺構図
第 170 図　H区近代遺構図
第 171 図　H区古墳時代後期～古代出土遺物実測図
第 172 図　H区Ⅰ層・中世～近代出土遺物実測図
第 173 図　H区出土石製品・鉄製品・金属製品生産関連遺物実測図
第 174 図　Ⅰ区西壁土層断面図
第 175 図　Ⅰ区古墳時代中期遺構図
第 176 図　Ⅰ区古墳時代中期～古代遺構図
第 177 図　Ⅰ区 SB09・03 遺構図
第 178 図　Ⅰ区 SB10 遺構図／遺物出土状態図
第 179 図　Ⅰ区 SB07 遺物出土状態図
第 180 図　Ⅰ区 SK54・80 遺物出土状態図
第 181 図　Ⅰ区古墳時代出土遺物実測図 1
第 182 図　Ⅰ区古墳時代出土遺物実測図 2
第 183 図　Ⅰ区 SB08・06 遺構図
第 184 図　Ⅰ区 SB05・04・02 遺構図
第 185 図　Ⅰ区 SB02 竈遺構図
第 186 図　Ⅰ区 SB01 遺構図
第 187 図　Ⅰ区古墳時代中期～古代遺構変遷図
第 188 図　Ⅰ区古代出土遺物実測図 1
第 189 図　Ⅰ区古代出土遺物実測図 2
第 190 図　Ⅰ区古代出土遺物実測図 3
第 191 図　Ⅰ区古代出土遺物実測図 4
第 192 図　Ⅰ区中世遺構図
第 193 図　Ⅰ区中世出土遺物実測図
第 194 図　Ⅰ区鉄製品・金属製品生産関連遺物実測図
第 195 図　J区東壁土層断面図
第 196 図　J区古代遺構図
第 197 図　J区近世～近代遺構図
第 198 図　J区出土遺物実測図
第 199 図　J区出土石製品・金属製品実測図
第 200 図　K区西壁土層断面図
第 201 図　K区近世～近代遺構図
第 202 図　K区出土遺物実測図
第 203 図　調査地点の層序および分析層準
第 204 図　Ｂａ・Ｂｂ区の植物珪酸体含量
第 205 図　D・E区の植物珪酸体含量
第 206 図　F・G区の植物珪酸体含量
第 207 図　H・K区の植物珪酸体含量
第 208 図　測定試料実測図
第 209 図　胎土分析試料実測図
第 210 図　赤色顔料の蛍光Ｘ線スペクトル図
第 211 図　月縄手遺跡土坑
第 212 図　H区Ⅳ層中の土器群包含状況

第 213 図　H区Ⅳ層出土土器群の組成
第 214 図　中之郷北遺跡Ⅳ層層位資料と月縄手遺跡土坑資料との対比
第 215 図　S 字甕口縁部形状の比較
第 216 図　高杯杯部稜径と稜深比の比較
第 217 図　松河戸遺跡 SK201 出土土器
第 218 図　Ⅰ区出土土器の変遷
第 219 図　八王子遺跡 NR01 最上層出土土器
第 220 図　朝日遺跡新資料館地点出土土器
第 221 図　朝日遺跡各地点出土土器
第 222 図　鍛冶関連遺物出土遺跡の分布
第 223 図　中之郷北遺跡の鞴羽口と関連資料
第 224 図　福田遺跡の鍛冶関連遺物と出土遺構
第 225 図　法海寺遺跡の鍛冶関連遺物と関連資料
第 226 図　吉田奥遺跡 3 号住居跡と出土遺物
第 227 図　門間沼遺跡の鍛冶関連遺物と関連資料
第 228 図　大県遺跡の鞴羽口
第 229 図　石川条里遺跡の鞴羽口
第 230 図　鞴羽口の形態の変遷
第 231 図　尾張地域における古墳時代中期の鞴羽口の変遷
第 232 図　四反畑遺跡と大県遺跡の韓式系土器甑
第 233 図　権現山 1 号墳の石室
第 234 図　中之郷北遺跡と大淵遺跡の管状土錘
第 235 図　飯守神遺跡の「美濃」刻印須恵器
第 236 図　美濃須衛産須恵器の諸例
第 237 図　三河型甕の諸例と関連資料
第 238 図　川原石積み横穴式石室・「美濃」刻印須恵器・三河型甕・製塩土器の分布
第 239 図　中之郷北遺跡の景観復原
第 240 図　中之郷北遺跡調査区と地籍図の照合
第 241 図　春日井郡中之郷村絵図
〈Ⅴ　宇福寺遺跡の調査〉
第 242 図　試掘調査の所見
第 243 図　宇福寺遺跡立会調査工区―北半
第 244 図　宇福寺遺跡立会調査工区―南半
第 245 図　P 83 工区土器分布状況模式図
第 246 図　P 82 工区土器分布状況模式図
第 247 図　P 80 工区土器分布状況模式図
第 248 図　調査区土層断面柱状図 1
第 249 図　調査区土層断面柱状図 2
第 250 図　P 86 工区採集遺物実測図
第 251 図　P 84 工区採集遺物実測図
第 252 図　P 83 工区採集遺物実測図 1
第 253 図　P 83 工区採集遺物実測図 2
第 254 図　P 83 工区採集遺物実測図 3
第 255 図　P 83 工区採集遺物実測図 4
第 256 図　P 83 工区採集遺物実測図 5
第 257 図　P 83 工区採集遺物実測図 6
第 258 図　P 82 工区採集遺物実測図 1
第 259 図　P 82 工区採集遺物実測図 2
第 260 図　P 82 工区採集遺物実測図 3
第 261 図　P 81 工区採集遺物実測図
第 262 図　P 80 工区採集遺物実測図 1
第 263 図　P 80 工区採集遺物実測図 2
第 264 図　廻間Ⅰ式 0 ～ 1 段階の土器
第 265 図　宇福寺遺跡器種組成（遺跡総計）
第 266 図　宇福寺遺跡器種組成（各工区・遺構）
第 267 図　関連遺跡分布図
第 268 図　箱清水式の主要器種
第 269 図　宇福寺遺跡と小森遺跡の箱清水式土器
第 270 図　箱清水式土器様式圏における東海系土器
第 271 図　北陸系土器と関連資料
第 272 図　布留式土器と関連資料
第 273 図　受口甕と S 字甕 0 類
第 274 図　朝日遺跡の布留式甕
第 275 図　畿内における東海系と山陰系の共存
第 276 図　宇福寺遺跡と元屋敷遺跡の土器に施された線刻
第 277 図　宇福寺遺跡の範囲と周辺の遺跡

写真目次

〈Ⅰ　前章〉
写 真 1　遺跡の現況
写 真 2　馬見塚遺跡
写 真 3　稲荷山古墳と高塚古墳
写 真 4　現況の島畑
〈Ⅱ　島崎遺跡〉
写 真 5　調査区の位置
写 真 6　調査区遠景
写 真 7　調査風景
写 真 8　A区
写 真 9　B区
写 真10　C区
写 真11　D区
写 真12　E区
写 真13　F区
写 真14　G区
写 真15　H区
写 真16　Ⅰ区第1面
写 真17　Ⅰ区第2面
写 真18　Ⅰ区第3面
写 真19　J区
写 真20　各調査区出土遺物1
写 真21　各調査区出土遺物2
〈Ⅲ　伝法寺本郷遺跡〉
写 真22　伝法寺本郷遺跡調査風景
写 真23　A区NR01
写 真24　A区上面遺構
写 真25　B区NR01／上面遺構
写 真26　C区下面／上面遺構
写 真27　D区遺物出土状況
写 真28　D区古代遺構
写 真29　D区出土金属製品生産関連遺物
写 真30　E～G区全景／E区下面／上面遺構全景
写 真31　F区下面／上面遺構
写 真32　G区下面／上面遺構全景
写 真33　各調査区出土遺物
写 真34　A区NR01出土自然木の材組織光学顕微鏡写真1
写 真35　A区NR01出土自然木の材組織光学顕微鏡写真2
写 真36　A区NR01出土自然木の材組織光学顕微鏡写真3
〈Ⅳ　中之郷北遺跡〉
写 真37　中之郷北遺跡調査風景
写 真38　A区NR01
写 真39　A区出土遺物
写 真40　A区出土木製品
写 真41　A区NR01遺物出土状況
写 真42　A区土層断面／中世～近世遺構
写 真43　Ba区土層断面／NR01／中世～近世遺構
写 真44　Bb区古墳時代初頭遺構／SU01
写 真45　古墳時代初頭遺構
写 真46　C区西壁土層断面
写 真47　C区古代／近世遺構全景
写 真48　Ba・Bb・C区出土遺物
写 真49　D区古墳時代初頭／古墳時代後期遺構全景
写 真50　D区Ⅳb層遺物出土状況
写 真51　D区古代／中世遺構
写 真52　D区出土遺物
写 真53　E区古墳時代／古代／中世～近世遺構
写 真54　D区古墳時代水田全景
写 真55　F区古墳時代／古代～中世遺構
写 真56　G区NR02／NR01／近世遺構／土層断面
写 真57　G区出土金属製品X線写真
写 真58　E・F・G区出土遺物
写 真59　H区古墳時代初頭／前期遺構
写 真60　H区古墳時代中期遺構
写 真61　H区古代／中世／近世／近代遺構全景
写 真62　H区出土遺物1
写 真63　H区出土遺物2
写 真64　Ⅰ区NR01全景
写 真65　Ⅰ区古墳時代中期～古代遺構全景
写 真66　Ⅰ区1期竪穴住居
写 真67　Ⅰ区2期竪穴住居
写 真68　Ⅰ区土坑遺物出土状況
写 真69　Ⅰ区古墳時代（1・2期）出土遺物
写 真70　Ⅰ区3期竪穴住居

写 真７１　Ⅰ区４期竪穴住居１
写 真７２　Ⅰ区４期竪穴住居２
写 真７３　Ⅰ区中世遺構全景
写 真７４　Ⅰ区古代・中世出土遺物
写 真７５　鉄製品・金属製品生産関連遺物・石製品
写 真７６　Ｊ区東壁土層断面
写 真７７　Ｊ区古代／近世遺構全景
写 真７８　Ｊ区中世～近代遺構全景
写 真７９　Ｋ区近世～近代遺構／土層断面
写 真８０　植物珪酸体顕微鏡写真１
写 真８１　植物珪酸体顕微鏡写真２
写 真８２　土器薄片の顕微鏡写真
写 真８３　赤色顔料の付着状況
写 真８４　測定に使用した赤色顔料
写 真８５　出土材・杭の材組織光学顕微鏡写真１
写 真８６　出土材・杭の材組織光学顕微鏡写真２
写 真８７　出土材・杭の材組織光学顕微鏡写真３
写 真８８　出土材・杭の材組織光学顕微鏡写真４
写 真８９　出土材・杭の材組織光学顕微鏡写真５
写 真９０　出土材・杭の材組織光学顕微鏡写真６
写 真９１　福田遺跡の鞴羽口先端部分
写 真９２　法海寺遺跡の鞴羽口
〈Ⅴ　宇福寺遺跡の調査〉
写 真９３　宇福寺遺跡調査風景
写 真９４　Ｐ83工区土層断面／遺物出土状況
写 真９５　Ｐ82工区土層断面
写 真９６　Ｐ81／Ｐ80工区土層断面
写 真９７　布留式高杯（５）の製作技法
写 真９８　Ｐ83工区採集遺物１
写 真９９　Ｐ83工区採集遺物２
写真100　Ｐ83工区採集遺物３
写真101　Ｐ82工区採集遺物１
写真102　Ｐ82工区採集遺物２
写真103　Ｐ80工区採集遺物
写真104　脚頂部のキザミ（門間沼遺跡）

挿表目次

〈Ⅰ　前章〉
第１表　調査工程表
〈Ⅱ　島崎遺跡〉
第２表　Ｆ区出土銭貨一覧表
〈Ⅲ　伝法寺本郷遺跡〉
第３表　放射性炭素年代測定及び暦年代較正の結果
第４表　Ａ区 NR01 出土自然木樹種同定結果一覧
〈Ⅳ　中之郷北遺跡〉
第５表　放射性炭素年代測定及び暦年代較正の結果
第６表　分析試料一覧
第７表　Ｂａ・Ｂｂ区の植物珪酸体分析結果
第８表　Ｄ・Ｅ区の植物珪酸体分析結果
第９表　Ｆ・Ｇ区の植物珪酸体分析結果
第10表　Ｈ・Ｋ区の植物珪酸体分析結果
第11表　測定試料及び処理
第12表　放射性炭素年代測定及び暦年代較正の結果
第13表　出土土器の詳細とその肉眼的特徴
第14表　出土土器の粘土と砂粒の特徴
第15表　胎土中の岩石片の分類と組み合わせ
第16表　赤色顔料から検出された元素と顔料の種類
第17表　出土木製品・木材の樹種同定結果一覧
第18表　形状・層位ごとの検出樹種集計
第19表　中之郷北遺跡から産出した昆虫化石
第20表　Ｈ区Ⅳ層出土土器群の組成
第21表　松河戸・宇田式土器編年と放射性炭素年代測定値との対比
第22表　鍛冶関連遺物一覧表
〈Ⅴ　宇福寺遺跡の調査〉
第23表　編年対照表
第24表　宇福寺遺跡器種組成表（遺跡総計）
第25表　宇福寺遺跡器種組成表（各工区・遺構）

Ⅰ　前章

第１章　調査の経緯

遺跡

島崎遺跡は一宮市島崎２丁目ほか、伝法寺本郷は一宮市丹陽町伝法寺、中之郷北遺跡は西春日井郡西春町中之郷にそれぞれ所在する（第１図）。遺跡周囲には、宅地、工業地、商業地が密集し、耕作地が点在する大都市近郊に特徴的な景観が広がっている。

名古屋高速３号線

これらの３遺跡は、名古屋高速３号線（県道高速清洲一宮線）建設計画に伴う埋蔵文化財の有無照会に応じて、平成 10 年８～ 10 月に愛知県教育委員会文化財課（当時、現愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室）と愛知県埋蔵文化財調査センターが一般国道 22 号線の周辺において試掘調査を実施した結果、新たに発見、登録された遺跡である。

試掘調査

名古屋高速３号線建設にかかる試掘調査は、全長約８㎞の予定工区周辺に、Ａ―１からＮ―２までの 28 地点を設置し（第２図）、中世陶器を包含する層を確認したＫ―２を含む周辺地区、Ｈ―２・Ｈ―３を含む地区、古墳時代の遺構と遺物を確認したＥ―２を含む周辺地区について、発掘調査が必要であることを回答した。なお、Ｌ―１・Ｌ―２を含む地区、Ｊ―１・Ｊ―２を含む地区、Ｈ―１を含む地区、Ｆ―１・Ｇ―１を含む地区、Ｃ―１・Ｃ―２を含む地区については、試掘調査において遺構が確認されず、包含層が希薄であったことから、立会調査による対応とし、その他の地区の周辺は、遺構と遺物が確認されなかったことから、保護法上支障がないものと判断された。試掘調査によって所在を確認した埋蔵文化財は、該当教育委員会との協議によって、Ｋ―２周囲を島崎遺跡（遺跡番号 02107）、Ｈ―２・Ｈ―３周囲を伝法寺本郷遺跡（遺跡番号 02108）、Ｅ―２周囲を中之郷北遺跡（遺跡番号 19016）として決定し、新発見の遺跡として新規に登録した。なお、宇福寺遺跡（西春日井郡西春町宇福寺他、遺跡番号 19017・02114）は、立会調査が必要とされたＨ―１、Ｆ―１・Ｇ―１を含む地区の工事掘削時に古墳時代の遺物が大量に発見されたことを受け、新規に登録された遺跡である。

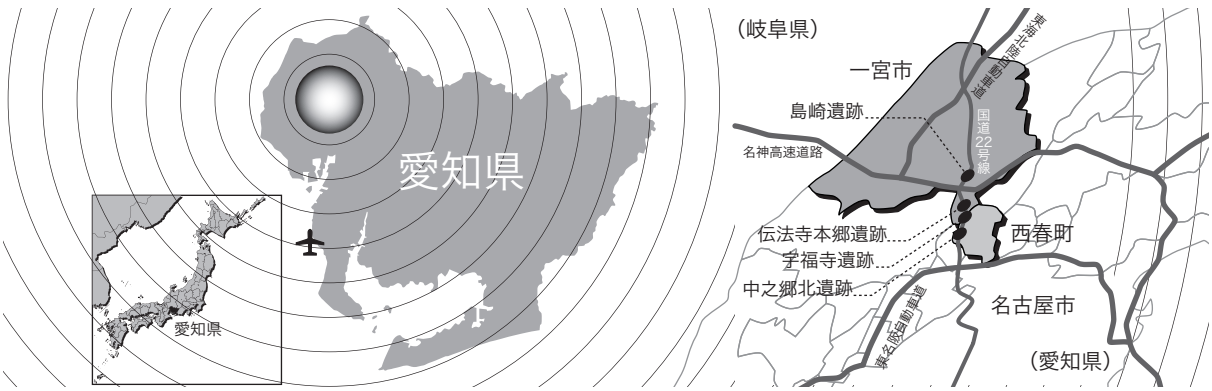
宇福寺遺跡

発掘調査

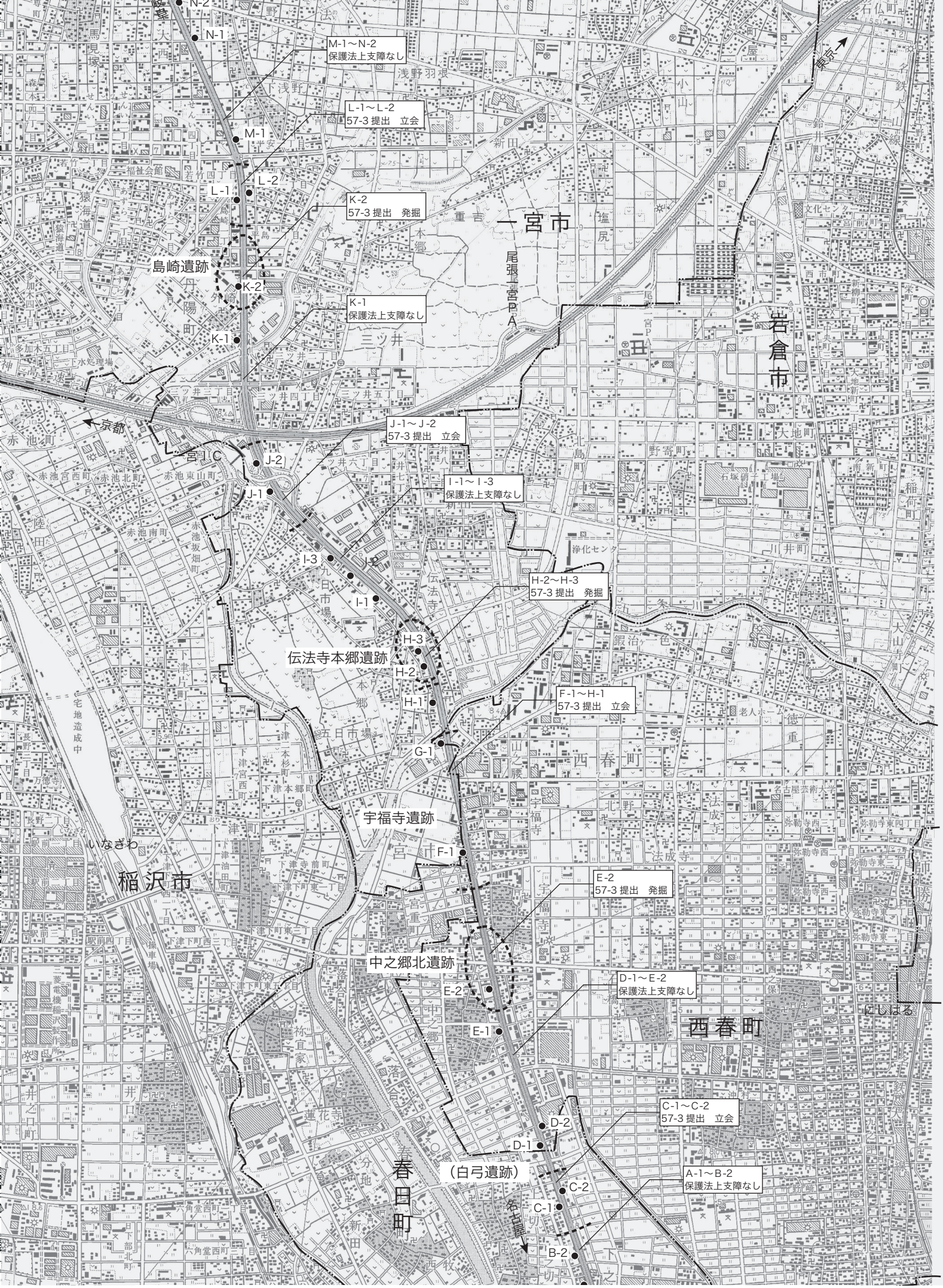
発掘調査は、県道高速清洲一宮線建設の事前調査として、名古屋高速道路公社より愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター（当時、現財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター）が実施した。

文献

愛知県教育委員会・財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター2000『愛知県埋蔵文化財情報』15　平成10年度



第１図　遺跡の位置



第２図　試掘地点と調査遺跡（1:25,000）

第２章　調査の経過

調査区の設定

名古屋高速３号線は、一般国道 22 号線に高架構造で併設されるため、発掘調査は橋脚建設に際して、掘削工事に影響を受ける範囲を調査対象として、各工区に調査区を設定した。

調査の工程

各遺跡において調査対象とした調査区と調査面積、調査期間はそれぞれ、島崎遺跡が 10 工区（Ｐ 137 ～ 128 ／Ａ～Ｊ区）計 2,000 ㎡、平成 13 年１～３月、伝法寺本郷遺跡が７工区（Ｐ 96 ～ 90 ／Ａ～Ｇ区）計 1,600 ㎡、平成 13 年４～５・８～９月、中之郷北遺跡が 12 工区（Ｐ 65 ～ 55・Ａ 63 ／Ａ、Ｂａ・Ｂｂ、Ｃ～Ｋ）計 2,400 ㎡、平成 13 年 10 月～平成 14 年２月である（第１表）。なお、各遺跡の調査概要については、各報文中において改めて記述する。

報告書作成

洗浄、注記までの整理作業は、平成 12・13 年度中に実施し、接合、復元、実測、写真撮影、収納等の整理作業と報告書の執筆、編集は、島崎遺跡を平成 17 年４～６月の３ヶ月、伝法寺本郷遺跡を平成 17 年５月の１ヶ月、中之郷北遺跡と宇福寺遺跡を平成 17 年６～９月の４ヶ月の期間内に実施し、平成 18 年３月に本書を刊行した。

文献

宮腰健司・織部匡久2001「島崎遺跡」『年報』平成12年度　財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター

宮腰健司2002「島崎遺跡」『愛知県埋蔵文化財情報』17　平成12年度　愛知県教育委員会・財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター

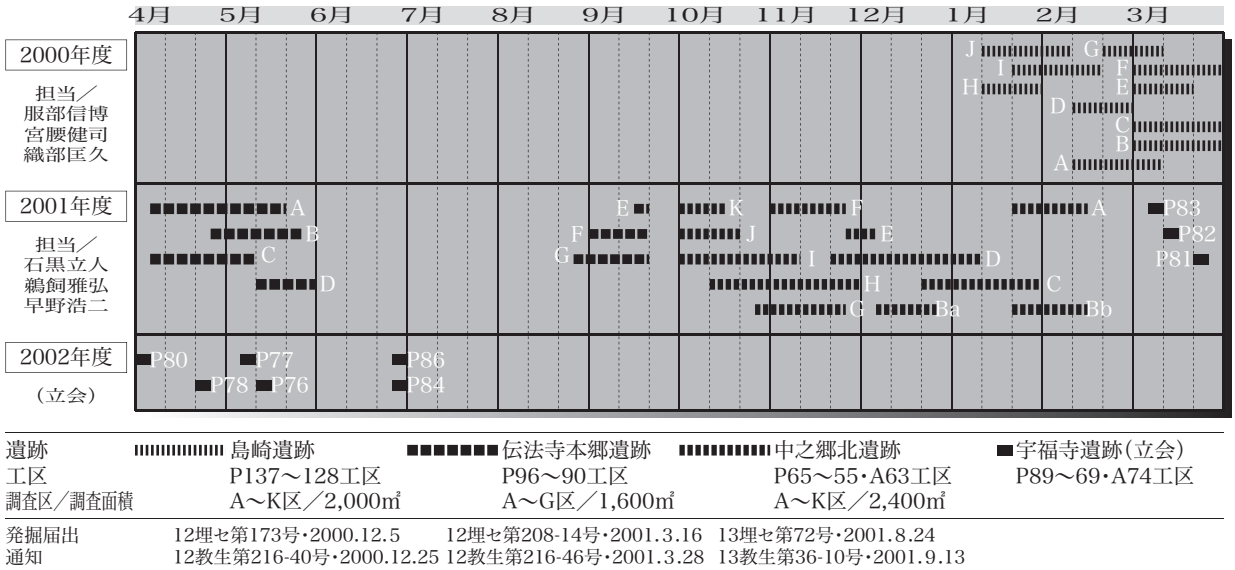
鵜飼雅弘・早野浩二2003「伝法寺本郷遺跡」『年報』平成13年度　財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター

鵜飼雅弘・早野浩二2003「中之郷北遺跡」『年報』平成13年度　財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター

鵜飼雅弘2004「伝法寺本郷遺跡」『愛知県埋蔵文化財情報』18　平成13年度　愛知県教育委員会・財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター

鵜飼雅弘2004「中之郷北遺跡」『愛知県埋蔵文化財情報』18　平成13年度　愛知県教育委員会・財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター

第１表　調査工程表



遺跡	島崎遺跡	伝法寺本郷遺跡	中之郷北遺跡	宇福寺遺跡（立会）
工区	P137～128工区	P96～90工区	P65～55・A63工区	P89～69・A74工区
調査区／調査面積	A～K区／2,000㎡	A～G区／1,600㎡	A～K区／2,400㎡	

発掘届出	12埋セ第173号・2000.12.5	12埋セ第208-14号・2001.3.16	13埋セ第72号・2001.8.24
通知	12教生第216-40号・2000.12.25	12教生第216-46号・2001.3.28	13教生第36-10号・2001.9.13



島崎遺跡調査着手前（Ⅰ・Ｊ区）



島崎遺跡調査完了後（島崎１丁目交差点）



伝法寺本郷遺跡調査着手前（Ｃ区）



伝法寺本郷遺跡調査完了後（伝法寺交差点）



宇福寺遺跡調査着手直後（Ｐ83工区）



宇福寺遺跡調査完了後（五日市場交差点）



中之郷北遺跡調査着手前（Ｆ・Ｇ・Ｈ区）



中之郷北遺跡調査完了後（中之郷交差点）

写真１　遺跡の現況

第３章　周辺の環境

地形・地質

濃尾平野

伊勢湾を臨む濃尾平野は、西縁を養老山地、東縁を台地や段丘群の発達する更新統堆積物によって画される平野で、わが国第三位の広大な面積を誇る。木曽川を隔てた左岸域（愛知県側）の扇状地帯、自然堤防帯、三角州帯からなる平野面は尾張平野とも呼ばれ、その主要部分は古木曽川水系の諸河川がもたらした夥しい堆積物である第四紀沖積層によって覆われている。沖積層それぞれの岩相分布状態は、扇状地帯が礫質層、自然堤防帯が砂質層、臨海三角州帯が泥質層である。

尾張平野



写真２　馬見塚遺跡（県指定史跡）

遺跡の立地と周辺の遺跡

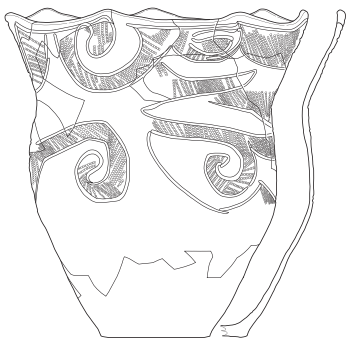
遺跡の立地

一宮市南東部に所在する島崎遺跡、伝法寺本郷遺跡、西春日井郡西春町西部に所在する中之郷北遺跡、宇福寺遺跡は、いずれも木曽川系自然堤防帯の緩傾斜面に立地する。五条川水系の岩倉市域、一宮市南東部域、西春町東部域、西春日井郡師勝町域には、砂質層を岩層とする相対的に古い自然堤防が発達し、縄文・弥生・古墳時代の遺跡が密集して形成されている（第５・６図）。その代表的な遺跡（古墳）が、西北出遺跡（岩倉市／縄文）、権現山遺跡（同／縄文・古墳）、大地遺跡（同／縄文・弥生）、小森遺跡（同／古墳）、馬見塚遺跡（一宮市／縄文・弥生・古墳）、三ツ井遺跡（同／縄文・弥生・古墳）、猫島遺跡（同／縄文・弥生）、蕪池遺跡（同／弥生）、伝法寺野田遺跡（同／弥生）、元屋敷遺跡（同／弥生・古墳）、西大門遺跡（同／弥生・古墳）、稲荷山古墳（同）、高塚古墳（西春町）、堤下遺跡（師勝町／縄文）、石塚遺跡（同／古墳）、能田旭古墳（同／古墳）である。なお、同じく五条川水系に属する朝日遺跡（春日町・清須市・名古屋市西区／縄文・弥生・古墳）は、中之郷北遺跡から下流方向へ約 2.5km の位置にある。

五条川水系の遺跡

日光川水系の遺跡

一方で、日光川水系の一宮市西部域においても同様に古い自然堤防が発達し、弥生・古墳時代の遺跡の密集域が形成される。その代表的な遺跡（古墳）が、西上免遺跡（弥生・古墳）、今伊勢車塚古墳、八王子遺跡（弥生・古墳）、一宮西高校二夕子遺跡（弥生）、北川田遺跡（弥生）、萩原中学校河田遺跡（弥生）である。



第３図　権現山遺跡の縄文土器

その両地域の中間地帯である青木川、三宅川水系の稲沢市域に発達する自然堤防は相対的に新しく、地表には低塑性粘土が厚く堆積する。この地域で遺跡形成が活発化するのは古代以降で、奈良時代には国府と国分二寺が、市域東部の下津地区には鎌倉時代に鎌倉街道の宿駅として折戸宿（弘安年間以降、「折戸」は「下津」と表記）、



写真３　稲荷山古墳（左、一宮市指定史跡）と高塚古墳（右）

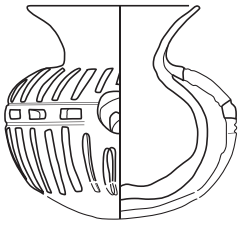
国府と守護所

室町時代に尾張国の守護所（下津城）が設置される。なお、尾張国府の所在が推定される稲沢市松下町付近は、宇福寺遺跡から西へ約３km、下津城跡と鎌倉街道は伝法寺本郷遺跡から西へ約１km の位置にある。伝法寺本郷遺跡付近には九日市場、五日市場の地名が残り、正和３年（1314）の「六波羅御教書案」には「下津五日市」とあることから、下津宿との関係も窺われる。

五条川、青木川の両岸にそれぞれ立地する島崎遺跡、伝法寺本郷遺跡、中之郷北遺跡・宇福寺遺跡は、五条川水系の岩倉市や一宮市南東部域と青木川水系の稲沢市域両地域の特質を帯びていることは容易に想像される。また同時に、これらの遺跡が尾張地域の、地形発達史、土地利用史の動的な描写に欠くべからざる存在であることも明らかである。

文献

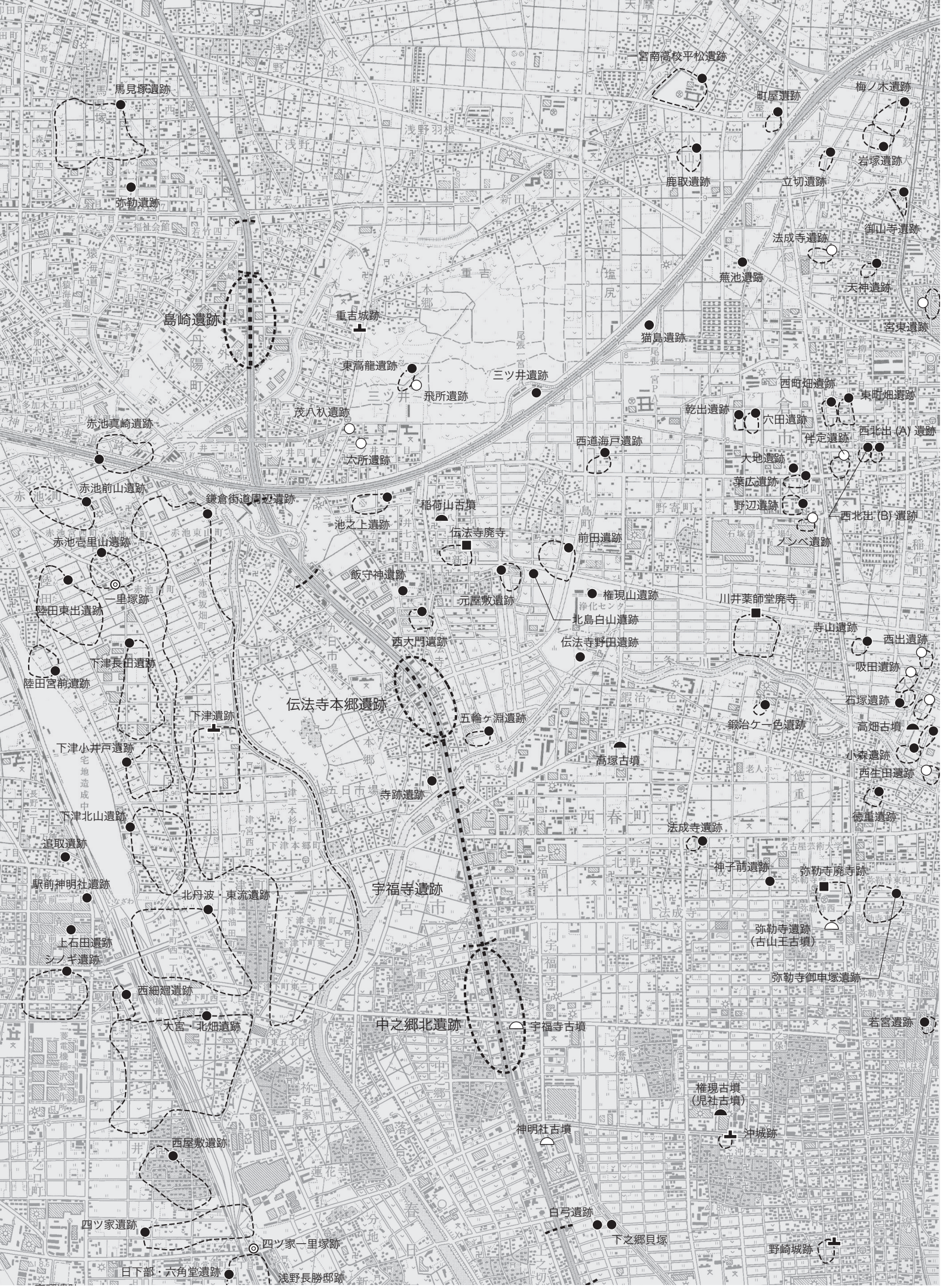
澄田正一・大参義一・岩野見司1967『新編一宮市史』資料編二　一宮市
大参義一・岩野見司1974『新編一宮市史』資料編四　一宮市
井関弘太郎1981「自然」『新修稲沢市史』研究編三　地理　稲沢市
稲葉伸道他1990『新修稲沢市史』本文編上　稲沢市
海津正倫1994『沖積低地の古環境学』古今書院
伊藤秋男編1994『高塚古墳発掘調査報告書』西春町教育委員会
早野浩二編2003『権現山遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第110集　財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター



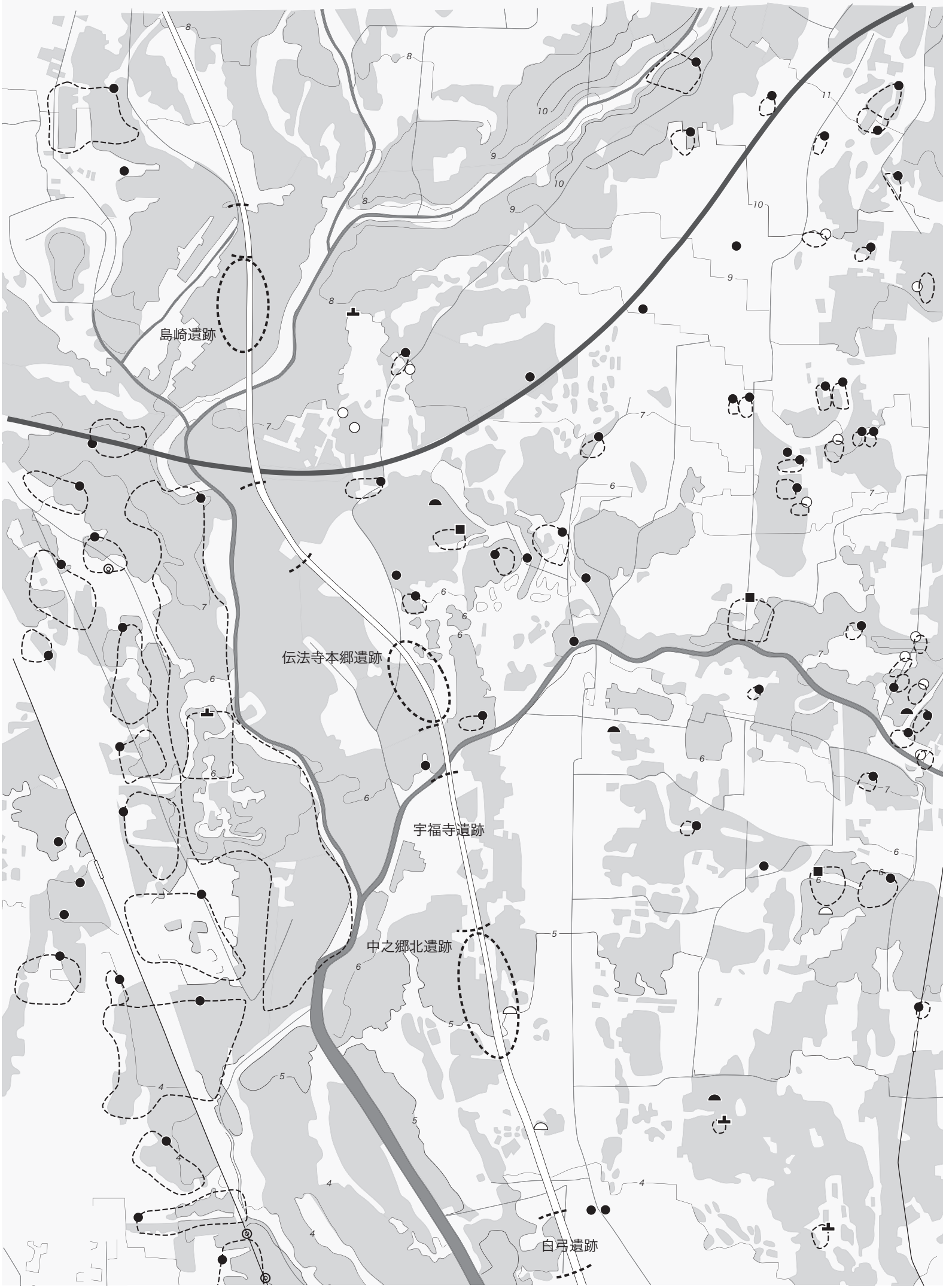
第４図　伝西大門遺跡の須恵器



写真４　現況の島畑（一宮市丹陽町三ツ井地区）



第５図　周辺の遺跡分布（1:25,000）



第６図　遺跡周辺の地形（1:25,000）

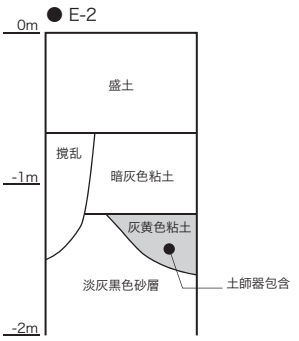
Ⅳ　中之郷北遺跡

第１章　調査の概要

試掘調査

調査区の設定

中之郷北遺跡の遺跡範囲は、愛知県教育委員会・愛知県埋蔵文化財調査センターが実施した試掘調査の所見（試掘地点 E-2、第２・101 図）を受けて確定した。調査区は国道 22 号線の路線上、全長約 500 ｍの橋脚建設予定地に設定した。設定した調査区は中之郷交差点を介して、交差点以北の P65 ～ 61 工区にそれぞれ A･B ａ･C･D・E 区、A63 工区に B ｂ区の６調査区、交差点以南の P60 ～ 55 にそれぞれ F ～ K 区の６調査区、計 12 調査区である。



第101図　試掘調査の所見

発掘調査

発掘調査は、道路建設の施工計画に従い、2001 年 10 月に交差点以南から着手し、交差点以南の調査を 2001 年 11 月に完了した。続けて交差点以北の調査を 2001 年 11 月に着手し、2002 年２月に完了した。各調査区は南北約 160 m、東西約 100 ｍの掘削範囲に対して、工法の関係上、調査対象は南北約 120 m、東西約 60 ｍの範囲に限定せざるをえなかった。表土除去と埋め戻し、調査中の排出土の処理は、名古屋高速道路の施工業者が実施した。



D区調査風景１



D区調査風景２



C区調査風景１



C区調査風景２

写真37　中之郷北遺跡調査風景



第102図　中之郷北遺跡調査区配置図（1:2,500）

第２章　基本層序と検出遺構

（１）基本層序

層序

各調査区では、古墳時代～近世の各時代に及ぶ遺構と遺物を各層序ごとに連続して検出した。調査は全長約 500 mの工区間に 12 調査区を設定して実施しているので、各調査区で検出した遺構の記述に際しては、遺構面相互の層序関係が適確に明示される必要がある。しかし、遺跡の堆積環境は複雑で、遺跡とその周辺における土地利用の変遷も一様ではないことから、地点を離れた厳密な層序対比には困難な部分も少なくない。そこで、中之郷北遺跡の南北の層序断面を第 104・105 図に示し、各層序の内容と対比関係を以下に整理して概述する。

調査区を設定した道路面の標高は 5.2 ～ 6.0 mで、現状で周囲より約１m高い。これは、国道敷設時に盛土が施された結果で、盛土下位の耕作土上面の標高は、畑地（島畑）部分で 5.0 m前後、畑地周囲の水田部分で 4.0 m前後となる。盛土下位に堆積する層は、灰色を基調とする粘土またはシルト層（酸化・還元の程度によって色調は大きく変化することが多い）で、中世と近世の遺物を包含する。この灰色粘土層を主体とした中近世の堆積層を＜Ⅰ層＞とする。なお、島畑などの耕作地は、Ⅰ層を造成して形成されることが多い。

Ⅰ層

Ⅱ層

Ⅰ層下位にはＥ区からＨ区にかけて古墳時代～古代の遺物を多く包含する暗褐色粘土が堆積し、その周囲のＤ区、Ⅰ区では、それぞれ、褐色を帯びた灰色シルト層が堆積する。この暗褐色粘土層とそれに相当する層を＜Ⅱ層＞とする。Ⅱ層の上面の標高はＤ区が約4.5 mで最も高く、Ｅ区で約 3.6 mまで急激に下降し、Ｅ区からⅠ区にかけて標高約 4.3 mまで緩やかに傾斜する。Ⅱ層の層厚は、0.2 ～ 0.3 mである。

Ⅲ層

Ⅱ層の下位にはＣ区からⅠ区にかけて中粒砂が堆積する。この堆積層を＜Ⅲ層＞とする。Ⅲ層は遺跡の広範を被覆する洪水性堆積で、Ａ区とＢａ区で検出された河川も、同様の堆積物によって埋積する。Ⅲ層中に包含される遺物は少ないが、Ａ区の河川からは、７世紀の遺物が大量に出土していることから、堆積が進行した時期もその前後と考えられる。

Ⅳ層

Ⅲ層の下位、標高 3.0 m付近には灰色を基調とする均質なシルト～粘土が堆積する。色調は還元の程度によって、青灰色に変化していることも多い。この堆積層を＜Ⅳ層＞とする。層厚は 0.8 m前後と厚く、上位がシルト質、下位が粘土質に漸位的に変化する傾向がある。下位の灰色粘土層直上付近には、５世紀前半の土器が埋没していることが多く、Ｈ区のⅣ層中では、下位の黒色粘土層（Ⅴ層）直上にかけて４世紀後半から５世紀前半の土器群が連続して検出された。この場合、土器群の出土層位を、上位からⅣａ層、Ⅳｂ層、Ⅳｃ層、Ⅳｄ層として細分して記述することとした。

Ⅴ層

Ⅳ層下位には層厚約 0.2 mの黒色粘土層が堆積する。この堆積層を＜Ⅴ層＞とする。Ⅴ層は各調査区、標高 2.5 m付近に安定して堆積するが、Ｃ区やＨ区など、Ⅴ層中に粗粒砂が混入する地点では質感がやや異なる。Ⅴ層中には３世紀前半の土器が包含される。

Ⅴ層下位には、灰色粘土と黒色粘土が交互に連続して堆積する。層序の確認は標高約 1.8 mまでを試みたが、それより下位は、激しい湧水により断念した。それぞれの層中に遺物

は確認されなかった。

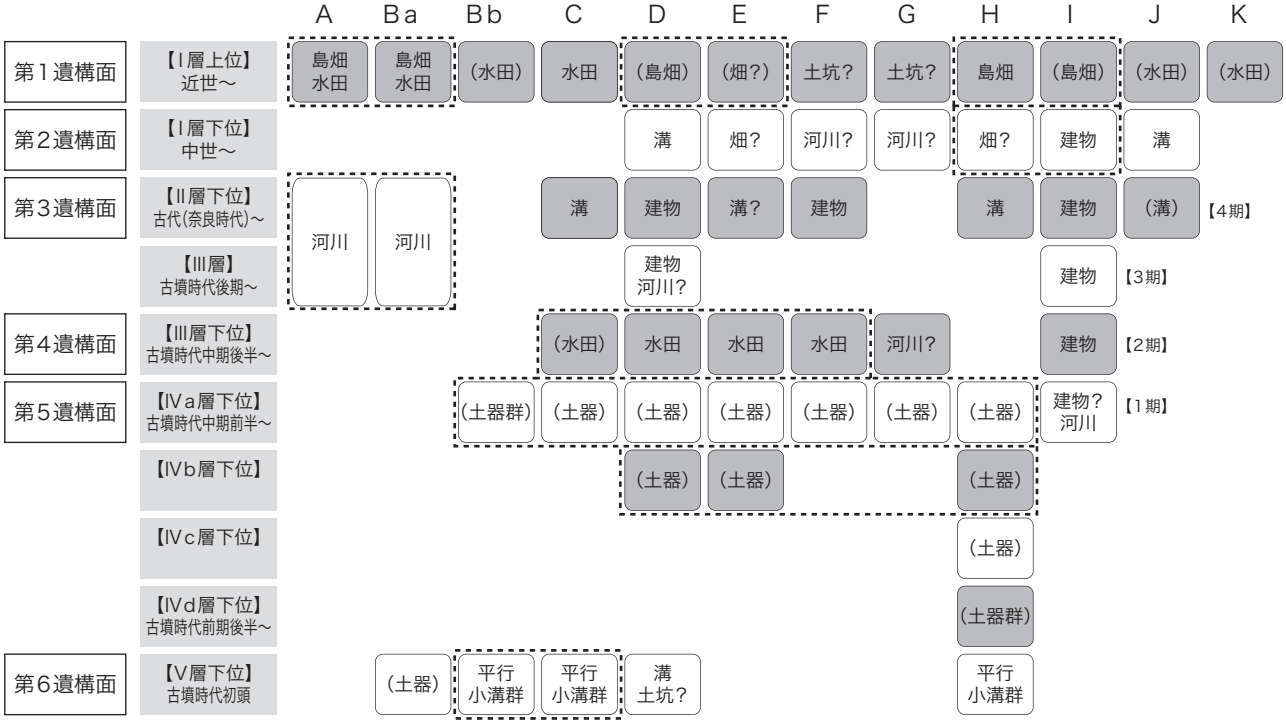
なお、調査時には、遺跡広範で確認され、識別が容易なⅡ層とⅤ層を鍵層として、各調査区間の層序や遺構面の対比を意識しつつ、調査を進行させることに努めた。 **鍵層**

（2）検出遺構

前項における調査区間の層序対比を受けて、遺構面を以下の６遺構面に整理統合する。 **遺構面の整理**

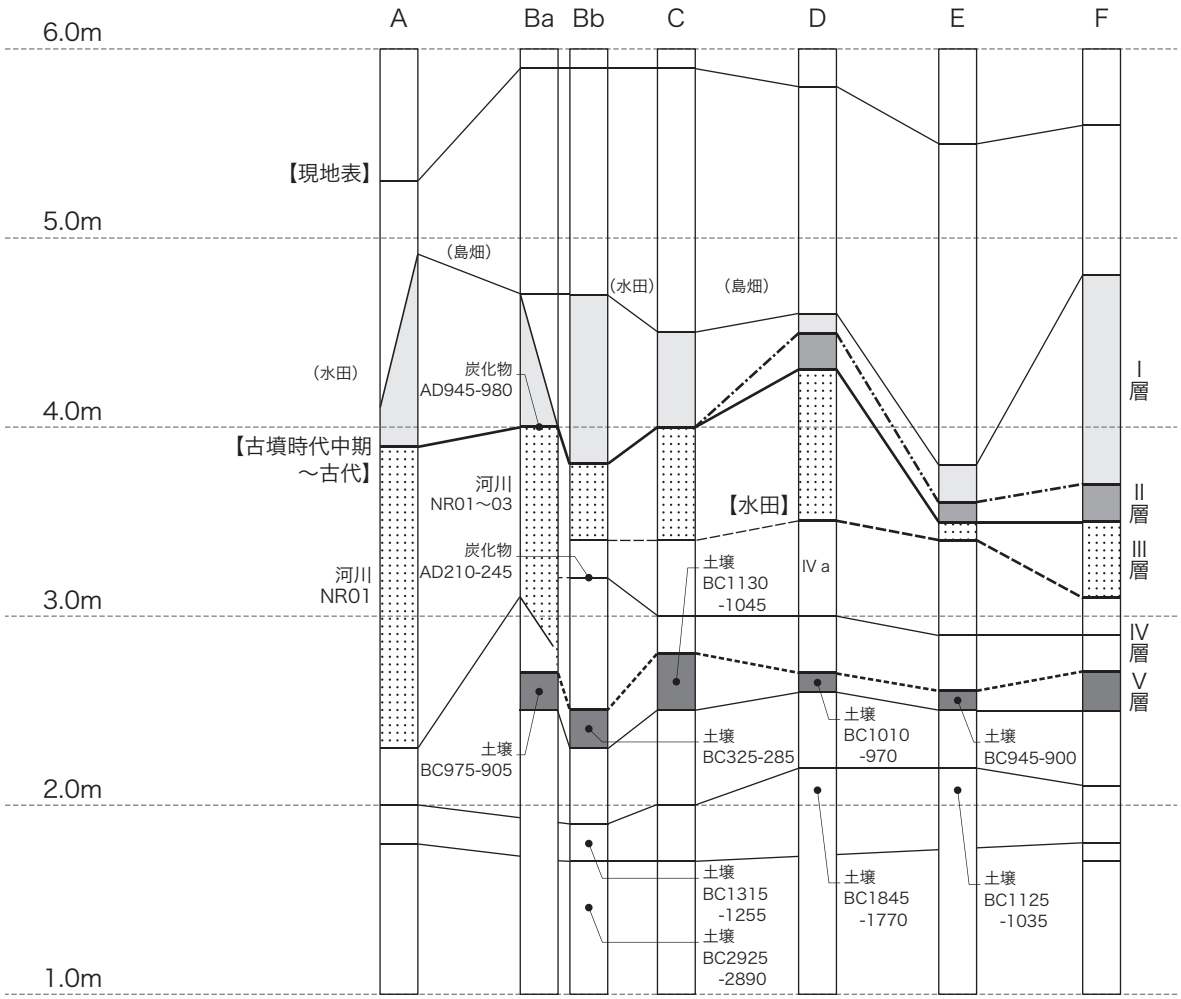
Ⅰ層上位で検出される近世の遺構を第１遺構面とする。第１遺構面では近世と近代の遺構が連続して検出される場合がある。主としてⅡ層上位で検出される中世の遺構を第２遺構面、Ⅲ層上位で検出される古代（８世紀）の遺構を第３遺構面、Ⅳ層上位で検出される古墳時代中期から古代（５世紀後半～７世紀）の遺構を第４遺構面とする。Ⅳ層を被覆するⅢ層の堆積は、７世紀を中心としながらも、５世紀後半以降の複数時期の洪水に起因することが判明しているので、第４遺構面は、複数の時期に細分される場合がある。Ⅳ層中で検出される古墳時代前期から古墳時代中期（４世紀後半～５世紀前半）の遺構を第５遺構面とする。明確な遺構は検出されないが、便宜的に遺構面として把握した。各調査区の層中において、やや散漫ながらも土器群が検出されている。細分した層に応じて、各遺構面（で検出された土器群）も分割して理解する。Ⅴ層下面で検出される古墳時代初頭（３世紀前半）の遺構を第６遺構面とする。

以下、遺構面については、１面、２面、３面…として、上記の６遺構面の分割に従い統一的に記述する。さらに、各遺構面をさらに分割する場合は、１―１面、１―２面…として記述する。また、それぞれの調査区の報告では、遺構面が削剥されていたり、遺構面が確認されつつも、遺構が検出されなかったため遺構の記述を省略する場合がある。そこで、各調査区において検出され、以下に報告する遺構を予め第 103 図に整理して掲げておく。 **遺構面の表記**



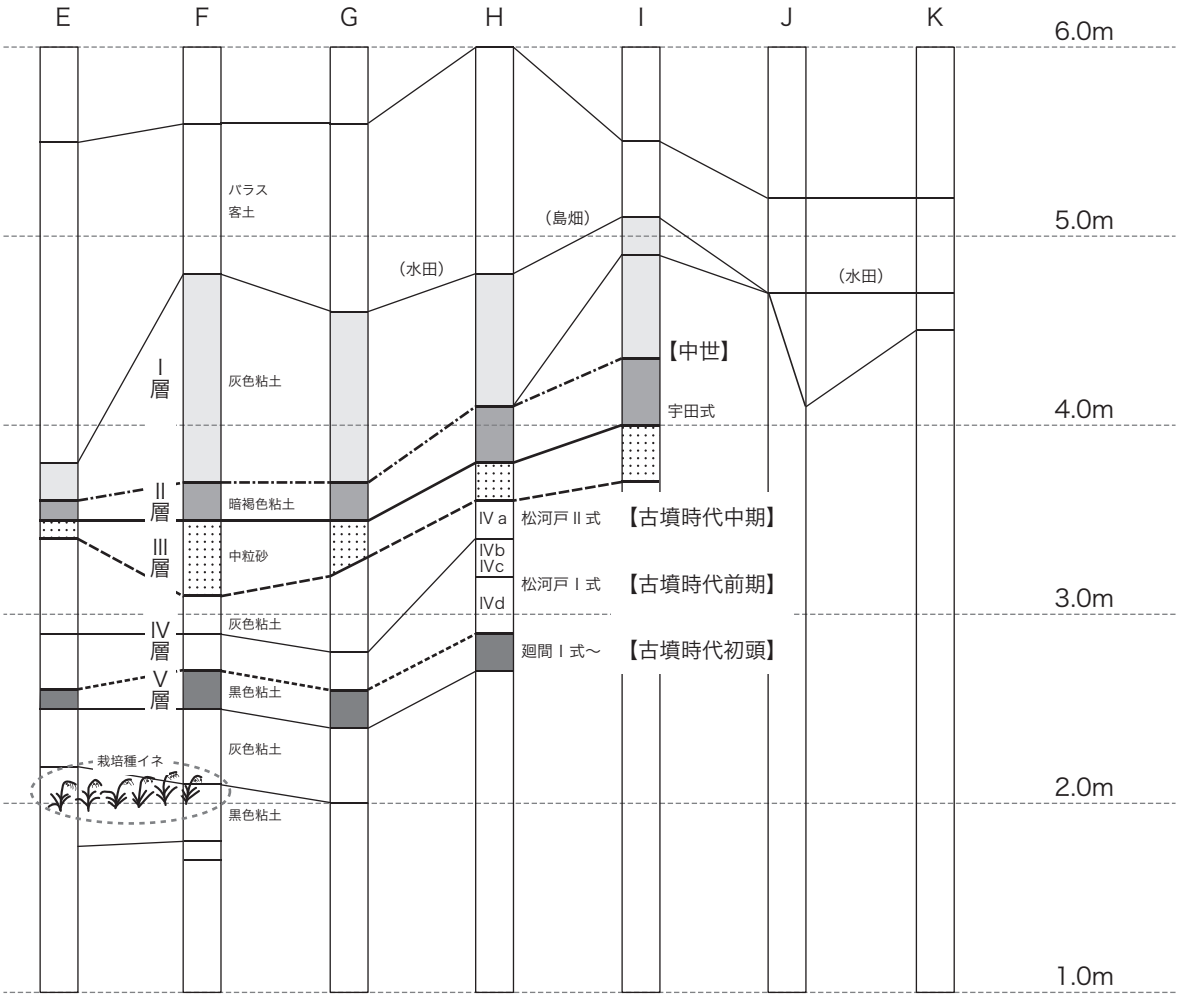
第103図　中之郷北遺跡検出遺構の概要





第104図　中之郷北遺跡調査区土層断面柱状図1（縦1:40／横1:2,500）





第105図　中之郷北遺跡調査区土層断面柱状図２（縦1:40／横1:2,500）

第３章　遺構と遺物

（１）Ａ区

層序と検出遺構

Ａ区では、Ⅰ層に対応する灰色シルト層の上位において中世～近世の遺構、Ⅰ層の下位において古代の河川を検出した（第 106 図）。結果､調査した遺構面は､計２遺構面である。

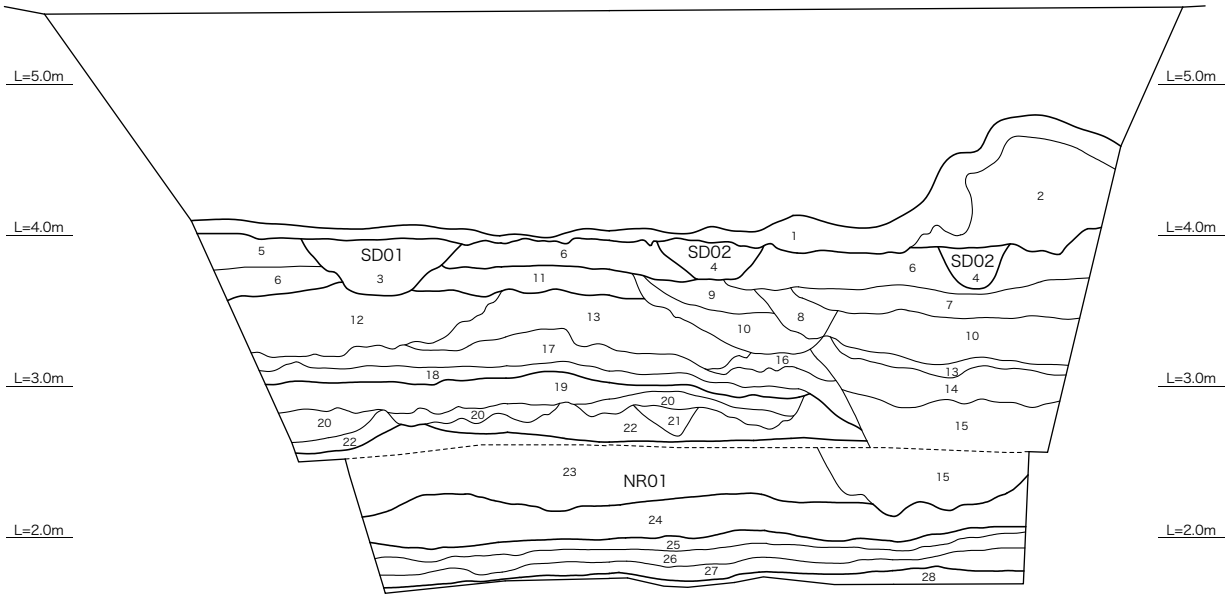
古代

河川NR01

古代の河川 NR01（第 107 図）は、堆積物と埋没時期から３～４面に対応すると判断される。Ａ区全域が河川内に相当するが、河川の東岸付近を調査したと思われる。検出面からの深さは最大で 1.7 ｍである。調査時には、河川内の堆積層を１層―灰色を基調とするシルト（～細粒砂)、２層―青灰色シルト、３層―灰色シルトと粗粒砂のレンズ状堆積で植物遺体を多く含む、４層―黒色粘質シルト、５層―粗粒砂の１～５層に区分した（第 106 図)。なお、５層下位は、灰色粘土と黒色粘土が交互に堆積する。

杭列

NR01- ３層を掘削中、調査区西壁付近で南北方向の杭列を検出した（第 108・109 図)。杭列は河川の東岸から距離を隔てていて、その設置目的については明確でない。杭頭部の標高は約 2.7 ｍで、杭列内には一面に大量の自然木や用材が滞留したような状態で残されていた。杭（78 ～ 90）の用材はエノキ属、ヤナギ属、クヌギ属の芯持材で（第４章（６）を参照)、径が４～６cm のものが多い。杭の先端はいずれも鋭利に仕上げられている。



1　7.5Y4/1 灰色シルト
2　2.5GY4/1 暗オリーブ灰色細粒砂
3　5Y4/2 灰オリーブ色細粒砂、炭化物少量含む
4　5Y3/2 オリーブ黒色粘質シルト、5Y5/3 灰オリーブ色シルト斑状に含む
5　10Y4/1 灰色粘土
6　5Y4/1 灰色細粒砂
7　2.5Y4/2 暗灰黄色細粒砂
8　2.5Y4/1 黄灰色シルト
9　2.5Y4/2 暗灰黄色シルト、7.5Y5/3 灰オリーブ色細粒砂混じる
10　2.5Y4/2 暗灰黄色細粒砂
11　5Y4/3 暗オリーブ色細粒砂
12　2.5Y4/3 オリーブ褐色細粒砂
13　2.5Y4/4 オリーブ褐色中粒砂
14　5Y3/2 オリーブ黒色粘土
15　5Y4/1 灰色粘質シルト
16　7.5Y4/1 灰色細粒砂
17　7.5Y4/1 灰色シルト、炭化物粒を少量含む
18　5Y4/1 灰色粘土
19　2.5Y3/1 黒褐色粘土、炭化物粒少量含む
20　5Y3/1 オリーブ黒色粘土
21　5Y3/1 オリーブ黒色粘質シルト、5Y4/1 灰色中粒砂斑状に含む
22　5Y4/1 灰色粘土、5Y4/1 灰色中粒砂互層状に含む
23　10Y5/1 灰色粗粒砂、7.5Y4/1 灰色粘質シルト互層状に含む
24　7.5Y5/1 灰色粘土
25　2.5Y3/1 黒褐色粘土、炭化物粒を含む
26　2.5Y2/1 黒色粘土
27　2.5Y3/1 黒褐色粘土
28　5Y4/1 灰色粘土

第106図　Ａ区東壁土層断面図（縦1:50／横1:100）

遺物は３層と４層においてややまとまって出土した。４層では東岸付近に集中して出土する傾向がある（第 110 図）。１・２層と５層において遺物はほとんど確認されなかった。

遺物出土状況

３・４層には古墳時代～古代の土師器と須恵器が包含されるが、両層に明確な様相差は認められず、上下層間で接合する個体も多い。古墳時代初頭の土師器（４層―１～７、３層―41 ～ 47）は、廻間Ⅰ式後半～廻間Ⅱ式前半に対比される個体が多く、隣接するＢａ区のⅤ層（黒色粘土層）に包含される土器に型式が対応する。個体の遺存率も比較的高いことからも、付近の自然堤防上には同時期の集落の展開が予測できる。古墳時代中期の土師器（４層―８～ 18、３層―48 ～ 51）は宇田式に対比される個体が多い。12 は独特な器形で、鍋あるいは甑と推定したが、古代に帰属する可能性もある。須恵器は、東山 11 号窯式、東山 61 号窯式、東山 44 号窯式、東山 50 号窯式の各型式が認められる。65 は高杯形器台の受部とした。これらの須恵器には土師器として伊勢型甕あるいは鍋（４層―19 ～ 23、３層―52 ～ 54）が対応する。66、67 は土師質の大型管状土錘で黒斑がある。出土した２点は両側辺が直線的で、両端面を平坦とする規格的な形態である。67 の法量は長さ 8.0cm、径 4.5cm、孔径 1.3cm で、重さは 151.2 ｇである。66 は、板状にした粘土を心棒に巻きつけ、両端を繋ぎ合わせる製作手法が観察される。同様な製作手法は甚目寺町大淵遺跡から出土した同形態の土師質管状土錘においても観察されている。

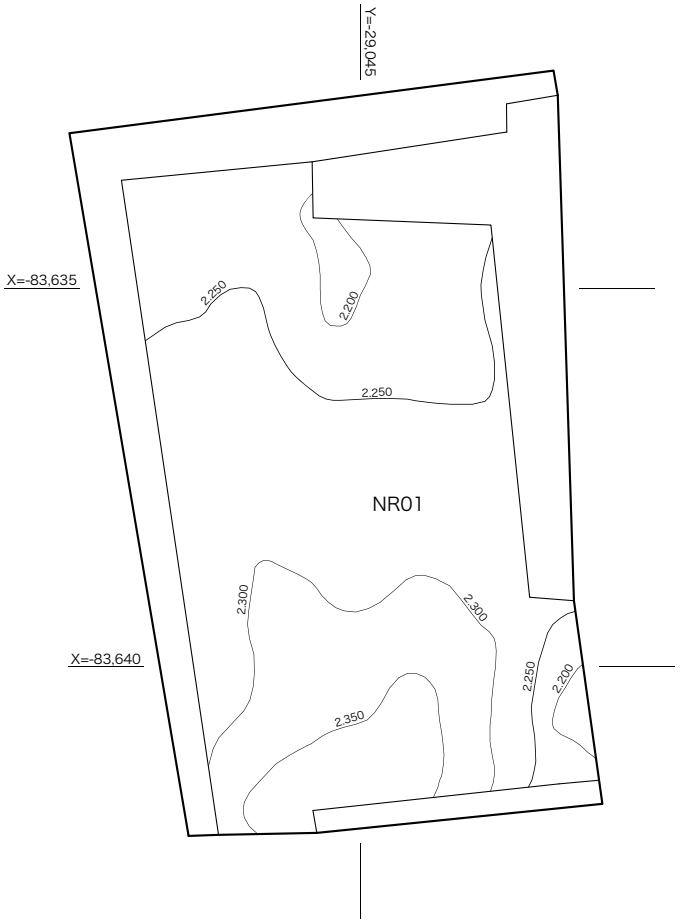
古墳時代初頭

古墳時代中期

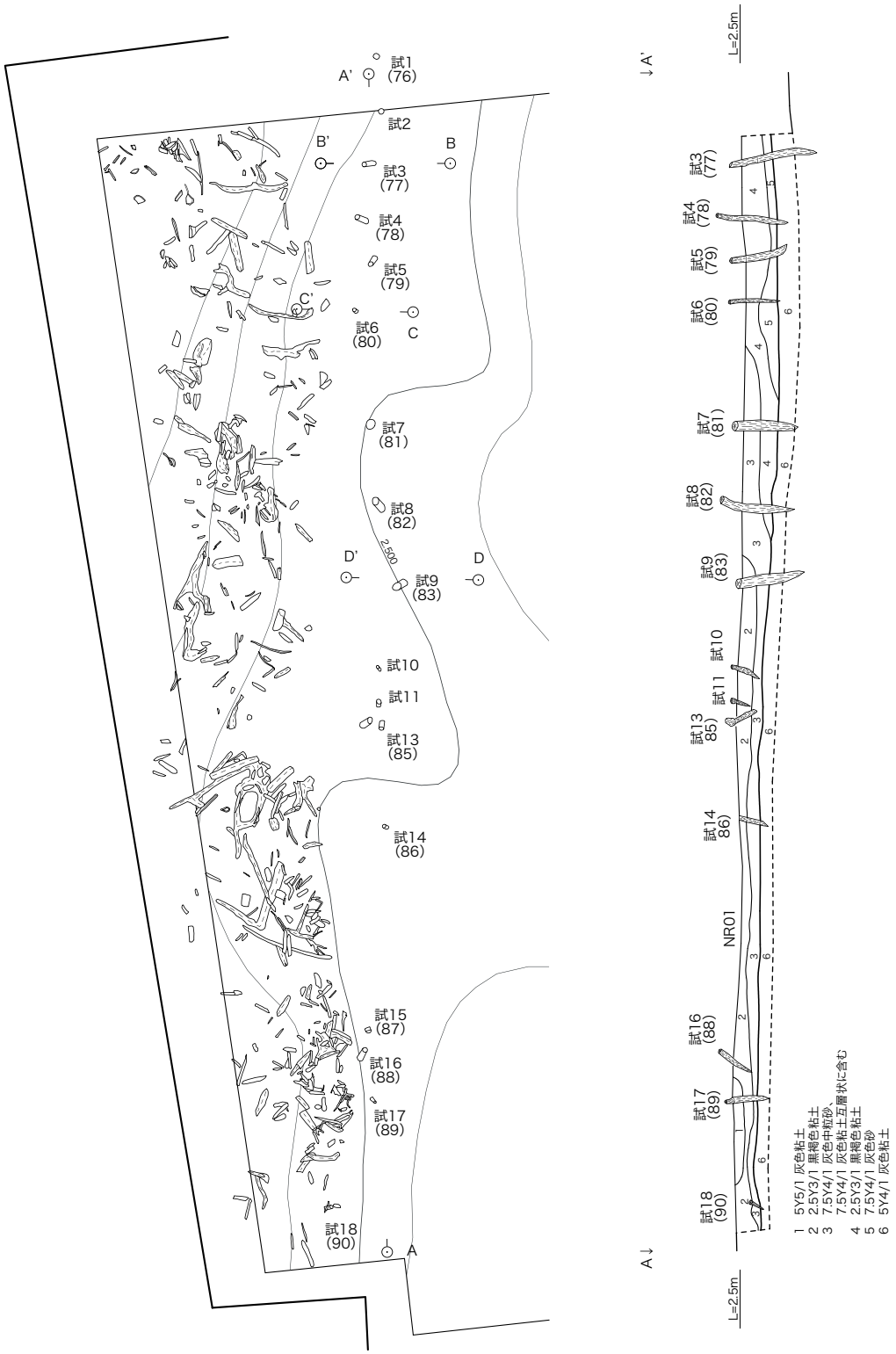
須恵器

大型管状土錘

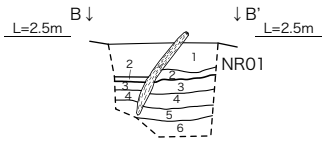
大渕遺跡



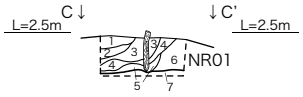
第107図　A区NR01遺構図（1:100）



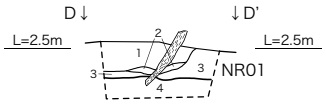
第108図　A区NR01-3層杭列遺構図1（1:50）



1　5Y4/1 灰色粘土、5Y3/1 オリーブ黒色粘土ブロック含む
2　7.5Y4/1 灰色中粒砂、5Y4/1 灰色粘土を互層状に含む
3　5Y4/1 灰色粘土
4　2.5Y4/1 黄灰色粘土
5　2.5Y4/1 黄灰色粘土、炭化物を少量含む
6　5Y2/1 黒色粘土



1　5Y3/1 オリーブ黒色粘土
2　7.5Y4/1 灰色粘土、7.5Y4/1 灰色中粒砂互層状に含む
3　5Y3/2 オリーブ黒色粘土
4　7.5Y4/1 灰色細粒砂
5　7.5Y5/1 灰色中粒砂
6　5Y3/1 オリーブ黒色粘土
7　5Y4/1 灰色粘土



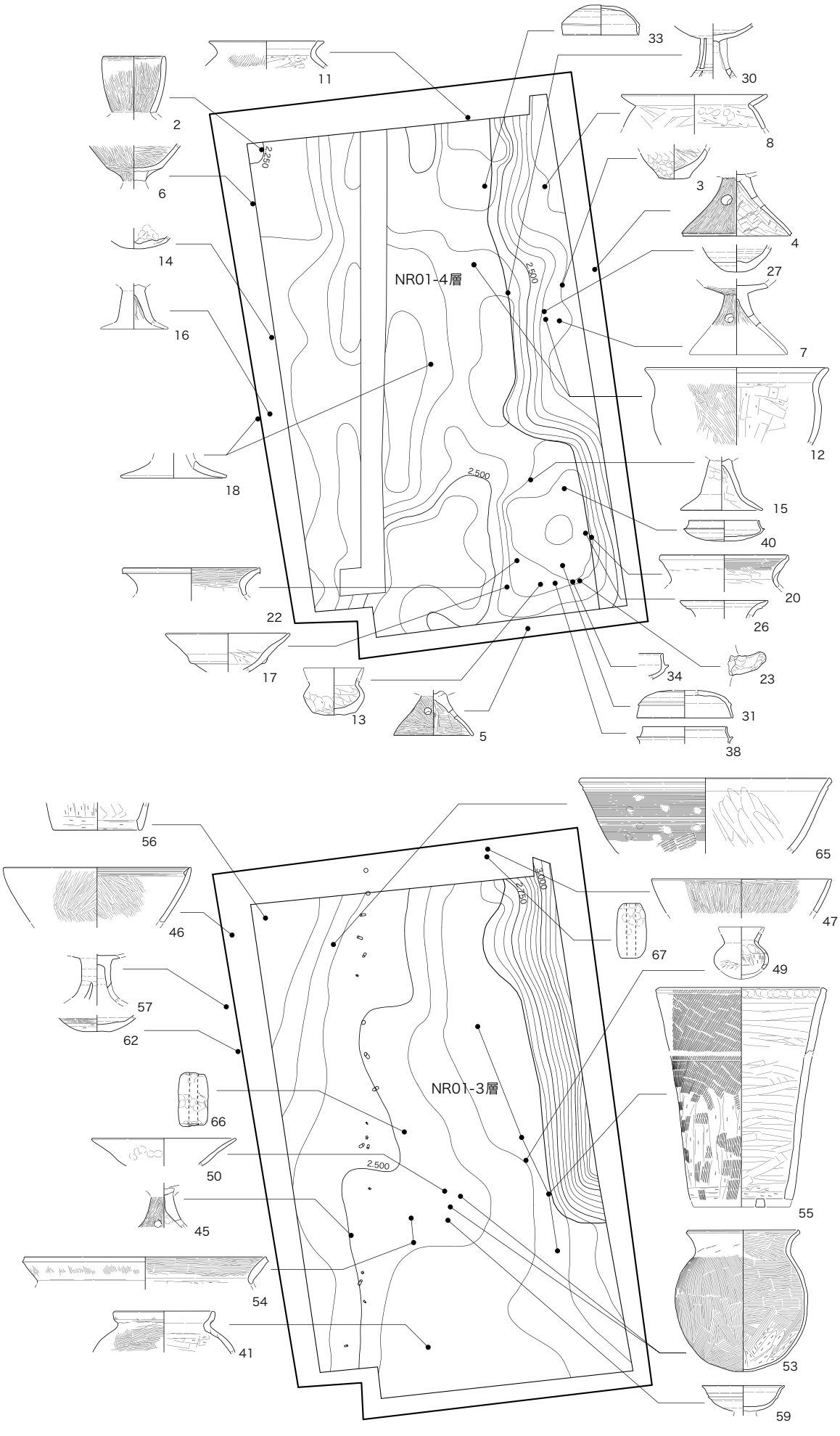
1　5Y3/1 オリーブ黒色粘土
2　5Y3/2 オリーブ黒色中粒砂、5Y3/1 オリーブ黒色粘土を互層状に含む
3　7.5Y5/1 灰色中粒砂
4　7.5Y4/1 灰色粘土

第109図　A区NR01-3層杭列遺構図2（1:50）

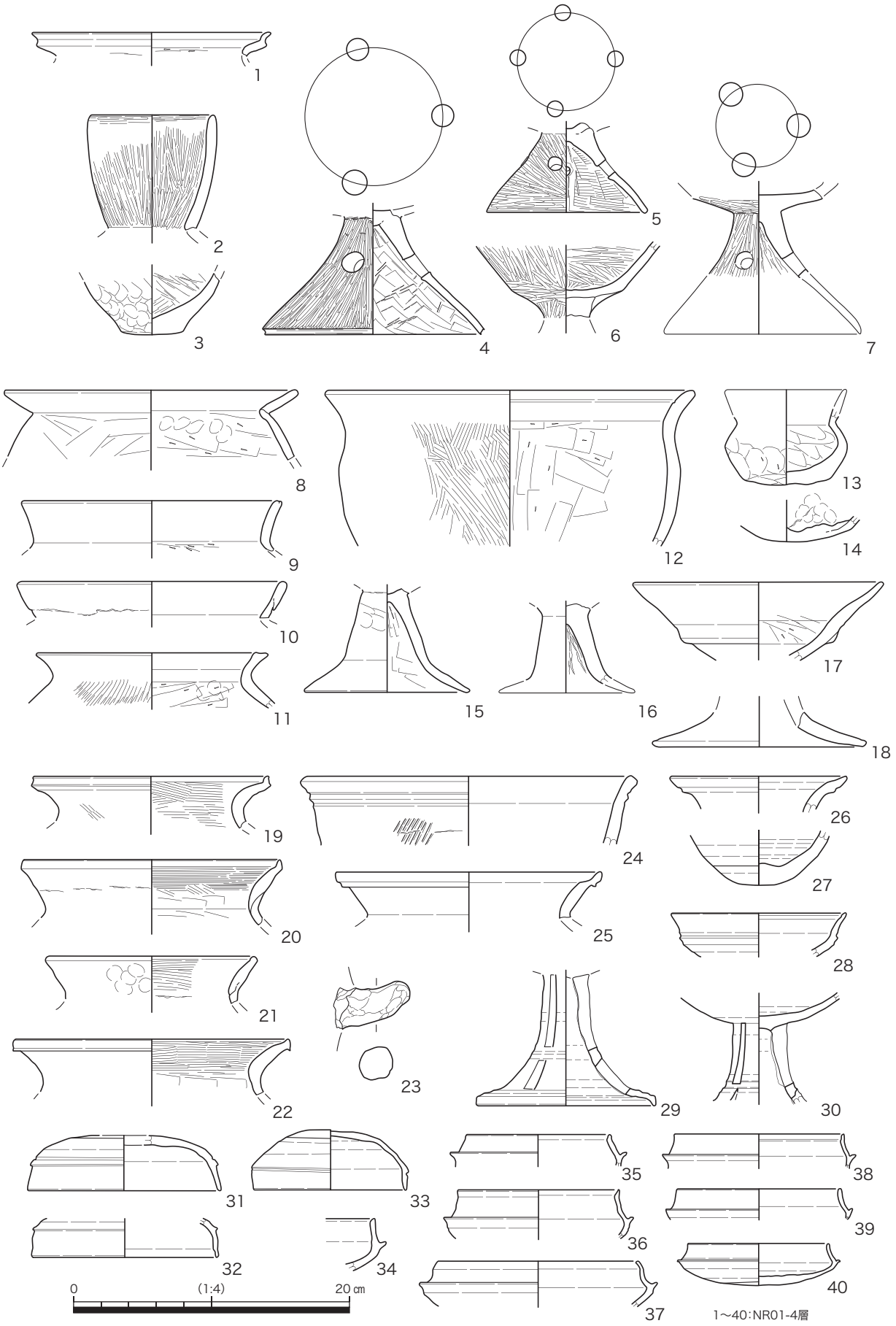


写真38　A区NR01

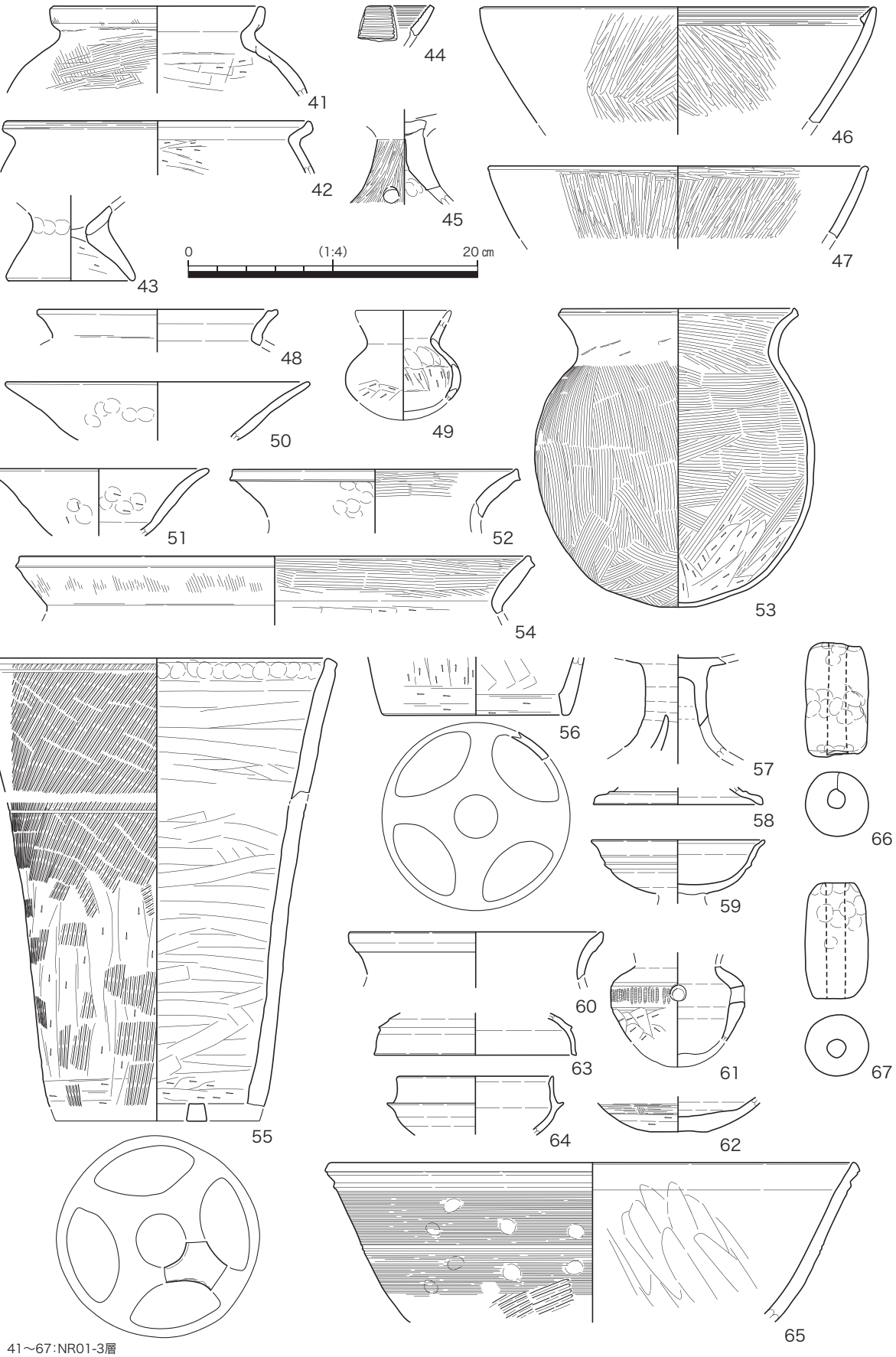
1：全景　2：杭列検出状況　3・4：杭列土層断面



第110図　A区NR01遺物出土状況（1:100）

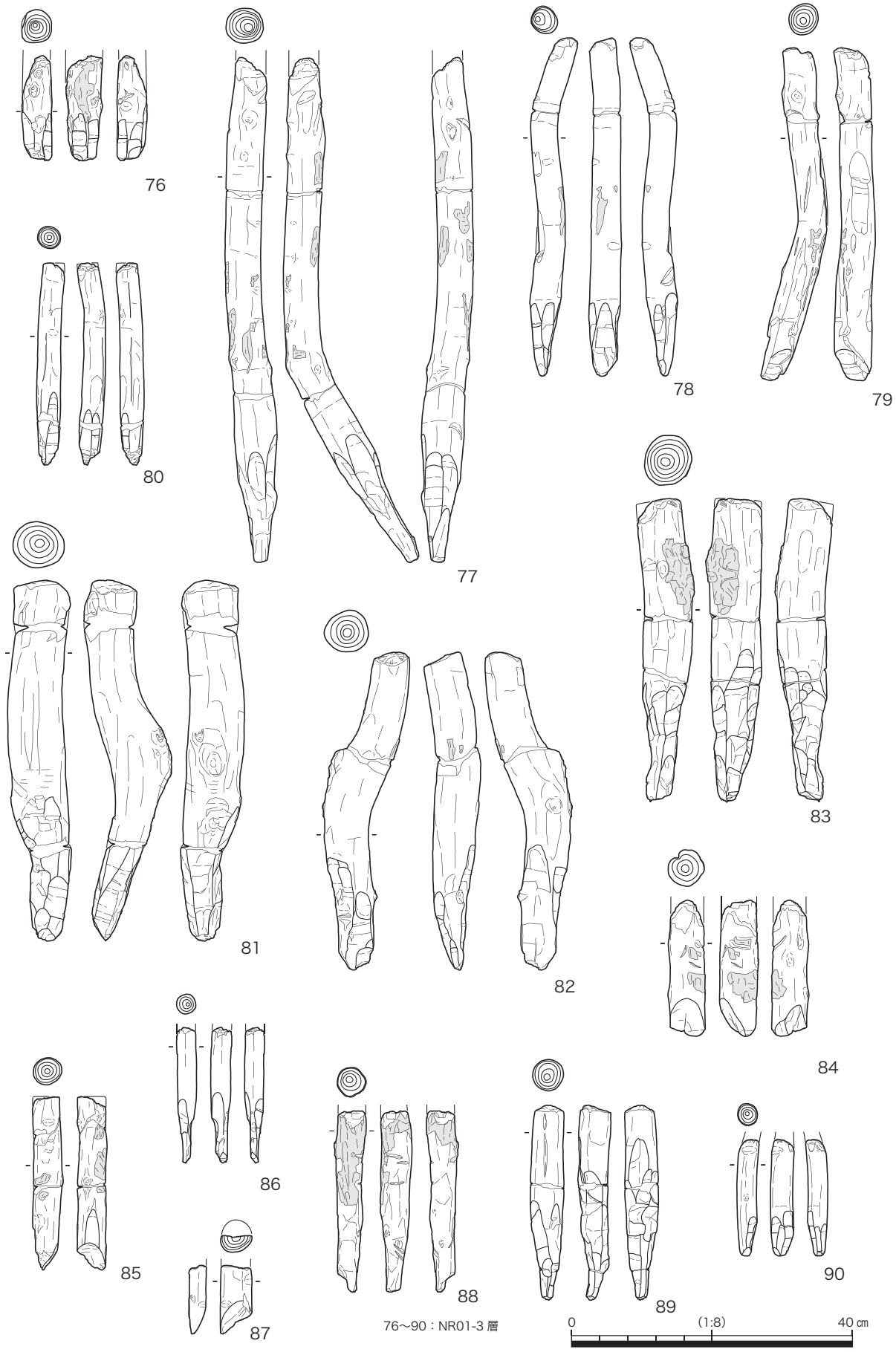


第111図　A区NR01-4層出土遺物実測図（1:4）



41～67:NR01-3層

第112図　A区NR01-3層出土遺物実測図（1:4）



第113図　A区NR01-３層出土木製品実測図（1:8）















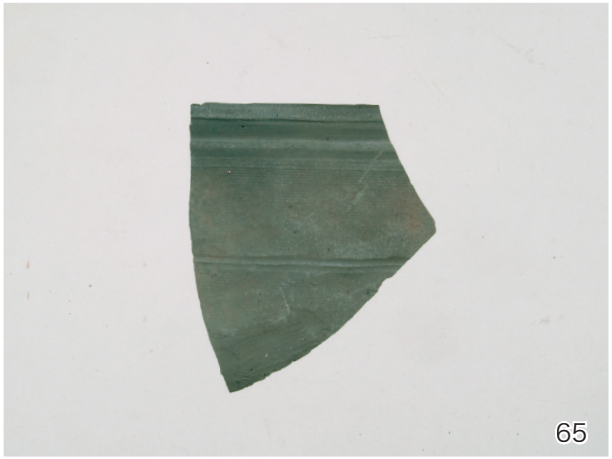




写真39　A区出土遺物


77


78


83


77


78


83

写真40　A区出土木製品

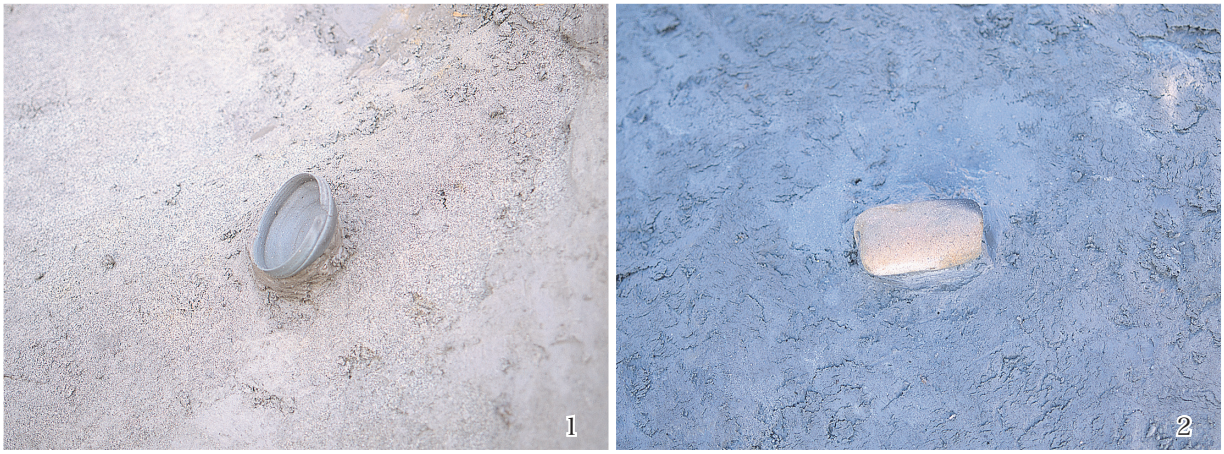


写真41　A区NR01遺物出土状況

1：4層出土須恵器蓋　2：3層出土大型管状土錘

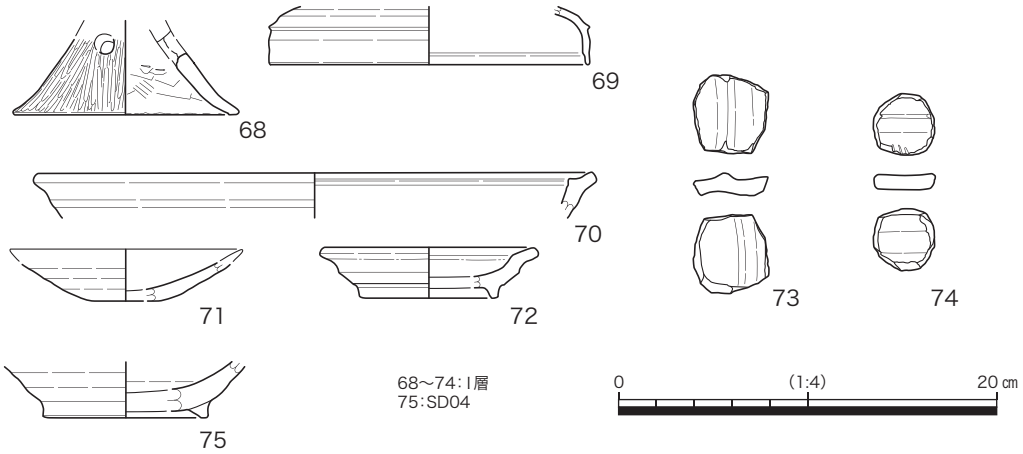
中世～近世

SD01～04 水田と島畑

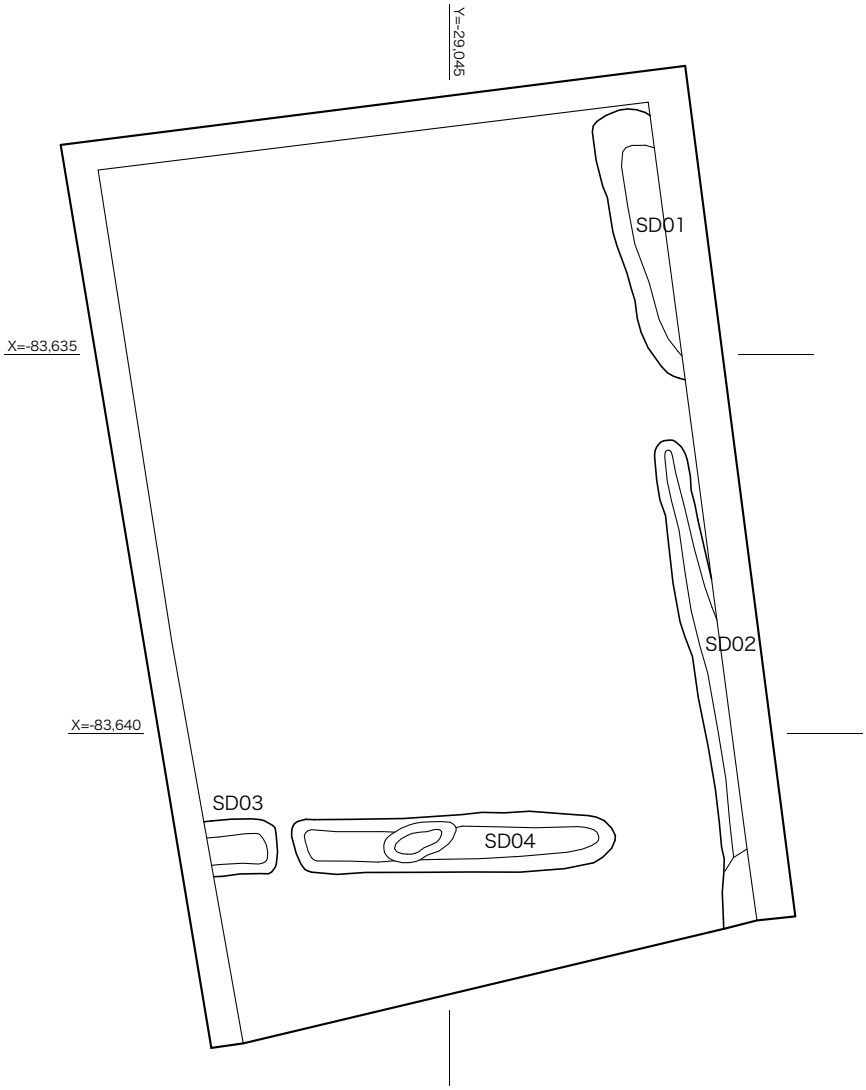
1面の遺構として、それぞれ南北方向を区画する溝SD01・02、東西方向を区画する溝SD03･04を検出した(第115図)。これらは耕作地を区画する溝であると思われる。また、それらの遺構の上位には水田と島畑が連続して形成されている。なお、土層断面において確認される島畑と水田面の比高は約0.7 mである。

Ⅰ層出土遺物

Ⅰ層には、下位の堆積層から混入したと思われる土師器高杯（68)、須恵器蓋（69）に加えて、古瀬戸陶器擂鉢（70)、東濃型山茶碗（71)、大窯陶器折縁皿（72)、瀬戸美濃陶器擂鉢を転用した加工円盤（73・74）など、15世紀後半～16世紀前半を中心として、19世紀までの遺物が含まれる。75はSD04から出土した尾張型第5型式の山茶碗である。出土遺物が少なく、確定的な見解を導くまでには及ばないが、12世紀に耕作地としての利用が開始されて以降、中世から近世を通じてA区付近は耕作地としての利用が継続したことを推察する。



第114図　A区Ⅰ層・SD04出土遺物実測図（1:4）



第115図　A区中世～近世遺構図（1:100）





写真42　A区土層断面／中世～近世遺構

1：西壁土層断面　2：中世～近世遺構全景

（2）Ba区

層序と検出遺構

Ｂａ区では、Ⅰ層に対応する灰黄色シルト層の上位において近世の島畠と水田、Ⅰ層下位において古墳時代後期～古代の河川を検出した（第 116 図）。調査した遺構面は計２遺構面となるが、Ⅴ層（黒色粘土層）中において古墳時代初頭の遺物を検出した。

古墳時代初頭

Ⅴ層出土遺物

Ⅴ層は大部分が古墳時代後期～古代の河川によって削剥され、調査区北端付近（河川の北岸付近）の部分がわずかに残存する程度であった。遺構は確認されなかったが、層中から古墳時代初頭の土師器が出土した。91 はＳ字甕Ｂ類古段階、92 は浅鉢あるいは甕。92 は外面に煤が厚く付着する。いずれもおよそ廻間Ⅱ式前半に対比される。

古墳時代後期～古代

河川内堆積物

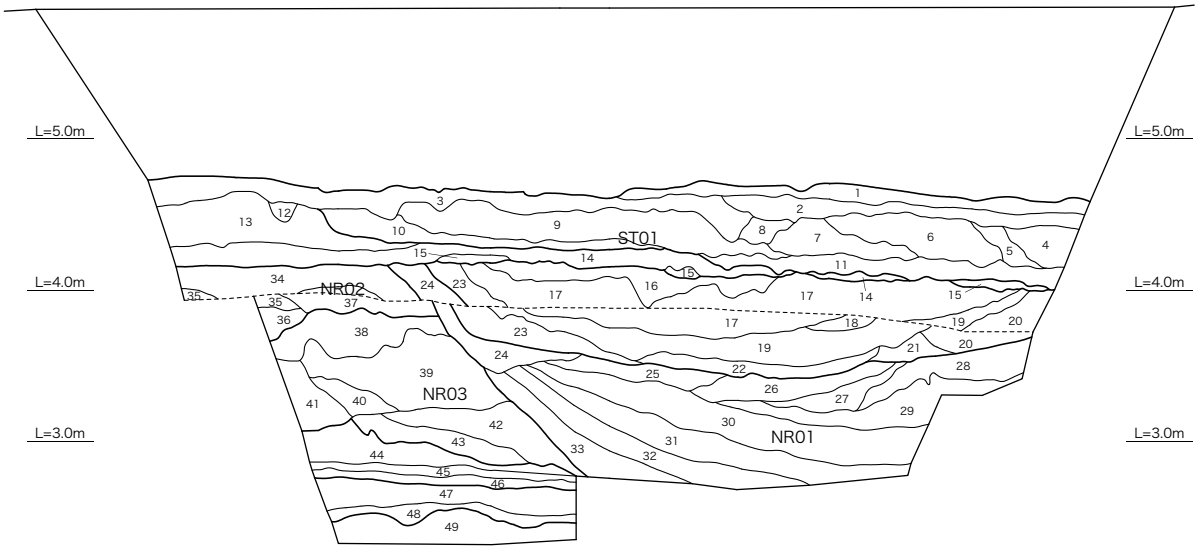
Ⅰ層下位は、河川内の堆積物がＢａ区全域を被覆する。Ｂａ区は河川の北岸付近に相当し、標高約 2.7 ｍまで（深さ約 1.3 ｍ）を掘削したが、完掘できなかった。堆積状況から河川が埋積する各段階を大局的に把握し、NR01、NR02、NR03 として順次、河川内

NR01

の堆積物を掘削した（第 116・117 図）。NR01 は上層と下層に区分され、層理面付近には自然木などの植物遺体や用材が大量に残されていた（樹種同定結果については第４章（６）を参照）。出土遺物は総じて少量で、NR01 上層において須恵器摘み蓋（97）、ごく薄く灰釉を施した灰釉陶器碗（98）、NR03 において古墳時代後期を相前後する土師器と

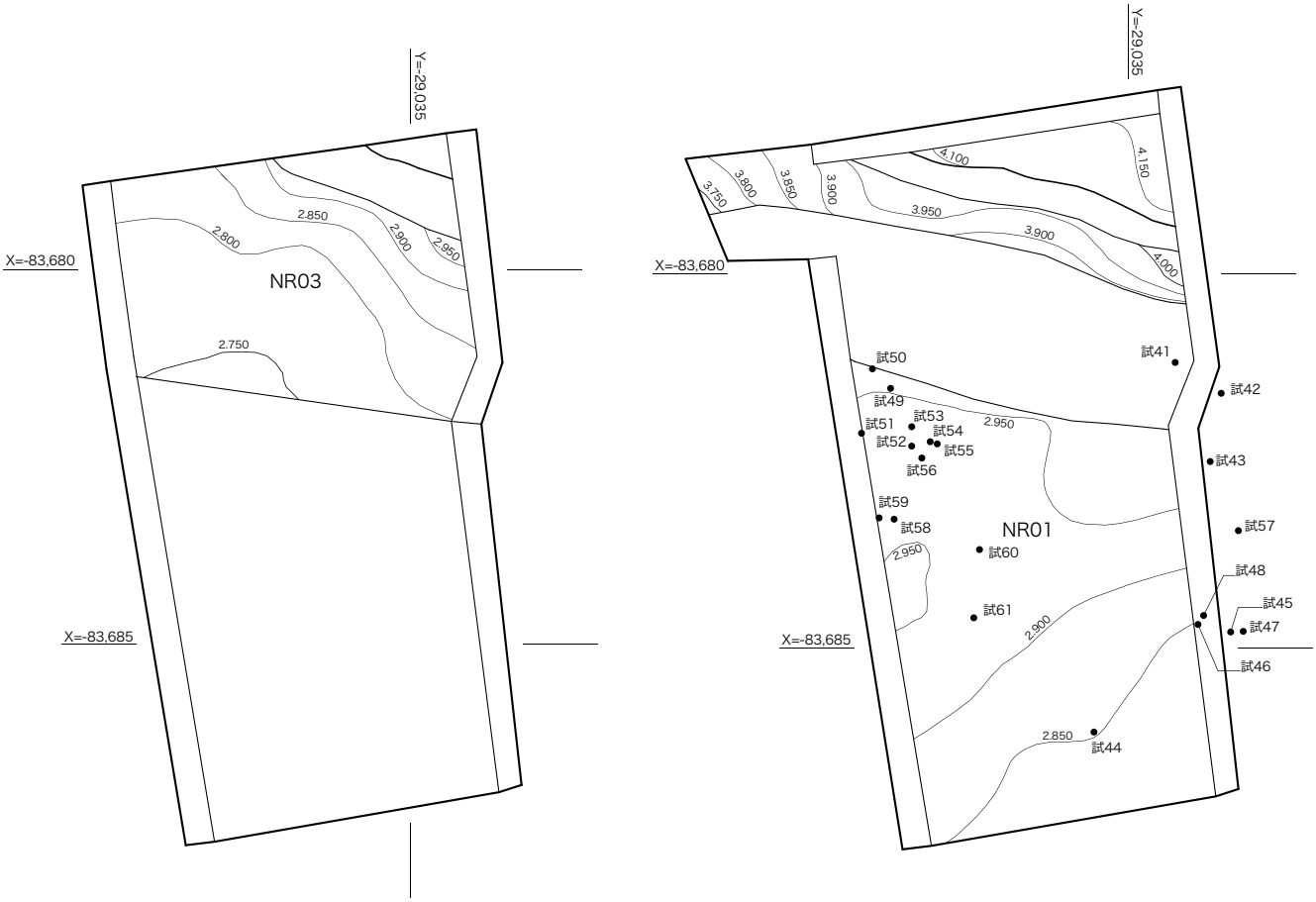
埋没時期

須恵器（93 ～ 96）などが出土した。これらの出土遺物から NR03 が６～７世紀、NR01 下層が８世紀、同上層が 10 ～ 11 世紀にそれぞれ埋没したと考えられる。

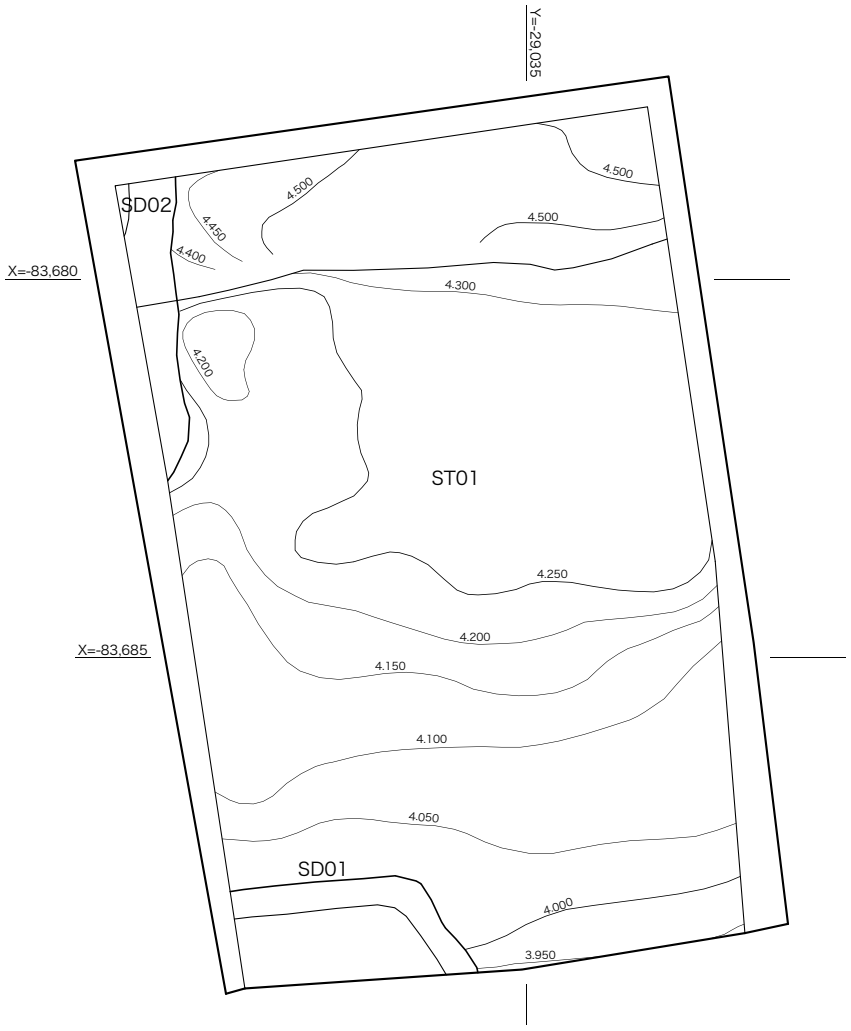


1 10Y4/1 灰色粘土
2 5Y6/2 灰オリーブ色シルト、5Y6/1 灰色中粒砂混じる
3 5Y6/1 灰色シルト
4 7.5Y5/2 灰オリーブ色粘質シルトと 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルトの斑土
5 7.5Y5/2 灰オリーブ色粘質シルト
6 2.5Y5/2 暗灰黄色シルトと 5Y6/2 灰オリーブ色シルトの斑土
7 5Y5/3 灰オリーブ色シルト
8 5Y5/2 灰オリーブ色シルト
9 5Y5/3 灰オリーブ色シルト
10 5Y5/3 灰オリーブ色粘質シルト、10Y5/1 灰色シルト斑入
11 10Y4/3 灰色粘質シルト
12 7.5Y5/2 灰オリーブ色シルト、2.5Y5/2 暗灰黄色粗粒砂混じる
13 5Y6/3 オリーブ黄色砂質シルト
14 5Y6/3 オリーブ黄色シルト
15 5Y6/2 灰オリーブ色シルト
16 5Y5/2 灰オリーブ色中粒砂
17 5Y6/4 オリーブ黄色シルト、5Y7/2 灰白色シルト斑入
18 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト
19 2.5Y7/1 灰白色粘土
20 2.5Y5/3 黄褐色細粒砂
21 2.5Y6/1 黄灰色細粒砂
22 2.5Y6/1 黄灰色粘土
23 2.5Y7/2 灰黄色細粒砂、下層に炭化材を密に含む
24 2.5Y6/1 黄灰色中粒砂
25 2.5Y7/2 灰黄色細粒砂
26 2.5Y4/1 黄灰色シルトと 2.5Y8/1 灰白色細粒砂の互層、植物遺体を大量に含む
27 2.5Y4/1 黄灰色シルトと 2.5Y8/1 灰白色細粒砂の互層、植物遺体を大量に含む
28 7.5Y6/1 灰色中粒砂
29 7.5Y6/1 灰色中粒砂
30 7.5Y6/1 灰色中粒砂
31 7.5Y6/1 灰色中粒砂
32 7.5Y6/1 灰色粘質シルト
33 7.5Y6/1 灰色粘質シルト
34 2.5Y6/2 灰黄色粘土、2.5Y5/3 黄褐色中粒砂わずかに混じる
35 2.5Y6/3 にぶい黄色粗粒砂
36 2.5Y6/3 にぶい黄色砂質シルト
37 10Y3/1 オリーブ黒色粘土、10Y7/1 灰白色シルト・10Y6/1 灰色中粒砂斑入、炭化物混じる
38 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト、10YR4/6 褐色粗粒砂混じる
39 10Y3/1 オリーブ黒色粘土と 10Y5/1 粘土の斑土、炭化物を含む
40 10Y5/1 灰色中粒砂
41 2.5Y6/2 灰黄色粘質シルト
42 10YR5/2 灰黄褐色粘土、10YR8/4 浅黄橙色シルト斑入
43 10YR4/1 褐灰色粘土
44 10Y5/1 灰色粘質シルト、炭化物を含む
45 10Y4/1 灰色粘土、炭化物を大量に含む
46 10Y6/1 灰色粘土
47 10Y2/1 黒色粘土、炭化物を含む
48 10Y3/1 オリーブ黒色粘土、10Y6/1 灰色粘土斑入
49 10Y6/1 灰色粘土

第116図　Ｂａ区東壁土層断面図（縦1:50／横1:100）



第117図　Ｂａ区NR03・01遺構図（1:100）



第118図　Ｂａ区中世～近世遺構図（1:100）

中世～近世

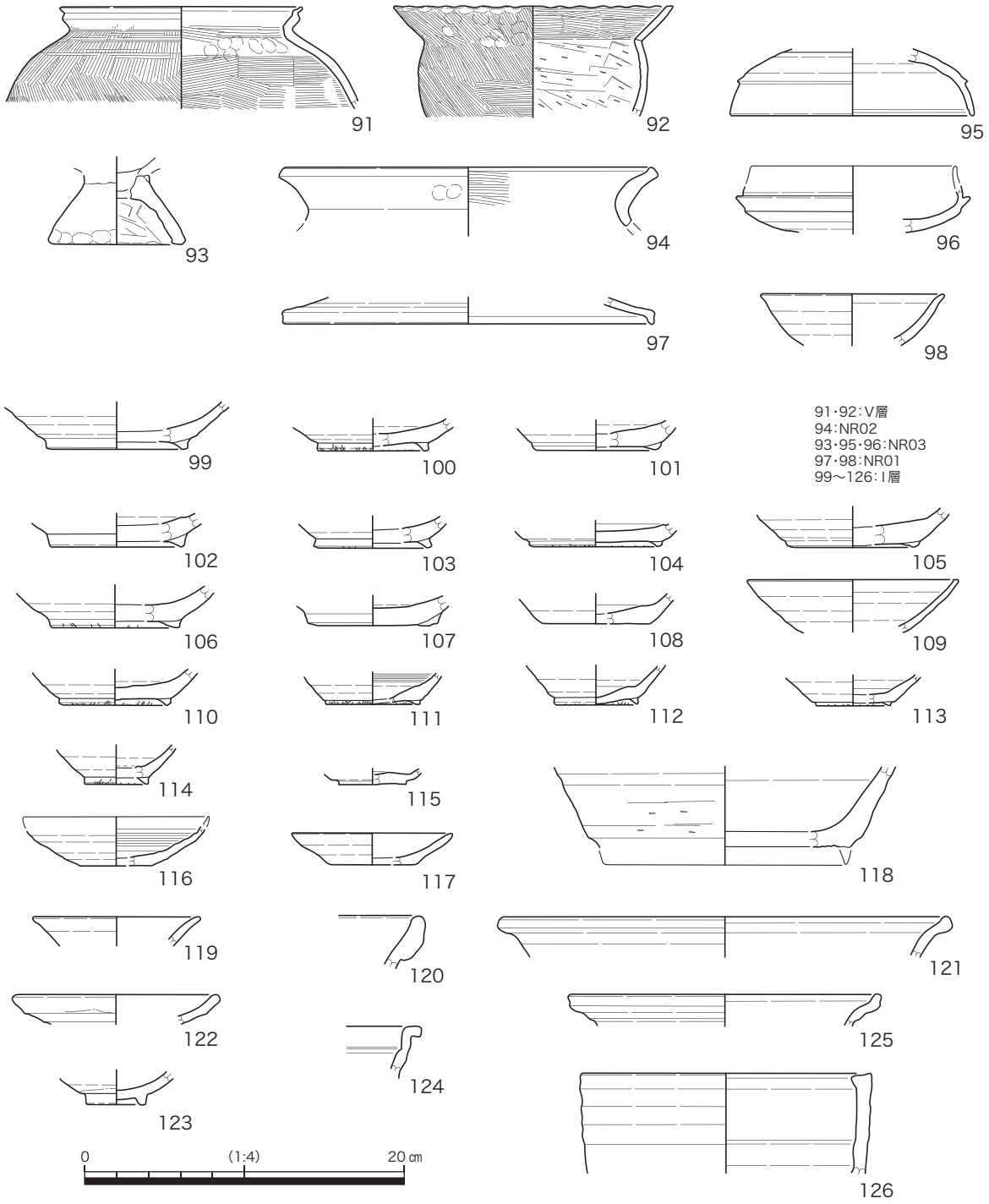
水田と島畑

Ⅰ層上位において中世～近世の耕作地（の痕跡）を検出した（第 118 図）。Ｂａ区北端付近が島畑、北端付近を除くＢａ区全域が水田に相当していたと考えられる。Ⅰ層中には尾張型山茶碗（99 ～ 108）、東濃型山茶碗（109 ～ 116）、15 世紀後半のロクロ調整土師器皿（117）、瀬戸陶器片口鉢（118）、大窯陶器稜皿（119）、擂鉢、丸皿、丸碗などの連房製品（120 ～ 125）など、12 ～ 18 世紀の各時期の遺物が散見される。126 は匣鉢で、口縁部に連続する敲打による器面剥離が認められることから、灰落としなどに転用されたことが推定できる。これらの遺物から、Ｂａ区周辺は中世以降、低湿な埋没河川上が水田に、周囲の高燥な自然堤防上が島畑にそれぞれ移行し、近世に継続したと考えられる。



写真43　Ｂａ区土層断面／NR01／中世～近世遺構

1：東壁土層断面　2：NR01全景　3：中世～近世遺構全景



第119図　Ｂａ区出土遺物実測図（1:4）

（3）Bb区

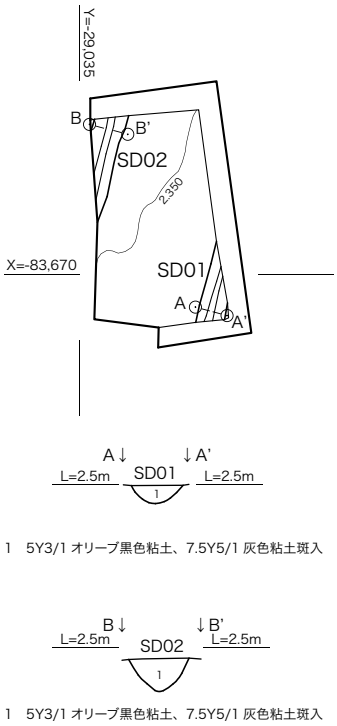
層序と検出遺構

Ｂｂ区ではⅣ層（灰色砂質シルト層）上位において古墳時代中期の土器群、Ⅴ層（黒色粘土層）下位において古墳時代初頭の遺構を検出した（第121図）。調査区が狭小なこともあって、各時期の堆積層を順次掘削したものの、古代以降の遺構は確認されなかった。

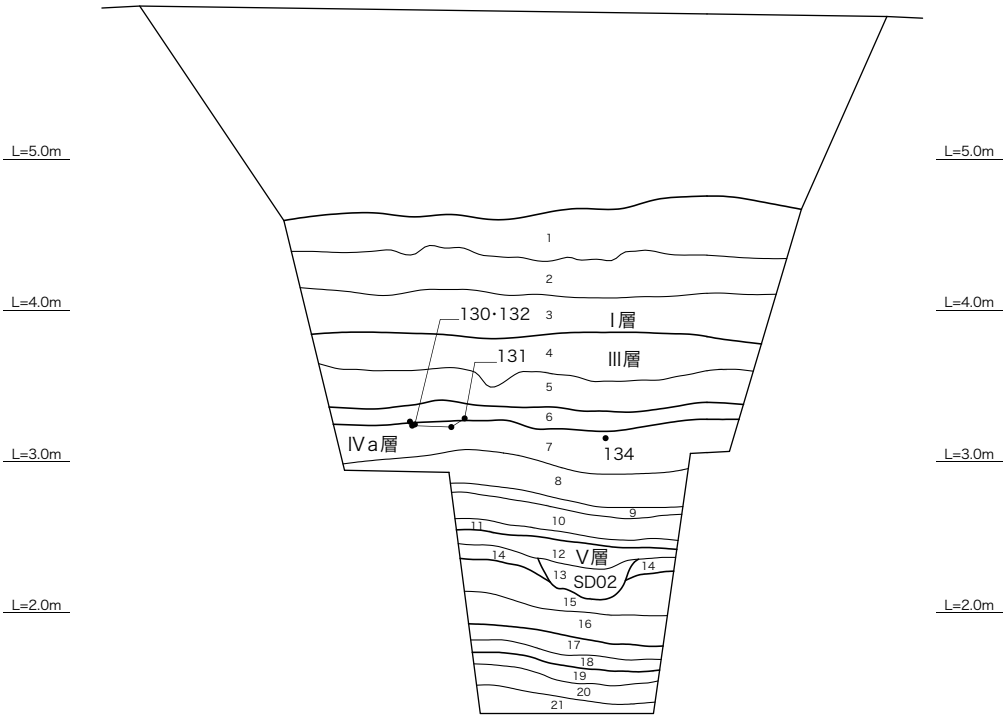
古墳時代初頭

SD01・02

Ⅴ層下位において北東―南東方向に通じる２条の小溝を検出し、SD01・02とした（第120図）。溝は幅約0.4ｍ、深さ約0.2ｍで、２条の溝の間隔は約1.6ｍである。埋土はⅤ層から連続する黒色粘土層で、基盤層に由来する灰色粘土が塊状に含まれるも、Ⅴ層からは明確に区別されない。Ⅴ層中からは、土師器甕（127）、高杯（128）、パレス壺（129）などが出土した。これらはおよそ廻間Ⅰ式後半に対比され、遺構の年代も３世紀前半と推定される。



第120図　Ｂｂ区古墳時代初頭遺構図（1:100）



1　10Y7/2 灰白色粘質シルト
2　10Y3/1 オリーブ黒色粘土
3　10Y4/1 灰色粘質シルト
4　7.5Y5/2 灰オリーブ色中粒砂
5　7.5Y5/1 灰色砂質シルト
6　7.5Y4/1 灰色砂質シルト、炭化物少量混じる、細粒砂を互層状に含む
7　10Y4/1 灰色砂質シルト
8　7.5Y4/1 灰色粘質シルト、炭化物を含む
9　7.5Y5/1 灰色中粒砂
10　10Y5/1 灰色粘土、炭化物を大量に含む
11　10Y6/1 灰色粘土
12　7.5Y2/1 黒色粘土、炭化物を含む
13　5Y3/1 オリーブ黒色粘土、7.5Y5/1 灰白色粘土斑入
14　7.5Y3/1 オリーブ黒色粘土、炭化物を含む
15　10Y5/1 灰色粘土
16　10Y5/1 灰色粘土、炭化物を縞状に含む
17　10Y2/1 黒色粘土
18　7.5Y3/1 オリーブ黒色粘土、植物遺体混じる
19　7.5Y4/1 灰色粘土、炭化物を縞状に含む
20　7.5Y4/1 灰色粘土と 7.5Y7/1 灰白色粘土の互層、植物遺体を大量に含む
21　10Y6/1 灰色粘土

第121図　Ｂｂ区東壁土層断面図（縦1:50／横1:100）

古墳時代中期

Ⅳ層中でも上位の層理面付近（Ⅳa層）において土器群SU01を検出した（第122・123図）。土器群は調査区南西の一画に分布するが、調査区の制約から、分布範囲は確定できなかった。土器群は、甕3点（130～132）、その他土製品として鞴羽口1点（133）を個体識別した。なお、鞴羽口が出土した周辺を精査したものの、鉄滓や微小鉄片などの鍛冶関連遺物は検出されず、付近における焼土や炭化物の含有も顕著でなかった。

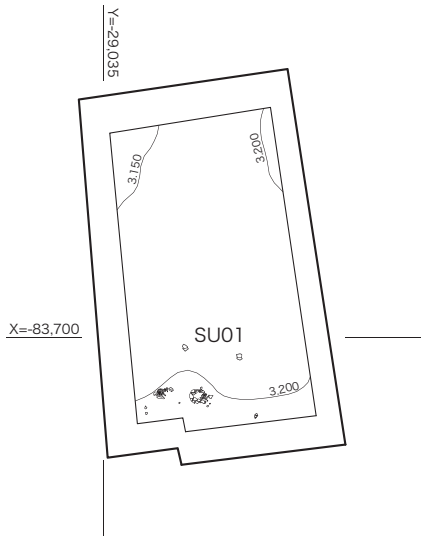
SU01

131は口縁部が内彎する形態、体部上半の調整などから、布留式あるいはその流れを汲む甕とした。内面のケズリ調整は失われ、器壁も厚い。口縁部に断続的な沈線を認める。

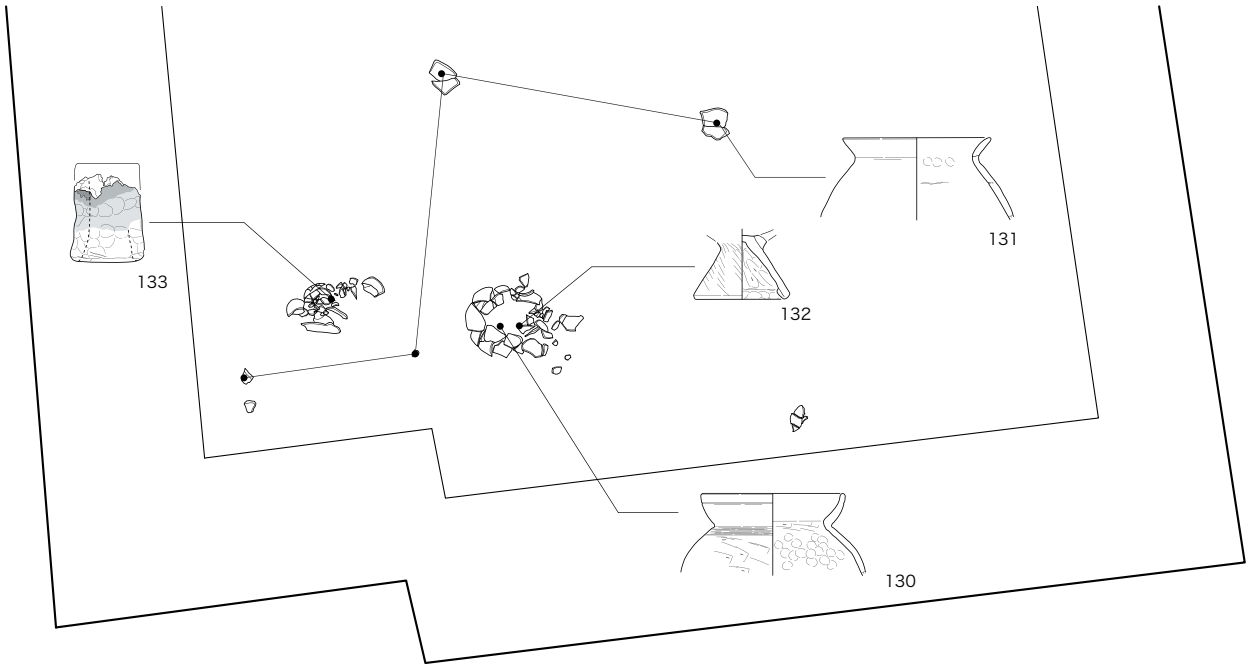
布留式甕

132はS字甕D類新段階で、松河戸Ⅱ式前半に対応する。鞴羽口は、基部がわずかに広がる形態で、外径7.4cm、内径4.2cm、基部後端の外径は7.9cmである。先端部分は欠失するが、外面先端部側に幅2～3cmの黒色化した部分が確認されるので、全長10cm程度の寸胴の形態が想定されるであろう。基部側は指の押圧によって整えられ、内面はやや曖昧なヘラケズリが施される。色調は、先端部側から黒色、白色（幅2～4cm）に熱変化する。なお、熱変化していない部分（被熱前）の色調は淡橙色である。残存する黒色部分には多孔質に溶

鞴羽口



第122図　Ｂｂ区古墳時代中期遺構図（1:100）



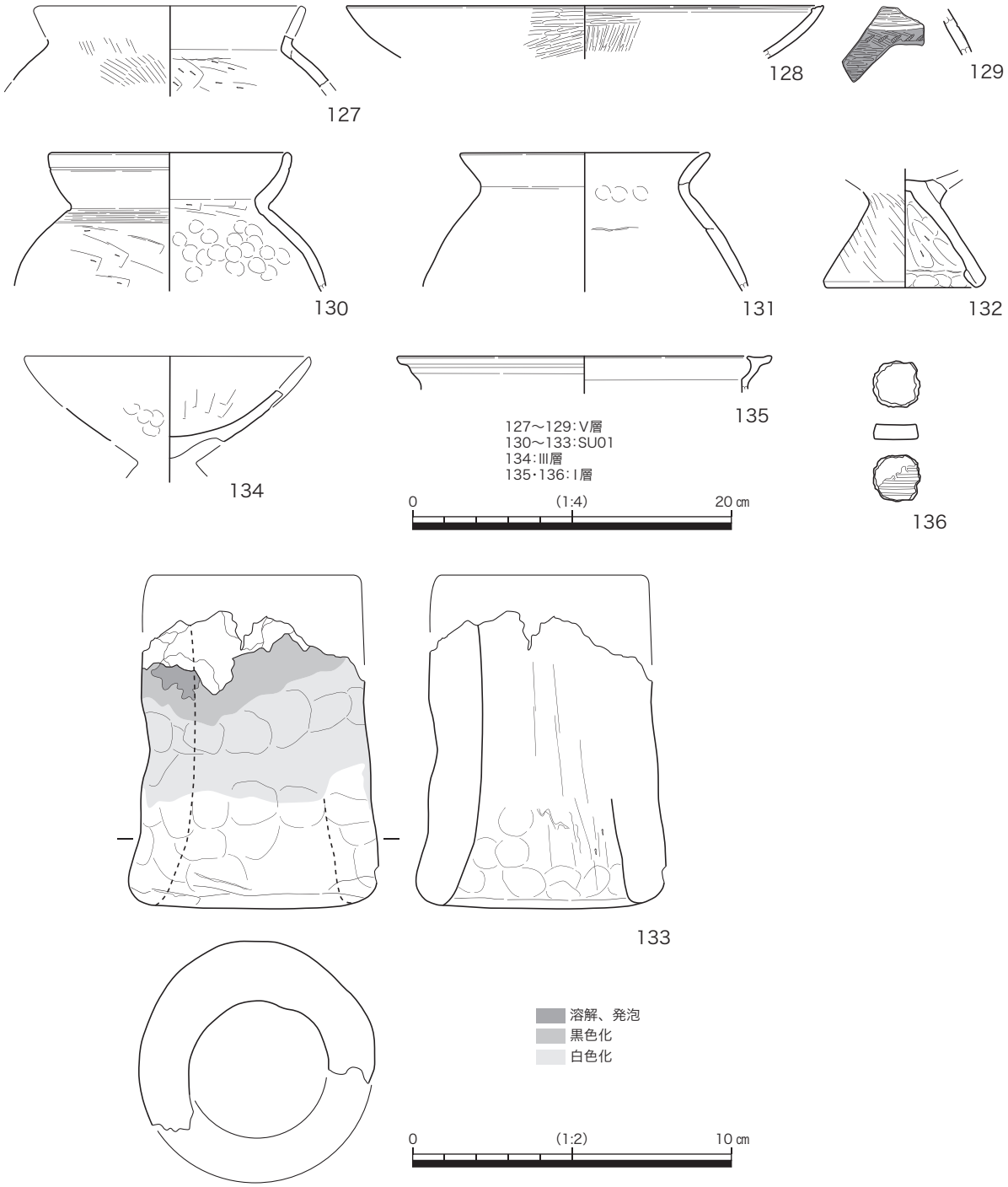
第123図　Ｂｂ区SU01遺物出土状態図（1:20）





写真44　Ｂｂ区古墳時代初頭遺構／SU01

１：古墳時代初頭遺構全景　２：SU01遺物近景



第124図　Ｂｂ区出土遺物実測図（1:4／1:2）

解、発泡した部分もわずかながら認められる。胎土中には砂粒が多く含まれる。共伴した松河戸Ⅱ式前半の土器群から、５世紀前半の年代が与えられる。

松河戸Ⅱ式前半

近世

Ⅰ層中からは近世の遺物（135・136）が出土した。遺構としては確認できなかったが、Ｂａ区と同様、Ｂｂ区の全域が水田に相当していると考えられる。

（4）C区

層序と検出遺構

C区ではⅠ層に対応する黒褐色シルト層上位において近世の耕作地、Ⅰ層下位において古代の遺構、Ⅳ層に対応する灰色粘土層中において古墳時代前期の土器、Ⅴ層（黒色粘土層）下位において古墳時代初頭の遺構を検出した（第125図）。

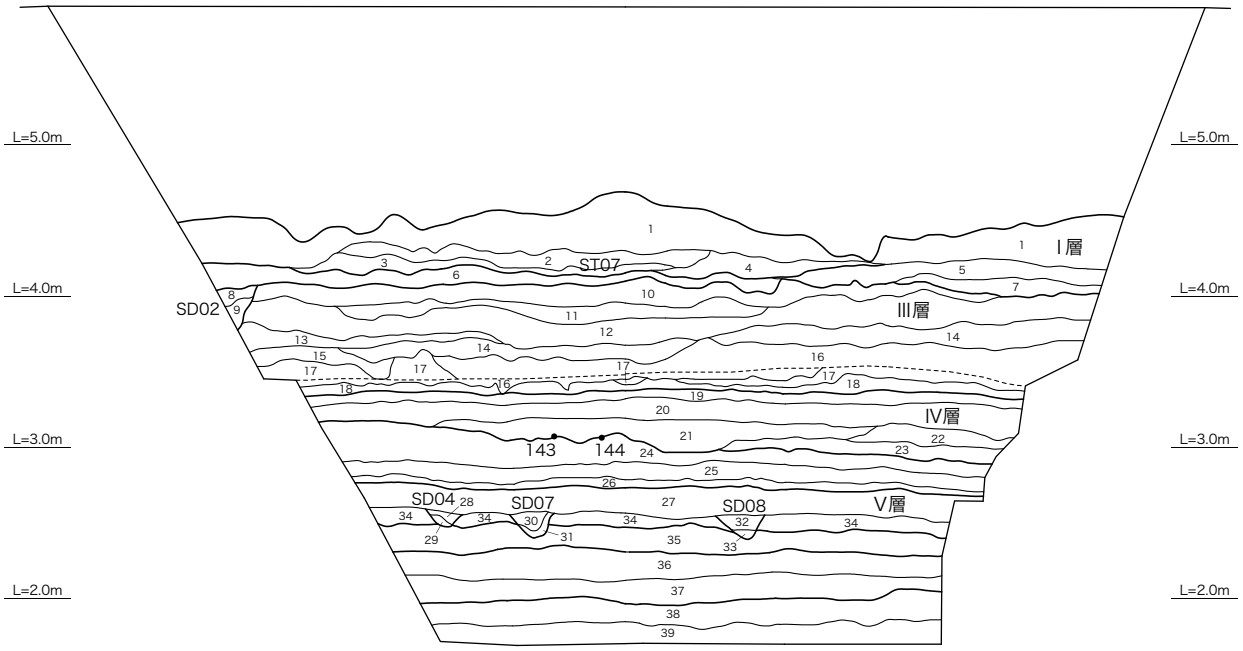
古墳時代初頭

SD04～08

Ⅴ層下位において北東―南東方向に平行して通じる4条の小溝SD05～08と、それに直交する1条の小溝SD04を検出した（第126図）。なお、Ⅴ層は周辺調査区に堆積するⅤ層と比較して、粗粒砂を多く含有する傾向が認められた。溝はB b区同様、幅約0.4 m、深さ約0.2 mで、溝の間隔は1.6 m前後とほぼ一定している。溝内には上層にⅤ層から連続する黒色粘土層、下層に基盤層に由来する灰色粘土が塊状に含まれる黒色粘土層が堆積する。SD07、SD06からそれぞれ土師器台付甕（137）、有稜低脚高杯（138）、Ⅴ層中からは、土師器台付甕（139）、高杯（140～142）などが出土した。溝内、Ⅴ層中出土遺物とも、およそ廻間Ⅰ式後半に対比され、遺構の年代も3世紀前半と推定される。

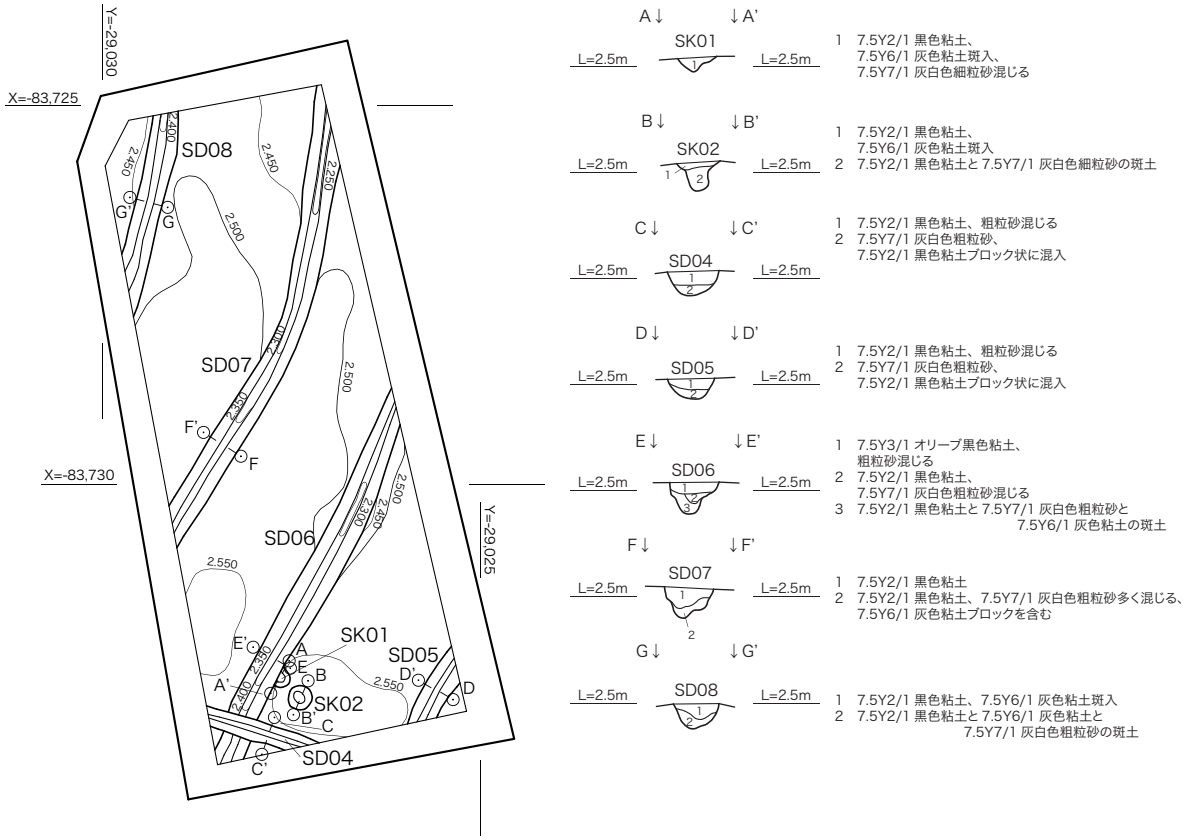
古墳時代前期

Ⅳ層中の上位（Ⅳb層）において古墳時代前期の土師器高杯（143）、小型壺（144）などを検出した。それぞれ杯部と体部が完存するが、同層中における遺物の出土は散漫で、



1 10Y3/1 オリーブ黒色中粒砂
2 5GY4/1 暗オリーブ灰色シルトと5Y5/1 灰色細粒砂の斑土
3 5Y4/2 灰オリーブ色中粒砂、5GY4/1 暗オリーブ灰色シルト斑入
4 10Y4/2 灰オリーブ色細粒砂
5 10Y4/1 灰色細粒砂
6 10Y3/2 オリーブ黒色シルト、5Y5/1 灰色細粒砂斑入
7 10Y5/1 灰色シルト
8 10Y4/1 灰色シルト
9 7.5Y5/1 灰色粘質シルト
10 7.5Y6/1 灰色細粒砂、5Y5/1 灰色シルト斑入
11 7.5Y4/1 灰色シルトと7.5Y6/1 灰色細粒砂の斑土
12 5Y5/1 灰色細粒砂
13 2.5Y4/3 オリーブ褐色細粒砂、5Y5/1 灰色細粒砂斑入
14 7.5Y4/1 灰色中粒砂
15 5Y6/1 灰色中粒砂、2.5Y5/1 黄灰色シルト斑入
16 2.5Y5/1 黄灰色中粒砂
17 5Y5/1 灰色粘質シルト
18 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質シルト、2.5Y4/2 暗灰黄色中粒砂斑入、炭化物互層状に混じる
19 5Y5/1 灰色粘質シルト、炭化物混じる
20 7.5Y4/1 灰色粘土、炭化物混じる
21 10Y4/1 灰色粘土、炭化物混じる
22 7.5Y4/1 灰色シルト
23 7.5Y6/1 灰色シルト
24 7.5Y4/1 灰色細粒砂
25 7.5Y3/1 オリーブ黒色粘土
26 7.5Y4/1 灰色粘土
27 7.5Y2/1 黒色粘土、粗粒砂混じる
28 7.5Y2/1 黒色粘土、粗粒砂混じる
29 7.5Y7/1 灰白色粗粒砂、7.5Y2/1 黒色粘土ブロック状に混入
30 7.5Y2/1 黒色粘土、7.5Y6/1 灰色粘土混入、7.5Y7/1 灰白色粗粒砂混じる
31 7.5Y6/1 灰色粘土と7.5Y7/1 灰白色粗粒砂の斑土
32 7.5Y2/1 黒色粘土、7.5Y6/1 灰色粘土斑入
33 7.5Y2/1 黒色粘土、7.5Y6/1 灰色粘土斑入、7.5Y7/1 灰白色粗粒砂混じる
34 7.5Y6/1 灰色粘土
35 7.5Y7/1 灰白色粗粒砂
36 7.5Y6/1 灰色粘土、炭化物を含む
37 7.5Y6/1 灰色粘土、炭化物を大量に含む
38 N2/0 黒色粘土
39 7.5Y3/1 オリーブ黒色粘土

第125図　C区西壁土層断面図（縦1:50／横1:100）

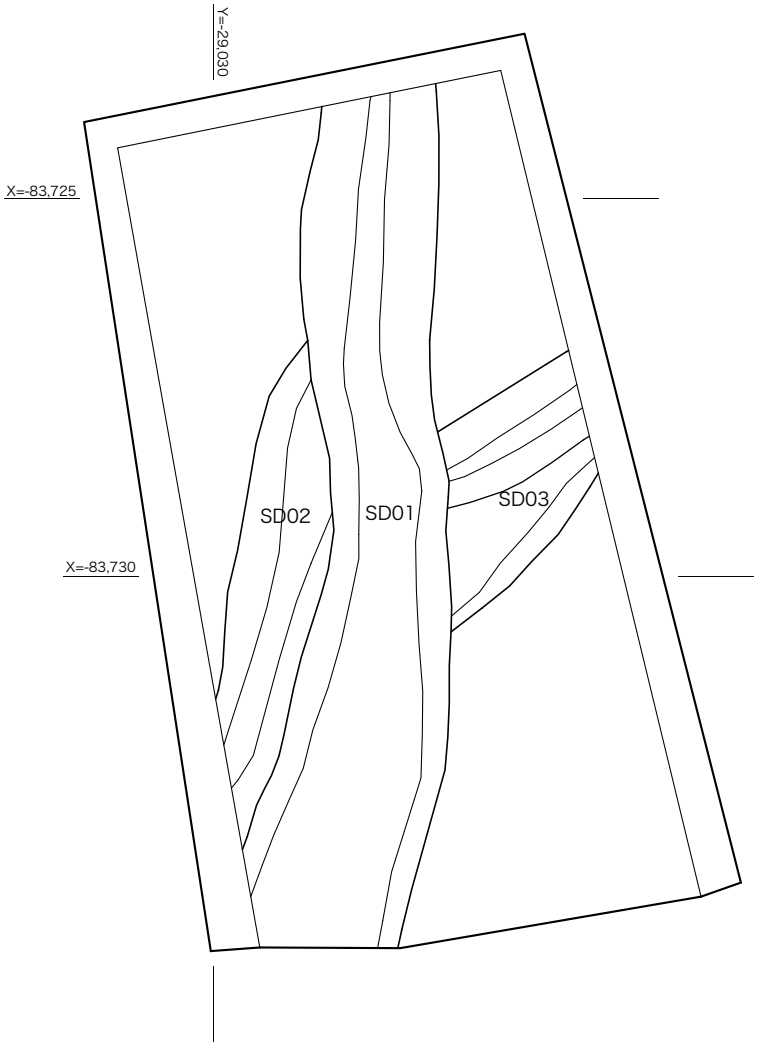


第126図　C区古墳時代初頭遺構図（1:100）



写真45　古墳時代初頭遺構

1：検出状況　2：完掘状況



第127図　C区古代遺構図（1:100）

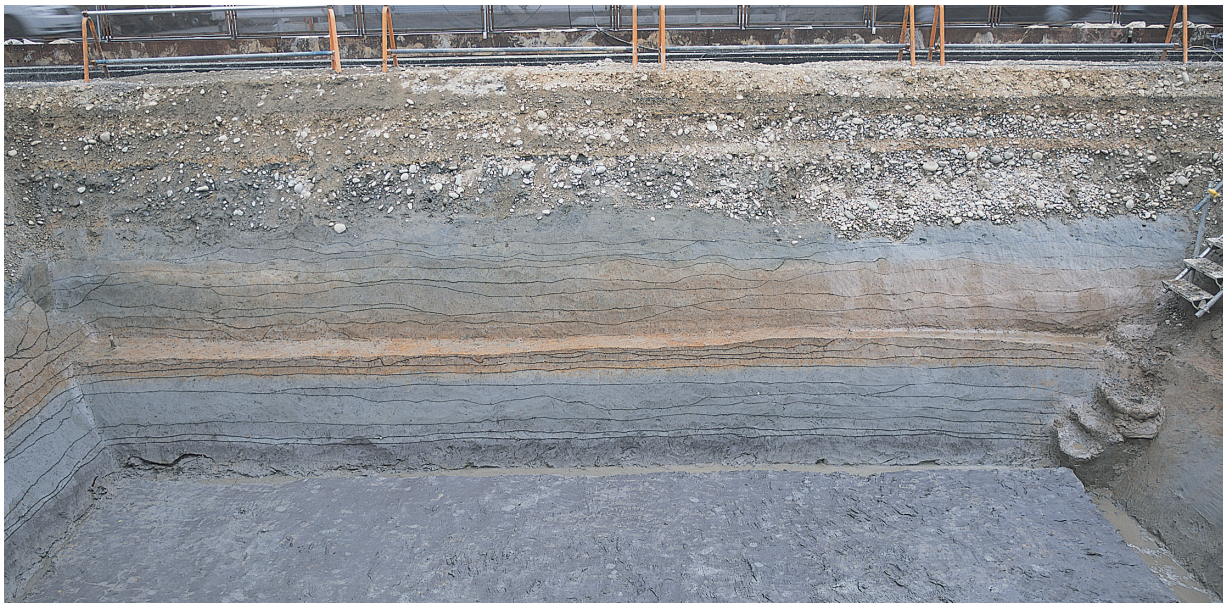
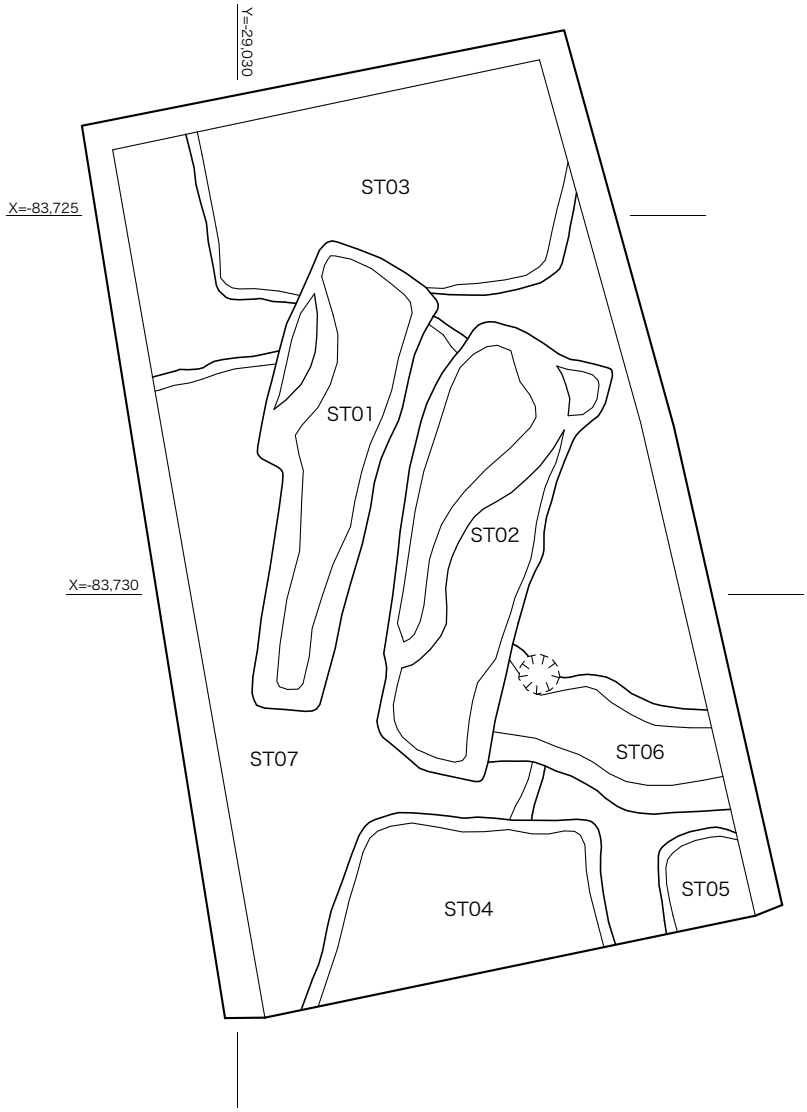


写真46　C区西壁土層断面



第128図　C区近世遺構図（1:100）



写真47　C区古代／近世遺構全景

1：古代遺構全景　2：近世遺構全景

それに関係する明確な遺構は検出されなかった。これらの土器は、およそ松河戸Ⅰ式後半に対比される。なお、Ⅳ層上位はD～F区の水田検出面に相当するが、層理面には傾斜があり、畦畔も検出されなかった。Ⅳ層を被覆するⅢ層の堆積が不安定であることからも、Ⅲ層堆積時に水田耕作土のかなりの部分が流出し、その結果、水田が検出されなかったと推定される。

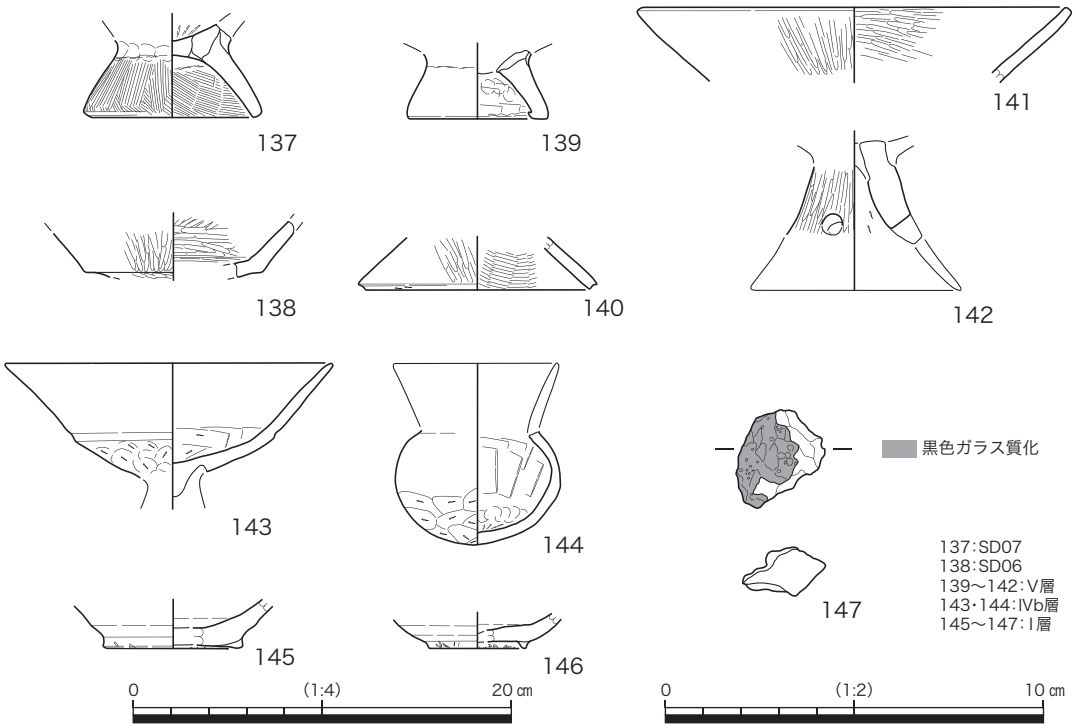
古代

Ⅰ層下位において南北方向に通じる溝SD01・02と、それに重複する東西方向の溝SD03を検出した（第127図）。溝の掘形は曖昧で、層位関係の把握にはやや難がある。層序からは古代～中世の遺構として把握されるが、遺構検出時に出土した遺物は古代以前の遺物に限定されることから、古代の遺構とした。

近世

島畑と水田

Ⅰ層上面において方形を基調とする落ち込みST01～07を検出した（第128図）。これらは、島畑造成時の地下げの痕跡と考えられ、地下げした部分は水田として利用されたと推測される。Ⅰ層中からは山茶碗（145・146）など13～14世紀の遺物がわずかに出土した。これらの遺物は、島畑形成時期の上限を示す。147は同層中から出土した中世以降に帰属する鉄滓である。



第129図　C区出土遺物実測図（1:100）

















写真48　Ｂａ・Ｂｂ・Ｃ区出土遺物

（5）D区

層序と検出遺構

D区では、Ⅱ層に対応する褐色シルト層上位で中世の遺構、Ⅱ層下位で古代の遺構、Ⅳ層に対応する黄灰色シルト層上位で古墳時代中期の水田、Ⅳ層中において古墳時代前～中期の土器、Ⅴ層（黒色粘土層）中において古墳時代初頭の遺物、Ⅴ層下位において古墳時代初頭の遺構を検出した（第130図）。なお、Ⅳ層上位で検出した水田については、E・F区を含め、F区の節において記述する。

古墳時代初頭

Ⅴ層中、あるいはⅤ層直上において古墳時代初頭の遺物が出土した（148～153）。148は土師器S字甕B類新段階、149は台付甕、150は内彎長頸壺、151・152は有段高杯である。152は径0.5～0.6cmの透孔2孔を一単位として3方に穿つ点を特徴とする。

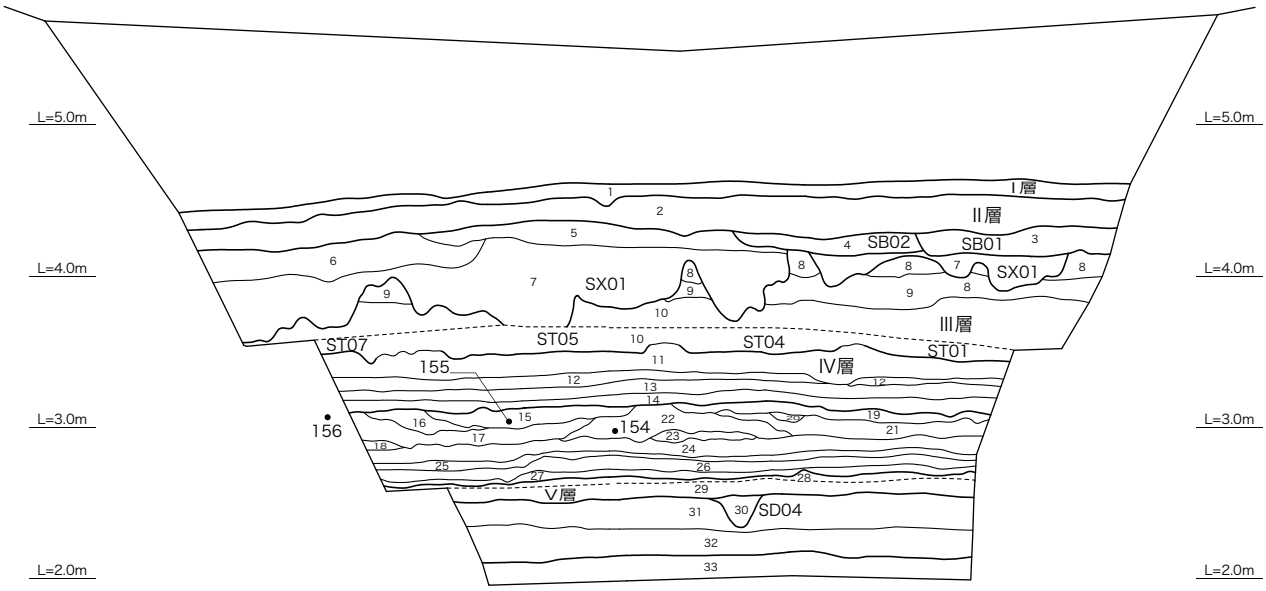
砥石

これらは廻間Ⅰ式後半～Ⅱ式のいずれかの時期に帰属する。153は凝灰質泥岩製の仕上げ砥で、5面の側面を使用面とする。同一層位から出土した土器から、古墳時代初頭に対比される。

Ⅴ層下位においては、蛇行しながら北東―南西方向に通じる溝SD04などを検出した（第131図）。掘形は曖昧で、遺構検出にはやや難がある。その他土坑SK40～43なども検出したが、掘り込みは明確でなく、むしろⅤ層の取り残し部分とするのが妥当であろう。

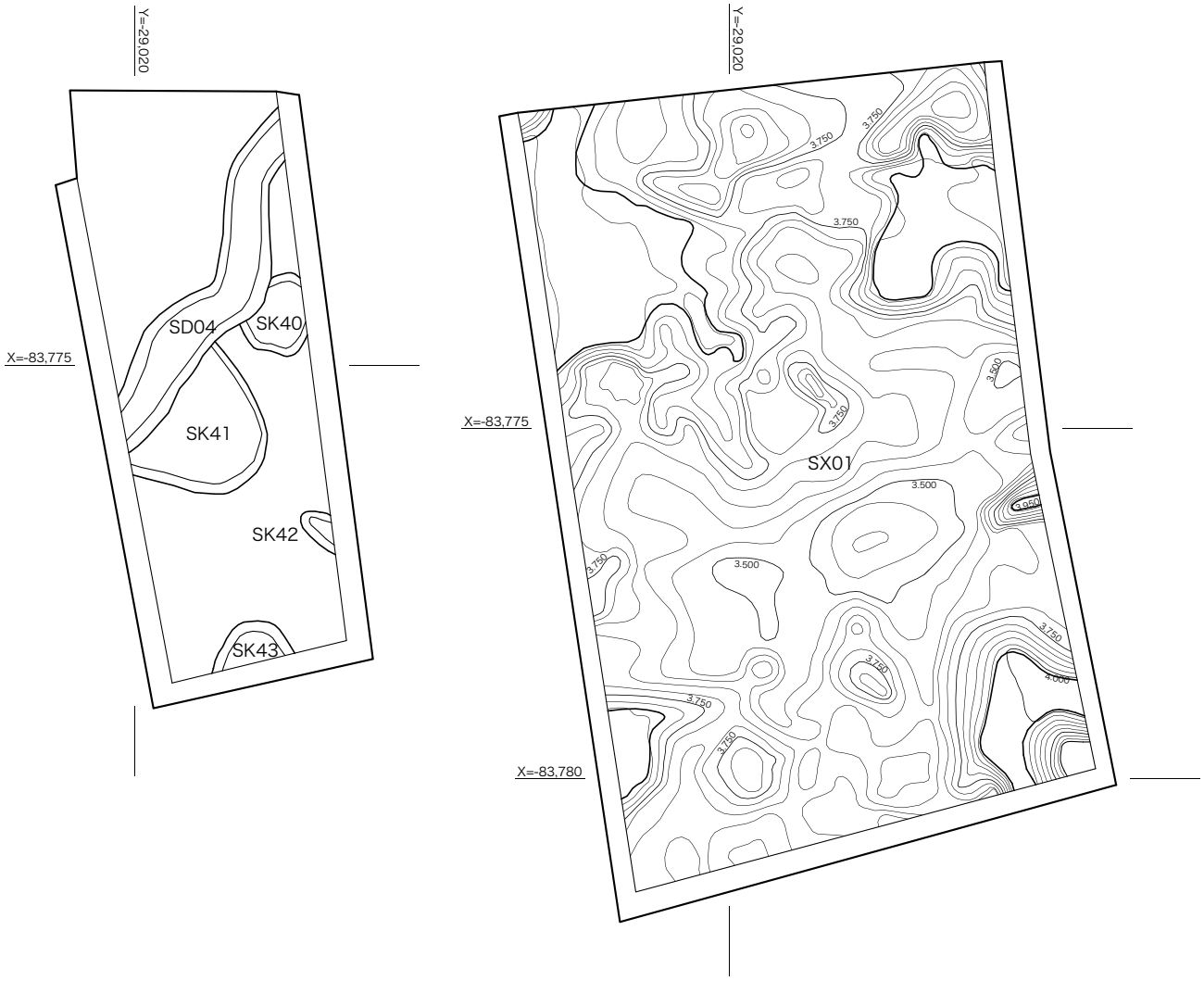
古墳時代前～中期

Ⅳ層中において古墳時代前～中期の土師器が出土した（154～156）。土器は原形を保っ



1 7.5Y3/2 オリーブ黒色細粒砂、5Y4/2 灰オリーブ色細粒砂斑状に含む
2 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質シルト
3 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト
4 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト、炭化物少量含む
5 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト、5Y4/4 暗オリーブ色細粒砂斑状に含む
6 10YR4/3 にぶい黄褐色細粒砂
7 10YR3/4 暗褐色中粒砂、2.5Y4/2 暗灰黄色中粒砂斑状に含む
8 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質シルト
9 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質シルト
10 10YR4/6 褐色シルト
11 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト、炭化物含む
12 2.5Y4/2 暗灰黄色細粒砂
13 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土、2.5Y4/3 オリーブ褐色細粒砂互層状に含む
14 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質シルト
15 5Y5/1 灰色粘土
16 10Y4/1 灰色細粒砂
17 5Y3/2 オリーブ黒色細粒砂
18 5Y3/1 オリーブ黒色細粒砂
19 7.5Y5/1 灰色粘質シルト
20 7.5Y4/1 灰色細粒砂
21 2.5Y5/1 灰色粘質シルト、7.5GY5/1 緑灰色細粒砂斑状に含む
22 7.5GY5/1 緑灰色粗粒砂
23 7.5Y4/1 灰色細粒砂
24 5Y4/1 灰色粘土
25 5Y3/1 オリーブ黒色粘土
26 2.5Y5/1 黄灰色粘土
27 2.5Y5/1 黄灰色粘土、2.5Y3/1 黒褐色粘土斑状に含む
28 2.5Y3/1 黒褐色粘土、炭化物多量に含む
29 7.5Y2/1 黒色粘土
30 7.5Y4/1 灰色粘土、7.5Y7/1 灰白色粘土斑状に含む
31 7.5Y7/1 灰白色粘土
32 7.5Y7/1 灰白色粘土、7.5Y4/1 灰色粘土互層状に含む
33 7.5Y2/1 黒色粘土

第130図　D区西壁土層断面図（縦1:50／横1:100）

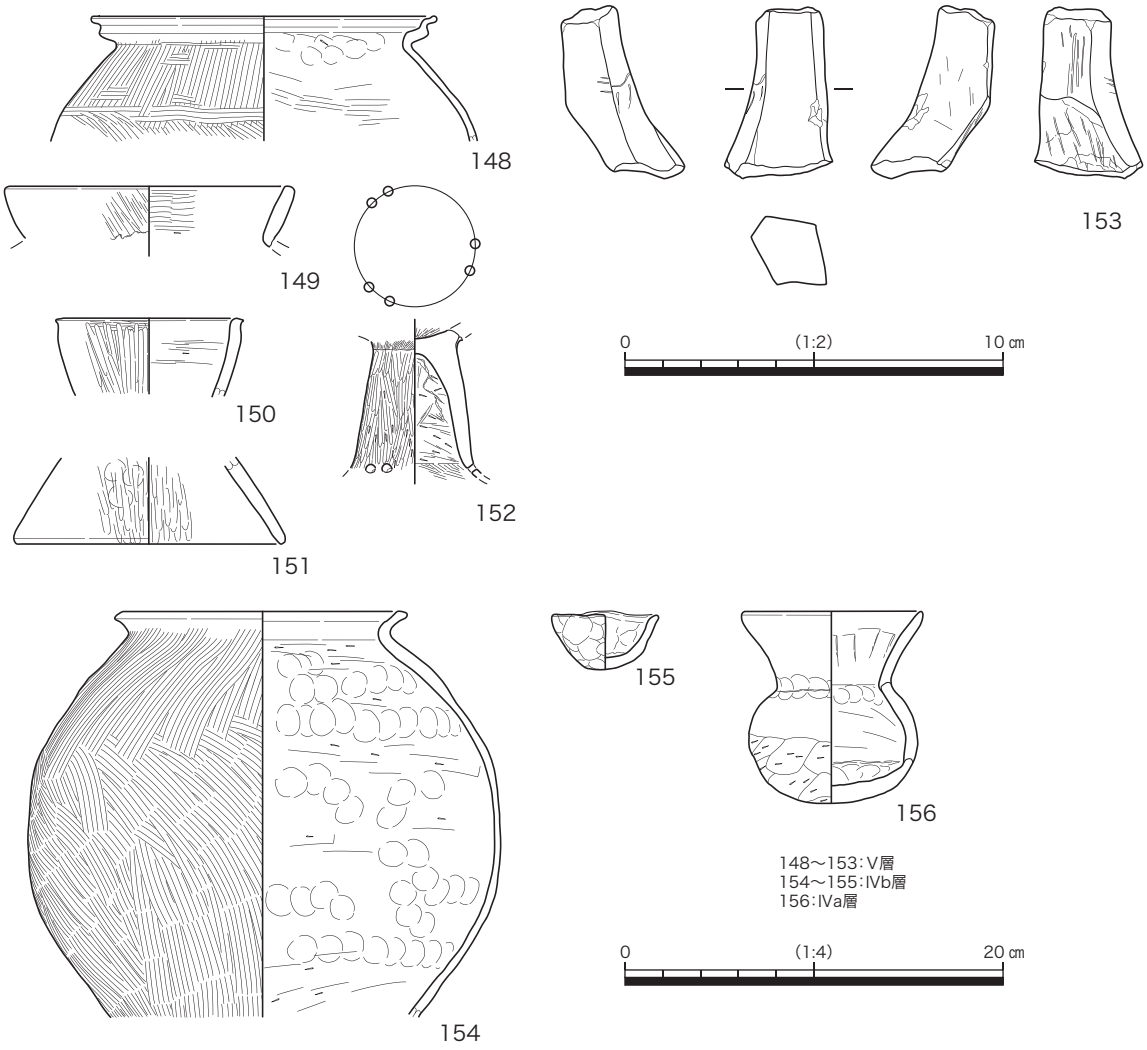


第131図　D区古墳時代初頭・古墳時代後期遺構図（1:100）



写真49　D区古墳時代初頭／古墳時代後期遺構全景

1：古墳時代初頭遺構検出状況　2：古墳時代後期遺構全景



第132図　D区古墳時代出土遺物実測図（1:4／1:2）

Ⅳa層・Ⅳb層

て出土するものの、それらの出土は散漫であった。また、土器の周囲にはわずかに炭化材の散布も認められたが、層中において明確な遺構は検出されなかった。156は小型壷、154はS字甕D類新段階、155は手捏ね土器で、小型壷が標高3.0m付近の層理面上（Ⅳa層）、S字甕と手捏ね土器はそれより下位（Ⅳb層）において出土した。出土状況をも考慮して、前者を松河戸Ⅱ式前半、後者を松河戸Ⅰ式後半に対比したい。



写真50　D区Ⅳb層遺物出土状況

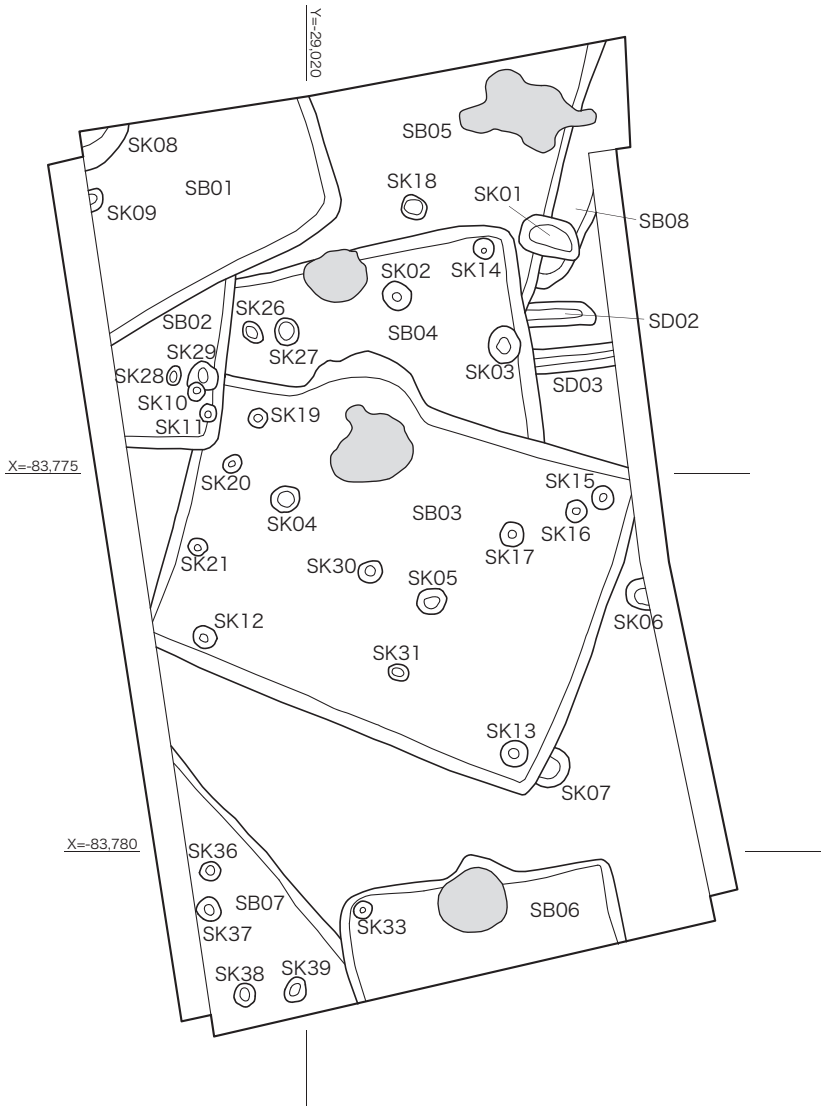
古代

Ⅱ層下位において相互に重複する８棟の竪穴住居 SB01 ～ 08 などを検出した（第 133 図）。竪穴住居の埋土はⅡ層に近似し、いずれも土質・色調変化に乏しかったため、遺構検出は容易でなかった。全形を把握できる住居は少ないが、いずれも基本的に竈を付設していると思われる。

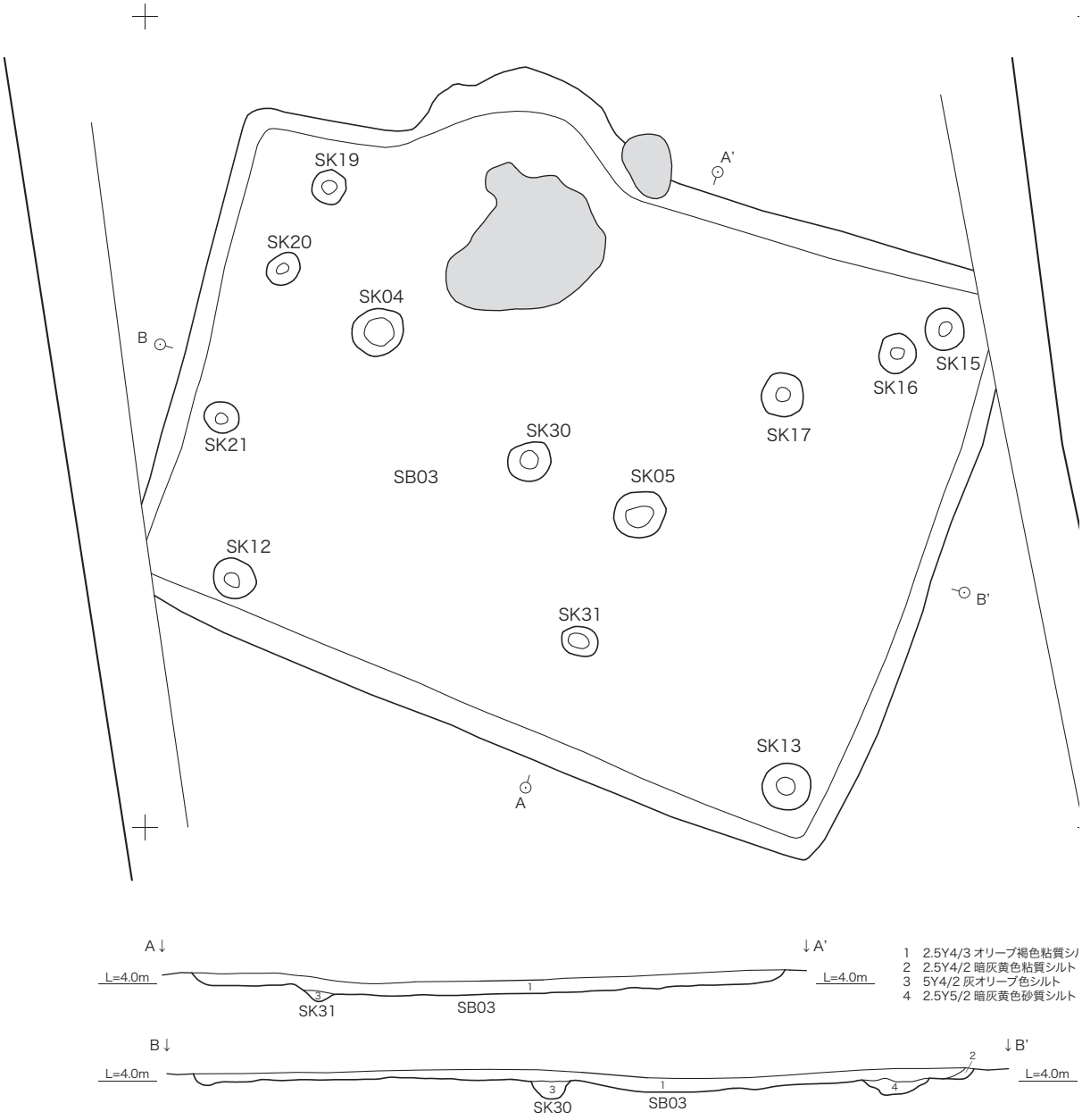
竪穴住居

一部が失われるも、全形が把握できた SB03（第 134 図）は、平面形が長軸約 5.8 m、短軸約 4.5 mの長方形で、長辺となる北辺側に竈を付設する（第 135 図）。竈内には半裁した状態の花崗岩の円礫（165）が支脚として残され、その周囲には須恵器無台杯（163）、土師器濃尾型甕（164）などが散乱していた。石製支脚は上下両端が顕著に被熱していることから、複数回、設置されたとみられる。竈は SB04、SB05、SB06 においても確認したが（第 138・139・140 図上）、いずれも遺存状況が良好でなく、竈の構造を詳細に把握するまでには及ばなかった。

SB03



第133図　D区古代遺構図（1:100）

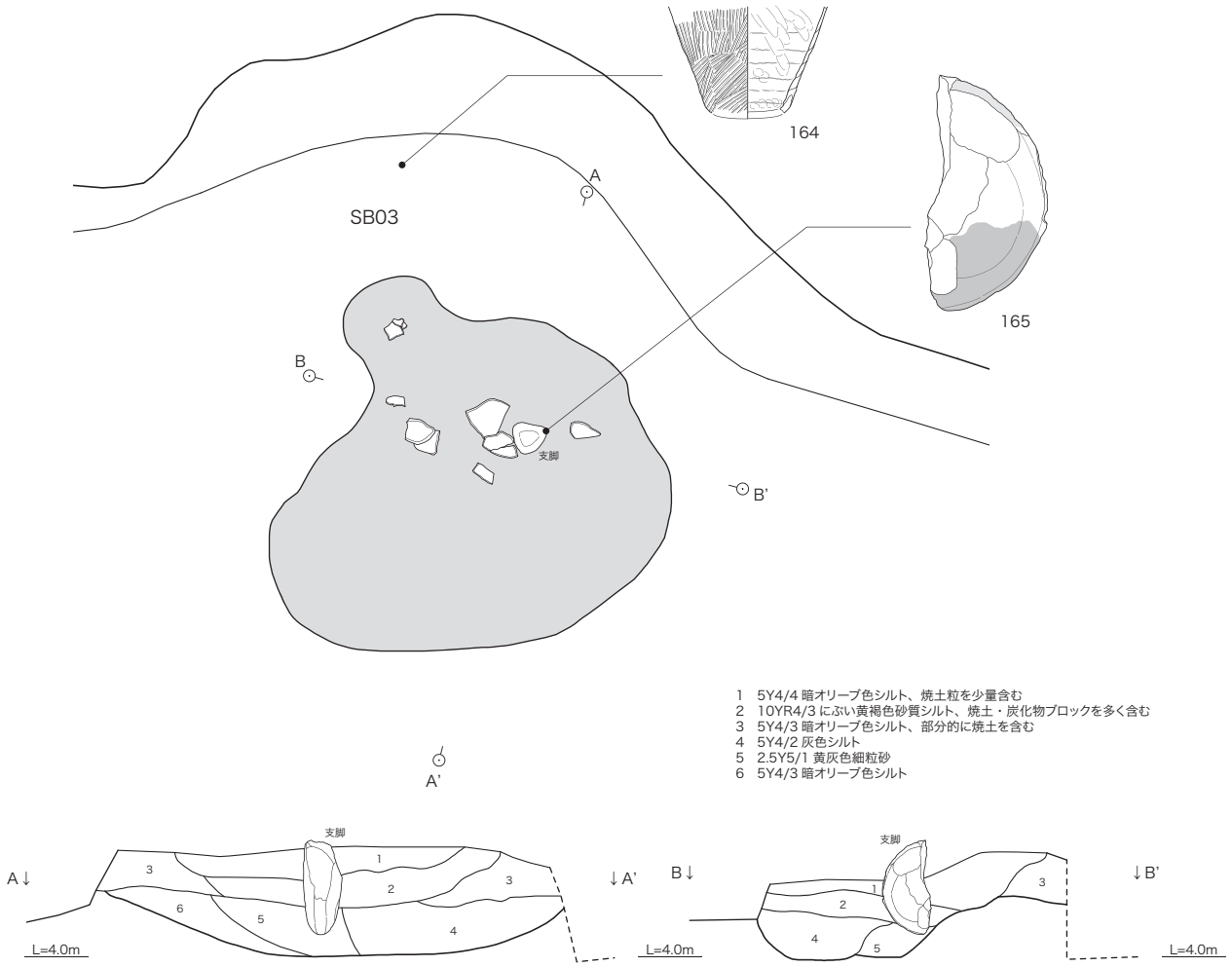


第134図　D区SB03遺構図（1:50）

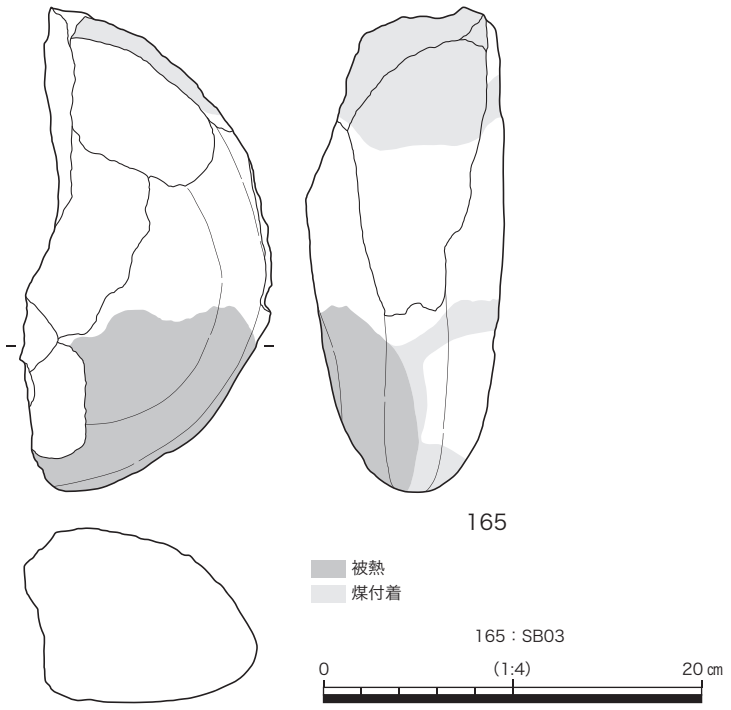
出土遺物

竪穴住居に残された遺物は乏しいが、SB01 において須恵器摘み蓋（157・158）、長頸瓶（159）、SB02 において須恵器無台杯（160）、SB04 において土師器濃尾型甕（161・162）、SB05 において須恵器無台碗（166）、摘み蓋（167）、甕（168）、土師器濃尾型甕（169・170）、SB07 において土師器濃尾型甕（172）などが出土した。これらは総じて折戸 10 号窯式期、8 世紀後半に相当する。SB06 の竈内から出土した須恵器鍋（171）は、

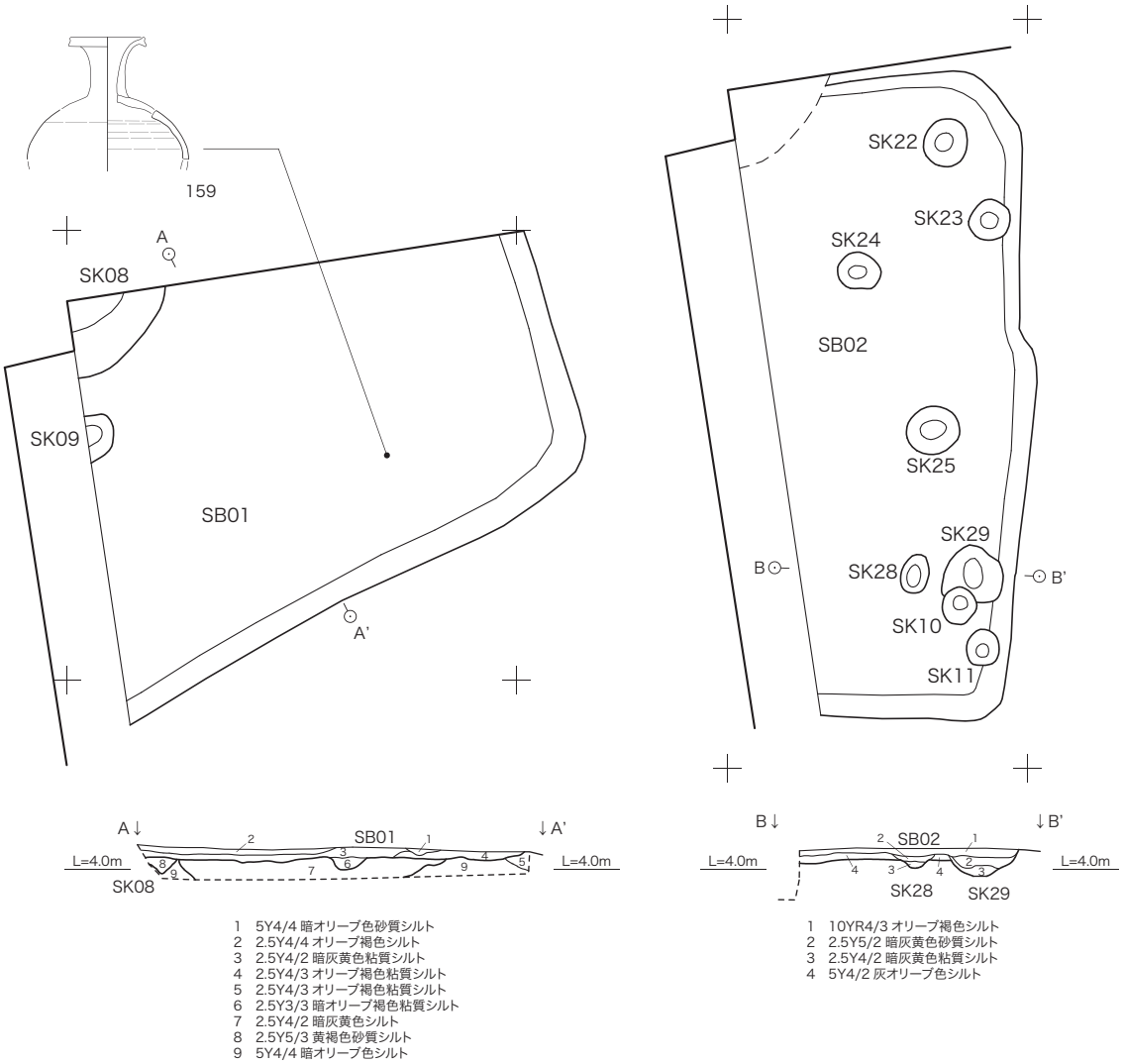
折戸10号窯式



第135図　D区SB03竈遺構図（1:20）



第136図　D区SB03支脚（1:4）



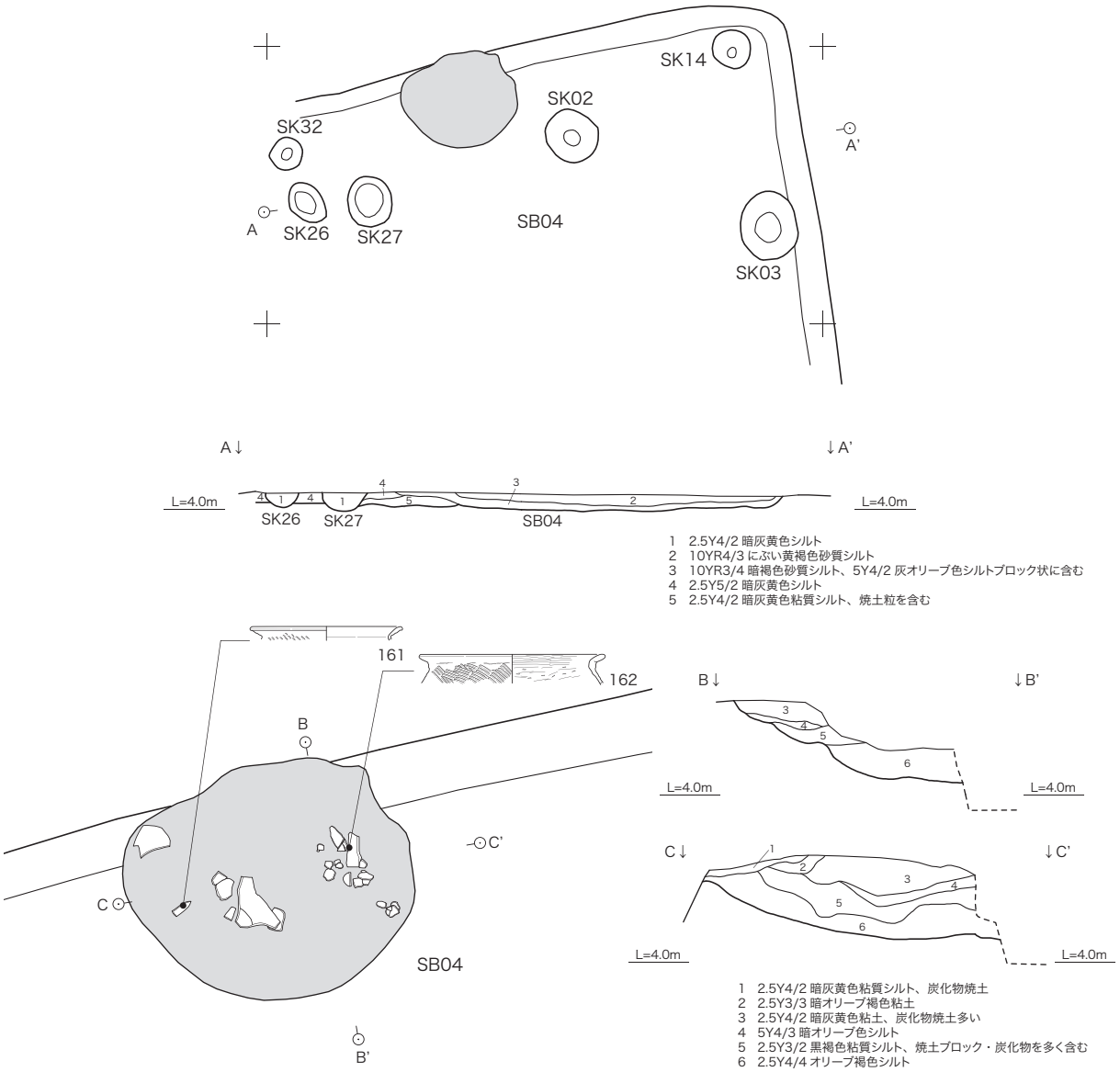
第137図　D区SB01・02遺構図（1:50）

7世紀以前に帰属する公算が強く、他に同時期と思われる須恵器甕も出土している。これらは、下位の堆積層であるⅢ層から混入した可能性も考慮されるが、SB07が他の竪穴住居と分布域を違えていること、須恵器が竈内に残されていたことに加えて、Ⅲ層に相当するSX01埋土には遺物がほとんど含まれないことから、竪穴住居の帰属時期を示す遺物として考えたい。

古墳時代後期

Ⅱ層と竪穴住居の下位にはⅢ層に相当する暗褐色中粒砂が堆積するが、暗褐色中粒砂を除去すると、下位の褐色シルト層の不安定な層理面が露呈するにすぎなかった（第131図右）。層理面の産状からは、かなりの水流が褐色シルト層を削剥した状況が推測される。砂層中から出土する遺物はごく少ないが、東山61号〜東山44号窯式に帰属する須恵器蓋が砂層中に確認されること、上位に掘削される竪穴住居の帰属時期の上限が7世紀と考えられたことなどから、中粒砂が堆積した時期を6世紀後半〜7世紀と考えておきたい。

Ⅱ層中からは、ややまとまった量の遺物が出土した（173 〜 191）。これらの大部分が

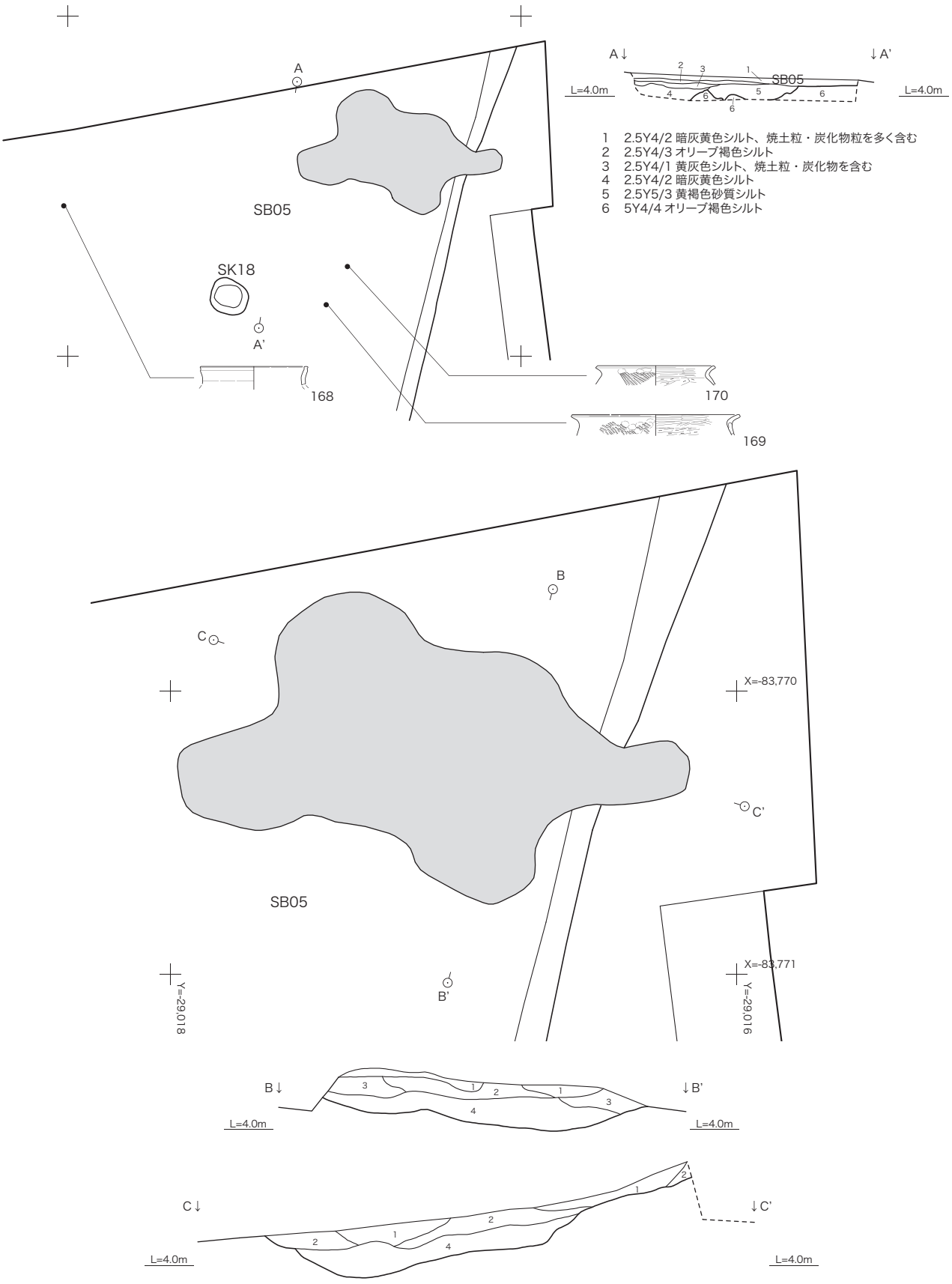


第138図　D区SB04遺構図（1:50／1:20）

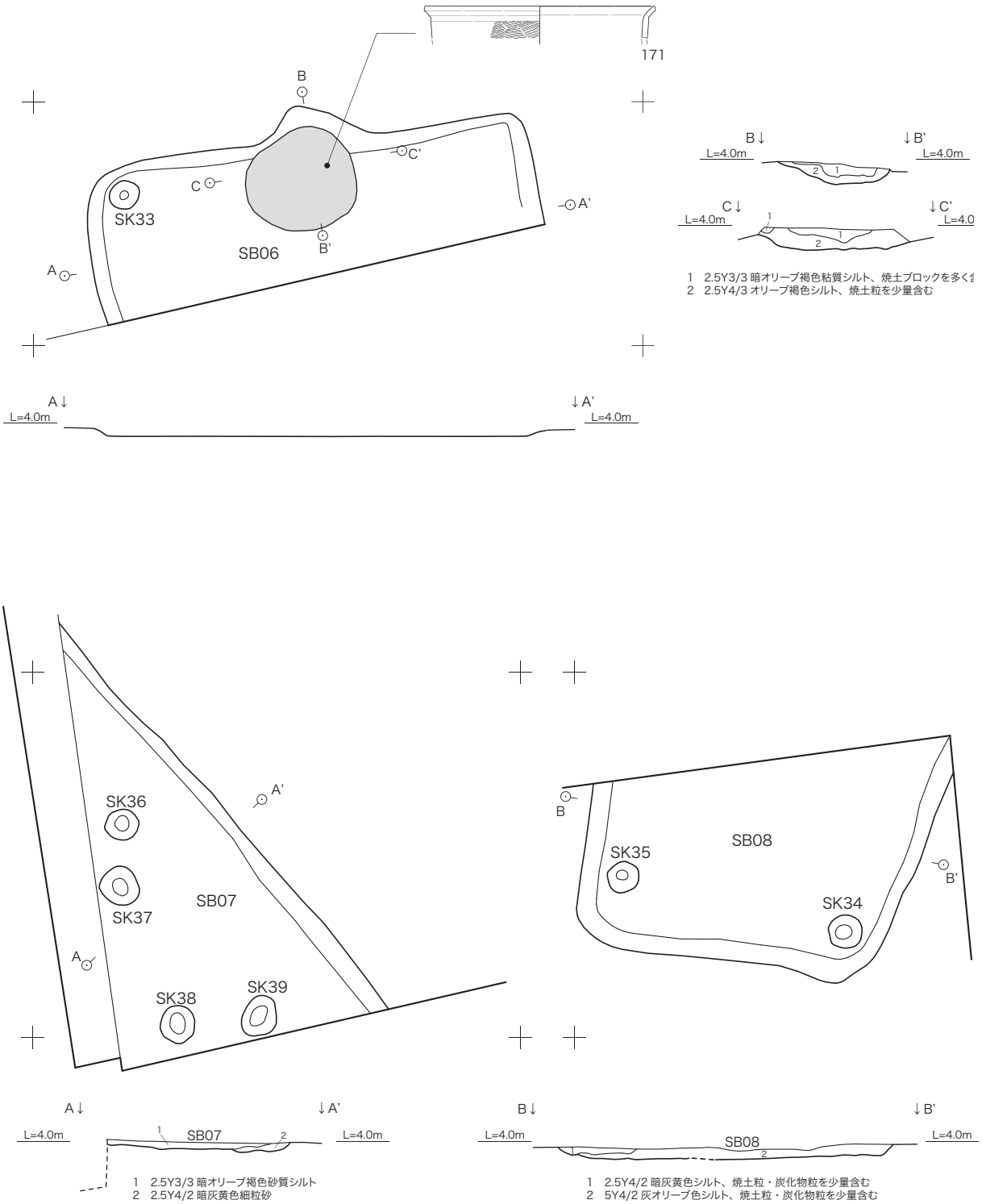
下位の竪穴住居に関係する遺物であるが、わずかに含まれる東山61号窯式～岩崎17号窯式に相当する杯（173・174）は、Ⅲ層とした暗褐色シルト層の堆積時期を示唆する遺物と思われる。185は器形の復原にやや難があるが、鉢状の器形を想定した。186は甕底部で、内面に当て具痕跡として、細同心円文が残る。両者は高蔵寺2号窯式前後、およそ8世紀前半に対比される。その他の須恵器（175～184）は総じて折戸10号窯式で、土師器甕（188・189）もそれに対応する時期の所産と考えられる。187は三河型甕、188・189は濃尾型甕である。三河型甕はH区においても認められ（334・335）、本遺跡における一定の使用が見込まれる点は注目される。190・191は鞴羽口で、同層中より出土した遺物から、帰属時期は6～8世紀に限定されるが、8世紀に帰属する公算がより強いと考えられる。190は先端部分で、黒色に熱変化する。溶解部分は多孔質に発泡する。被熱前の色調は橙色。いずれも砂粒が少ない均質な胎土である。191も同じく先端部分で、先端側が黒色、基部側が白色に熱変化する。被熱前の色調は淡橙色。

細同心円文

三河型甕



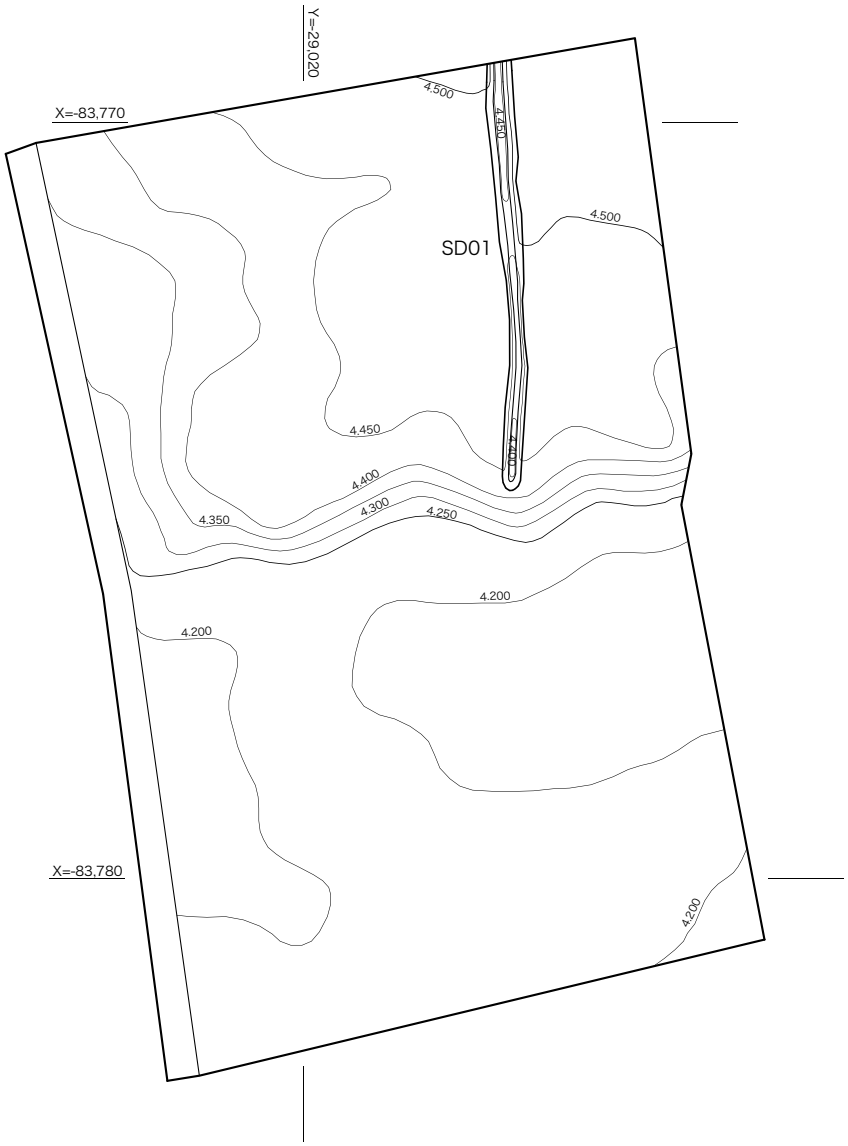
第139図　D区SB05遺構図（1:50／1:20）



第140図　D区SB06・07・08遺構図（1:50）

中世

Ⅰ層は島畑の耕作土で、その下位、Ⅱ層上位において溝１条を検出し、SD01 とした（第 141 図）。わずかに出土した第５型式の尾張型山茶碗から帰属時期を中世前期、12 ～ 13 世紀と推測しておく。



第141図　D区中世遺構図（1:100）

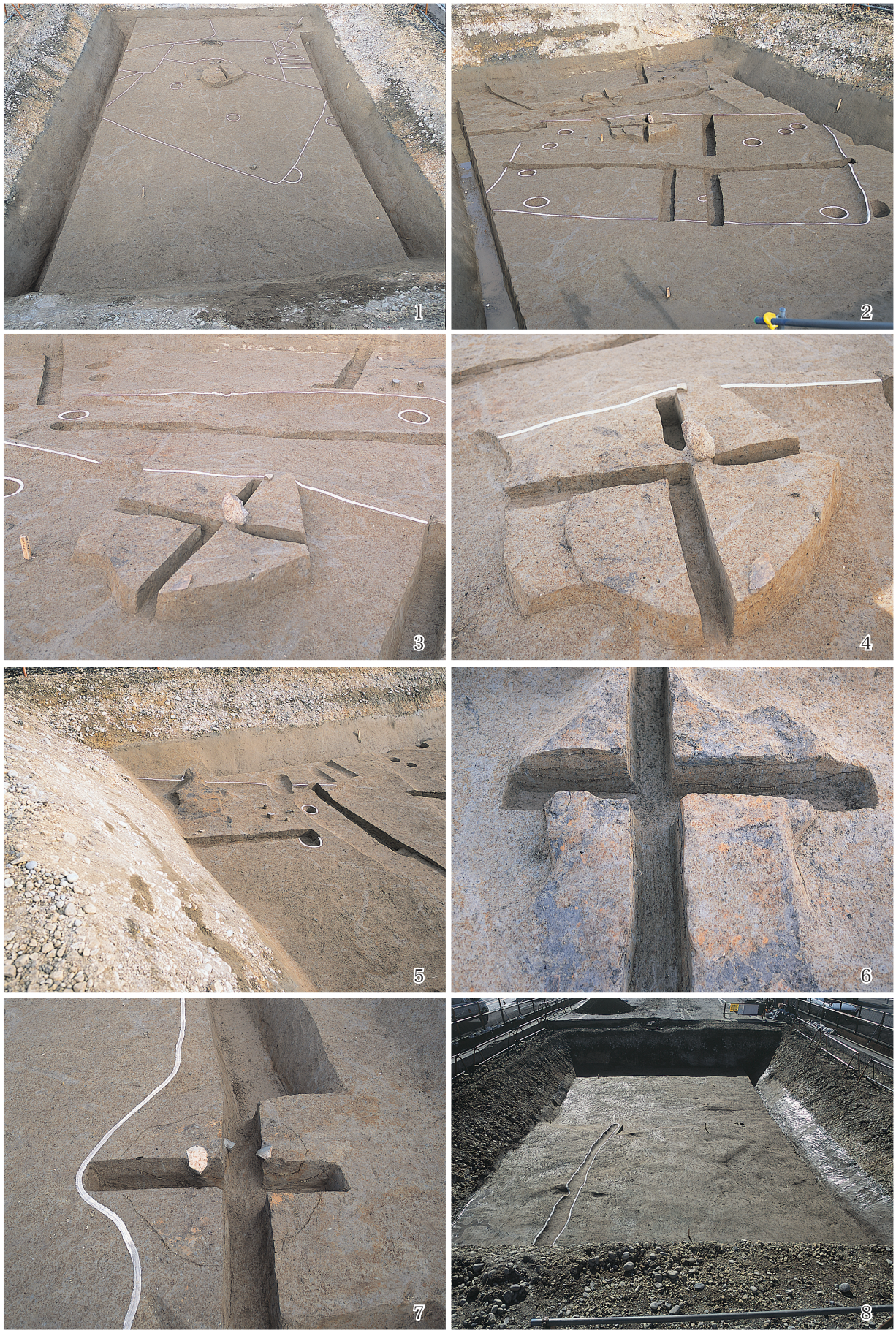
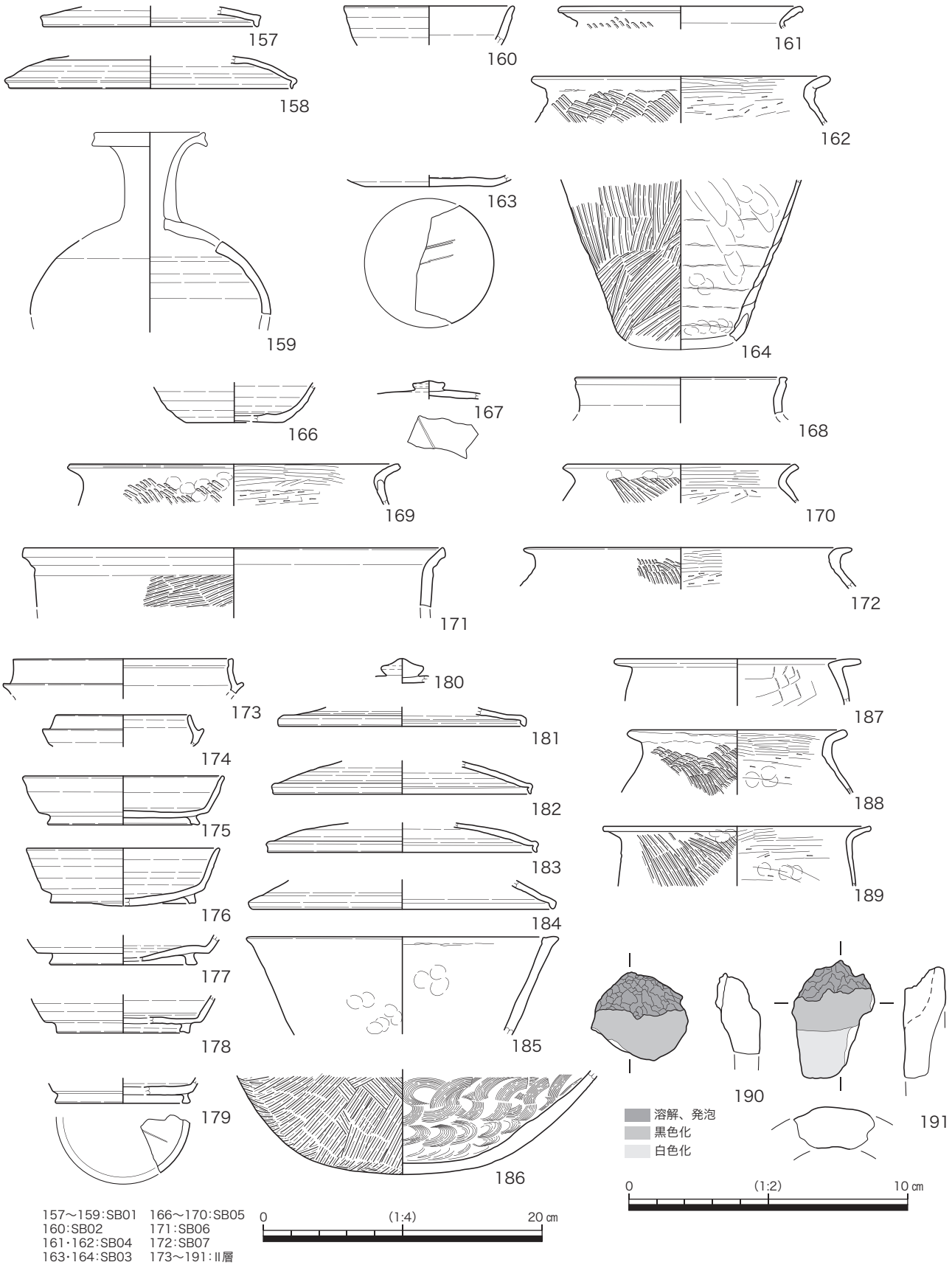


写真51　D区古代／中世遺構

1：古代遺構検出状況　2：SB03全景　3・4：SB03竈　5：SB05全景　6：SB05竈　7：SB06竈　8：中世遺構全景



第142図　D区古代出土遺物実測図（1:4／1:2）



写真52　D区出土遺物

（6）E区

層序と検出遺構

E区は、国道敷設時に標高約3.8ｍまで削剥されていたので、Ⅰ層に対応する灰白色シルト層上位からⅡ層に対応する暗褐色粘土上位にかけて、中世以降の遺構を同時に検出した（第143図）。また、Ⅱ層下位において古代の遺構、Ⅳ層に対応する青灰色粘土層上位において古墳時代中期の水田、Ⅳ層中において古墳時代前～中期の土器を検出した。Ⅳ層上位で検出した水田については、D・F区を含め、F区において記述する。

古墳時代前～中期

土師器大型高杯

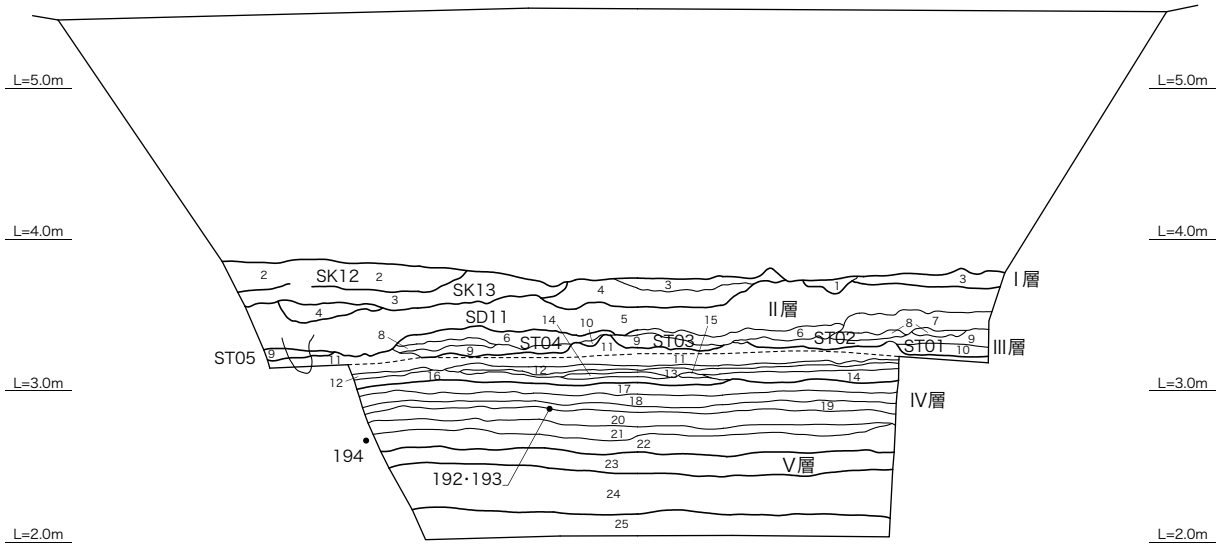
E区においてⅣ層（相当）層は、青灰色粘土が炭化物層と互層状に堆積する。Ⅳ層中からは古墳時代中期の土師器大型高杯（192・193）、小型壷（194）が出土した。土師器大型高杯は2個体が折り重なるようにして出土し、小型壷も体部が完存するも、周囲における土器の出土はごく散漫で、土器に関係する明確な遺構も検出されなかった。なお、大型高杯はⅣ層中でも上位（Ⅳａ層）において出土し、小型壷は同層中でも高杯より下位（Ⅳｂ層）において出土したことから、前者を松河戸Ⅱ式前半、後者を松河戸Ⅰ式後半に対比しておきたい。192・193は「同工品」として差し支えないまでに、形態、法量、製作手法が相互に酷似する。そればかりでなく、両者の杯部内面には煤が付着することから、同一目的で使用されたことも確実であろう。

「同工品」

なお、Ⅴ層（黒色粘土層）以下を掘削したものの、灰色粘土層と黒色粘土層が連続して堆積するのみで、遺構、遺物とも検出されなかった。

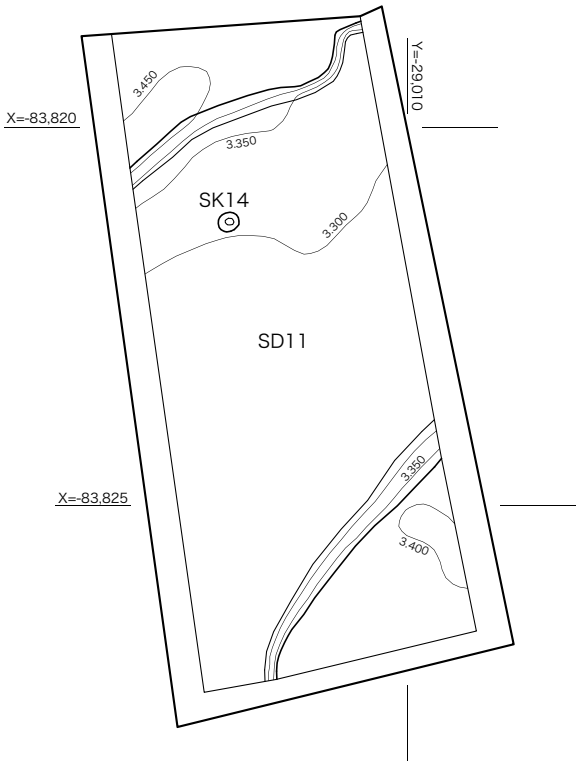
古代

Ⅱ層下位において溝状の緩やかな落ち込みSD11を検出したが（第144図）、正確には



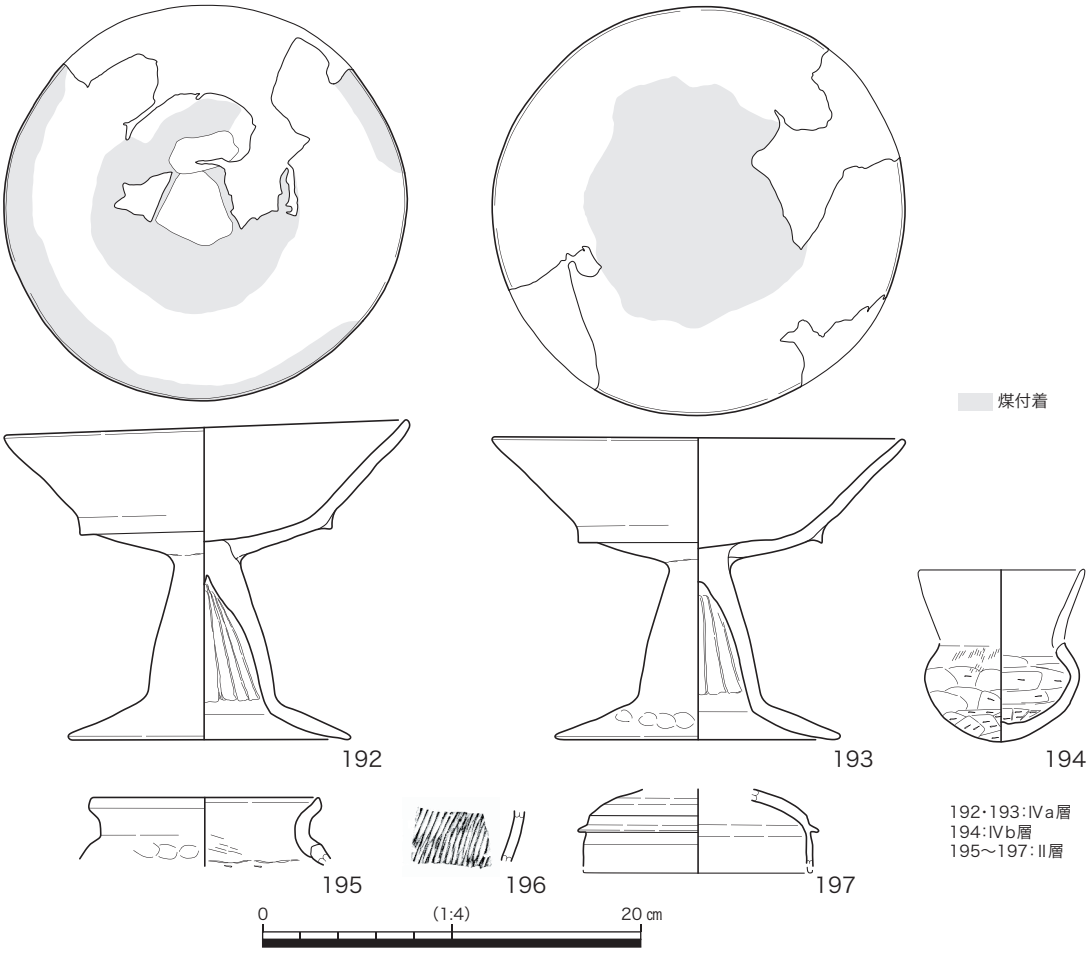
1 5Y7/2 灰白色細粒砂と 5Y4/2 灰オリーブ色シルトの互層
2 5Y7/1 灰白色細粒砂
3 5Y7/1 灰白色細粒砂、2.5Y5/2 暗灰黄色シルト斑入
4 2.5Y6/2 灰黄色粘質シルト
5 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土
6 2.5Y6/2 灰黄色粘質シルト
7 2.5Y6/2 灰黄色シルト
8 10YR5/4 にぶい黄褐色粗粒砂、2.5Y5/2 暗灰黄色粘土ブロック混じる
9 2.5Y5/2 暗灰黄色粘土、7.5Y7/3 浅黄色粘質シルト斑入
10 5Y5/1 灰色砂質シルト
11 5Y5/1 灰色砂質シルト、炭化物を互層状に含む
12 5Y8/3 淡黄色中粒砂
13 5Y7/1 灰白色砂質シルト
14 5Y6/2 灰オリーブ色砂質シルト、炭化物を互層状に含む
15 7.5Y4/1 灰色シルト
16 10Y6/1 灰色砂質シルト
17 10Y5/1 灰色シルト
18 7.5Y5/1 灰色粘質シルト
19 10Y5/1 灰色シルト
20 7.5Y5/1 灰色粘質シルト
21 10Y5/1 灰色シルト
22 10Y4/1 灰色粘土
23 7.5Y2/1 黒色粘土
24 10Y5/1 灰色粘土
25 7.5Y2/1 黒色粘土

第143図　E区西壁土層断面図（縦1:50／横1:100）



第144図　E区古代遺構図（1:100）

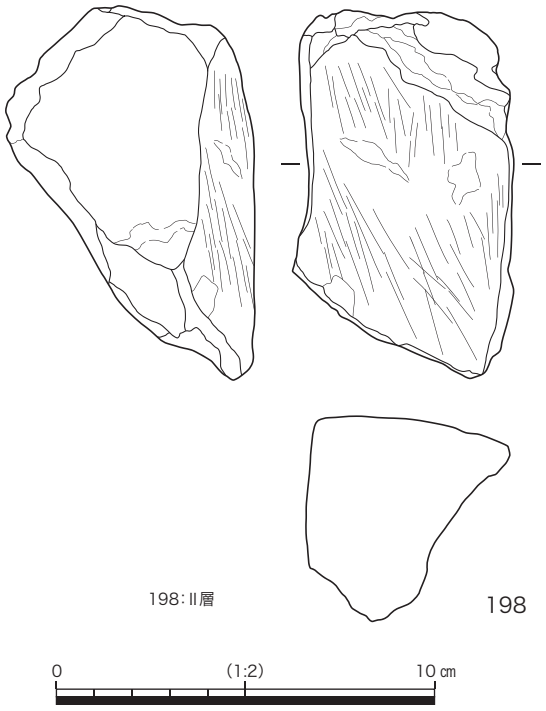
遺構ではなく、Ⅲ層上位の層理面の起伏とすべきであろう。同一面においては、他にわずかに土坑が検出されたのみである。Ⅱ層中からは土師器甕（195）、須恵器甕（196）、蓋（197）などが出土した。197はおよそ城山２号窯式に相当する。195は跳ね上げ状の口縁部を特徴とするやや独特な形態であるが、197と同時期の所産としておきたい。ただしⅡ層は、古墳時代の遺物を混じえつつも、古代の遺物を多く包含することから、Ⅱ層とその下位で検出される遺構に対しては、８世紀を中心とした年代を与えておくことが妥当であろう。198は同一層位で出土した凝灰質泥岩製の仕上げ砥である。



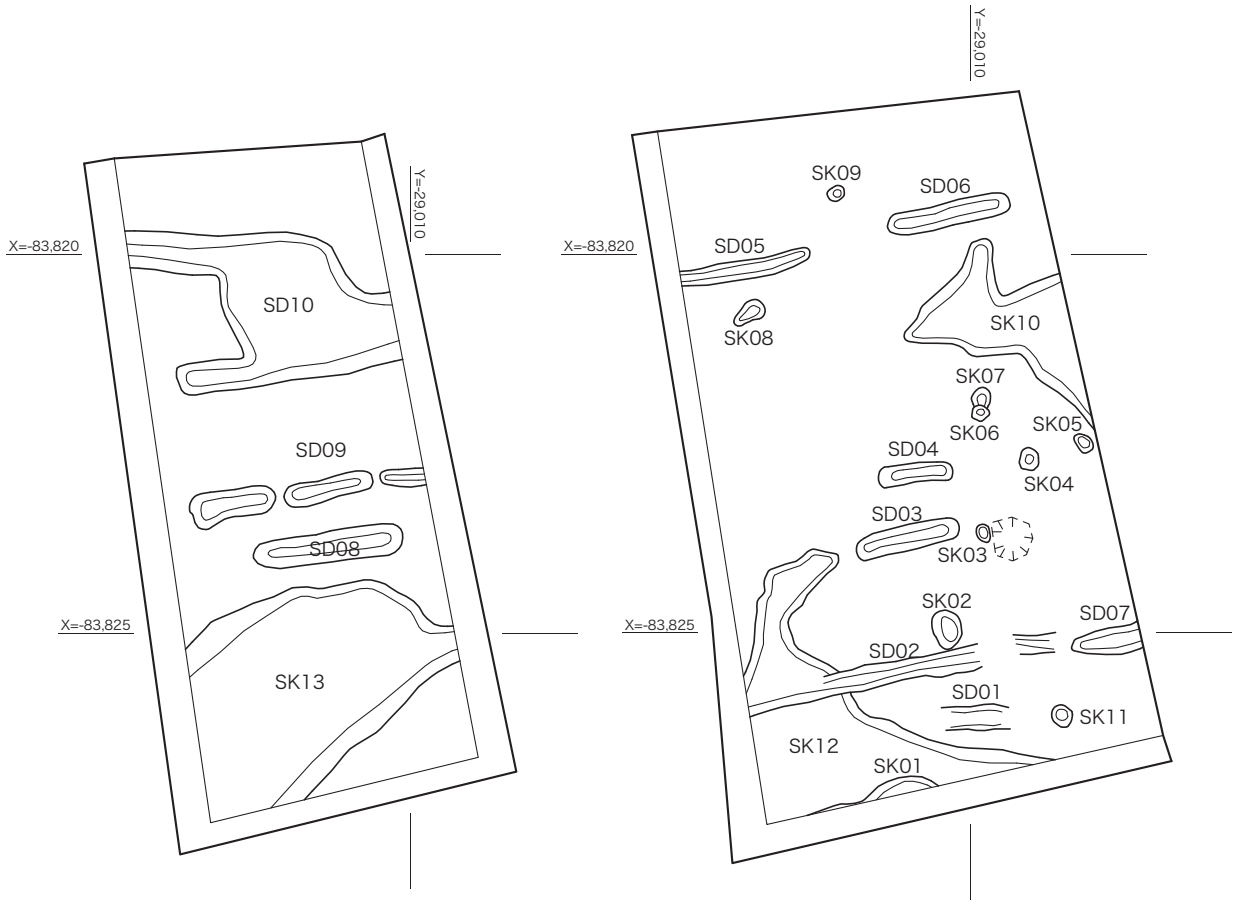
第145図　E区Ⅳ層・Ⅱ層出土遺物実測図（1:4）

中世〜近世

中世以降の遺構はⅠ〜Ⅱ層中で連続して検出されたので、便宜的に上位の遺構を1—1面、下位の遺構を1—2面に分割して調査した。1—1面では近世以降の東西方向を基調とする小溝SD01〜06と、それらの下位で細粒砂で埋積される不定形の落ち込みSK10・12などを検出した（第147図右）。1—2面では中世以降の東西方向を基調とする小溝SD08・09と1—1面と同様、細粒砂で埋積される不定形の落ち込みSK10・13などを検出した（第147図左）。出土遺物はⅠ層を含めて、中世後期の瀬戸美濃陶器などがわずかに出土したのみである。



第146図　E区出土石製品実測図（1:2）



第147図　E区中世〜近世遺構図（1:100）



写真53　E区古墳時代／古代／中世～近世遺構

1：Ⅳa層遺物出土状況　2：西壁土層断面　3：古墳時代水田全景・4：古代遺構全景　5・6：中世～近世遺構全景

（7）F区

層序と検出遺構

F区では、Ⅰ層に対応する灰色シルト層上位で近世の遺構、Ⅱ層に対応する暗褐色粘土層上位で中世の落ち込み（河川）、その下位で古代の土坑群（建物）、Ⅳ層に対応する灰色粘土層上位で古墳時代中期の水田を検出し、計4遺構面を調査した（第148図）。なお、Ⅳ層中では古墳時代中期の土器を検出した。

古墳時代中期

Ⅳ層は灰色粘土層と黒褐色粘土層が交互に堆積する層で、Ⅳ層中でもより上位（Ⅳa層）で土師器直口壷（200）、高杯（201）などが出土した。これらは松河戸Ⅱ式前半に対比される。199は出土層位が明確ではなく、時期を推定する根拠を欠く。類例にも乏しく、器種、系譜についても明確にしがたい。

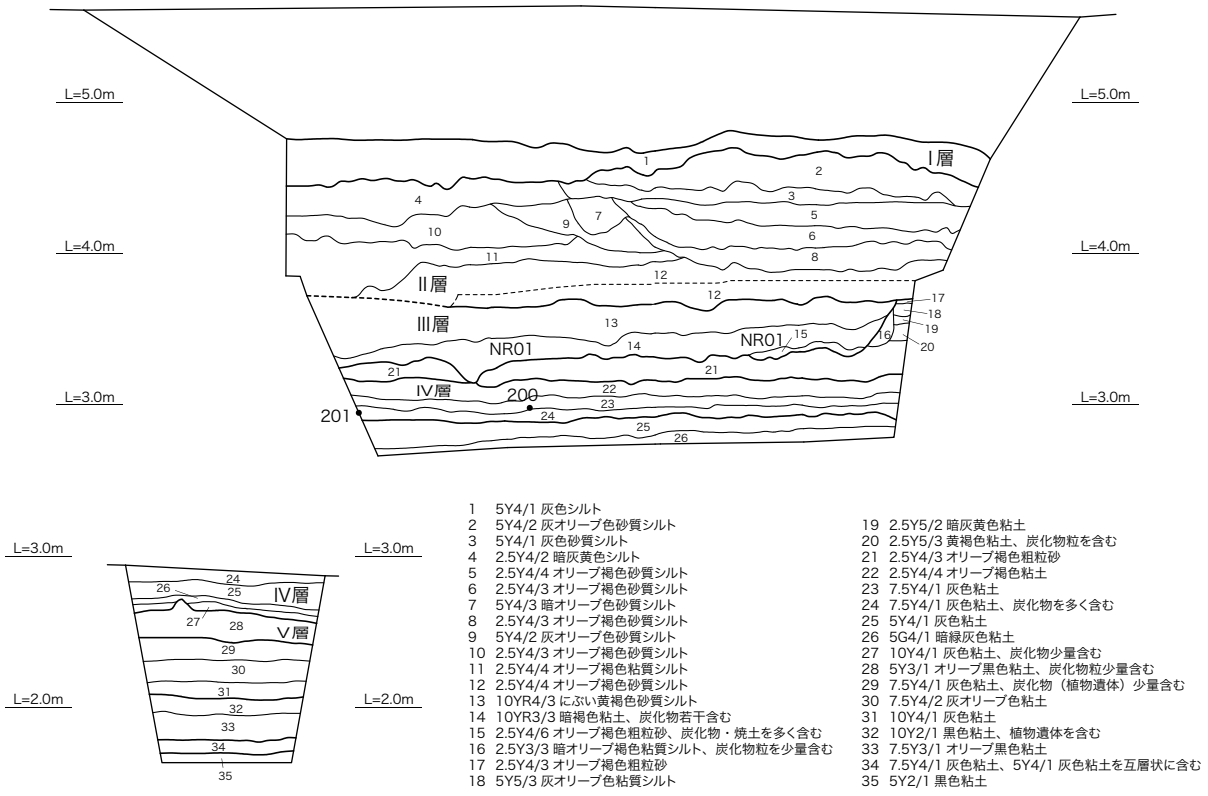
E区同様、Ⅳ層、Ⅲ層以下を順次掘削したが、Ⅲ層以下は黒色粘土と灰色粘土が交互に堆積するのみで、遺構、遺物とも検出されなかった。

古代～中世

掘立柱建物

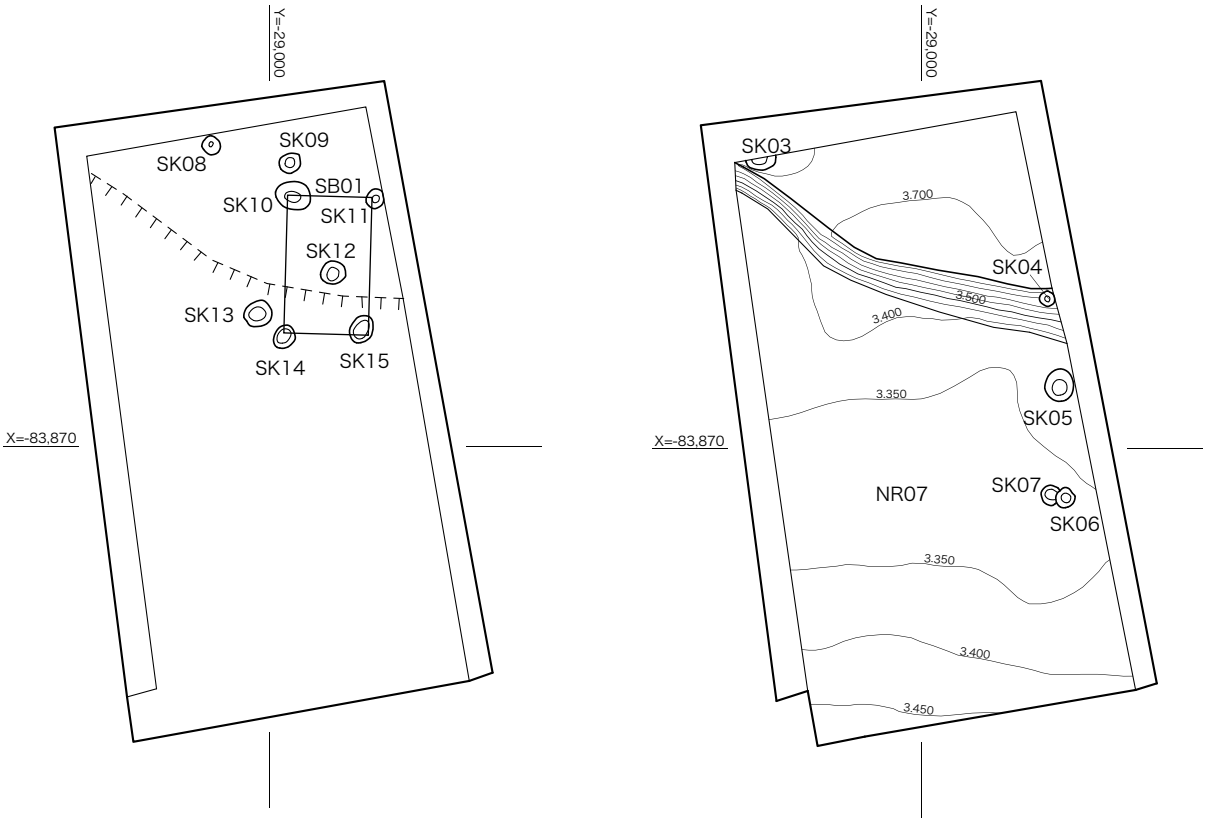
Ⅲ層に対応する灰白色粘土層が残存する調査区北半において土坑群を検出した（第149図左）。調査区の制約上、確実性には乏しいが、掘立柱建物1棟を復原した（SB01）。Ⅱ層中の遺物（202～204）などを参考にすると、建物の帰属時期は、6～8世紀のいずれかに求められる。

Ⅱ層上位においては、落ち込みNR01の北岸付近を検出した（第149図右）。検出した

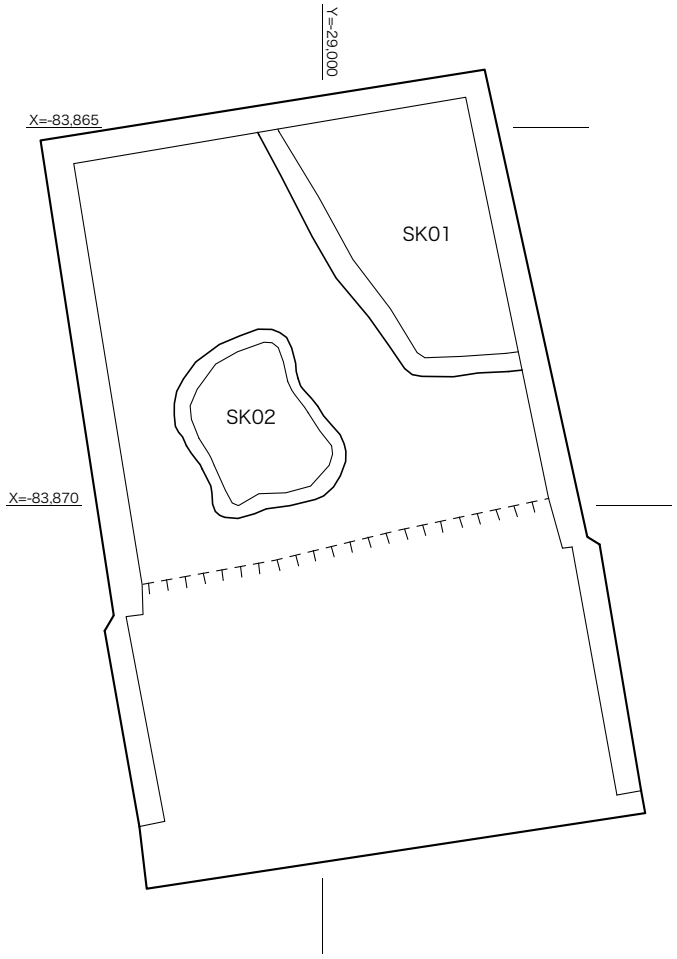


1 5Y4/1 灰色シルト
2 5Y4/2 灰オリーブ色砂質シルト
3 5Y4/1 灰色砂質シルト
4 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト
5 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質シルト
6 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質シルト
7 5Y4/3 暗オリーブ色砂質シルト
8 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質シルト
9 5Y4/2 灰オリーブ色砂質シルト
10 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質シルト
11 2.5Y4/4 オリーブ褐色粘質シルト
12 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質シルト
13 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト
14 10YR3/3 暗褐色粘土、炭化物若干含む
15 2.5Y4/6 オリーブ褐色粗粒砂、炭化物・焼土を多く含む
16 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質シルト、炭化物粒を少量含む
17 2.5Y4/3 オリーブ褐色粗粒砂
18 5Y5/3 灰オリーブ色粘質シルト
19 2.5Y5/2 暗灰黄色粘土
20 2.5Y5/3 黄褐色粘土、炭化物粒を含む
21 2.5Y4/3 オリーブ褐色粗粒砂
22 2.5Y4/4 オリーブ褐色粘土
23 7.5Y4/1 灰色粘土
24 7.5Y4/1 灰色粘土、炭化物を多く含む
25 5Y4/1 灰色粘土
26 5G4/1 暗緑灰色粘土
27 10Y4/1 灰色粘土、炭化物少量含む
28 5Y3/1 オリーブ黒色粘土、炭化物粒少量含む
29 7.5Y4/1 灰色粘土、炭化物（植物遺体）少量含む
30 7.5Y4/2 灰オリーブ色粘土
31 10Y4/1 灰色粘土
32 10Y2/1 黒色粘土、植物遺体を含む
33 7.5Y3/1 オリーブ黒色粘土
34 7.5Y4/1 灰色粘土、5Y4/1 灰色粘土を互層状に含む
35 5Y2/1 黒色粘土

第148図　F区西壁土層断面図（縦1:50／横1:100）



第149図　F区古代～中世遺構図（1:100）

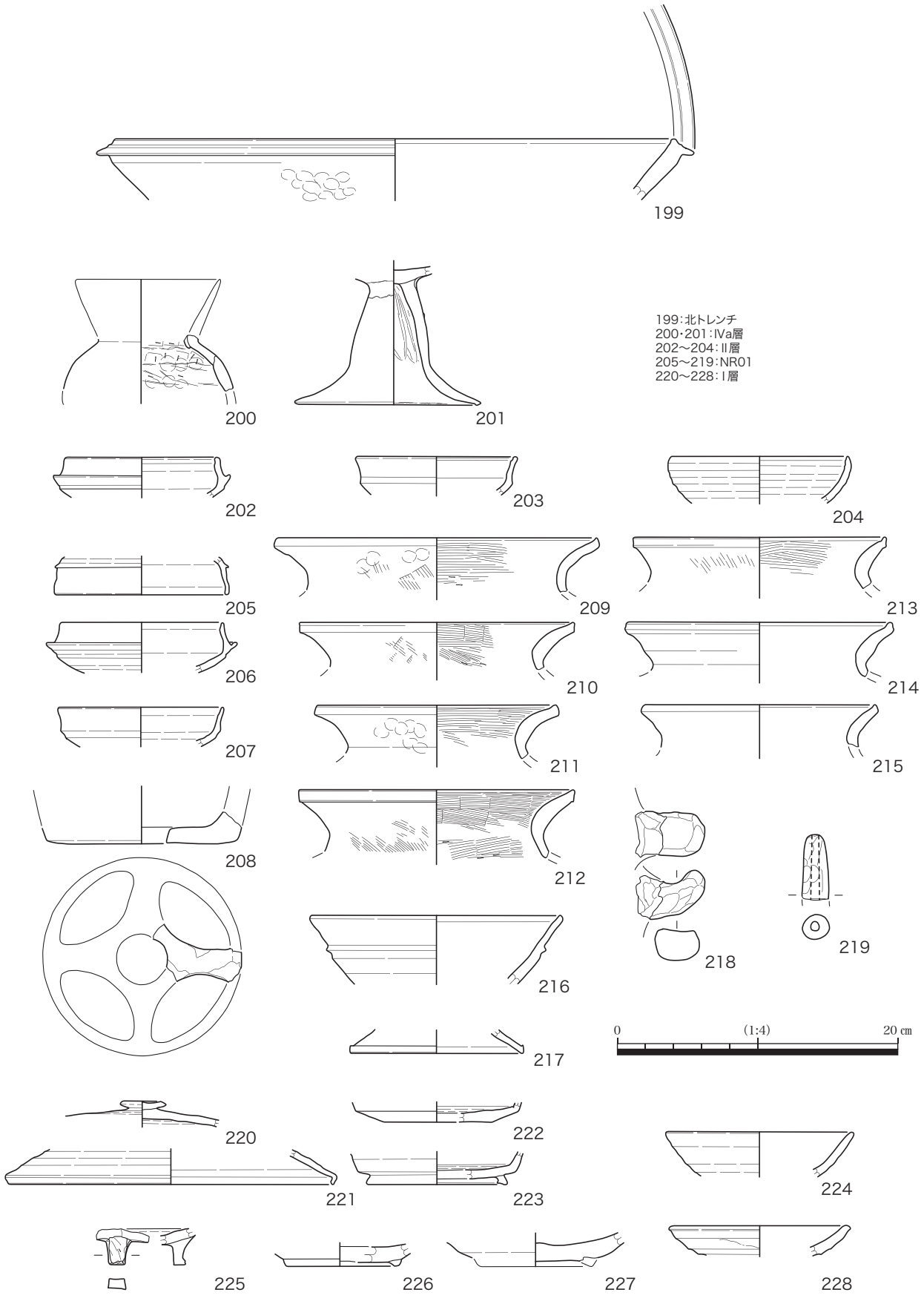


第150図　F区近世遺構図（1:100）

層位から遺構の帰属時期は中世と考えられるが、図示した出土遺物（205～219）は、6～8世紀の遺物に限られる。これらは本来、Ⅱ層に包含されていた遺物であろう。216、217は須恵器と同様の製作によりながら軟質に焼成された土器で、同一個体の可能性がある。器形は高杯に類似するも、類例に乏しく、時期、系譜についても明確にしがたい。

近世

Ⅰ層上位において方形を基調とする落ち込みSK01・02を検出した（第150図）。Ⅰ層中あるいはⅠ層上位からは、尾張型山茶碗（226・227）、瀬戸美濃陶器丸皿（228）などが出土した。



第151図　F区出土遺物実測図（1:4）

水田

D～F区を通じ、Ⅳ層上位において古墳時代中期の水田を検出した（第153図）。水田は自然堤防状微高地から派生する緩傾斜面を利用して配置され、D、E、F区の検出面の標高はそれぞれ、3.5、3.2、3.1 m前後である。なお、C、G区では水田相当層が確認されるも、耕作土の大部分はすでに流出したとみられ、水田は検出されなかった。

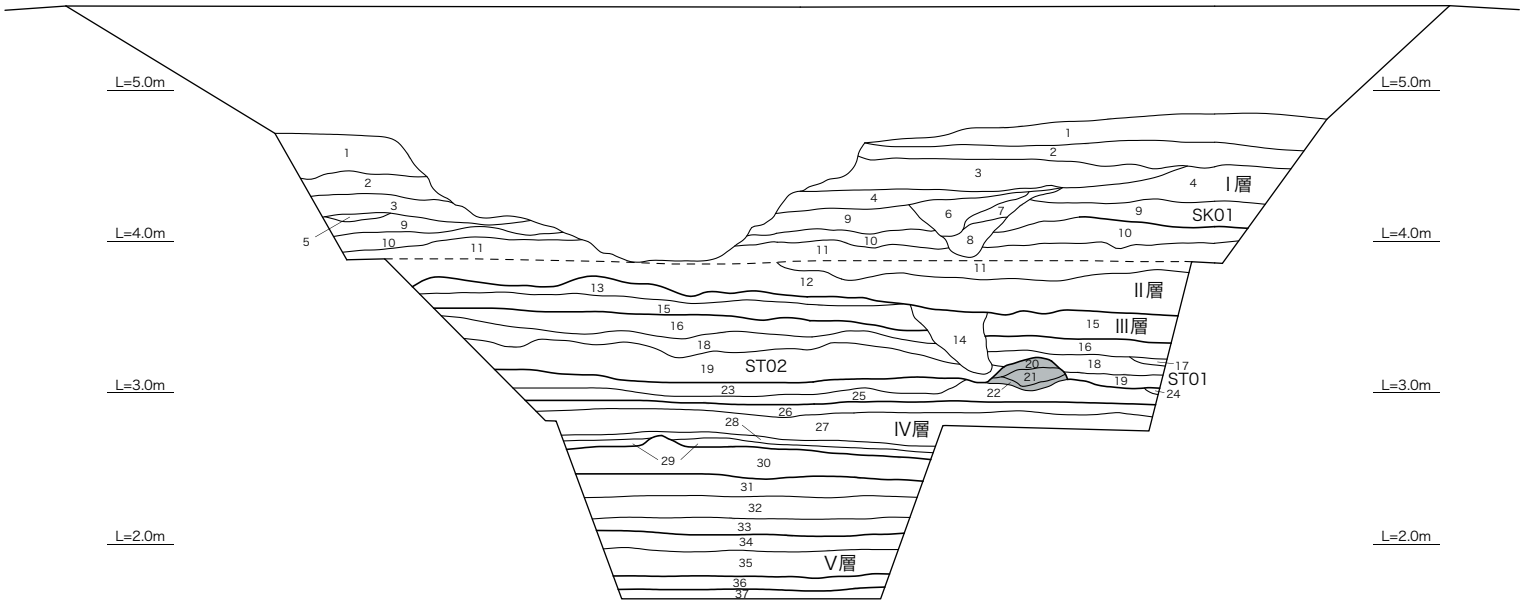
大区画

F区は、粗粒砂によって水田面が被覆されるため（第152図）、大区画を構成する畦畔は良好に残存し、高さ約0.2 mの畦畔を容易に検出することができた（第154図右下）。しかし、小区画を構成する畦畔は明確でなく、水田の埋没と同時に大部分が流出したものと考えられた。その一方、主としてシルトと粘土の斑状の堆積物によって被覆されるE区（第154図右上）、Ⅲ層とした中粒砂層との中間に褐色シルトが堆積するD区（第154図左上）では、小区画を構成する畦畔を検出したものの、大区画に対応する畦畔は残存が良好でなく、明確にそれを識別することは難しかった。仮にD区中央で南北に通じる畦畔を大区画に対応する畦畔として想定するなら、D区からF区を通じる基幹的な大区画を復原することも可能かと思われる。小区画については、D･E区の検出状況から、短辺（南北辺）2～3 mを基本単位とするとみられる。

小区画

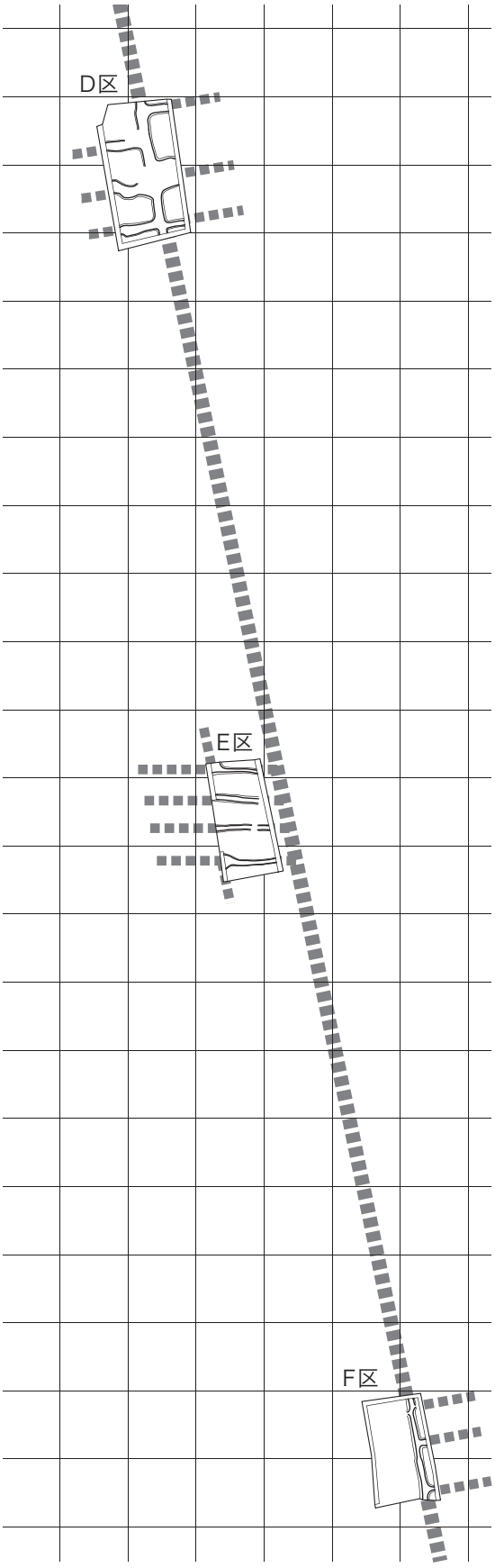
帰属時期

水田の帰属時期は、Ⅳ層中でも上位に5世紀前半（松河戸Ⅱ式前半）の遺物が包含されること、Ⅳ層を被覆するⅢ層の堆積時期がD区において6世紀後半、あるいはG区において5世紀後半と推定されることから、5世紀のいずれかの時期と考えられる。

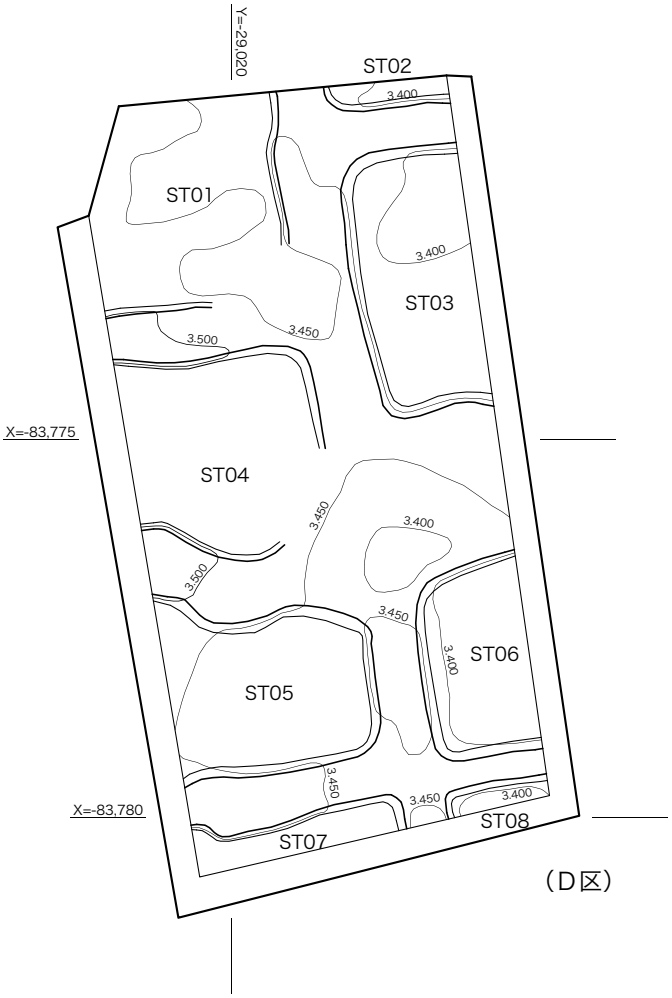


1 5Y4/1 灰色シルト
2 5Y4/2 灰オリーブ色砂質シルト
3 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質シルト
4 5Y4/2 灰オリーブ色砂質シルト
5 5Y4/4 暗オリーブ色砂質シルト
6 5Y4/3 暗オリーブ色シルト
7 5Y5/2 灰オリーブ色砂質シルト
8 5Y4/3 暗オリーブ色砂質シルト
9 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質シルト
10 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質シルト
11 5Y5/2 灰オリーブ色粘土質シルト
12 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質シルト
13 2.5Y4/3 オリーブ褐色粗粒砂
14 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘土、10YR4/3 にぶい黄褐色粗粒砂斑入
15 5Y5/3 灰オリーブ色粘質シルト
16 2.5Y5/2 暗灰黄色粘土
17 10YR4/3 にぶい黄褐色微細粒砂、2.5Y4/6 オリーブ褐色粘土斑入
18 2.5Y5/3 黄褐色粘土、2.5Y4/3 オリーブ褐色粗粒砂斑入
19 2.5Y4/3 オリーブ褐色粗粒砂
20 5Y5/1 灰色粘土
21 7.5Y4/1 灰色粘土、炭化物少量含む
22 5Y4/1 灰色粘土
23 2.5Y4/4 オリーブ褐色粘土
24 7.5Y4/1 灰色粘土
25 7.5Y4/1 灰色粘土
26 7.5Y4/1 灰色粘土
27 5Y4/1 灰色粘土
28 5G4/1 暗緑灰色粘土
29 10Y4/1 灰色粘土
30 5Y3/1 オリーブ黒色粘土
31 7.5Y4/1 灰色粘土
32 7.5Y4/2 灰オリーブ色粘土
33 10Y4/1 灰色粘土
34 10Y2/1 黒色粘土、植物遺体を含む
35 7.5Y3/1 オリーブ黒色粘土
36 7.5Y4/1 灰色粘土、5Y4/1 灰色粘土を互層状に含む
37 5Y2/1 黒色粘土

第152図　F区北壁土層断面図（縦1:50／横1:100）



第153図　D・E・F区古墳時代水田遺構全体図（1:500）



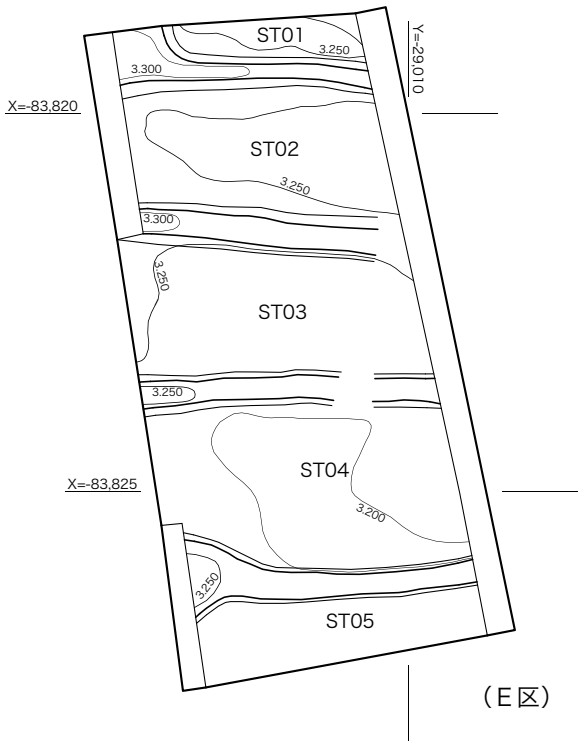
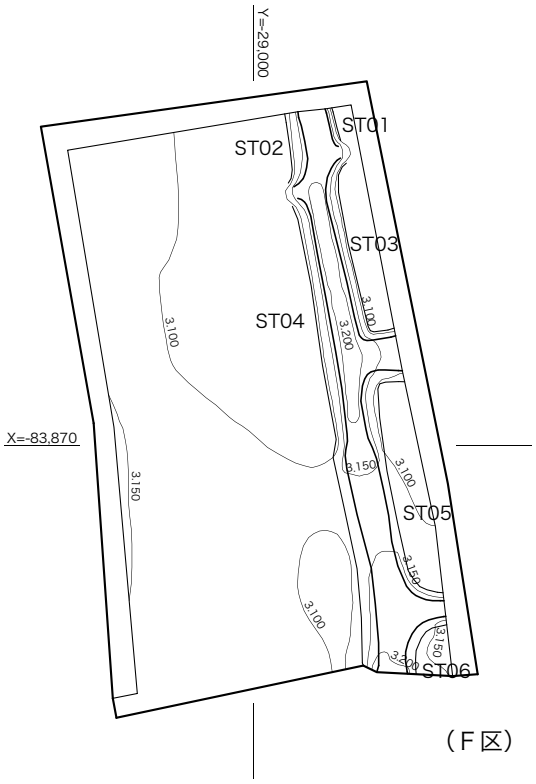




写真54　D区古墳時代水田全景



第154図　D・E・F区古墳時代水田遺構図（1:100）

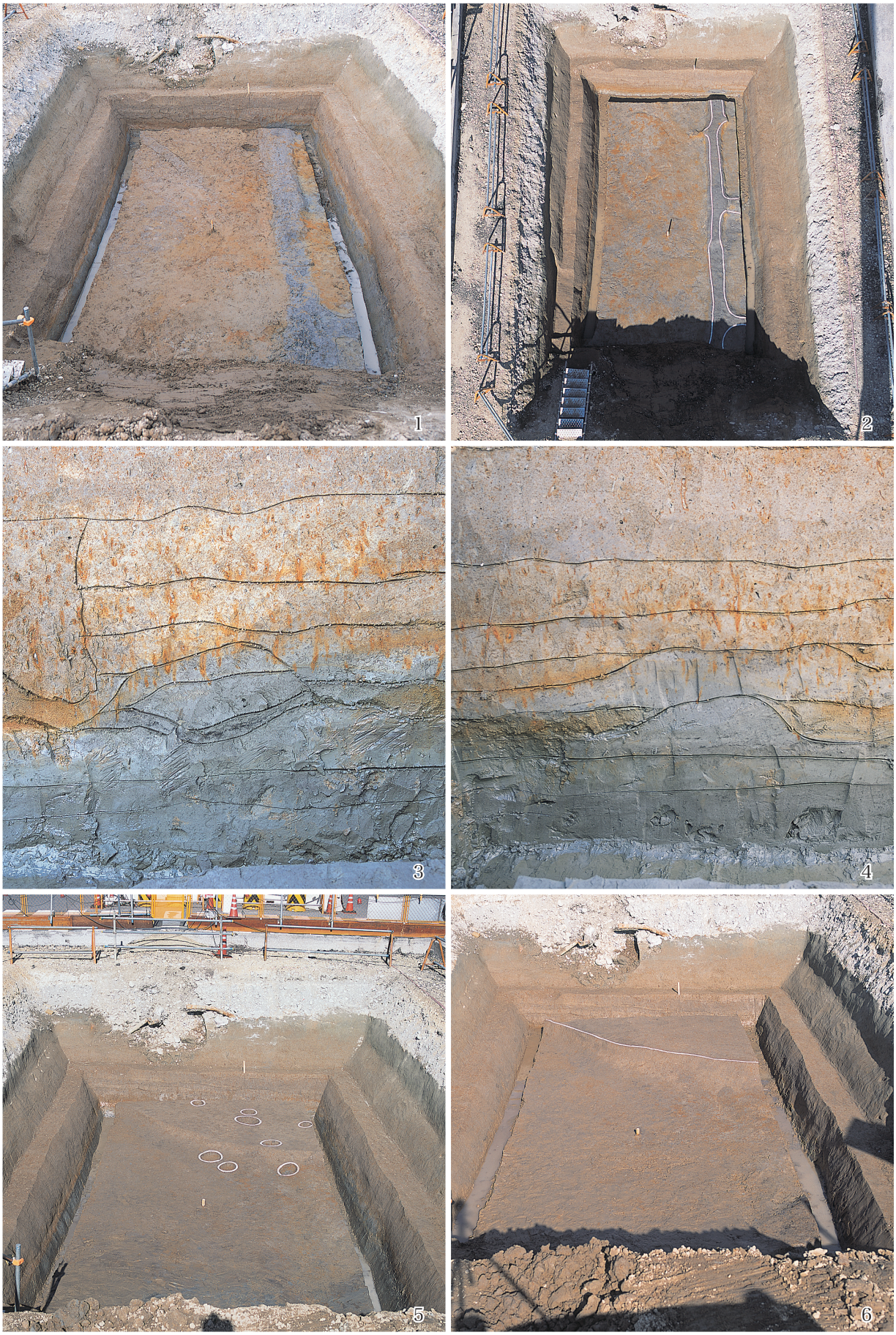


写真55　Ｆ区古墳時代／古代～中世遺構

１・２：古墳時代水田全景　３・４：古墳時代水田畦畔土層断面　５・６：古代～中世遺構全景

(8) G区

層序と検出遺構

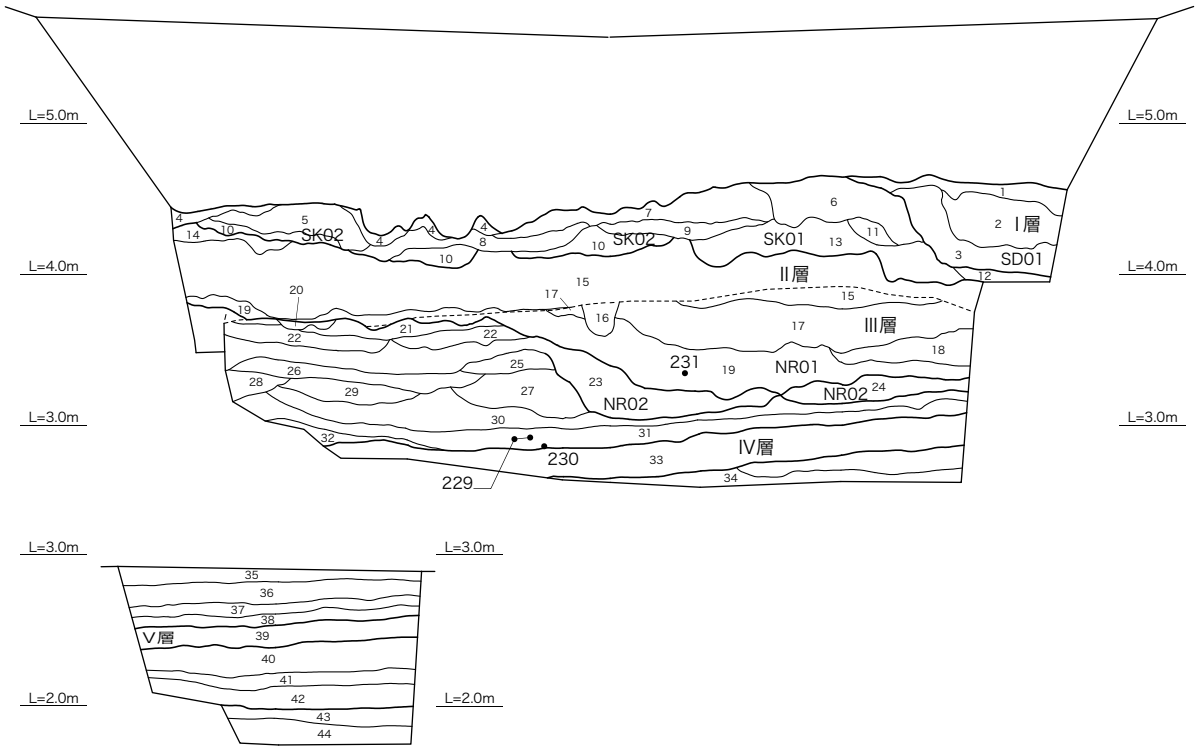
G区におけるⅠ～Ⅲ層の堆積は総じて不安定であったが、Ⅰ層に対応する灰色シルト層上位において近世の遺構、Ⅱ層に対応する暗褐色粘土層上位で中世の落ち込み（河川）、その下位で古墳時代中期の落ち込み（河川）、Ⅳ層に対応する灰色粘土層上位で古墳時代中期の溝を検出し（第155図）、計4遺構面を調査した。なお、Ⅳ層中では古墳時代中期の土器を検出した。

古墳時代中期

NR02

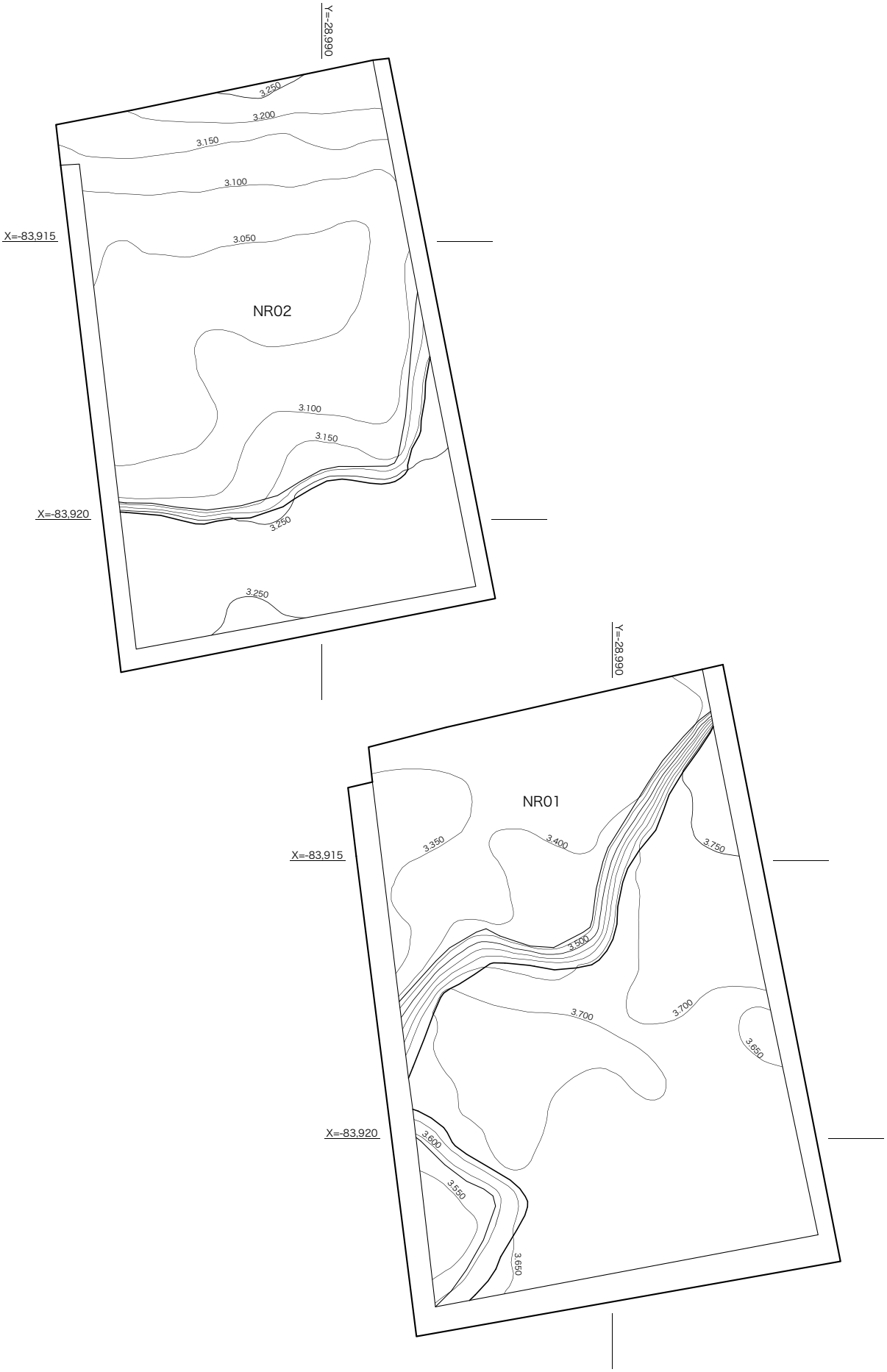
Ⅳ層上位（Ⅳa層）において、松河戸Ⅱ式前半に対比される小型壷（229・230）を検出した。Ⅲ層は主として中粒砂がレンズ状に連続して堆積する不安定な層で、その上位において検出した落ち込みをNR02とした。NR02は黄灰色中粒砂と灰色粘土によって埋積され、Ⅲ層と同様に不安定な堆積環境にあったことを示唆している。出土状況を明確に把握できなかったが、NR02には231、232などが包含されていたとみられる。231は城山2号窯式に相当する須恵器蓋、232は外面に平行タタキを施した酸化焔焼成の土器で、

朝鮮半島系軟質土器

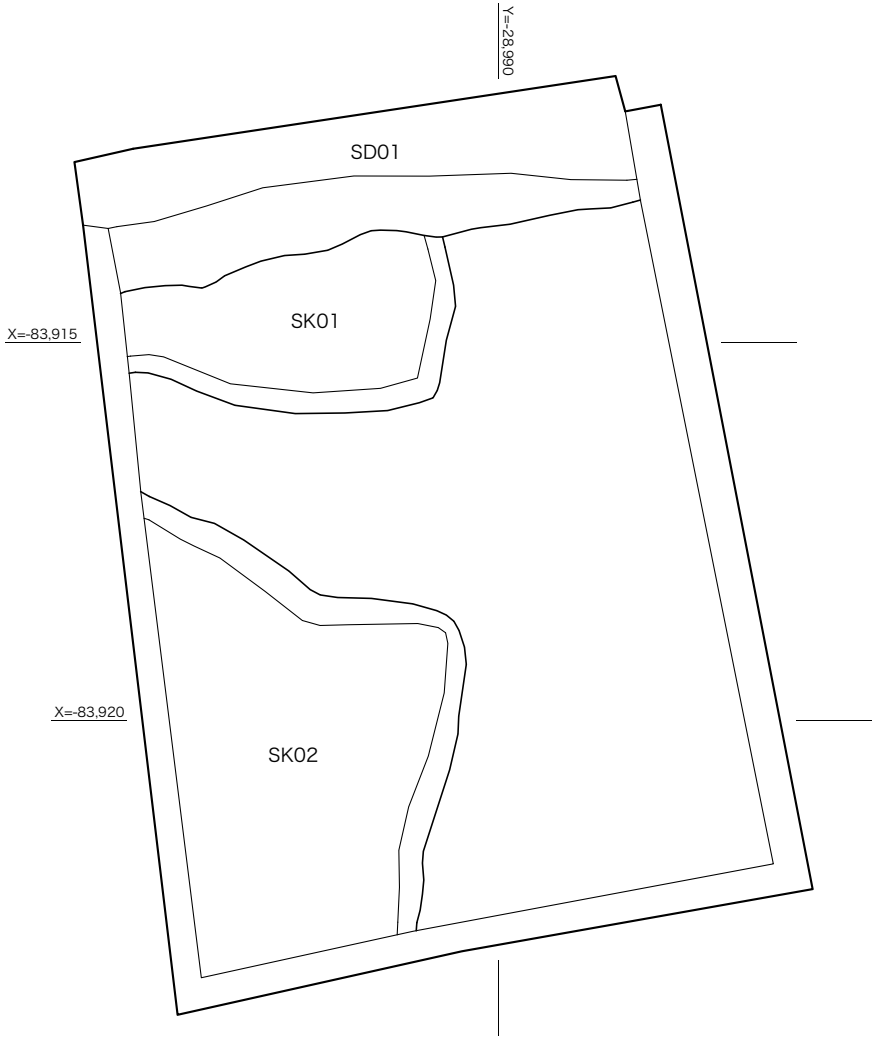


1 2.5Y5/2 暗灰黄色細粒砂、7.5Y4/1 灰色細粒砂斑入
2 5Y4/1 灰色細粒砂と10Y4/1 灰色細粒砂と7.5Y4/2 灰オリーブ色細粒砂の斑土
3 5Y4/1 灰色細粒砂、10Y4/1 灰色細粒砂斑入
4 2.5Y4/4 オリーブ褐色細粒砂、5Y3/1 オリーブ黒色シルト斑入
5 2.5Y4/3 オリーブ褐色細粒砂、5Y4/1 灰色シルト斑入
6 10Y4/1 灰色細粒砂、N2/0 黒色シルト斑入
7 7.5Y4/3 暗オリーブ色砂質シルト
8 2.5Y4/2 暗灰黄色シルトと5Y6/1 灰色細粒砂の斑土
9 2.5Y5/3 黄褐色シルト、2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質シルト斑入
10 2.5Y5/2 暗灰黄色細粒砂
11 10Y4/1 灰色細粒砂
12 10Y3/2 オリーブ黒色細粒砂、7.5Y7/1 灰白色中粒砂斑入
13 5Y5/1 灰色細粒砂と2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質シルトの斑土
14 10Y6/2 オリーブ灰色シルト、5Y4/2 灰オリーブ色粘土斑入
15 7.5Y4/2 灰オリーブ色粘土
16 5Y5/1 灰色シルト、2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト斑入
17 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土と5Y6/1 灰色粗粒砂の斑土
18 7.5Y4/1 灰色粗粒砂、5Y4/1 灰色粗粒砂斑入
19 5Y4/2 灰オリーブ色粘土と2.5Y6/2 灰黄色中粒砂の斑土
20 5Y4/1 灰色中粒砂と2.5Y3/2 黒褐色シルトの斑土
21 10YR4/2 灰黄褐色粘土と2.5Y4/2 暗灰黄色シルトの斑土
22 2.5Y4/1 黄灰色粘土と2.5Y4/4 オリーブ褐色粘土の斑土
23 10Y4/2 オリーブ灰色粘土と2.5Y4/2 暗灰黄色中粒砂の斑土
24 7.5Y4/1 灰色粘土、炭化物混じる
25 2.5Y4/4 オリーブ褐色中粒砂
26 10YR4/3 にぶい黄褐色粗粒砂
27 10YR4/3 にぶい黄褐色粗粒砂
28 10YR3/3 暗褐色粗粒砂
29 7.5Y4/1 灰色中粒砂と10YR4/1 褐灰色粘土の斑土
30 5Y4/2 灰オリーブ色細粒砂と10YR4/6 褐色粗粒砂と10Y4/1 灰色粗粒砂の互層
31 10Y4/1 灰色細粒砂と10Y4/1 灰色粗粒砂の斑土
32 10Y4/1 灰色細粒砂と10Y4/1 灰色細粒砂の斑土
33 7.5Y4/1 灰色粘土
34 7.5Y4/1 灰色粘土
35 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質シルト、炭化物を含む
36 5Y5/2 灰オリーブ色粘土
37 5Y4/1 灰色粘土、炭化物やや多く含む
38 7.5Y4/1 灰色粘土、炭化物を少量含む
39 5Y3/2 オリーブ黒色粘土
40 5Y4/1 灰色粘土、炭化物粒少量含む
41 7.5Y4/2 灰オリーブ色粘土
42 10Y4/1 灰色粘土、炭化物少量
43 10Y2/1 黒色粘土
44 7.5Y3/1 オリーブ黒色粘土

第155図　G区西壁土層断面図（縦1:50／横1:100）



第156図　G区古墳時代中期／中世遺構図（1:100）

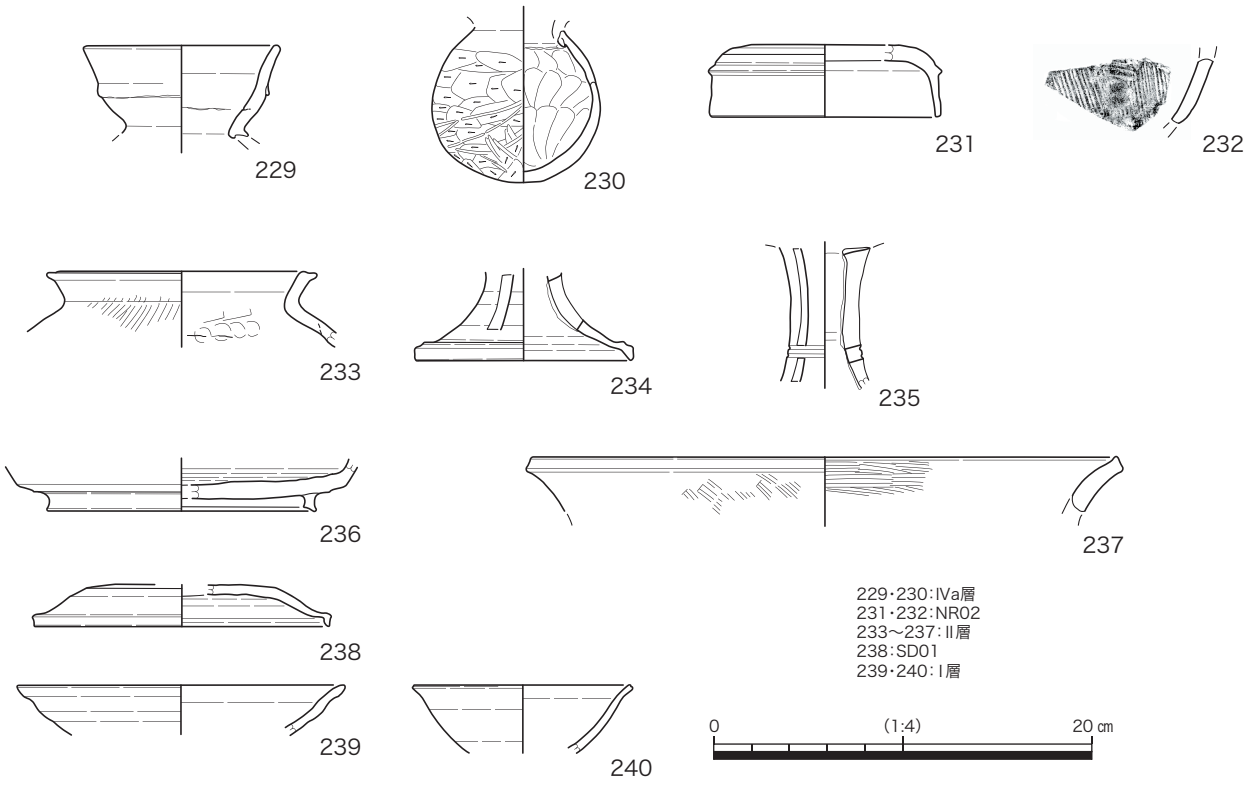


第157図　G区近世遺構図（1:100）



写真56　G区NR02／NR01／近世遺構／土層断面

1：NR02全景　2：NR01全景　3：近世遺構　4：西壁土層断面



第158図　G区出土遺物実測図（1:4）

朝鮮半島系軟質土器とした。器種は甕と推定され、231 に相前後する時期に帰属すると思われる。

古代～中世

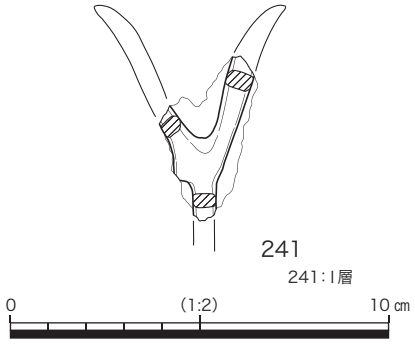
古代の遺構は検出されなかったが、II層を中心として須恵器有台杯（236）、土師器伊勢型甕（237）など、古代の遺物がわずかに出土した。

鉄鏃

241 はI層から出土した雁股式の鉄鏃である。

近世～近代

I層上位において方形を基調とする落ち込み SK01・02 と東西に通じる溝 SD01 を検出した（第157図）。I層中からは尾張型山茶碗（239）、東濃型山茶碗（240）などがわずかに出土したのみである。SD01 は SK01 埋積後に掘削されること、埋土の状況などから近代の用水路と考えられる。



第159図　G区出土金属製品実測図（1:2）

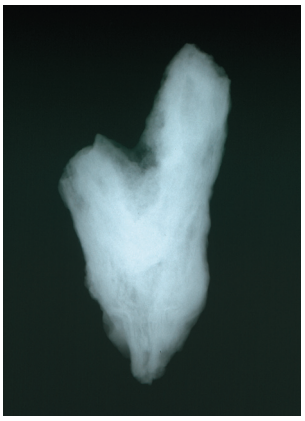


写真57　G区出土金属製品X線写真（1:1）











写真58　E・F・G区出土遺物

（8）H区

層序と検出遺構

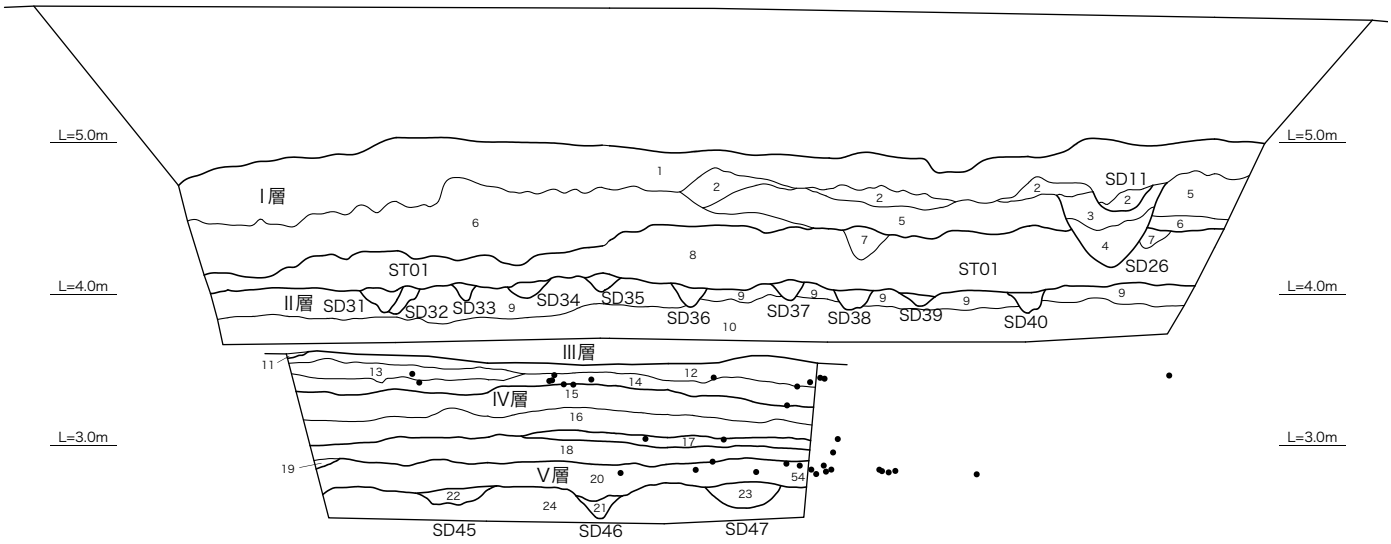
H区では、Ⅰ層に対応する灰色粘質シルト層上位において島畑、Ⅱ層に対応する暗褐色粘土層上位において中世の遺構、Ⅱ層下位において古代の遺構を調査した（第160図）。Ⅳ層に対応する灰色粘土層中では、古墳時代前～中期の土器が各層で連続して出土し、Ⅴ層（黒色粘土層）下位では古墳時代初頭の遺構を検出した。ただし、Ⅲ層以下における土器の包含は、重機掘削による堆積状況の確認作業中に初めて明らかになった事実である。そのため、Ⅲ層以下は結果として不十分な点が多い調査にならざるをえなかった。

古墳時代初頭

平行小溝群

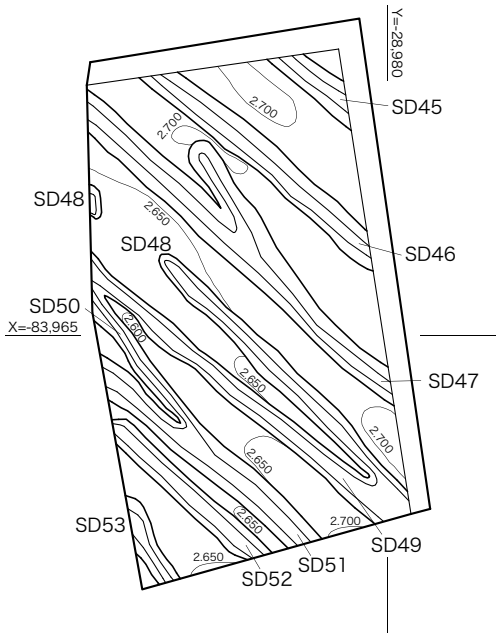
Ⅴ層下位において北西―南東方向に通じる平行小溝群SD45～53を検出した（第161図）。H区においてⅤ層は、C区と同様、粗粒砂を多く含有する傾向が認められる。この所見は、堆積環境と小溝群の分布との関連を示唆しているようにも思われる。溝は2条を一単位として検出されるものが多く、相互に分岐、合流する。各溝は幅約0.4 m、深さ0.1～0.2 mの規模で、Ｂｂ･C区に近似する。溝の間隔は2条を一単位とする単位間は約0.5 mを基調とし、約0.8 mと間隔が広い部分（SD45・46間）もある。溝内にはⅤ層から連続する粗粒砂を多く混じえる黒色粘土層が堆積する。Ⅴ層中からは、わずかながら**廻間Ⅰ式後半**前後の土師器（258～261）が出土していることから、Ｂｂ・C区と同様、平行小溝群の帰属時期は、3世紀前半の前後に求められるであろう。

なお、Ⅴ層下位には粗粒砂を多く混じえる灰色粘土層が堆積するが、以下の各層において遺構、遺物は検出されなかった。



1 5Y5/1 灰色シルトと
5GY6/1 オリーブ灰色シルトと
7.5Y7/1 灰白色中粒砂の斑土
2 5Y5/1 灰色シルトと
5Y4/1 灰色シルトの斑土
3 10Y5/1 灰色粘質シルト
4 10Y5/1 灰色粘質シルトと
5GY6/1 オリーブ灰色シルトの斑土
5 2.5GY6/1 オリーブ灰色シルト
6 2.5GY5/1 オリーブ灰色粘質シルト、
5BG5/1 青灰色シルト斑入
7 2.5GY6/1 オリーブ灰色シルトと
5GY6/1 オリーブ灰色シルトの斑土
8 5BG6/1 オリーブ灰色シルト、
7.5Y8/1 灰白色細粒砂が互層状に含まれる
9 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト
10 7.5Y5/1 灰色中粒砂
11 5Y6/1 灰色細粒砂
12 5Y6/1 灰色シルト
13 5Y5/1 灰色粘土
14 5Y6/1 灰色シルト、
5Y5/1 灰色細粒砂混じり
15 5Y6/1 灰色粘土
16 5Y5/1 灰色粘土
17 5Y5/1 灰色中粒砂、
5Y4/1 灰色粘土を互層状に含む、炭化物少量
18 7.5Y4/1 灰色粘土、
19 7.5Y4/1 灰色中粒砂混じり
7.5Y3/1 オリーブ黒色粘土、
20 5Y5/1 灰色シルト斑入
7.5Y3/1 オリーブ黒色粘土、
21 7.5Y3/1 オリーブ黒色中粒砂・炭化物多量に含む
7.5Y3/1 オリーブ黒色中粒砂、
22 7.5Y5/1 灰色粗粒砂混じり
7.5Y3/1 オリーブ黒色中粒砂、
23 7.5Y5/1 灰色粗粒砂混じり
7.5Y3/1 オリーブ黒色粘土、
24 7.5Y3/1 オリーブ黒色粗粒砂混じり
7.5Y6/1 灰色粘土、
7.5Y7/1 灰白色粗粒砂混じり

第160図　H区西壁土層断面図（縦1:50／横1:100）



第161図　H区古墳時代初頭遺構図（1:100）

古墳時代前～中期

土器群

Ⅳ層中の各層では、古墳時代前～中期の土器群が連続して検出された。以下、土器群を検出した層位を、出土層位に応じて、上位からⅣａ層、Ⅳｂ層、Ⅳｃ層、Ⅳｄ層として記述する。

SU04

Ⅳｄ層　Ⅴ層直上で、土器群 SU04 を検出した（第 162 図）。土器は調査区南西部を中心として南北約６ｍ、東西約３ｍの範囲に散布していたが、調査区の制約から、分布範囲は確定できなかった。周辺には炭化物の散布も認められたが、土器群に関係する明確な遺構は検出されなかった。土器はいずれも土層の圧密化によって破片となっていたが、個体の完存率が高いものが多い。

松河戸Ⅰ式初頭

土器群は、Ｓ字甕（242 ～ 248）、小型平底甕（249）、甕（250）、中型直口壺（251）、広口壺（252）、小型壺（257）、屈折脚高杯（253 ～ 256）によって構成される。これらの個体によって構成される土器群は、松河戸Ⅰ式初頭に対比される良好な一括資料である。

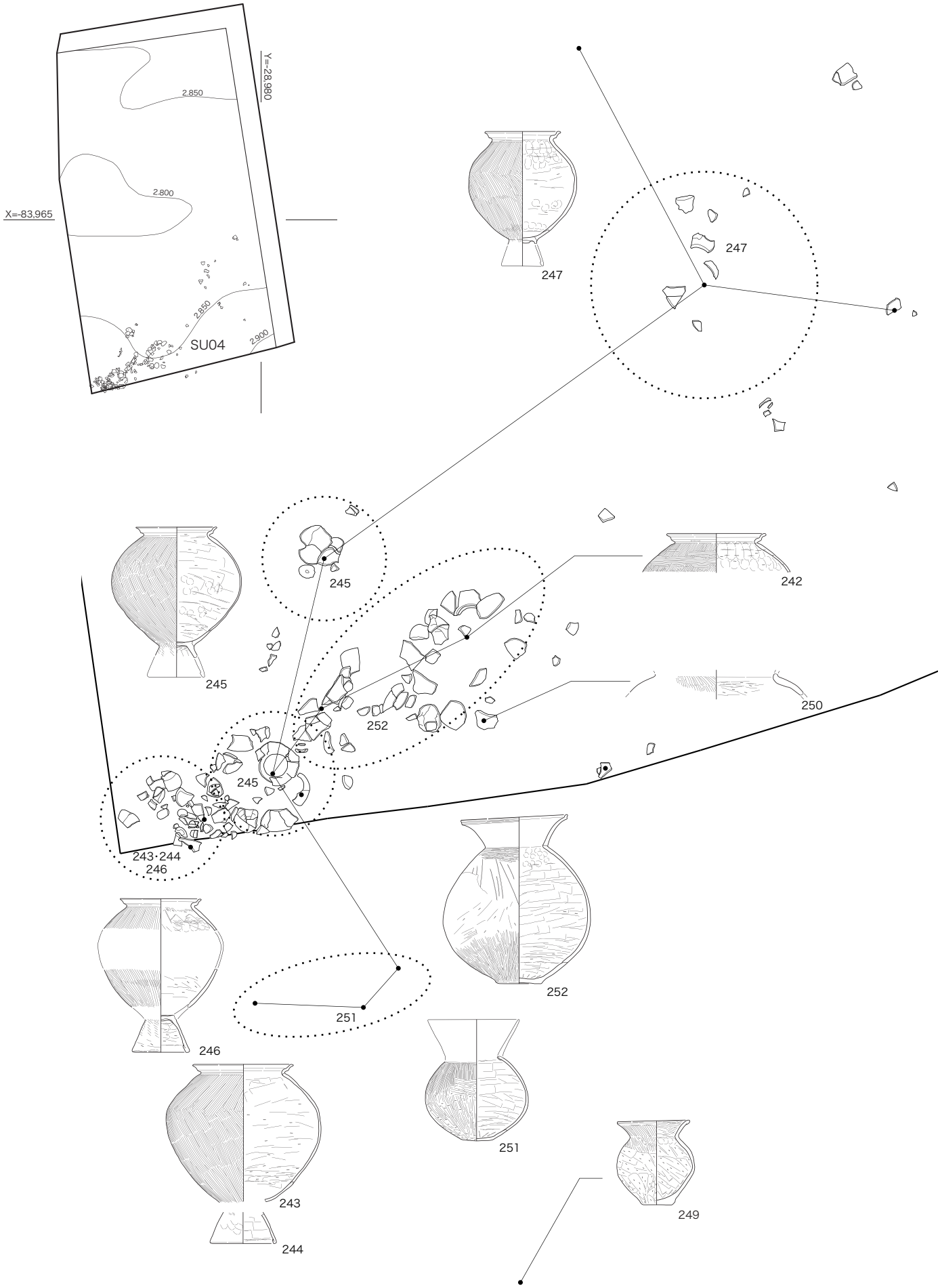
個体識別した結果は、甕７個体（Ｓ字甕５個体）、壺３個体、高杯４個体で、甕が高率を示す。242 はＳ字甕Ｃ類新段階、243・245・246・247 はＳ字甕Ｄ類古段階で、口径 16cm・器高 25cm 前後、口径 12cm・器高 21cm 前後の二法量がある。249 の小型平底甕は全体に製作が粗雑である。250 はＳ字甕に類似するが、胎土、器壁の厚さなどが明らかに異なる。251 は底部を曖昧とする直口壺で、体部上半は細かい沈線状のミガキを施し、下半は幅広の匙面状のミガキを施す。体部下半はミガキ調整に先行するヘラケズリ調整が部分的に表面化する。252 は受口状の口縁部形態を特徴とする壺で、体部上半に線刻？がある。線は非常に曖昧で細く、縦位に疎らに刻まれるのみ。その図案についても不明である。

布留式高杯

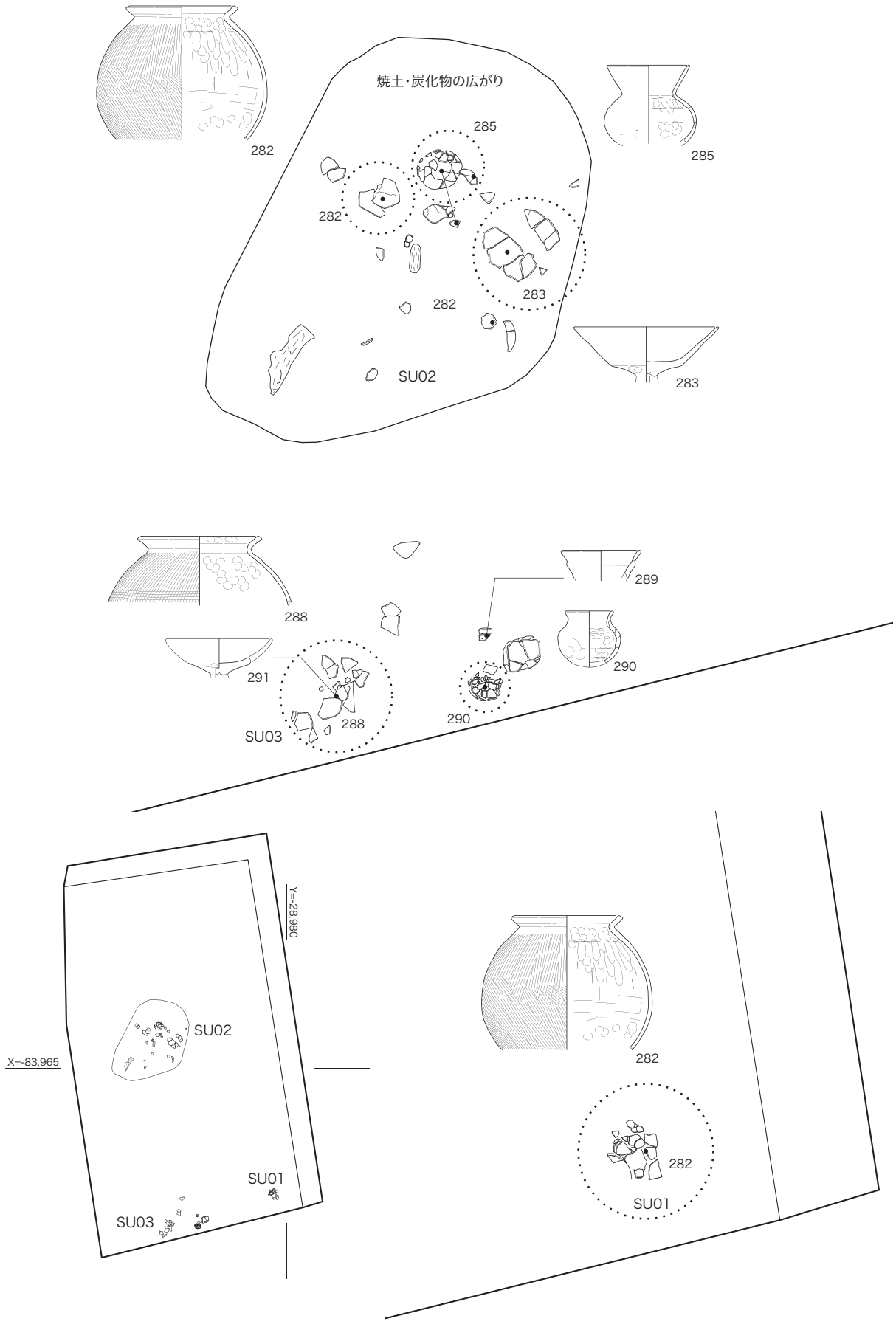
屈折脚高杯（253 ～ 256）は、小さい杯底部、細い脚柱状部を特徴とする。253 は杯部外面に横位のミガキ、内面に放射状暗文を施す屈折脚高杯で、布留式に系譜する個体と思われる。外面のミガキは細かい沈線状である。254 は透孔がある屈折脚高杯で、脚柱状部に縦位のミガキを施す。257 は底部を小さな平底とする小型壺で、口縁部外面先端付近に曖昧な多条沈線による装飾がある。器面調整は細かいハケ調整を基調とするが、口縁部外面に曖昧なミガキ調整を施す。

Ⅳｃ・Ⅳｂ層　SU04 とⅣａ層で検出した土器群（SU01 ～ 03）との中間の層位において土器群を検出した。SU04、SU01 ～ 03 と比較してやや出土状況が不安定ながら、相対的に下位のⅣｃ層で出土した一群（262 ～ 269）と、上位のⅣｂ層で出土した一群（270 ～ 281）とに区分した。

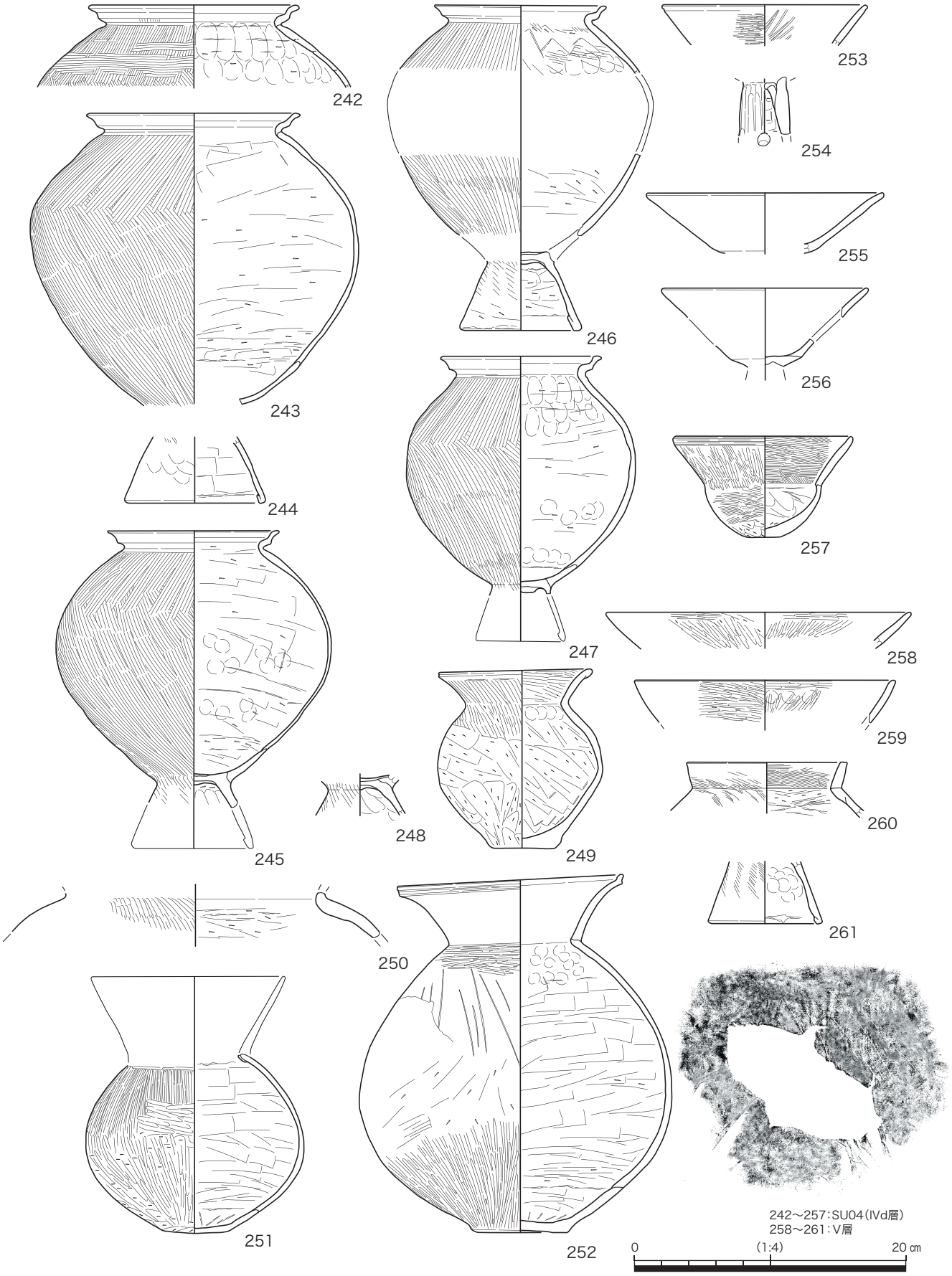
Ⅳｃ層の土器群は、Ｓ字甕（262・263）、甕（264・265）、有段口縁壺（266）、無透孔屈折脚高杯（267 ～ 269）によって構成される。262 はＳ字甕Ｄ類古段階、263 はＳ



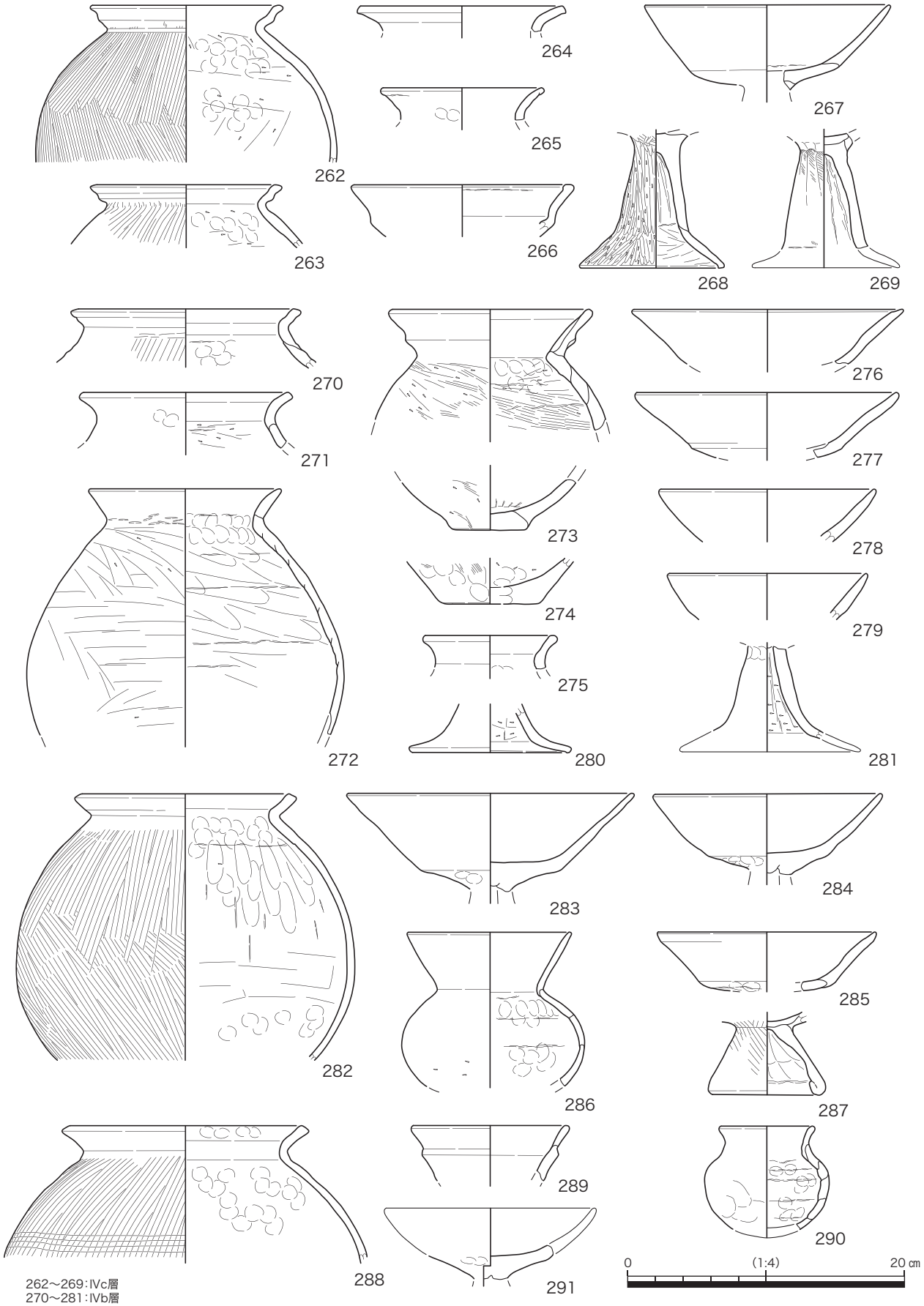
第162図　H区SU04遺構図・遺物出土状態図（1:100／1:20）



第163図　H区SU01～03遺構図・遺物出土状態図（1:100／1:20）



第164図　H区SU04・V層出土遺物実測図（1:4）



262～269：IVc層
270～281：IVb層
282～286：SU01・02（IVa層）
287：SU01付近
288～291：SU03（IVa層）

第165図　H区IVc層・IVb層・SU01～03出土遺物実測図（1:4）











写真59　H区古墳時代初頭／前期遺構

1：古墳時代初頭遺構検出状況　2：古墳時代初頭遺構完掘状況　3：北壁土層断面　4：SU04遺物近景　5：SU04全景

字甕Ｄ類中段階。268 は脚部に縦位のミガキ調整をやや疎らに施すが、全体に製作が粗雑である。269 は脚柱状部の上位に幅広のメントリ状のナデを施す。

Ⅳｂ層の土器群は、Ｓ字甕（270）、甕（271・272）、小型甕（275）、壷（273・274）、無透孔屈折脚高杯（276 ～ 281）によって構成される。270 はＳ字甕Ｄ類中段階、272 は最大径が体部下半にある甕で平底の可能性もある。高杯は、277・278 など、杯部は口径（18cm 前後）に比して浅く、杯部上半が複雑に彎曲するものがみられる。

出土状況は不安定ながら、甕の構成、Ｓ字甕や高杯の型式差から、Ⅳｃ層とⅣｂ層の土器群には相互に新旧関係を認めることが可能であろう。つまり、前者は松河戸Ⅰ式前半、後者は松河戸Ⅰ式後半の区分におよそ対応するものと考えられる。

松河戸Ⅰ式の区分

Ⅳａ層　Ⅳ層中でも最上位、Ⅲ層直下に近い位置で、土器群 SU01 ～ 03 を検出した（第 163 図）。SU02 は土器が分布する周囲、南北 1.6 m、東西 1.2 mの範囲に炭化材、焼土が散布していたが明確な遺構は検出されなかった。焼失家屋に土器群や炭化材が残されていた状況も想定したが、土器群を確認した段階では、竪穴住居の平面形を確定することは困難と判断した。SU01、SU03 についても SU02 と同様、土器群に関係するような遺構は確認できなかった。なお、SU01・02 は、両土器群に含まれていたＳ字甕（282）などが接合したことから、同一の土器群であった可能性を考慮し、同時に扱うこととした。

SU01～03

SU01･02 は、Ｓ字甕Ｄ類（282）、大型高杯（283）、高杯（284 ～ 285）、中型の直口壷（286）から構成される。Ｓ字甕（282）は口縁部から体部にかけて器壁の厚さが均一で、口縁部外面に痕跡的な段を残す特徴からＤ類新段階に対比される。高杯は口径 20cm 以上の大型高杯（283）と口径 16cm 前後の高杯（284・285）に法量分化する。直口壷（286）は顕著に外反する口縁部、球形に近い体部を特徴とする。SU03 は、Ｓ字甕（288）、小型壷（289・290）によって構成される。Ｓ字甕（288）はＤ類新段階に対比される。289 は口縁部を有段状とする小型壷、291 は杯部を無稜とする高杯である。

SU01・02、SU03 の土器群は、Ⅳａ層出土土器群として、およそ松河戸Ⅱ式前半に対比される内容を示す。ただし、291 については、杯部形態、脚部との接合方法から宇田式に時期が下降する可能性があり、検討を要する。

松河戸Ⅱ式前半



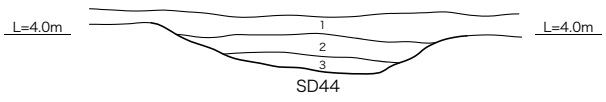


写真60　Ｈ区古墳時代中期遺構

1：SU01～03全景　2：SU03全景

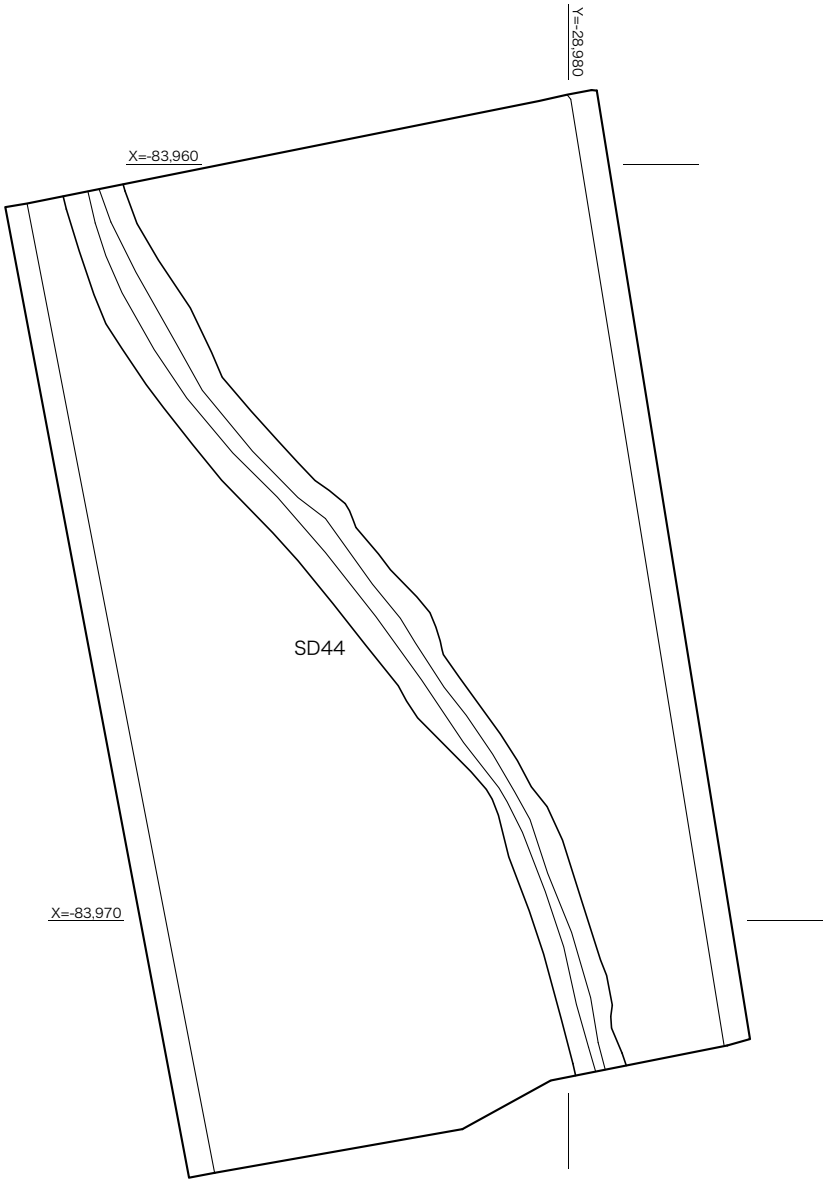
古代

Ⅱ層下位において北西―南東方向に通じる溝 SD44 を検出した（第 166・167 図）。埋土は上位のⅡ層に近似する。溝内から出土した遺物はごく少なく、およそ東山 50 号窯式に対比される須恵器蓋（292）を図示しえたのみである。Ⅱ層中には、5 ～ 8 世紀の各時期の土器（293 ～ 320）が包含されていることと、層位関係から、SD44 は 5 ～ 8 世紀のいずれかの時期に帰属すると判断されるが、埋土を観察する限りでは、8 世紀後半の可能性がより高いと思われる。



5　10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト
6　10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト、10YR8/4 浅黄橙色細粒砂を互層状に含む
7　10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト、7.5Y5/1 灰色中粒砂斑入

第166図　SD44土層断面図（1:50）



第167図　H区古代遺構図（1:100）

中世

微高地状の起伏

Ⅰ層を除去すると、調査区南西部分に比高約 0.1 mの微高地状の起伏が顕れ、その縁辺で北西―南東方向に通じる小溝 SD28、低地状となる部分で北東―南西方向の小溝群 SD29 ～ 43 が検出された（第 168 図）。SD28 は下位の SD44 の位置を踏襲して掘削されている。一方で、微高地上において遺構は検出されなかった。微高地上の SD28 と低地の各溝は相互に連結し、低地の溝は２条を一単位とするものが多いようにも捉えられる。溝は幅 0.3 ～ 0.5 m、深さ約 0.1 mで、低地に配された溝間の間隔は（２条一単位とする溝間の間隔を考慮しない場合）、0.6 ～ 1.0 mで、やや不規則である。溝の機能、微高地上の土地利用を明らかにすることは難しいが、畑など耕作に関係する遺構と考えておきたい。

小溝群



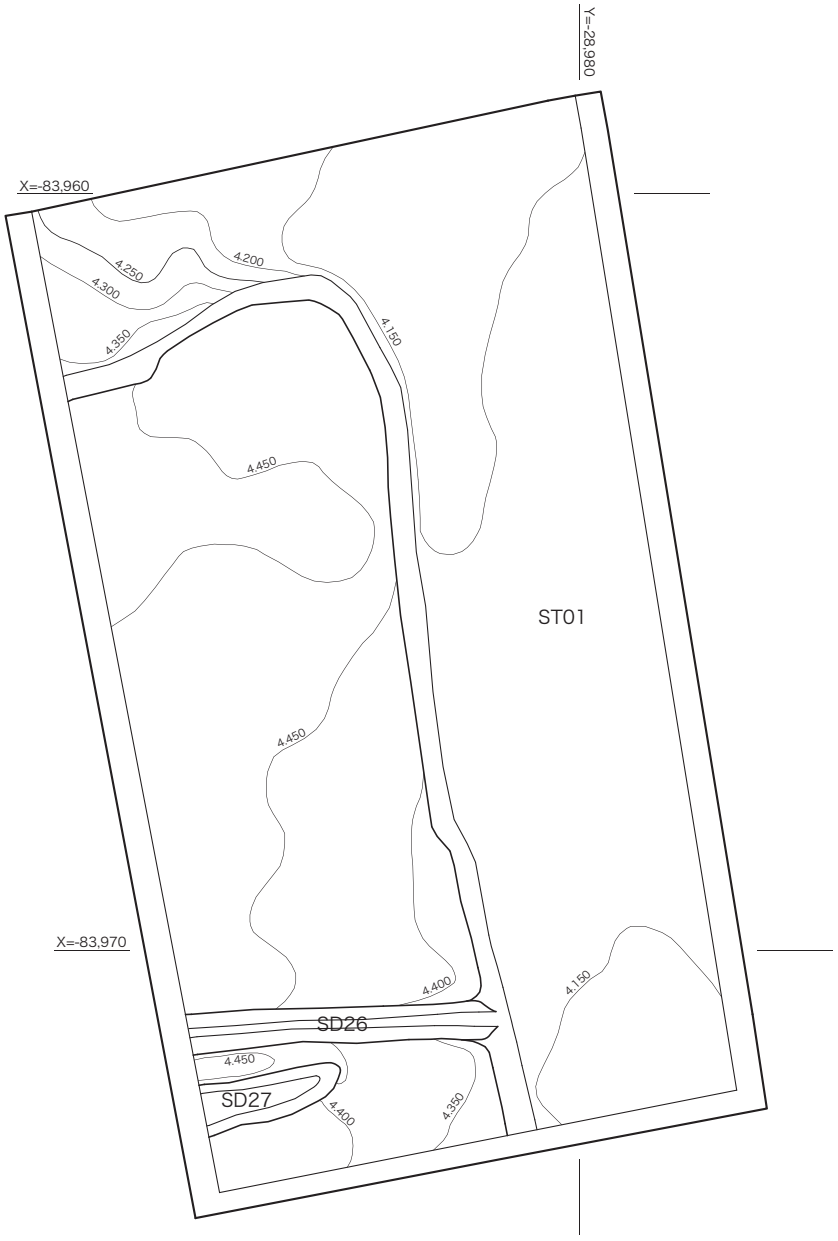
第168図　H区中世遺構図（1:100）

溝からは第６型式の尾張型山茶碗（337）、脇之島窯式の東濃型山茶碗（338）が出土したことに加え、上位のⅠ層中からは、尾張型山茶碗（339 ～ 343）、東濃型山茶碗（344 ～ 356）の各型式、古瀬戸前期の入子（357）、14 世紀の非ロクロ調整土師器皿（358）、白磁碗（359・360）、青磁碗（361）、古瀬戸後期の燭台（362）などが出土している。

近世～近代

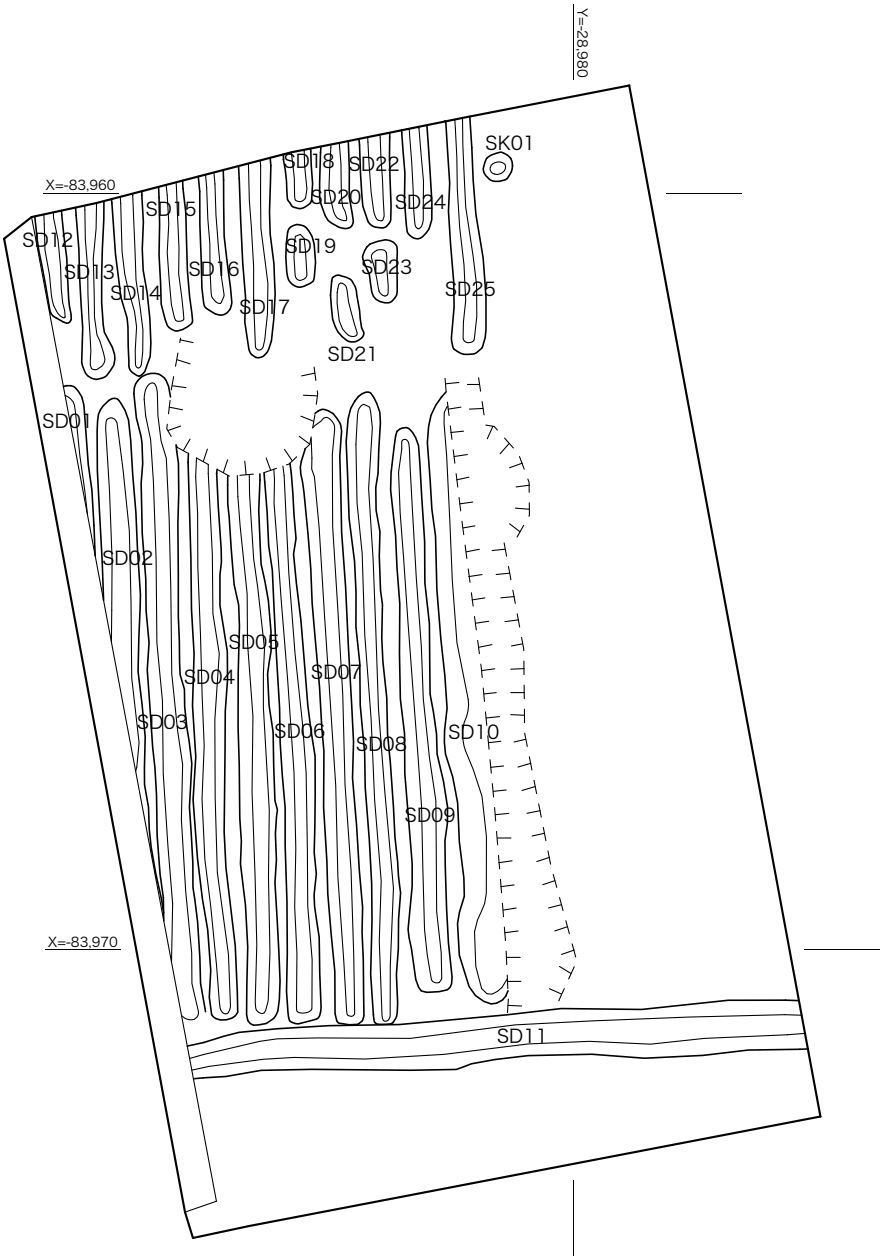
島畑と水田

Ⅰ層上位において近世以降の島畑と水田 ST01、島畑上において平行小溝群 SD01 ～ 25 などを検出した（第 169・170 図）。なお、島畑部分はⅠ層下位の微高地状の部分、水田部分はⅠ層下位の低地部分に対応し、H 区周辺は中世から近世、さらに近代にかけて耕作地としての土地利用が継続していたことが想定される。369・370 はⅠ層上位において

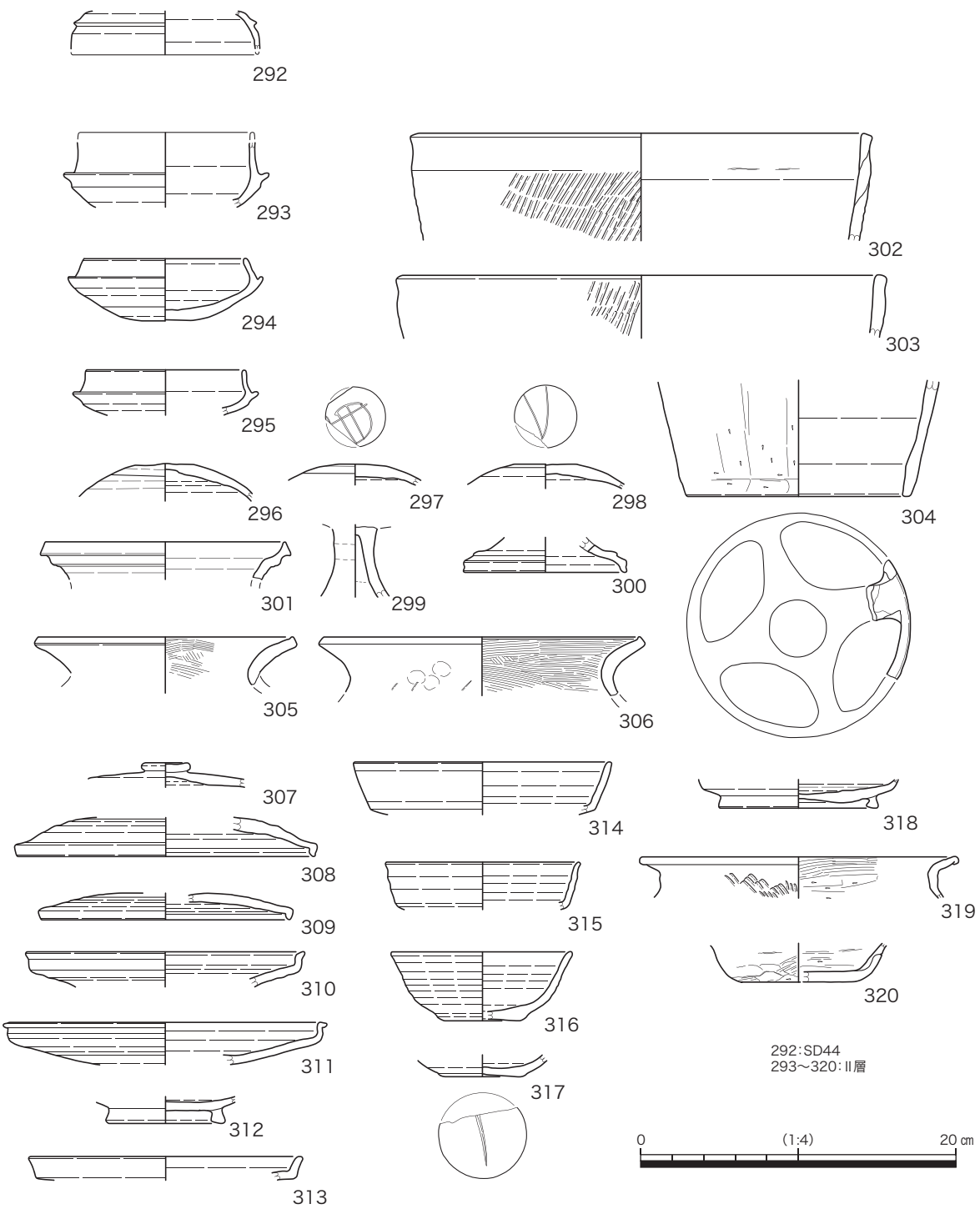


第169図　H区近世遺構図（1:100）

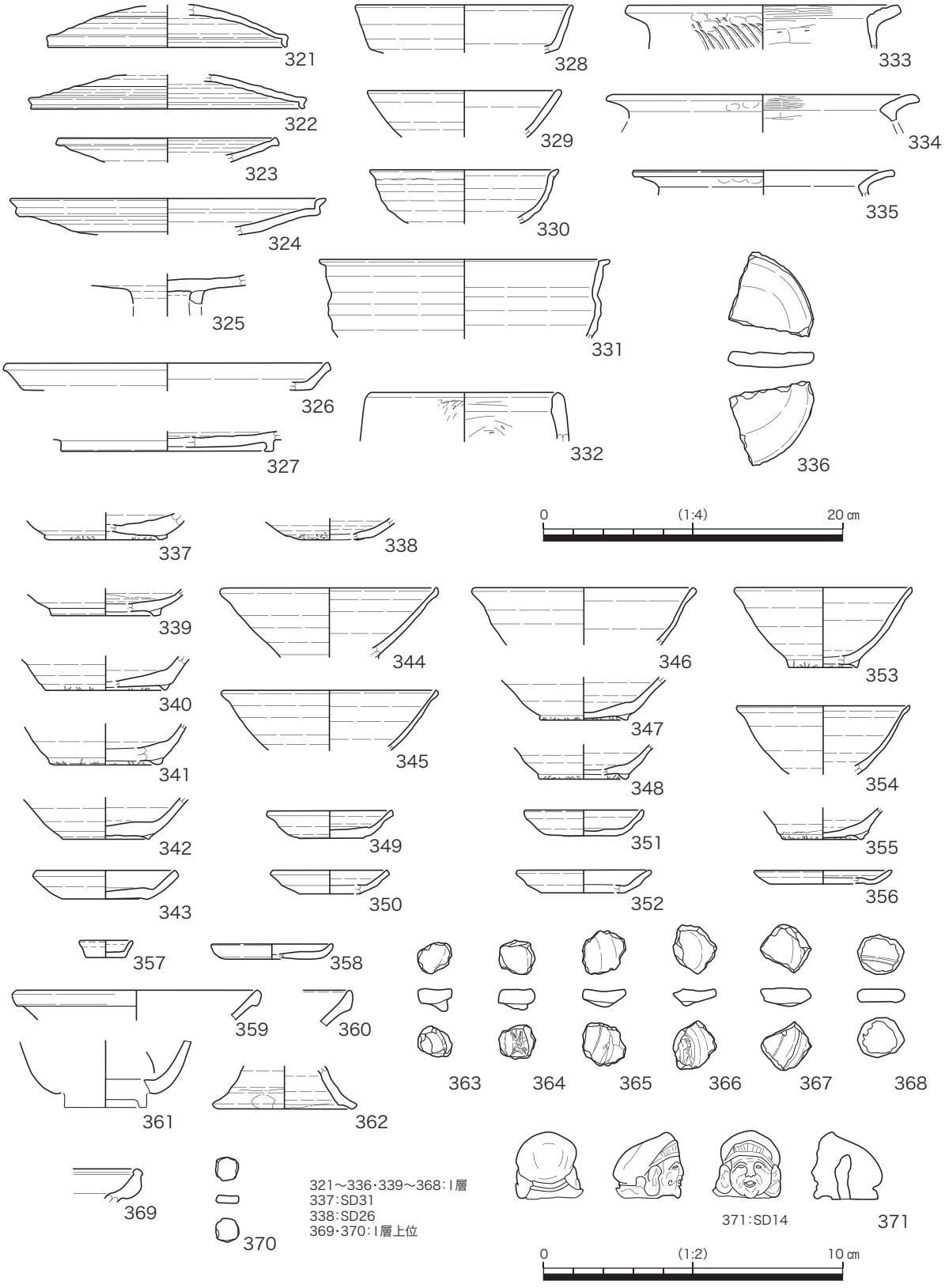
出土した遺物である。369 は擂鉢、370 は志野製品を利用した加工円盤で、およそ 17 世紀後半に対比される。371 は陶製の人形で、島畑上の溝 SD14 より出土した。372 は砂質凝灰岩製の仕上げ砥。376 は溶解した羽口の一部と思われ、片面は平滑に黒色ガラス質化するが、反対の面は多孔質に発泡する。



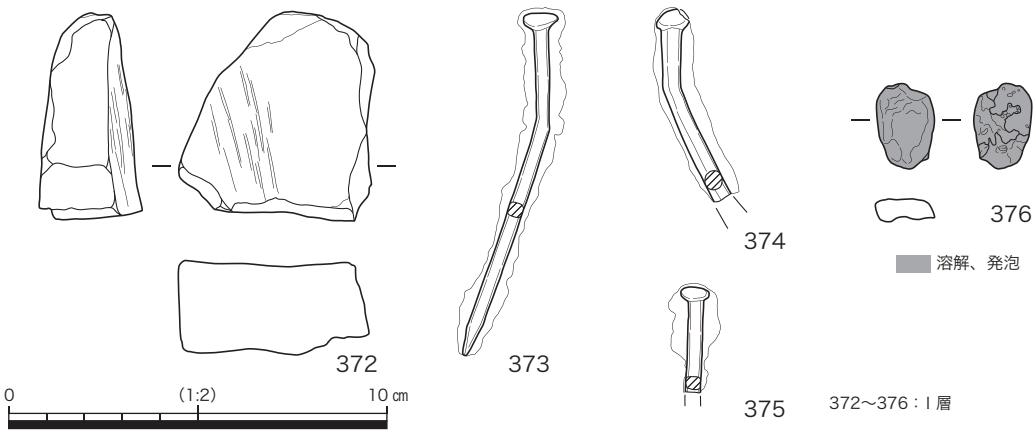
第170図　H区近代遺構図（1:100）



第171図　H区古墳時代後期～古代出土遺物実測図（1:4）



第172図　H区Ⅰ層・中世～近代出土遺物実測図（1:4／1:2）



第173図　H区出土石製品・鉄製品・金属製品生産関連遺物実測図（1:2）



写真61　H区古代／中世／近世／近代遺構全景

1：古代遺構全景　2：中世遺構全景　3：近世遺構全景　4：近代遺構全景



写真62　H区出土遺物1











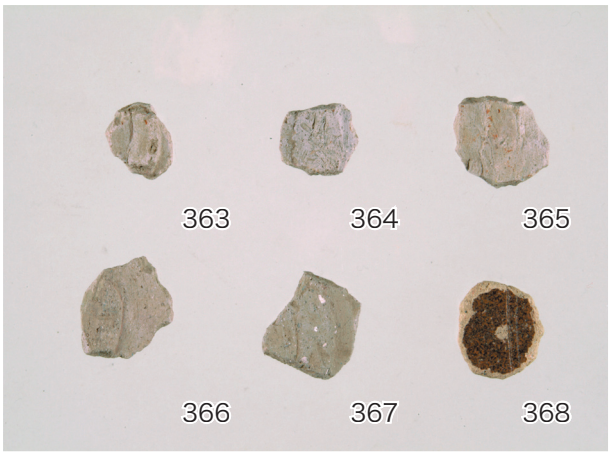




写真63　H区出土遺物２

（10） Ⅰ区

層序と検出遺構

Ⅰ区では、Ⅱ層に対応する暗灰黄色砂質シルト層の上位で中世の遺構、Ⅱ層の下位で古墳時代中期～古代の建物群、建物群の下位において河川状の緩やかな落ち込みを検出した（第 174 図）。結果、３遺構面を調査した。しかし調査時には、H 区以北にみるような古墳時代中期以前の遺構の展開、遺物の包含を認識していなかったので、３面以下の調査は、部分的な遺構・遺物の有無確認を実施したのみで、不十分なまま調査を完了した。

古墳時代中期

緩やかな落ち込み

２面の遺構の下位で、褐色シルト～細粒砂で埋積される河川状の緩やかな落ち込み NR01 を確認した（第 175 図）。NR01 はⅠ区を北西―南東方向に通じ、調査区内において見かけ上の両岸を検出した。仮に示す計測値は、幅５～８m、深さ約 0.3 mである。

有袋鉄斧と水銀朱

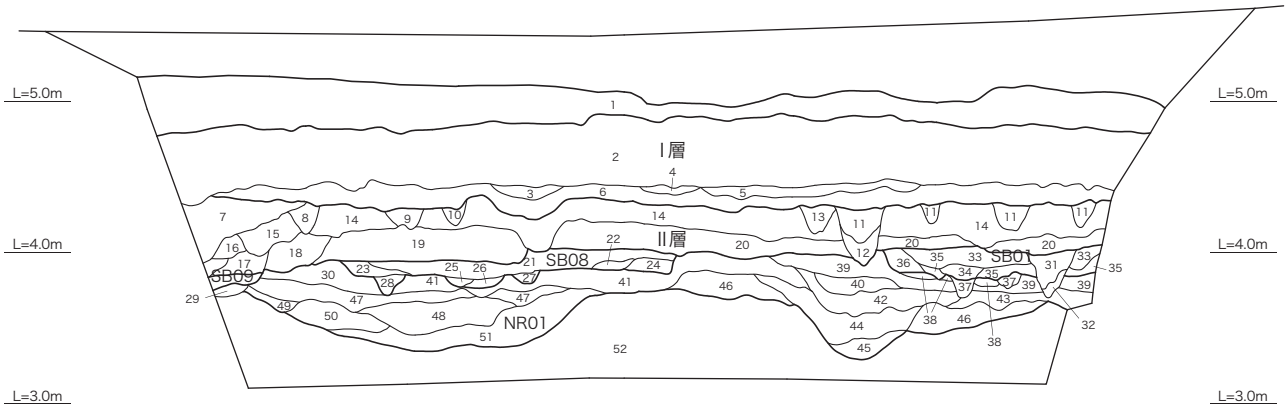
NR01 内の堆積層からは古墳時代中期の遺物（377 ～ 389・532）が出土した。遺物には南岸を中心として出土した土師器（377 ～ 389）に加えて、最深部付近で出土した有袋鉄斧（532）、北岸付近において出土した水銀朱（第４章（５）を参照）がある。土師器は甕（377・378）、S 字甕（379・380）、有段口縁壷（381）、小型壷（384）、中型直口壷（385）、高杯（386・387）、大型高杯（388・389）などによって構成される。これらは総じて松河戸Ⅱ式前半に対比されるが、杯部を無稜とする高杯（386）は、やはり宇田式にまで下降する可能性があり、検討を要する。

松河戸Ⅱ式前半

古墳時代中期～古代

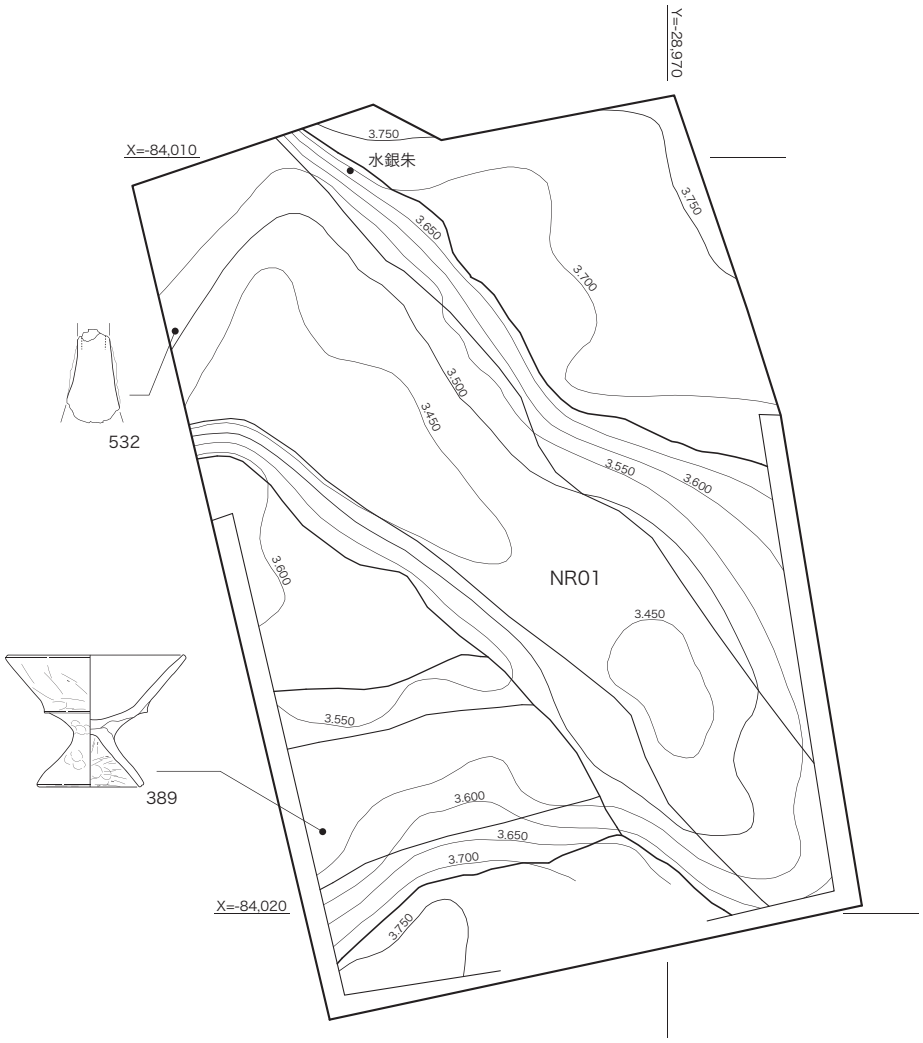
竪穴住居群と土坑

第２面において、相互に重複する古墳時代中期～古代の竪穴住居 10 棟、土坑を検出した（第 176 図）。竪穴住居の埋土は、いずれも土質、色調変化に乏しく、遺構検出は容易



1 5Y3/1 オリーブ黒色シルト
2 5Y4/3 暗オリーブ色砂質シルト
3 7.5Y3/2 オリーブ黒色粘質シルト、7.5GY7/1 明緑灰色細粒砂斑入
4 7.5Y3/2 オリーブ黒色粘質シルト、7.5GY7/1 明緑灰色細粒砂斑入
5 7.5Y4/2 灰オリーブ色シルト、7.5Y5/2 灰オリーブ色細粒砂斑入
6 5Y4/2 灰オリーブ色シルト、7.5Y7/1 灰白色シルト斑入
7 5Y4/2 灰オリーブ色シルト、7.5Y7/1 灰白色シルト斑入
8 10Y5/1 灰色シルト、7.5Y4/2 灰オリーブ色シルト斑入
9 7.5Y4/2 灰オリーブ色シルト、10Y5/1 灰色シルト斑入
10 7.5Y4/2 灰オリーブ色シルト、10Y5/1 灰色シルト斑入
11 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質シルト、5Y5/2 灰オリーブ色細粒砂斑入
12 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質シルト、2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト斑入
13 5Y3/2 オリーブ黒色粘質シルト、5Y5/2 灰オリーブ色細粒砂斑入
14 5Y4/2 灰オリーブ色シルト
15 7.5Y4/2 灰オリーブ色シルト、7.5Y8/1 灰白色細粒砂斑入、炭化物・焼土粒多く混じる
16 7.5Y4/2 灰オリーブ色シルト、炭化物・焼土粒少量混じる
17 7.5Y4/2 灰オリーブ色シルト
18 5Y4/1 灰色シルト、5Y8/1 灰白色細粒砂・焼土粒・炭化物わずかに混じる
19 7.5Y5/2 灰オリーブ色シルト
20 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト
21 7.5Y4/2 灰オリーブ色シルト
22 7.5Y4/1 灰色砂質シルト
23 5Y4/1 灰色砂質シルト、5Y8/1 灰白色中粒砂互層状に含む
24 7.5Y4/1 灰色砂質シルト
25 5Y4/1 灰色砂質シルト、5Y8/1 灰白色細粒砂斑入
26 5Y5/2 灰オリーブ色シルト
27 5Y5/2 灰オリーブ色シルト
28 5Y4/1 灰色砂質シルト、7.5Y4/2 灰オリーブ色細粒砂斑入
29 7.5Y4/1 灰色砂質シルト
30 5Y5/1 灰色細粒砂
31 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質シルト
32 5Y4/3 暗オリーブ色シルト、2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質シルト斑入
33 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト、焼土粒を少量含む
34 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト、5Y6/2 灰オリーブ色細粒砂斑入
35 5Y5/2 灰オリーブ色細粒砂
36 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト
37 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト
38 5Y4/3 暗オリーブ色中粒砂
39 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト
40 10YR4/4 褐色細粒砂
41 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質シルト
42 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト
43 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト、5Y4/1 灰色細粒砂斑入
44 10YR4/4 褐色粘質シルト
45 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質シルト、2.5Y4/3 オリーブ褐色中粒砂斑入
46 2.5Y4/4 オリーブ褐色細粒砂
47 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト、炭化物少量混じる
48 5Y4/3 暗オリーブ色細粒砂、2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト斑入
49 5Y4/2 灰オリーブ色細粒砂、2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト斑入
50 2.5Y4/4 オリーブ褐色中粒砂
51 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色中粒砂
52 2.5Y4/3 オリーブ褐色中粒砂

第174図　Ⅰ区西壁土層断面図（縦1:50／横1:100）

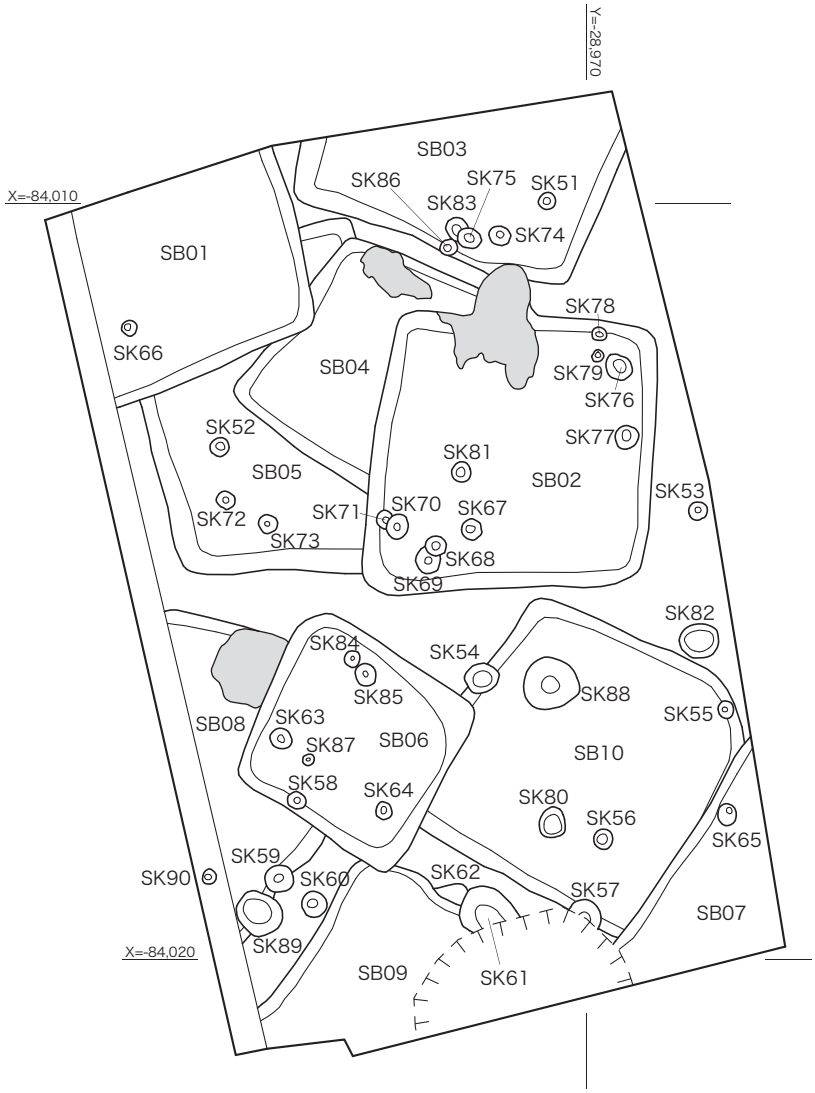


第175図　Ⅰ区古墳時代中期遺構図（1:100）



写真64　Ⅰ区NR01全景

1：検出状況　2：完掘状況

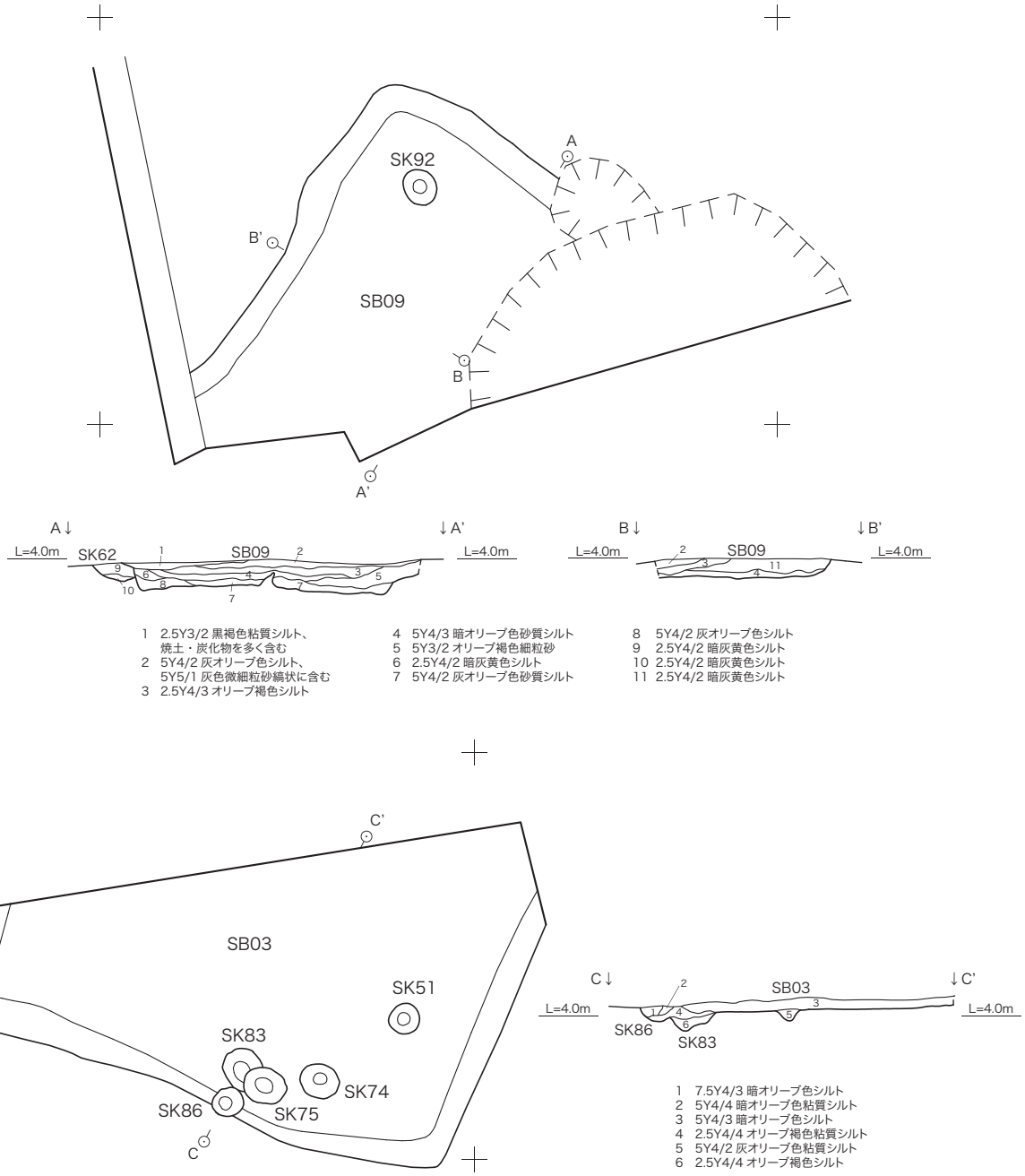


第176図　Ⅰ区古墳時代中期～古代遺構図（1:100）



写真65　Ⅰ区古墳時代中期～古代遺構全景

1：検出状況　2：完掘状況



第177図　Ⅰ区SB09・03遺構図（1:50）



写真66　Ⅰ区1期竪穴住居

1：SB09全景　2：SB03全景

でなかった。竪穴住居などの遺構は、重複関係、出土遺物から、５世紀前半―松河戸Ⅱ式／１期、５世紀後半―宇田式／２期、７世紀前半―東山 50 号窯式／３期、８世紀後半―折戸 10 号窯式／４期の４時期に大別される（第 187 図）。

４期区分

１期とした竪穴住居には SB09、SB03 の２棟がある（第 177 図）。SB09 は調査区南部、SB03 は調査区北部に分布し、竪穴住居が３面において NR01 の両岸、つまり直前に微高地化していた部分に立地したことが指摘できる。竪穴住居はいずれも一部分を検出したのみで、規模については、SB03 の一辺が４ｍであることが判明するのみである。炉や竈、主柱穴についても明確でない。

１期

SB09 から出土した土器として、土師器Ｓ字甕Ｄ類（390・391）と高杯（392）、SB03 から出土した土器として土師器高杯（393）がある。390 はＳ字甕Ｄ類新段階で、これらはいずれも松河戸Ⅱ式後半に対比される。

松河戸Ⅱ式後半

２期とした竪穴住居は SB10、SB07 の２棟で、土坑 SK54、SK56、SK76、SK80、SK89 もおよそ同時期に位置づけられる。SB10 と SB07 は相互に重複し、SB10 が SB07 に対して先行する。

２期

SB10 の平面形は、長軸約 3.8 m、短軸約 3.6 ｍの長方形で、炉や竈、主柱穴は確認されなかった（第 178 図）。土器（394 ～ 398）は住居の南半を中心にややまとまって出土した。394・395 は内外面ハケ調整を基調とする土師器台付甕、396 は口縁部が短小な小型壷、397 は大型高杯である。なお、須恵器は出土しなかった。土器組成、小型壷や大型高杯の形態から、これらの土器群は宇田Ⅰ式に対比して大過ないと思われる。

SB10

宇田Ⅰ式前半

SB07 は調査区南東の一画で検出されたため、規模については不明である。床面付近において土器がまとまって出土し、焼成後の穿孔がある須恵器有蓋高杯（403）が床面に伏せ置かれた状態で残されていた（第 179 図）。また、その周囲には土師器宇田型甕（399）が破片となって散乱していた。他の出土土器として、土師器高杯（400）、須恵器蓋（401・402）、高杯（404）がある。399 は宇田型甕３類、401 ～ 403 はおよそ東山 11 号窯式に相当する。404 は長脚化する傾向がすでに認められることから、東山 11 号窯式に後続する型式に対比される可能性がある。これらの土器群は、およそ宇田Ⅱ式後半―東山 11 号窯式直後として位置づけることが可能かと思われる。

SB07

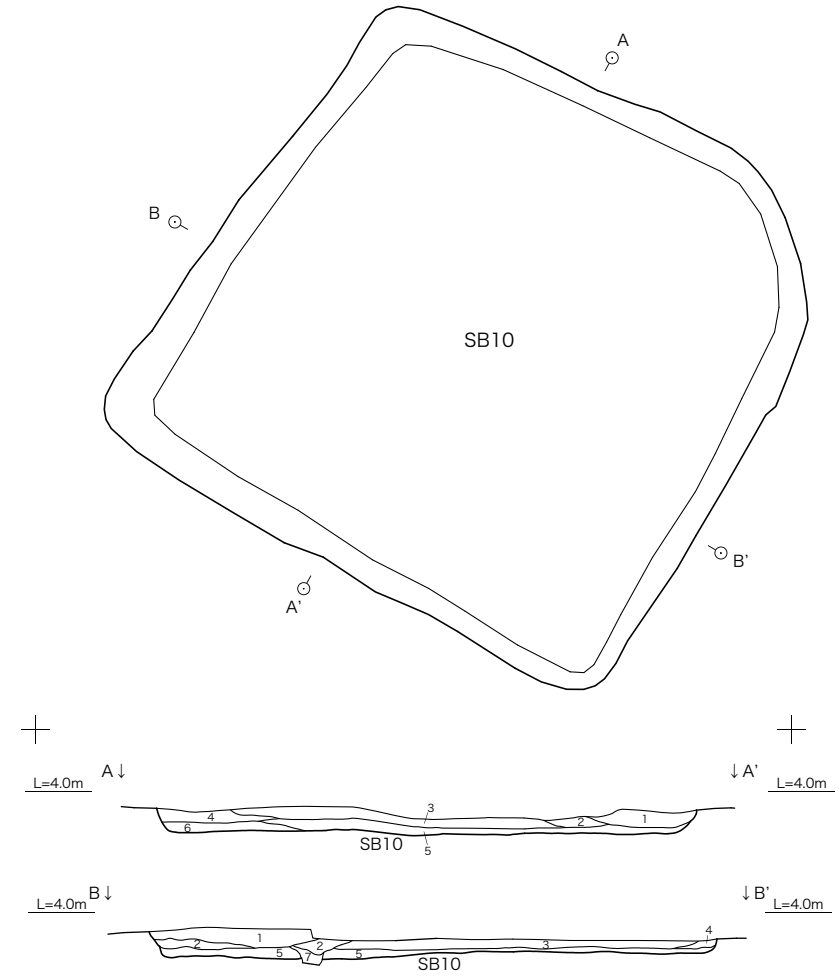
宇田Ⅱ式後半



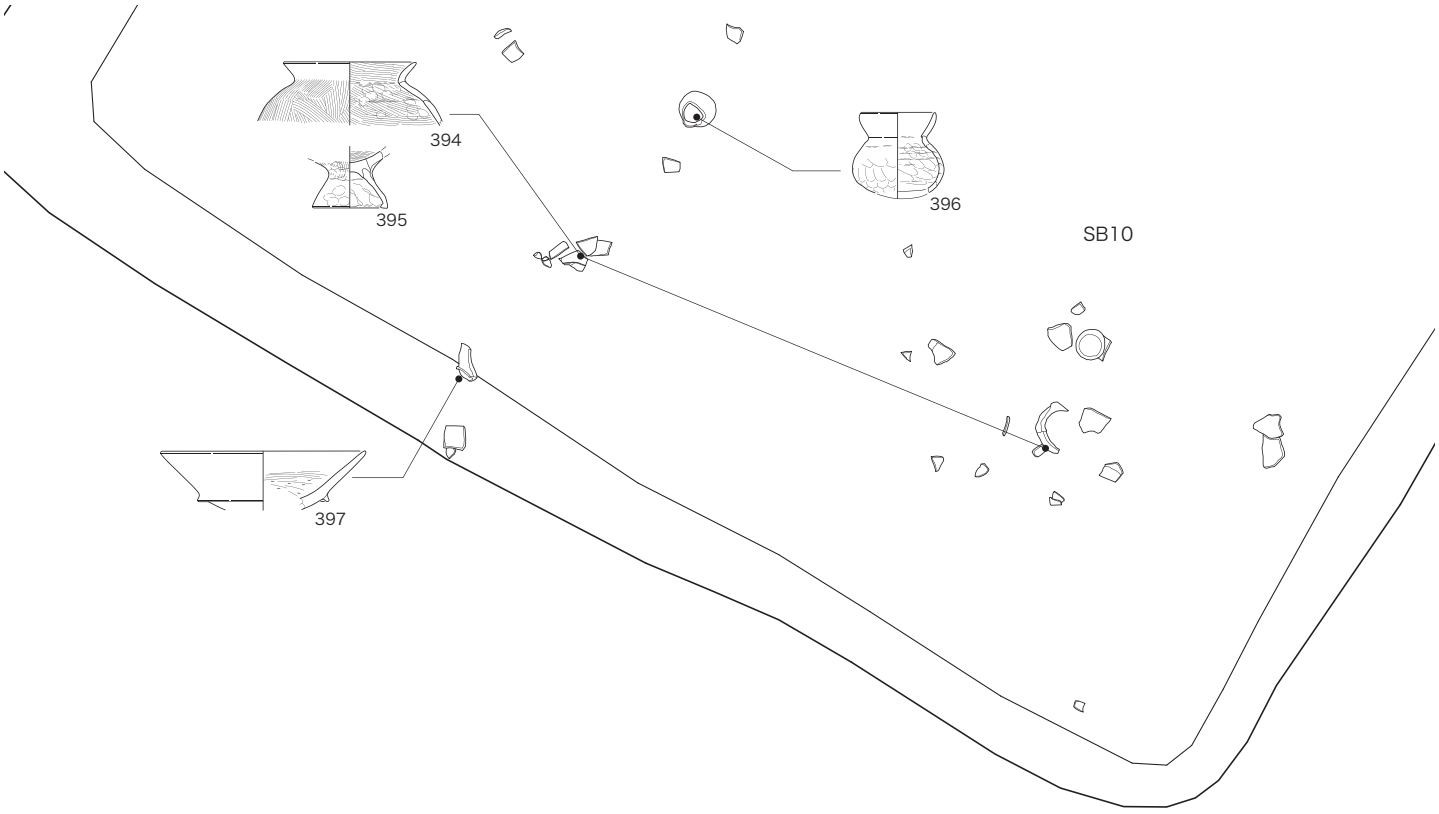


写真67　Ⅰ区２期竪穴住居

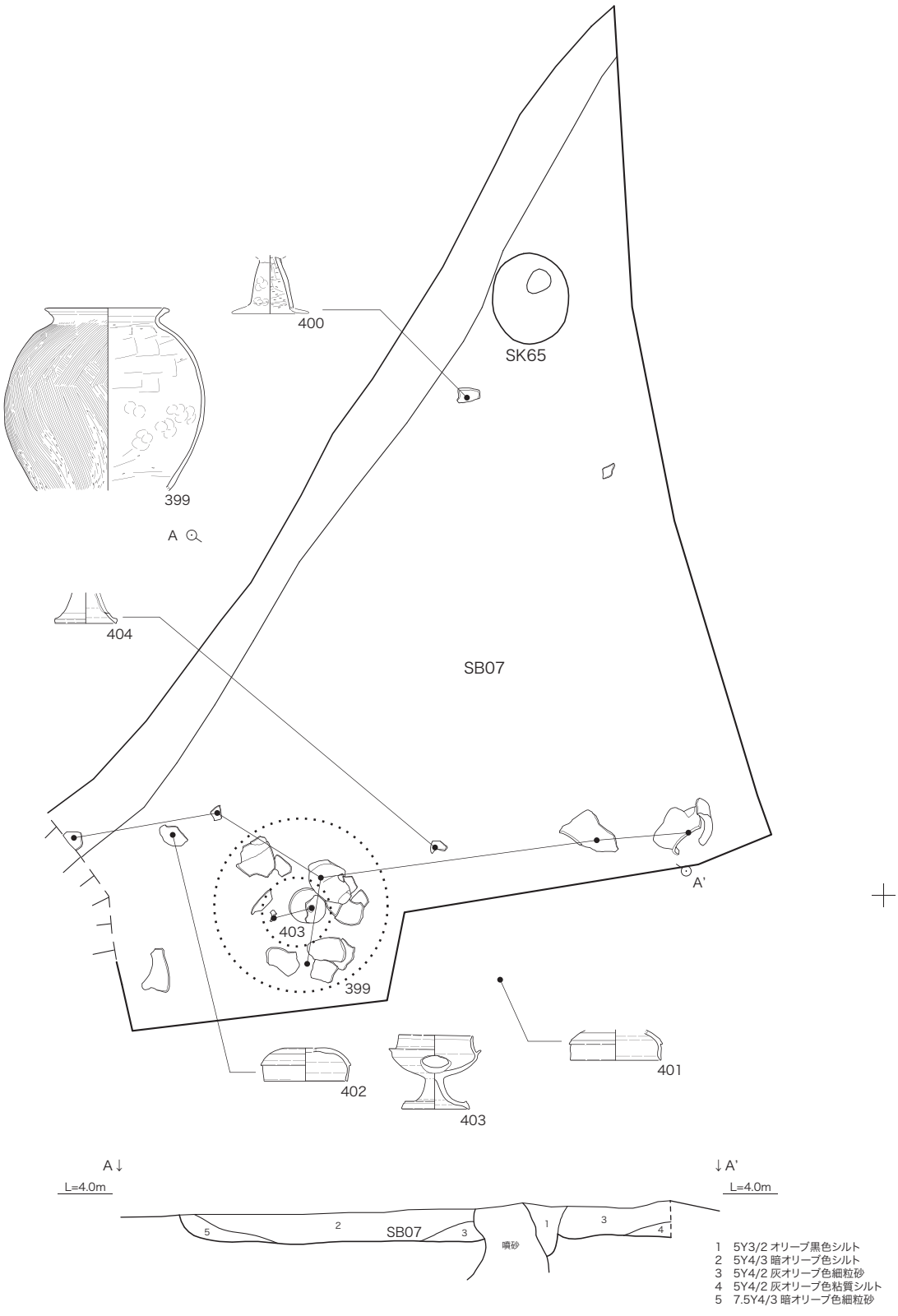
１：SB10全景　２：SB07遺物出土状況



1　5Y4/3 暗オリーブ色シルト、5Y6/2 灰オリーブ色細粒砂斑入、炭化物混入
2　2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト、2.5Y5/2 暗灰黄色細粒砂斑入
3　2.5Y4/2 暗灰黄色シルト、5Y5/2 灰オリーブ色細粒砂斑入、炭化物混入
4　5Y4/2 灰オリーブ色砂質シルト
5　5Y4/3 暗オリーブ色砂質シルト、2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト斑入
6　5Y4/1 灰色細粒砂、2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト斑入
7　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質シルト



第178図　Ⅰ区SB10遺構図／遺物出土状態図（1:50／1:20）



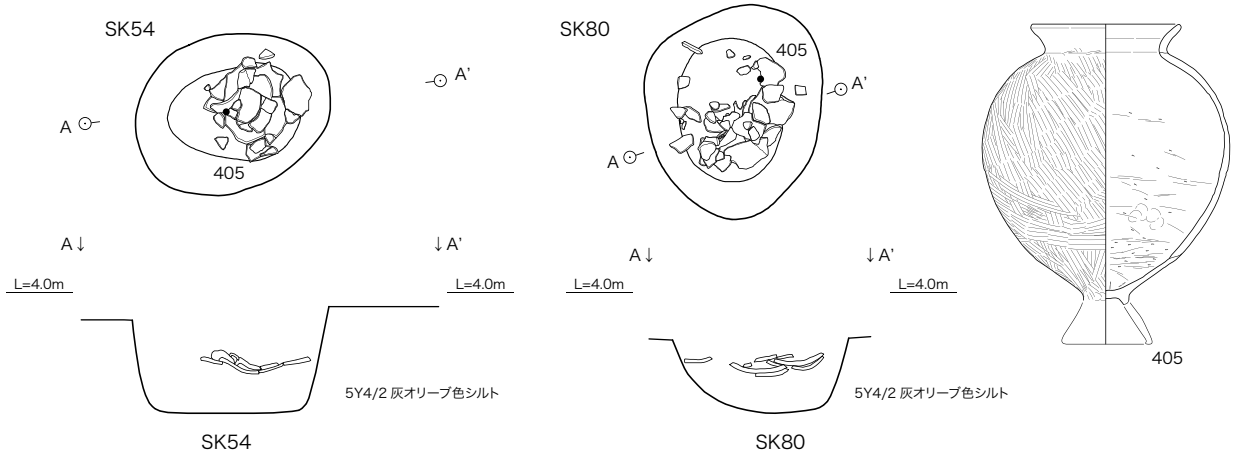
第179図　Ⅰ区SB07遺物出土状態図（1:20）

土師器敷設土坑

SK54、SK80、SK56 は、土坑の中位に破砕した土師器を敷設した土坑で、SK54、SK80 の両土坑に埋設されていた甕（405）が接合し、SK56 は大型高杯（412）を敷設していた（第 180 図）。敷設状況から土師器は柱の根固めとして使用されたとも考えられるが、掘立柱建物を復原することはできなかった。なお、SK54 と SK80 は SB10 に対して後続する。405 は外面の粗いハケ調整、球形に近い体部を特徴とする甕で、およそ宇田Ⅰ式に対比され、SB10 との新旧関係を考慮するなら、宇田Ⅰ式後半に相当する可能性がより高いと判断される。SK56 より出土した大型高杯（412）、SK76 より出土した高杯（413）、SK89 より出土した有段口縁壺（414）についても、同時期と考えておきたい。

宇田Ⅰ式後半

なお、上位の 1 面の遺構として検出した SK49 には古墳時代の土器が一定量包含されていた。土師器 S 字甕（406・407）、高杯（408）は 1 期の SB09 に、須恵器蓋（409）、有蓋高杯（410・411）は 2 期の SB07 に由来する土器と思われる。

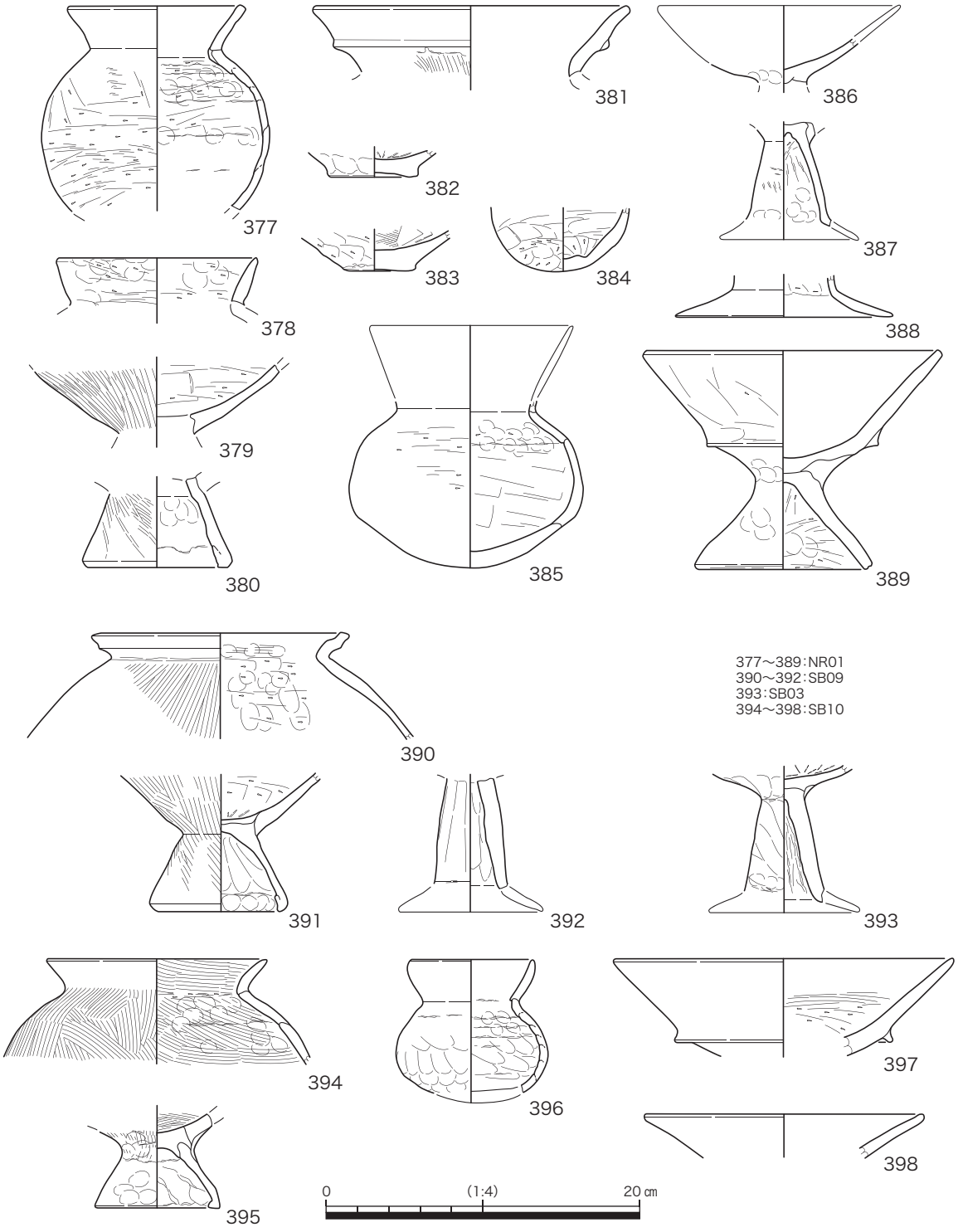


第180図　Ⅰ区SK54・80遺物出土状態図（1:20）

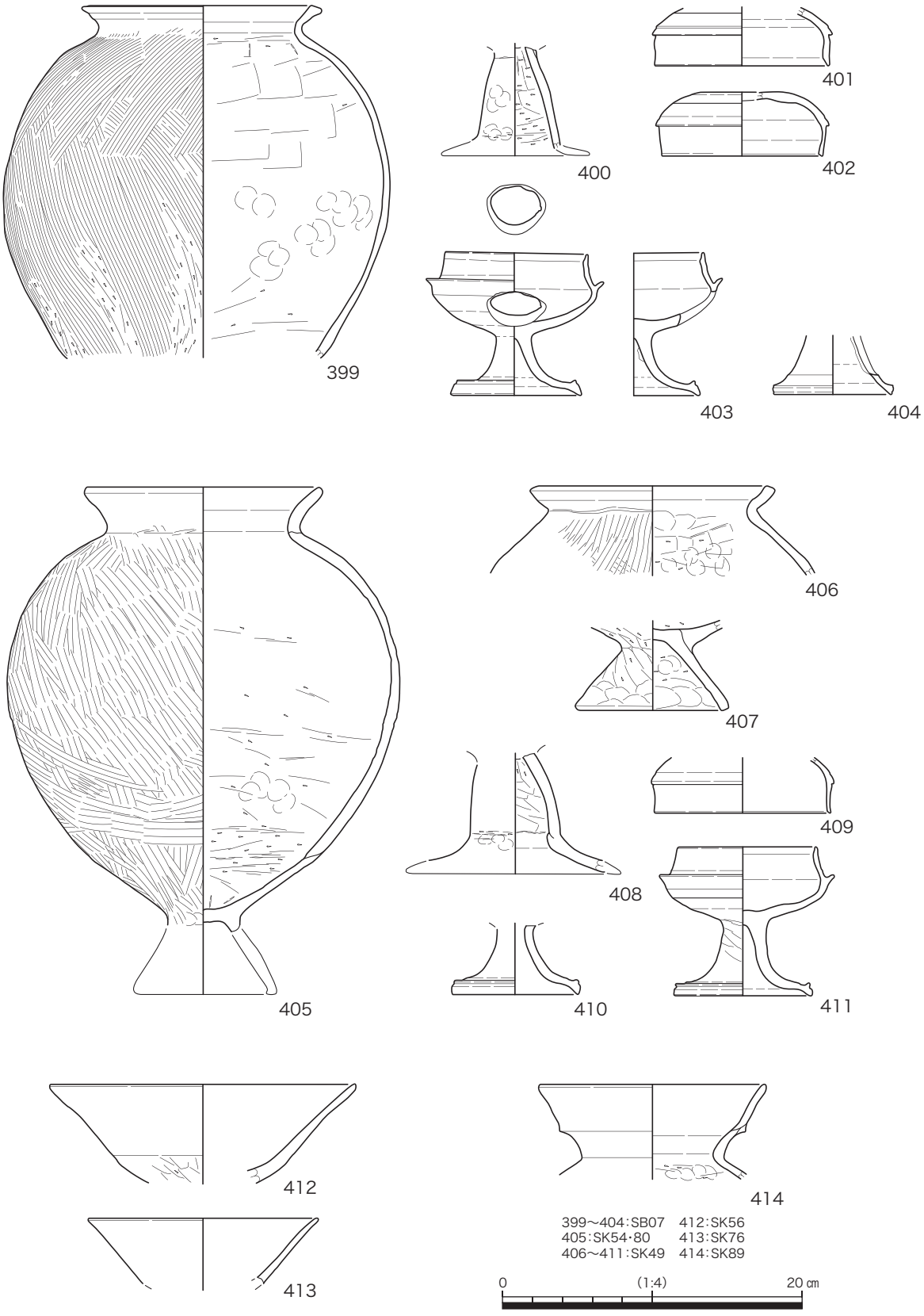


写真68　Ⅰ区土坑遺物出土状況

1：SK54　2：SK80



第181図　Ⅰ区古墳時代出土遺物実測図1（1:4）



第182図　Ⅰ区古墳時代出土遺物実測図２（1:4）



写真69　Ⅰ区古墳時代（１・２期）出土遺物

3期　3期とした竪穴住居はSB08（第183図上）、SB05（第184図）の2棟で、SK90、SK45も出土土器から同時期に位置づけられる。いずれも調査範囲が限られるので、平面形、規模については不明確な部分が多いが、一辺4.5m前後の方形を想定しておきたい。

SB08　SB08は北辺に竈を付設する。SB08からは須恵器蓋（415）、杯（416）、平瓶（417）、直口壺あるいは脚付盌(418)などが出土した。これらは、東50号窯式の前後に対比される。また、竈内からは鉄滓（536）が出土したが、鍛冶炉を竈と誤認している可能性も考えられ、検出した遺構そのものについても検討の余地がある。

SB05　SB05からは、東山50号窯式の須恵器蓋（419）、土師器伊勢型甕（420）などが出土した。なお、421は1面の遺構として検出したSK49から出土した脚付盌と考えられる須恵器で、SB08に伴っていた可能性がある。

4期　4期とした竪穴住居はSB04、SB02、SB01、SB06の4棟で、SB04、SB02において竈の付設を確認した。いずれも竈は、崩落後に焼土が周辺に流出した状態で遺存していた。

SB04　SB04は一辺約3.0mで、竈を北辺でも北東隅近くに付設する（第184図）。住居からは、須恵器無台杯（422～425）が出土した。

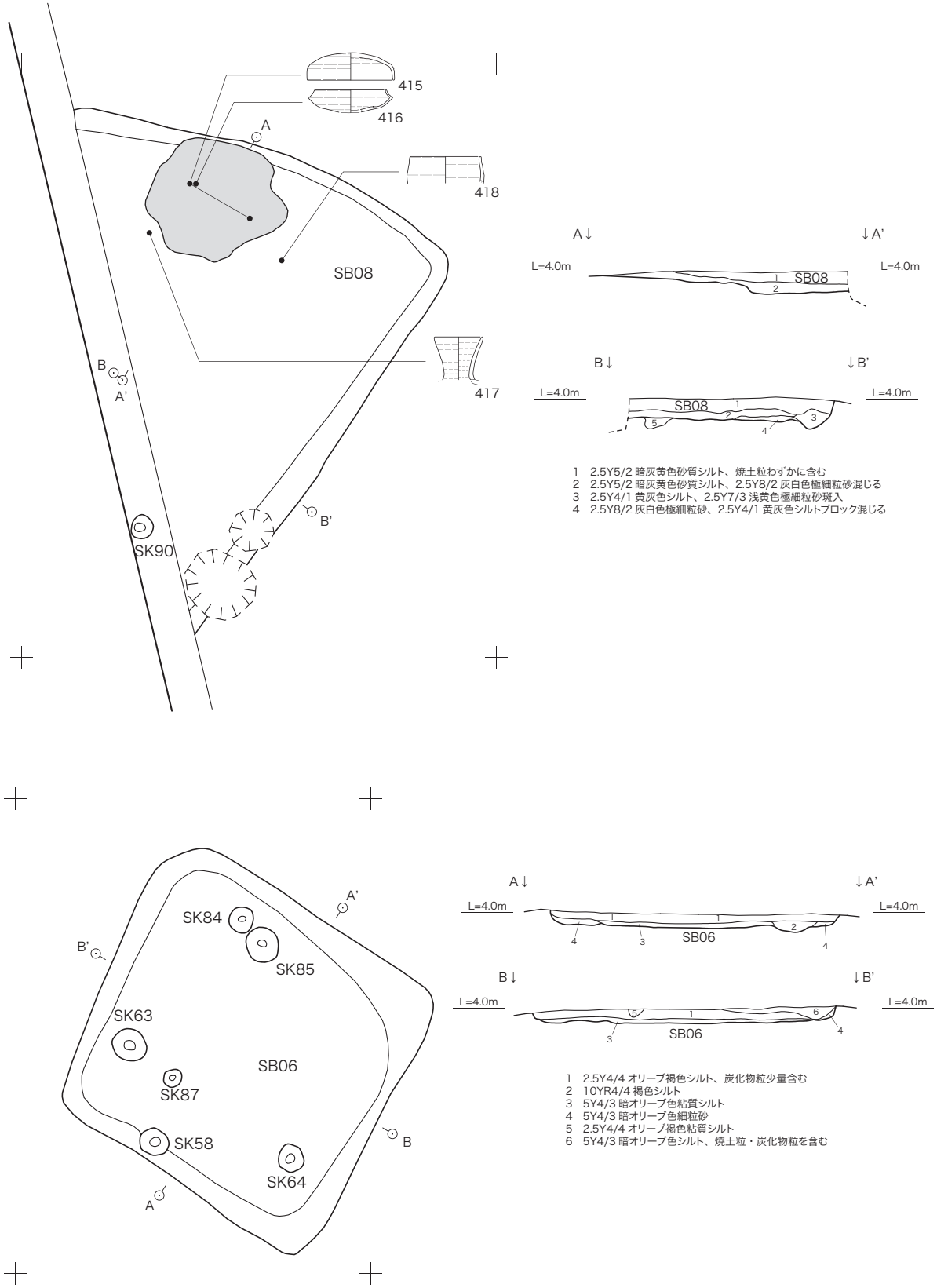
SB02　SB02は一辺約3.8mで、竈を北辺中央に付設する（第184・185図）。住居からは有台杯（427・428）、製塩土器（429）に加えて、鉄滓（537～540）が出土した。

SB01など　その他、SB01（第186図）から出土した須恵器蓋（430）、有台杯（431・432）、盤（433）、土師器濃尾型甕（434）、SB06（第183図下）から出土した須恵器無台杯（426）、SK90から出土した須恵器無台杯（435）、SK49から出土した平瓶（437）は、総じて須恵器は折戸10号窯式に対比され、土師器なども同時期の所産と考えられる。なお、SB01からは砂質凝灰岩製の仕上げ砥（546）が出土している。

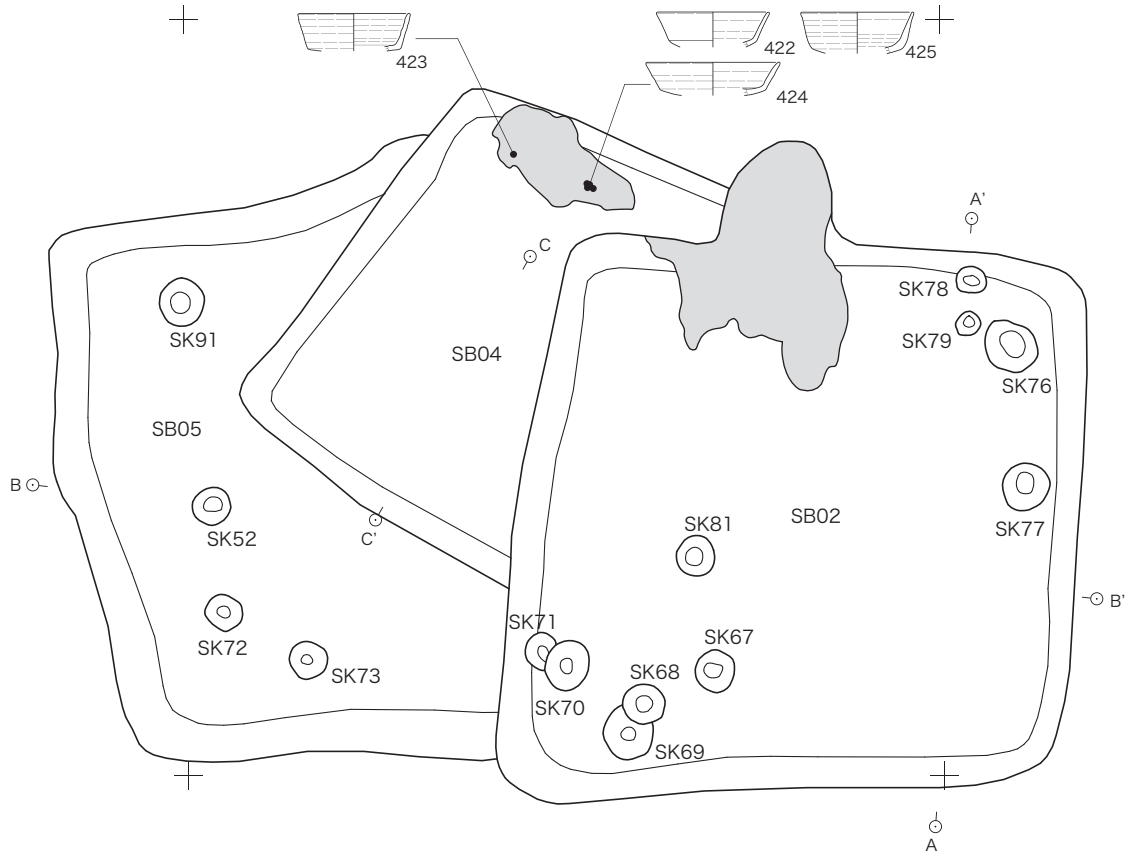
Ⅱ層出土遺物　また、Ⅱ層からは、奈良時代を中心として、古墳時代中期～古代の遺物がまとまって出土した(439～492)。須恵器(439～477)については、439の有蓋高杯が東山11号窯式、440の蓋と441の短頸壺が岩崎17号窯式、442の蓋が高蔵寺2号窯式にそれぞれ対比される以外は、鳴海32号～折戸10号窯式に対比される。土師器（478～492）としては、甑（478・479）、甕（480～492）がある。479は甑の底部に付加した桟の部分と推定した。

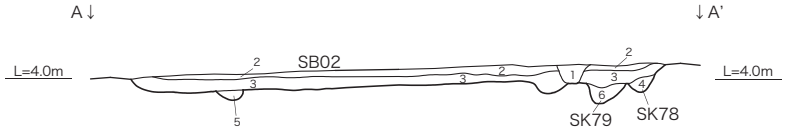


写真70　Ⅰ区3期竪穴住居
1：SB08全景　2：SB08竈土層断面

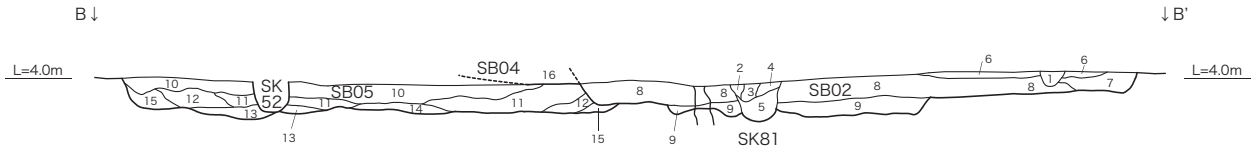


第183図　Ⅰ区SB08・06遺構図（1:50）

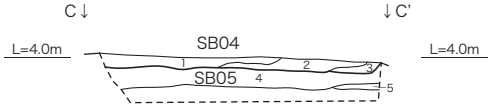




1 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質シルト、7.5Y6/1 灰色細粒砂斑入
2 5Y4/4 暗オリーブ色シルト、7.5Y6/1 灰色細粒砂、斑入
3 5Y4/3 暗オリーブ色シルト
4 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト
5 5Y4/3 暗オリーブ色砂質シルト
6 5Y4/3 暗オリーブ色シルト、2.5Y4/1 黄灰色粘土斑入

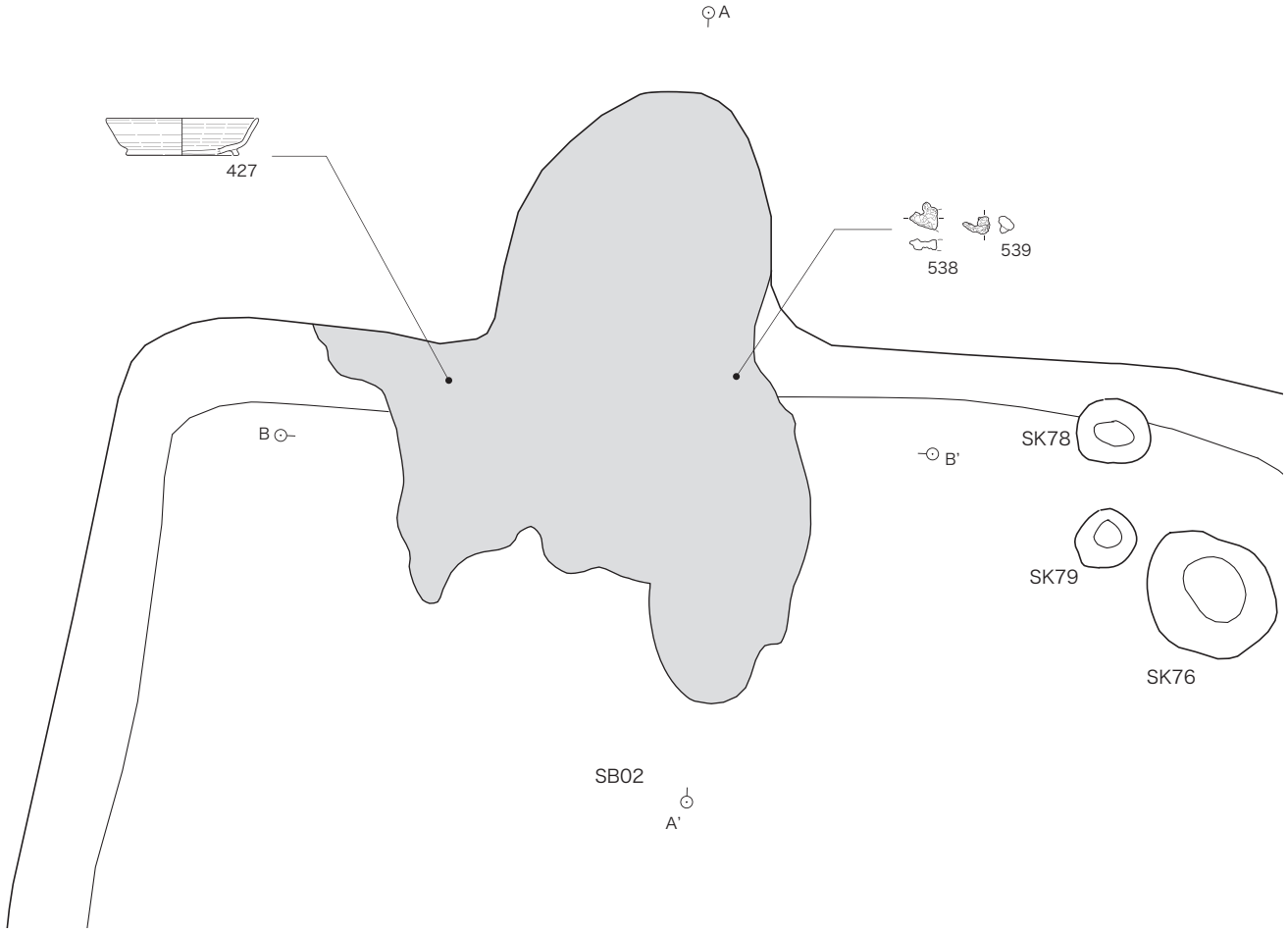


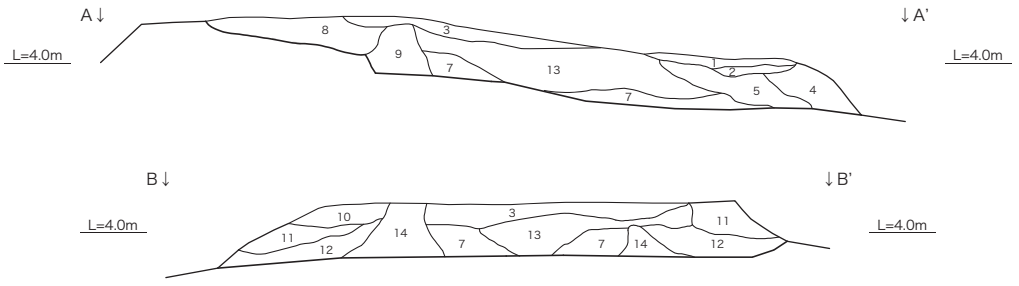
1 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質シルト
2 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト
3 10YR4/2 灰黄褐色シルト
4 2.5Y4/3 オリーブ黒色シルト
5 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト
6 5Y3/2 オリーブ黒色シルト、7.5Y6/1 灰色細粒砂を互層状に含む、焼土を少量含む
7 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト、炭化物粒を少量含む
8 5Y4/1 灰色シルト、2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質シルト斑入、焼土・炭化物粒を少量含む
9 5Y4/2 灰オリーブ色細粒砂、5Y3/2 オリーブ黒色粘質シルト斑入
10 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質シルト、5Y6/1 灰色砂斑入
11 5Y4/2 灰オリーブ色シルト
12 2.5Y3/2 黒褐色粘質シルト
13 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト、炭化物少量含む
14 5Y4/2 灰オリーブ色シルト
15 2.5Y3/2 黒褐色粘質シルト
16 5Y4/3 暗オリーブ色砂質シルト、焼土粒を少量含む



1 5Y4/2 灰オリーブ色シルト
2 5Y4/3 暗オリーブ色砂質シルト、焼土粒を少量含む
3 5Y6/1 灰色砂質シルト、5Y8/1 灰白色極細粒砂斑入
4
5

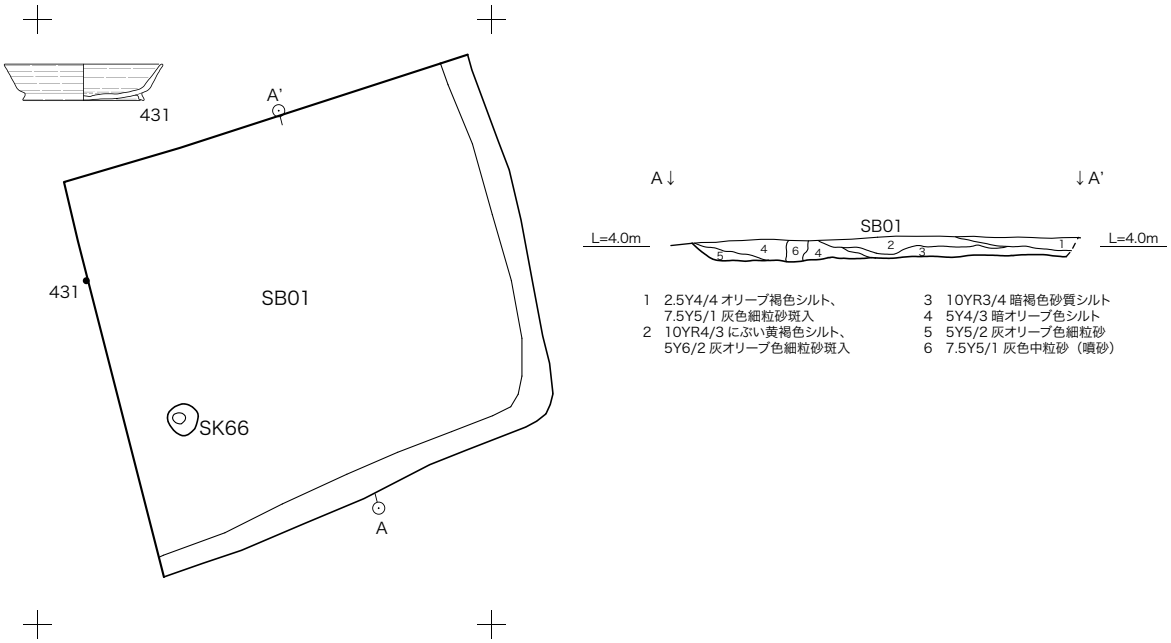
第184図　Ⅰ区SB05・04・02遺構図（1:50）





1　5Y4/2 灰オリーブ色シルト、灰・炭化物多く混じる
2　5Y8/2 灰白色粘土、2.5Y4/2 暗灰黄色シルト互層状に混じる
3　5Y5/2 灰オリーブ色シルト、3〜5cm の焼土ブロックを大量に含む
4　5Y5/2 灰オリーブ色砂質シルト
5　5Y5/1 灰色粘質シルト、5Y8/1 灰白色極細粒砂斑入、炭化物・焼土粒わずかに含む
6　5Y5/1 灰色シルト、焼土ブロックを大量に含む
7　5Y4/2 灰オリーブ色極細粒砂
8　5Y4/1 灰色シルト、5Y7/1 灰白色極細粒砂斑入
9　5Y6/1 灰色砂質シルト、1〜3cm の焼土ブロック大量に含む
10　5Y5/2 灰オリーブ色シルト、1〜2cm の焼土ブロック混じる、炭化物少量混じる
11　5Y5/2 灰オリーブ色シルト
12　5Y6/2 灰オリーブ色シルト、5Y8/1 灰白色細粒砂斑入
13　5Y4/2 灰オリーブ色シルト、1〜3cm の焼土ブロック大量に含む
14　5Y4/2 灰オリーブ色砂質シルト、1〜3cm の焼土ブロック・炭化物濃密

第185図　Ⅰ区SB02竈遺構図（1:20）



第186図　Ⅰ区SB01遺構図（1:50）

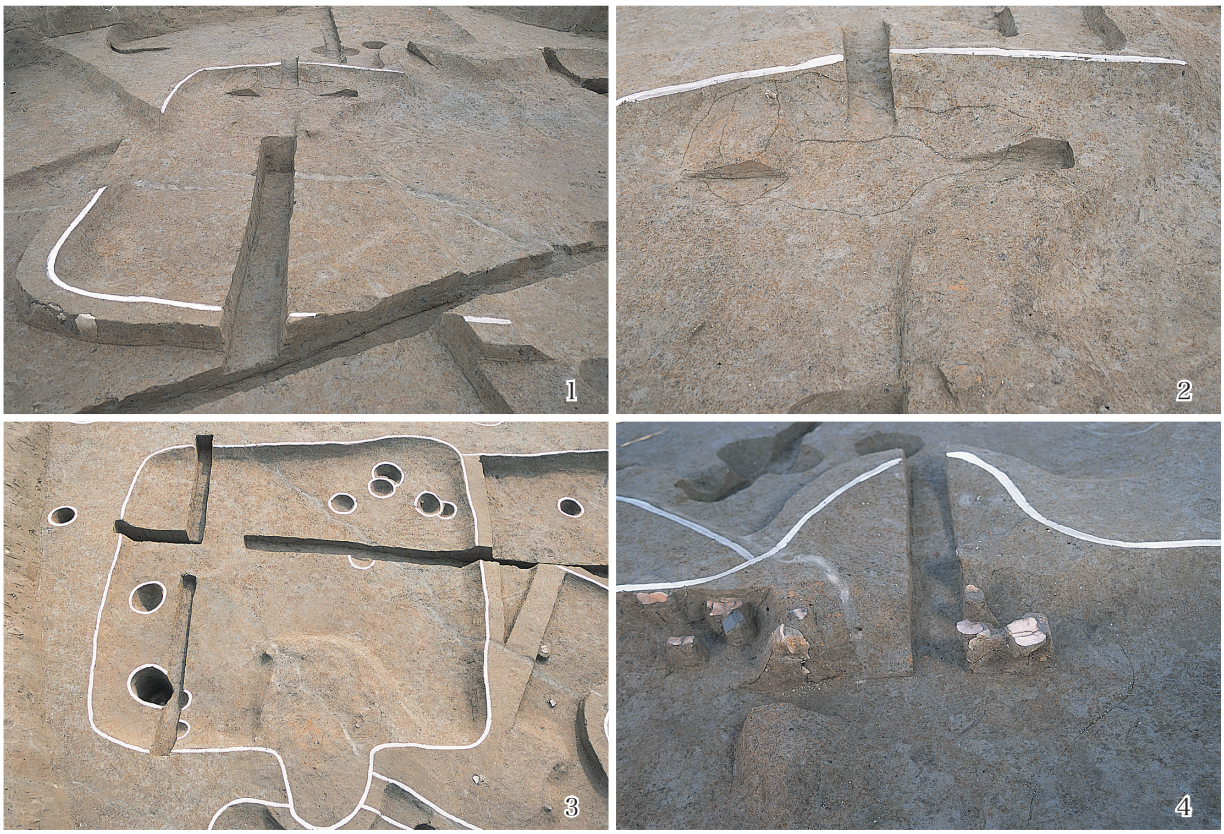
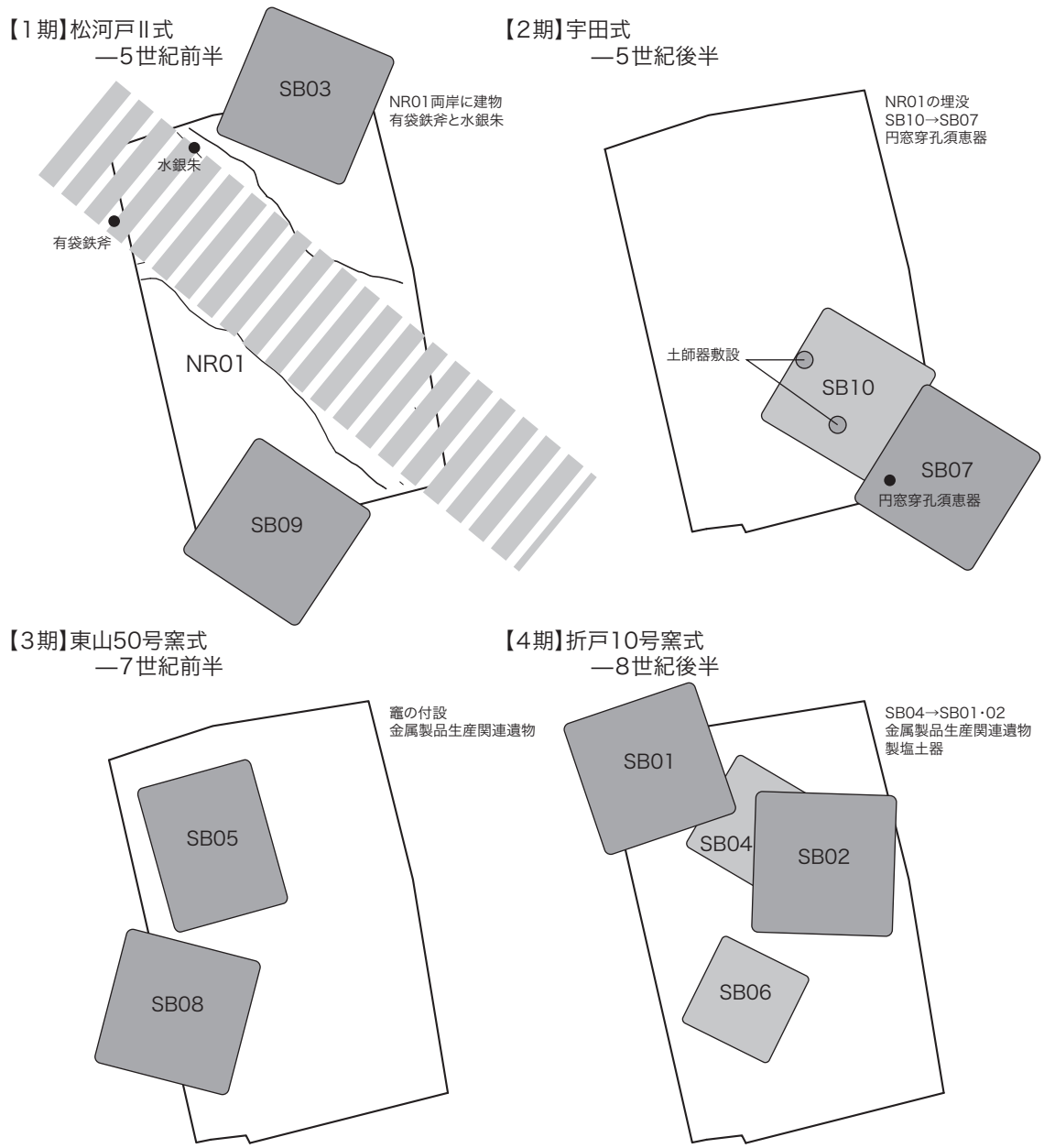


写真71　Ⅰ区４期竪穴住居１

１：SB04全景　２：SB04竈　３：SB02全景　４：SB02竈



第187図　Ⅰ区古墳時代中期～古代遺構変遷図（1:200）

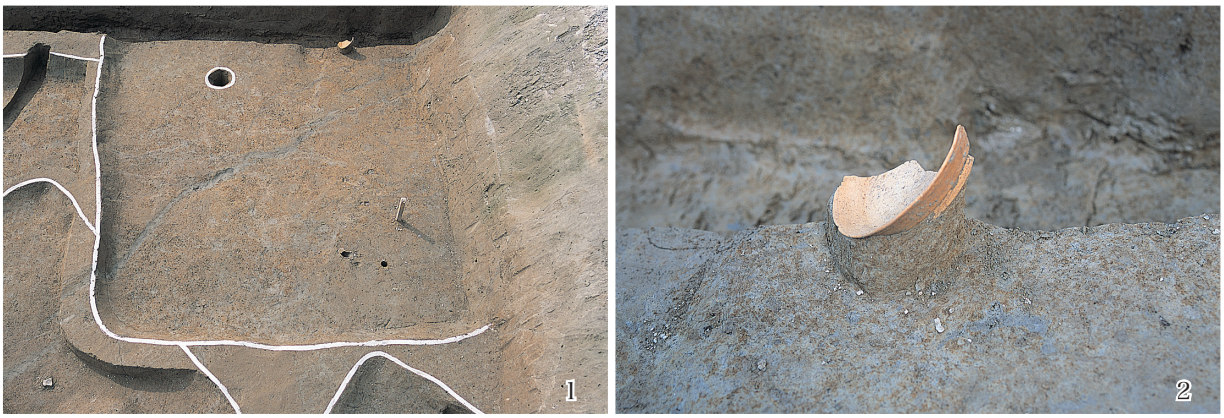
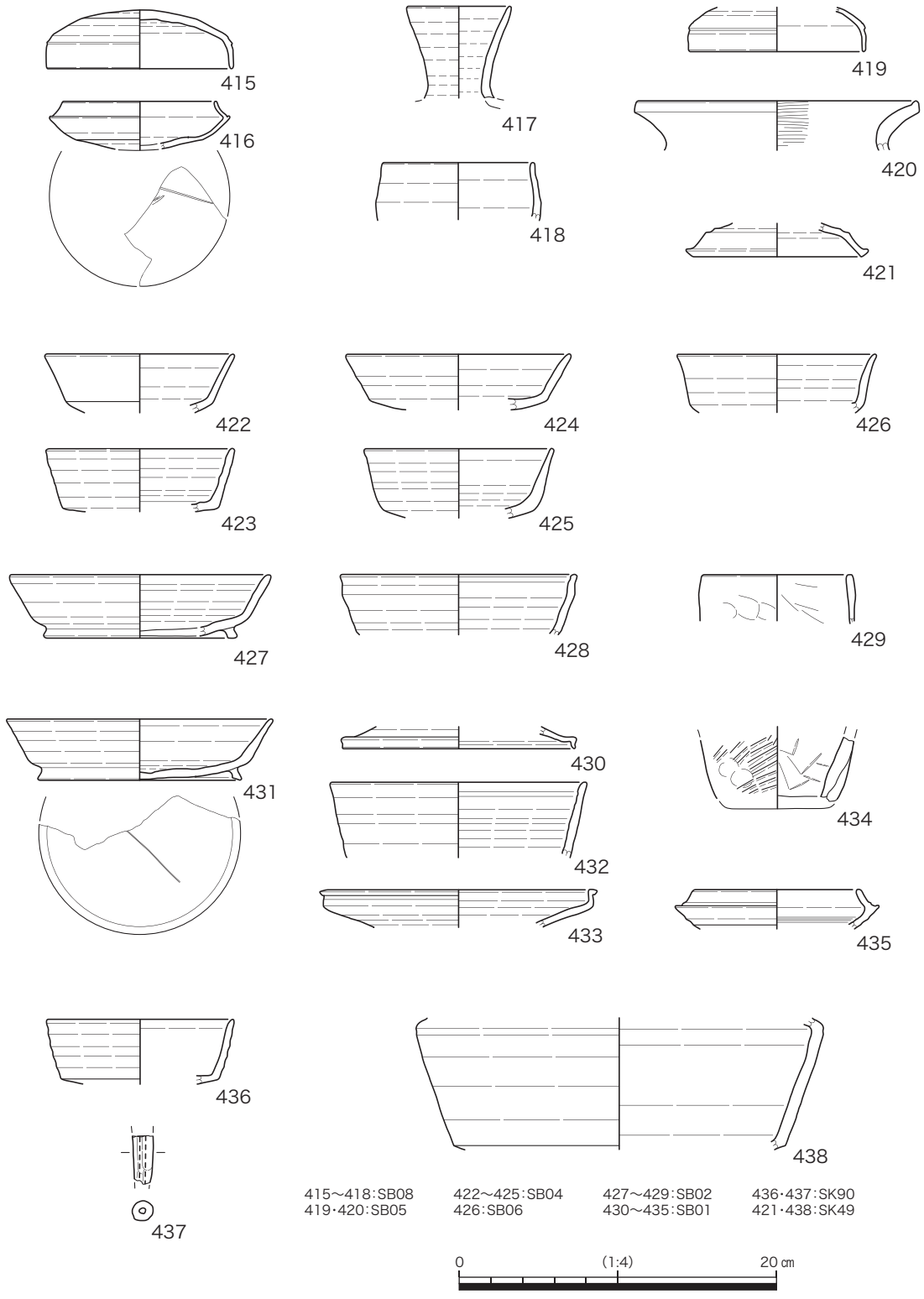
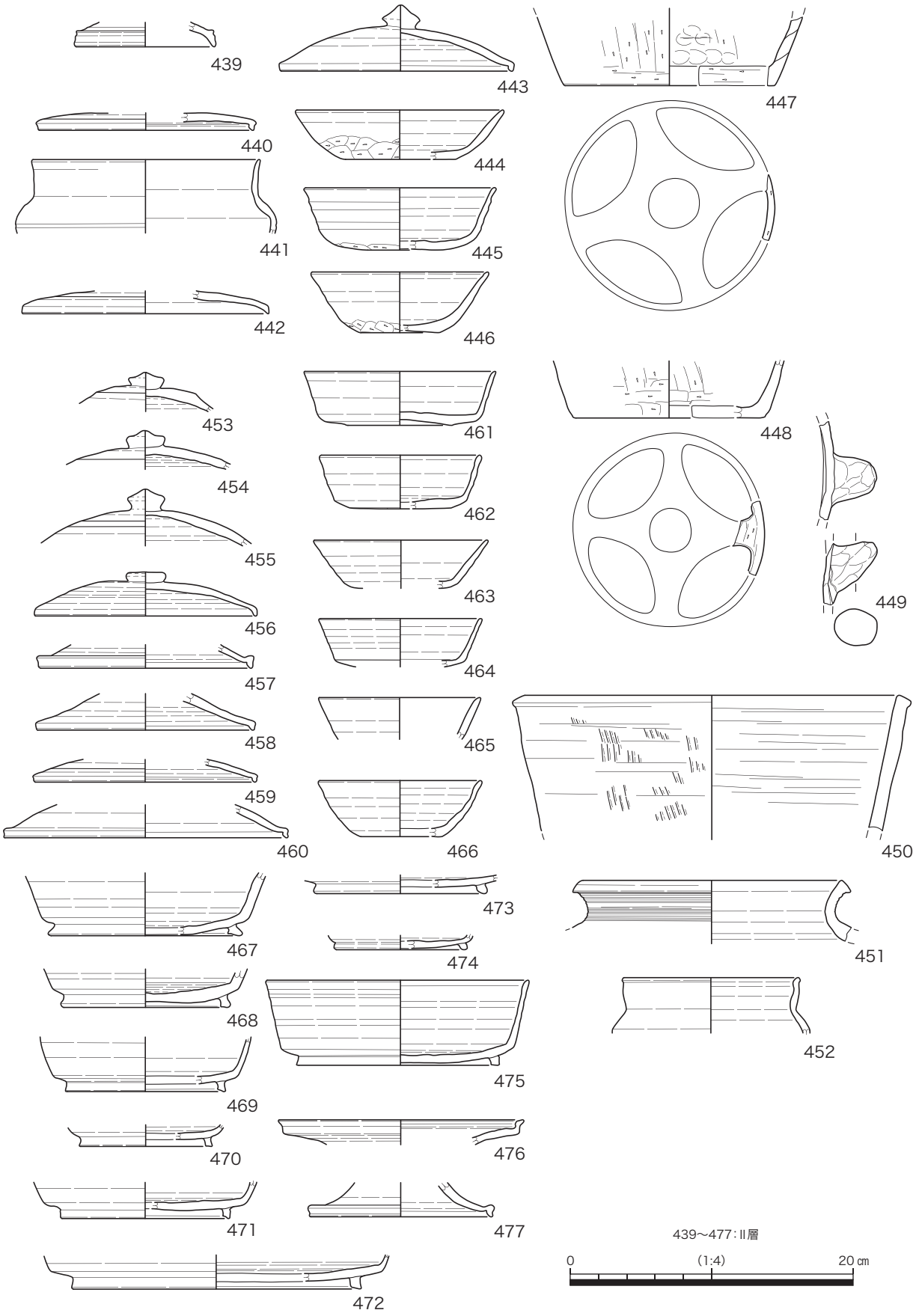


写真72　Ⅰ区４期竪穴住居２

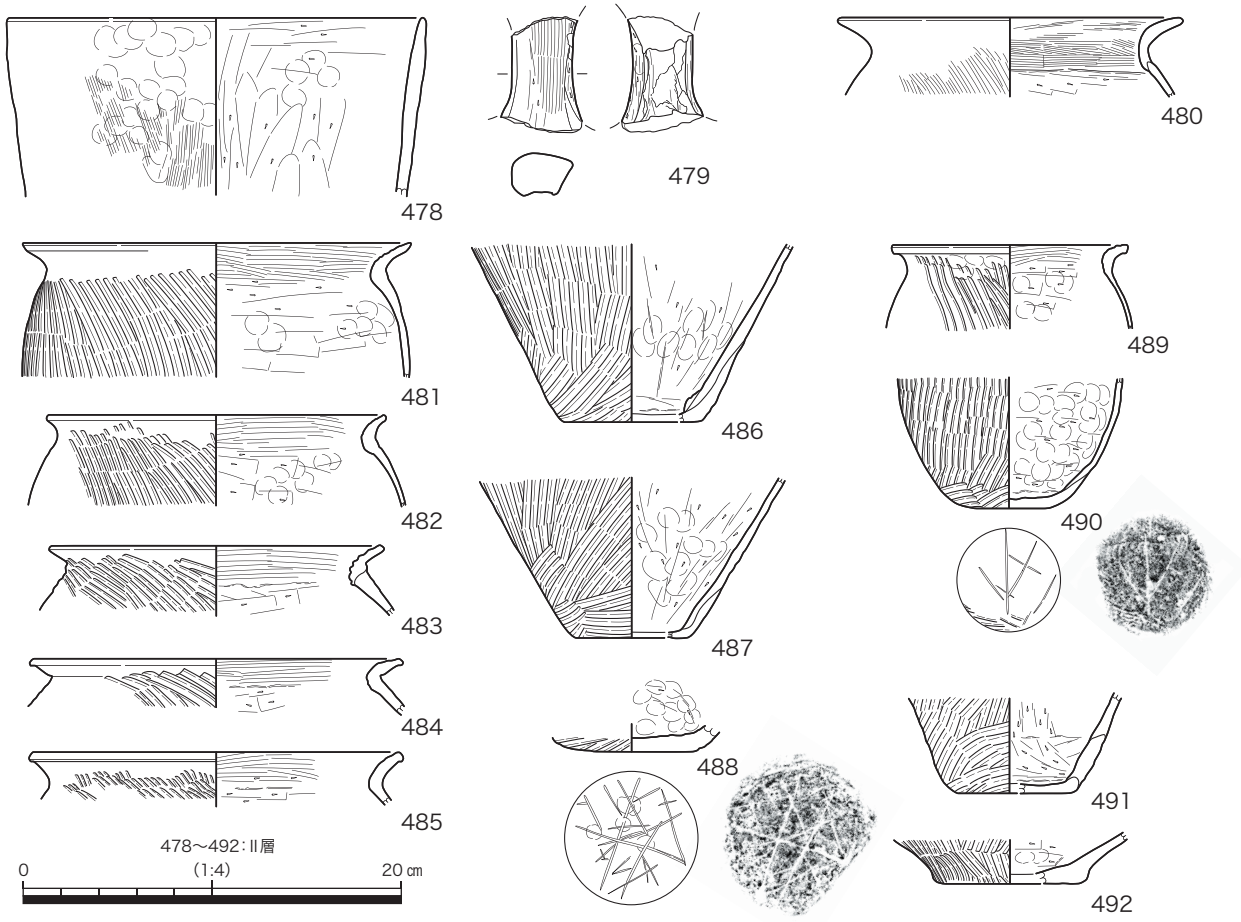
１：SB01全景　２：SB01遺物近景



第188図　Ⅰ区古代出土遺物実測図1（1:4）



第189図　Ⅰ区古代出土遺物実測図２（1:4）



第190図　Ⅰ区古代出土遺物実測図３（1:4）

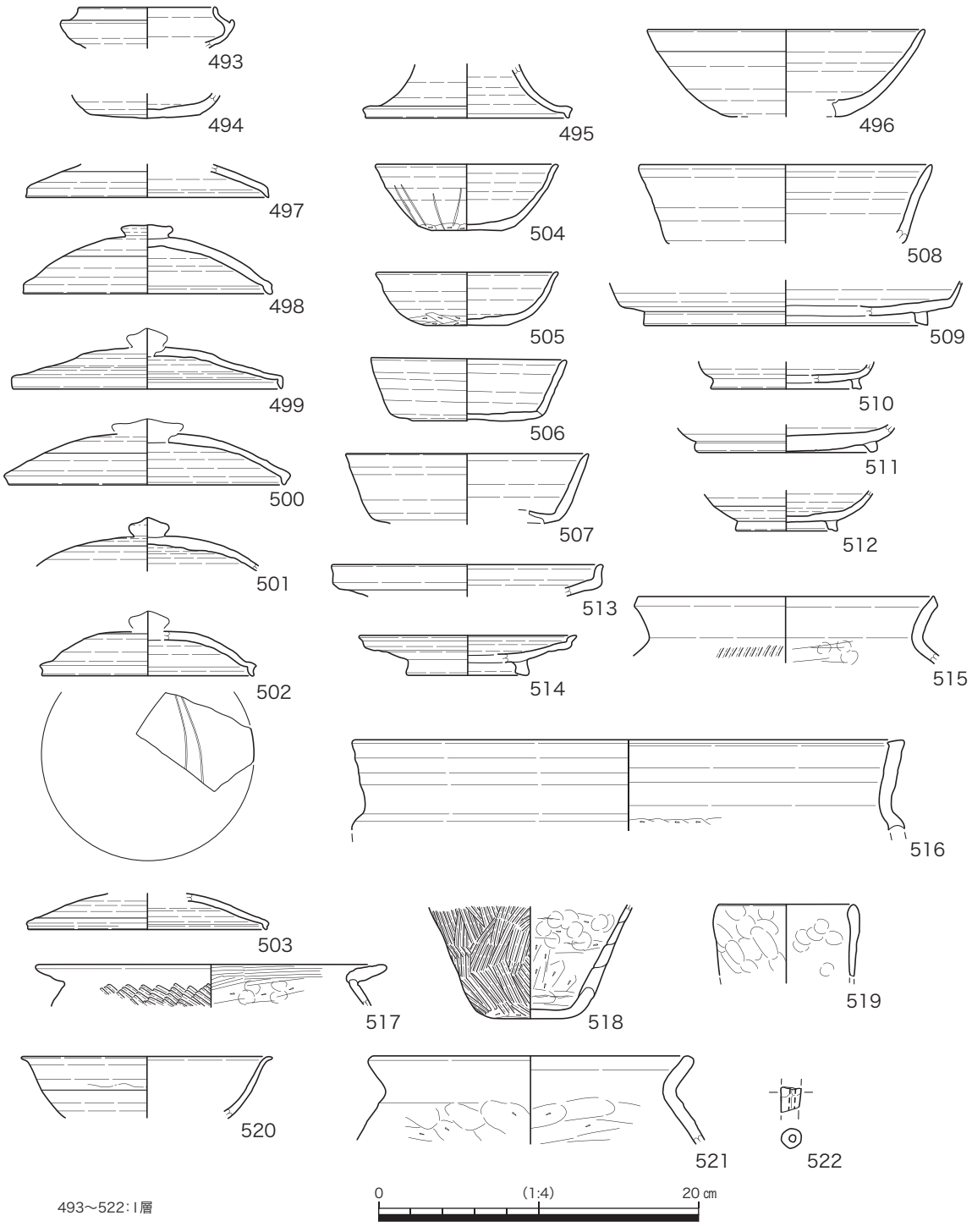
480 ～ 492 は濃尾型甕である。480 は緩やかに外反する口縁部、口縁部内面と体部外面の細かいハケ調整を特徴とし、平底と思われる。近隣の遺跡では清須市清洲城下町遺跡 SB63 などに類例が求められ、８世紀前半に相当する。その他の濃尾型甕（481 ～ 492）は８世紀後半に相当する。488・490 の底部外面には木葉痕に似せた線刻がある。492 は壷状の器形を呈する。

その他古代の遺物

493 ～ 522 はⅠ層中あるいは中世の遺構に包含されていた古代の遺物である。493 は岩崎 17 号窯式の杯、494 は同窯式の無台杯、496 は高蔵寺２号窯式の碗で、それ以外の須恵器は鳴海 32 号～折戸 10 号窯式に対比される。504 は体部外面下半に、ごく細い４条の線を刻む。516 は大型の鉢で、体部に環状の把手が付されていたと考えられる。517・518 は濃尾型甕、519 は製塩土器である。520 は黒笹 90 号窯式の灰釉陶器碗、521 は土師器甕でおよそ９世紀後半に相当する。

金属製品生産関連

その他、541・542 はⅡ層中から出土した鉄滓で、８世紀後半までに時期が限定される。同層中に包含される遺物は、明らかに８世紀後半の遺物が多いので、鉄滓の帰属時期も同時期に求められる可能性が高い。



第191図　I区古代出土遺物実測図４（1:4）

中世

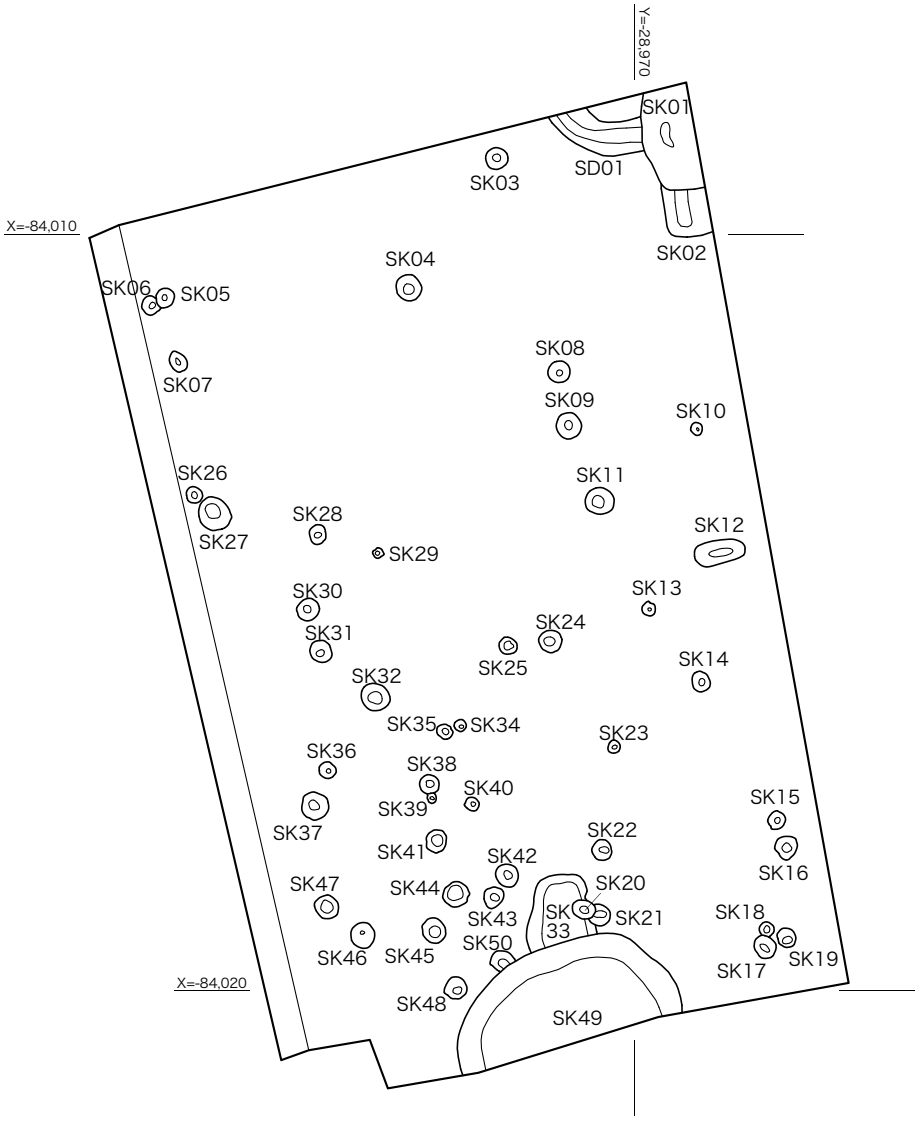
小土坑群

Ⅱ層上位となるⅠ面において、中世の小土坑を多数検出したが、掘立柱建物を復原するまでには及ばなかった（第 192 図）。523 ～ 527 は各土坑から、528 ～ 531 はⅠ層中から出土した中世陶器で、523 ～ 526・528・529 は尾張型第 5 型式の山茶碗、530 は尾張型第 6 型式の山茶碗、527・531 はそれぞれ瓶類、尾張型第 5 型式の山茶碗を転用した加工円盤である。これらの遺物から、土坑

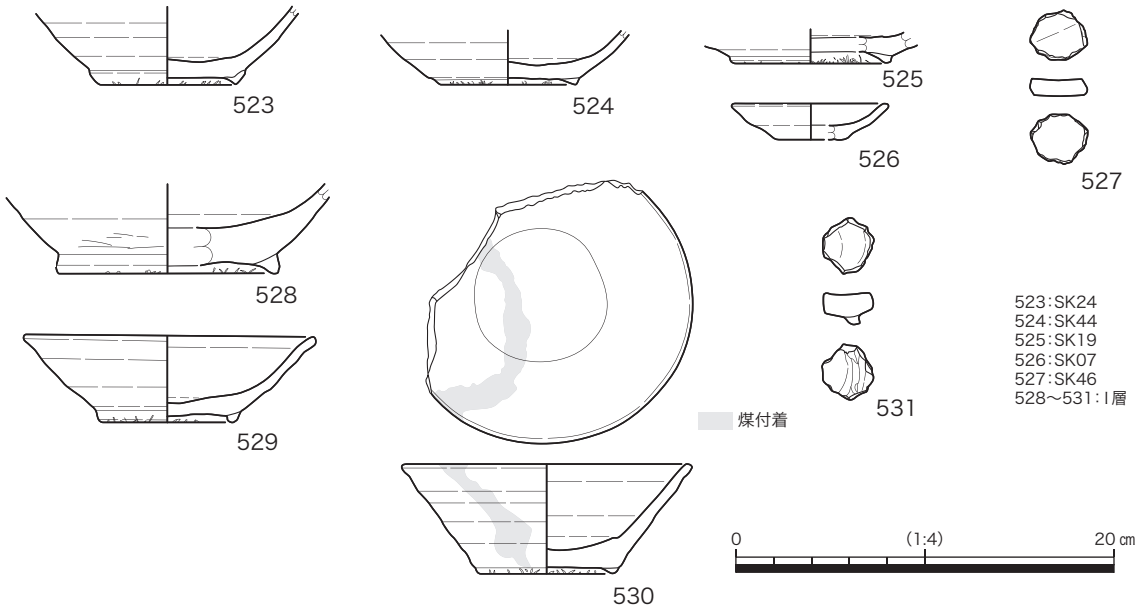
出土遺物



写真73　Ⅰ区中世遺構全景



第192図　Ⅰ区中世遺構図（1:100）



第193図　Ⅰ区中世出土遺物実測図（1:4）

群の帰属時期は 12 世紀後半～ 13 世紀前半に求められる。その他、Ⅰ層中からは砂質凝灰岩製の仕上げ砥石（547）が出土した。

金属製品生産関連

Ⅰ区は鉄製品、金属製品生産関連遺物のややまとまった出土が特徴的であるので（第 194 図）、ここでまとめて報告することとしたい。

有袋鉄斧

有袋鉄斧（532）は錆の固着が著しく、図化には難がある。袋部が完全に密着しているためか、閉じ合わせを確認することができない。出土状態から、松河戸Ⅱ式、5 世紀前半に帰属することが判明する。533 は鉄製刀子の茎部で、中世以降に帰属する可能性が高い。

刀子

534 は鞴羽口の先端部分で、先端から黒色、灰白色に熱変化する。被熱前の色調は橙色で胎土は均質である。535 は砂粒をほとんど含まない精良な粘土によって成形された粘土塊で、分割破砕された 2 片、45.3 g が出土した。一片には平滑な面が確認され、多角柱に近い形状が推定されることから、鋳型片とした。類似した形状の粘土塊は、一宮市伝法寺本郷遺跡 D 区、同八王子遺跡においても確認されている。出土状態からは古代～中世のいずれかの時期に帰属すると判断されるが、伝法寺本郷遺跡などの諸例から、古代、8 世紀後半の可能性がより高いと思われる。

鞴羽口

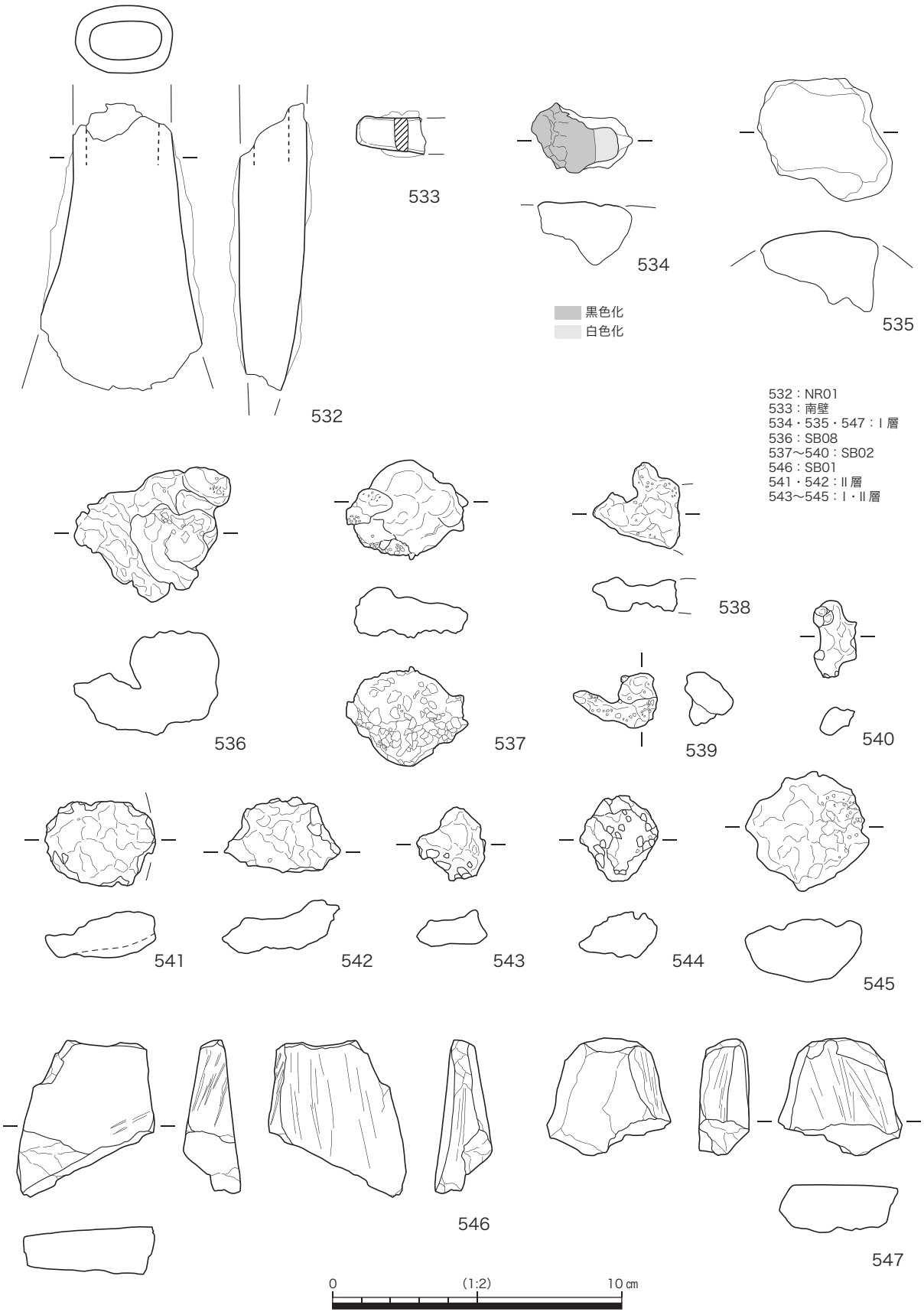
鋳型？

536 ～ 545 は鉄滓で、いずれも小さく生成する産状から、鉄素材または鉄製品を加熱鍛打する作業時に排出したものと思われる。536 は鞴羽口が溶解した黒色ガラス質が上面全体に溶着する。黒色ガラス質の表面は滑らかで光沢がある。SB08 出土で 7 世紀前半に帰属する。537・538 も黒色ガラス質が上面に溶着した鉄滓で、下面には砂粒が固着する。539・540 は、鞴羽口が溶解した黒色ガラス質で、同じく表面は滑らかである。537 ～ 540 は SB02 出土で 8 世紀後葉に帰属する。541、545 は分割、破砕された小型の椀形滓で、下面には炉床土が固着する。544 は上面が多孔質となって生成する。541 ～ 545 は主としてⅡ層から出土した資料で、帰属時期は 7 ～ 8 世紀と推測される。

鉄滓

546・547 は砂質凝灰岩製の仕上げ砥である。546 は SB01 出土で、8 世紀後葉、547 はⅠ層出土で中世以前に帰属する。

砥石



第194図　Ⅰ区鉄製品・金属製品生産関連遺物実測図（1:2）



写真74　Ⅰ区古代・中世出土遺物

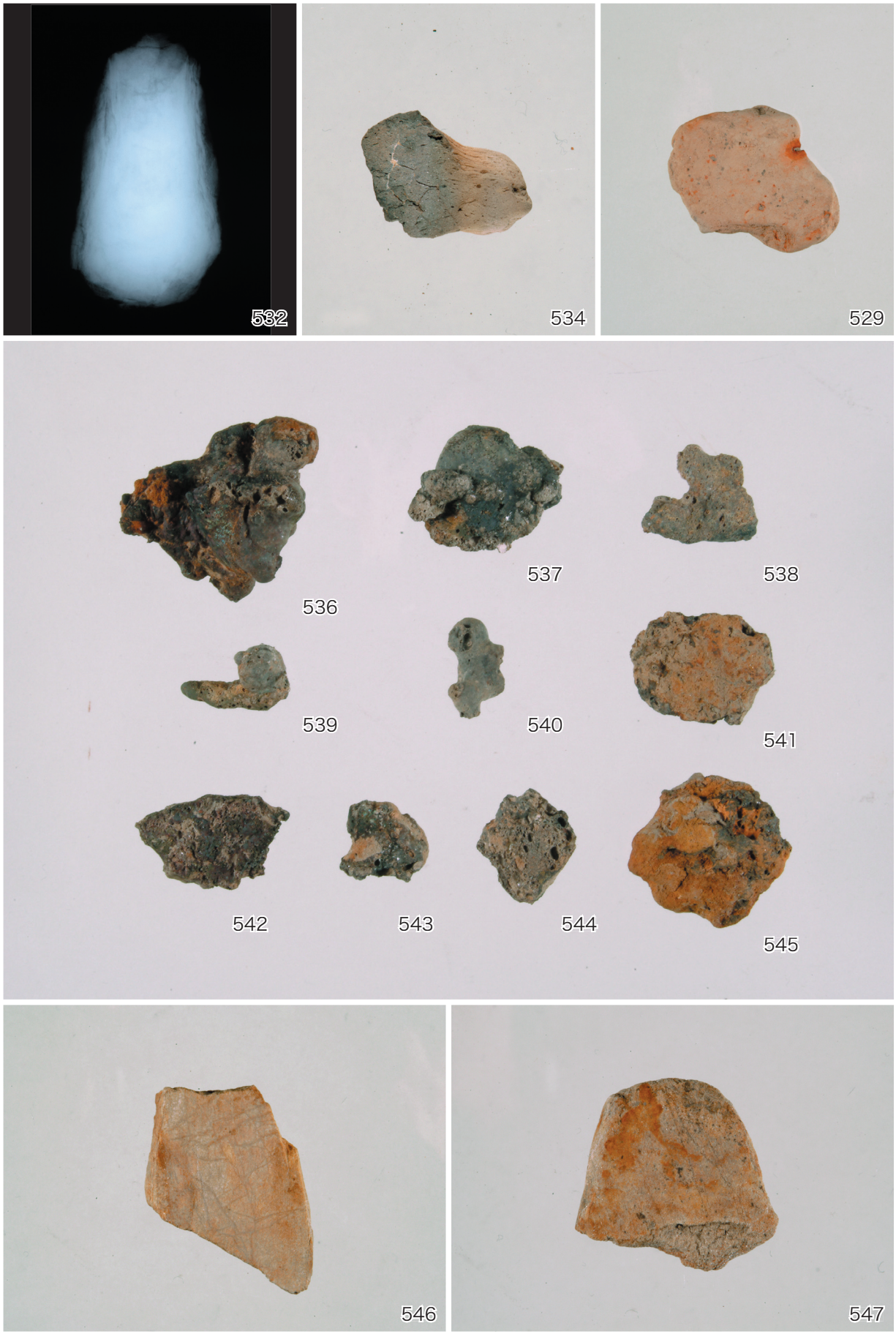


写真75　鉄製品・金属製品生産関連遺物・石製品

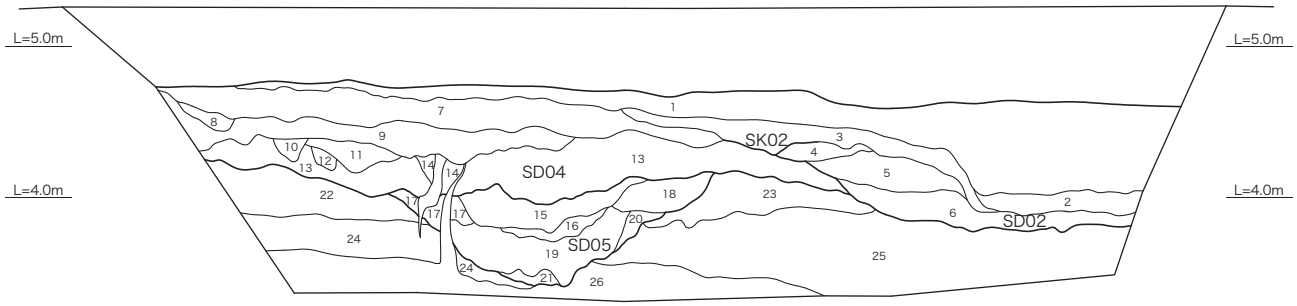
（11） J 区

層序と検出遺構

J 区では灰色シルト層上位において、同一地点で連続して掘削された溝 SD01 ～ SD05 などを検出した（第 195 ～ 197 図）。灰色シルト層はⅣ層に対応するとも思われるが、確実ではない。灰色粗粒砂の下位には粗粒砂が堆積し、同層中において、部分的な遺構・遺物の有無確認を実施したが、遺構、遺物は検出されなかった。粗粒砂層より下位の堆積層の確認は実施していないので、古墳時代以前の遺構・遺物の存在については不明である。

出土遺物

出土遺物はごく希薄であったものの、層序関係から、SD05、SD04 が古代、SD03 と方形土坑 SK01（SD03 と同一面において検出）、平行する SD01・02 が近世～近代に帰属すると考えられる。

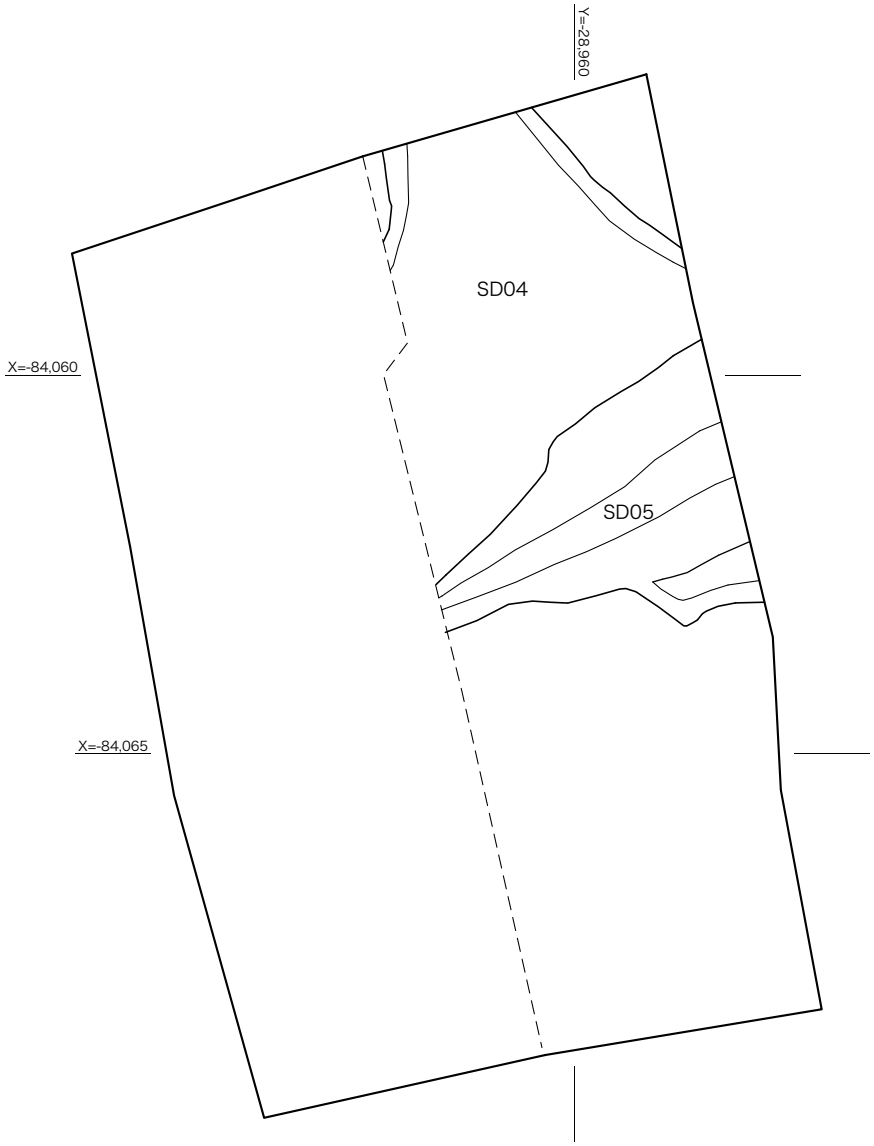


1 5Y5/1 灰色シルト
2 7.5Y3/1 オリーブ黒色粘土、5Y4/1 灰色シルト斑入
3 7.5Y4/1 灰色シルトと 5Y4/1 灰色シルトの斑土、炭化物少量混
4 7.5Y4/1 灰色粘土、5Y5/1 灰色粘土斑入
5 5Y4/1 灰色シルトと 7.5Y4/1 灰色シルトの斑土
6 7.5Y4/1 灰色粘土と 5Y4/1 灰色粘土の斑土
7 5Y4/1 灰色シルト、7.5Y4/1 灰色細粒砂斑入
8 5Y3/2 オリーブ黒色シルト、5Y6/1 灰色細粒砂斑入
9 5Y3/2 オリーブ黒色シルト
10 5Y5/1 灰色シルト、焼土混じる
11 5Y4/2 灰オリーブ色シルト
12 5Y4/1 黄灰色シルト、5Y5/1 灰色粘土斑入
13 2.5Y4/2 暗灰黄色細粒砂
14 10Y4/1 灰色シルト
15 7.5Y5/1 灰色砂質シルト
16 5YR5/1 褐灰色粘質シルト、5Y8/1 灰白色細粒砂斑入
17 5Y5/1 灰色粘質シルト
18 5Y5/1 灰色粘質シルト
19 5YR5/1 褐灰色粘質シルト
20 7.5Y5/1 灰色粗粒砂
21 7.5YR5/1 褐灰色中粒砂、5YR5/1 褐灰色粘質シルト斑入
22 5Y4/2 灰オリーブ色シルト
23 10YR4/4 褐色砂質シルト
24 5Y5/1 灰色細粒砂
25 7.5Y5/1 灰色粗粒砂
26 7.5Y5/1 灰色粗粒砂

第195図　J 区東壁土層断面図（縦1:50／横1:100）



写真76　J 区東壁土層断面



第196図　Ｊ区古代遺構図（1:100）

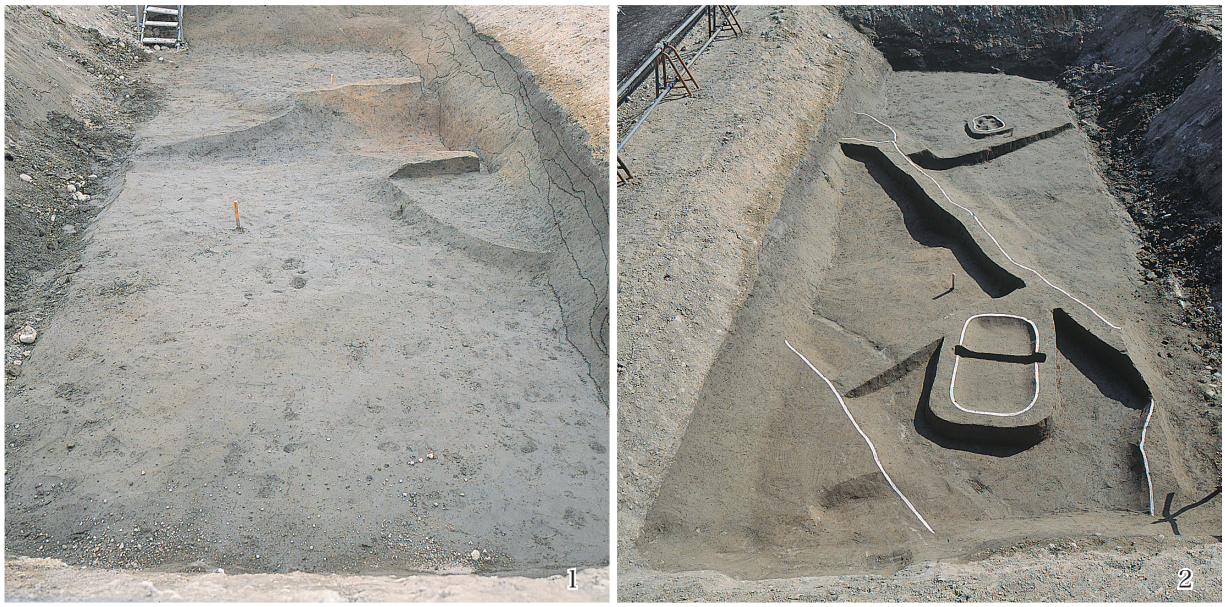
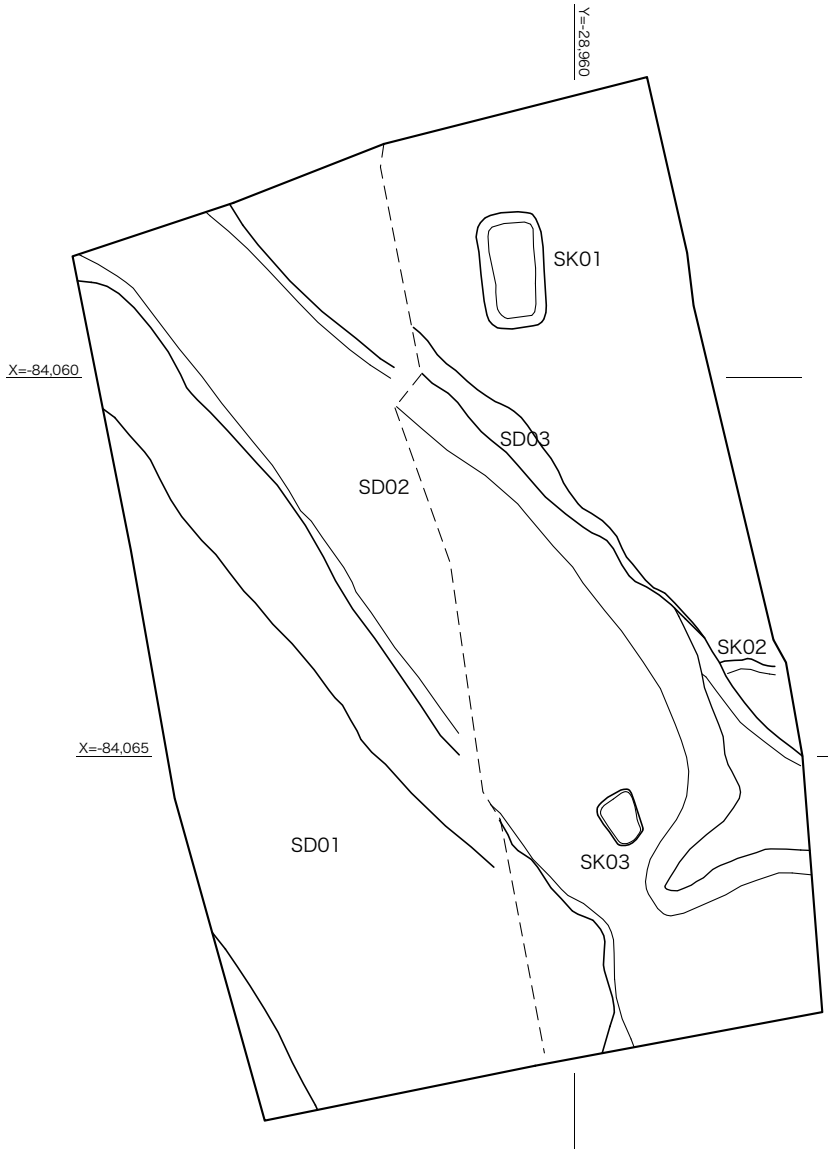


写真77　Ｊ区古代／近世遺構全景

1：東半古代遺構全景　2：東半近世遺構全景

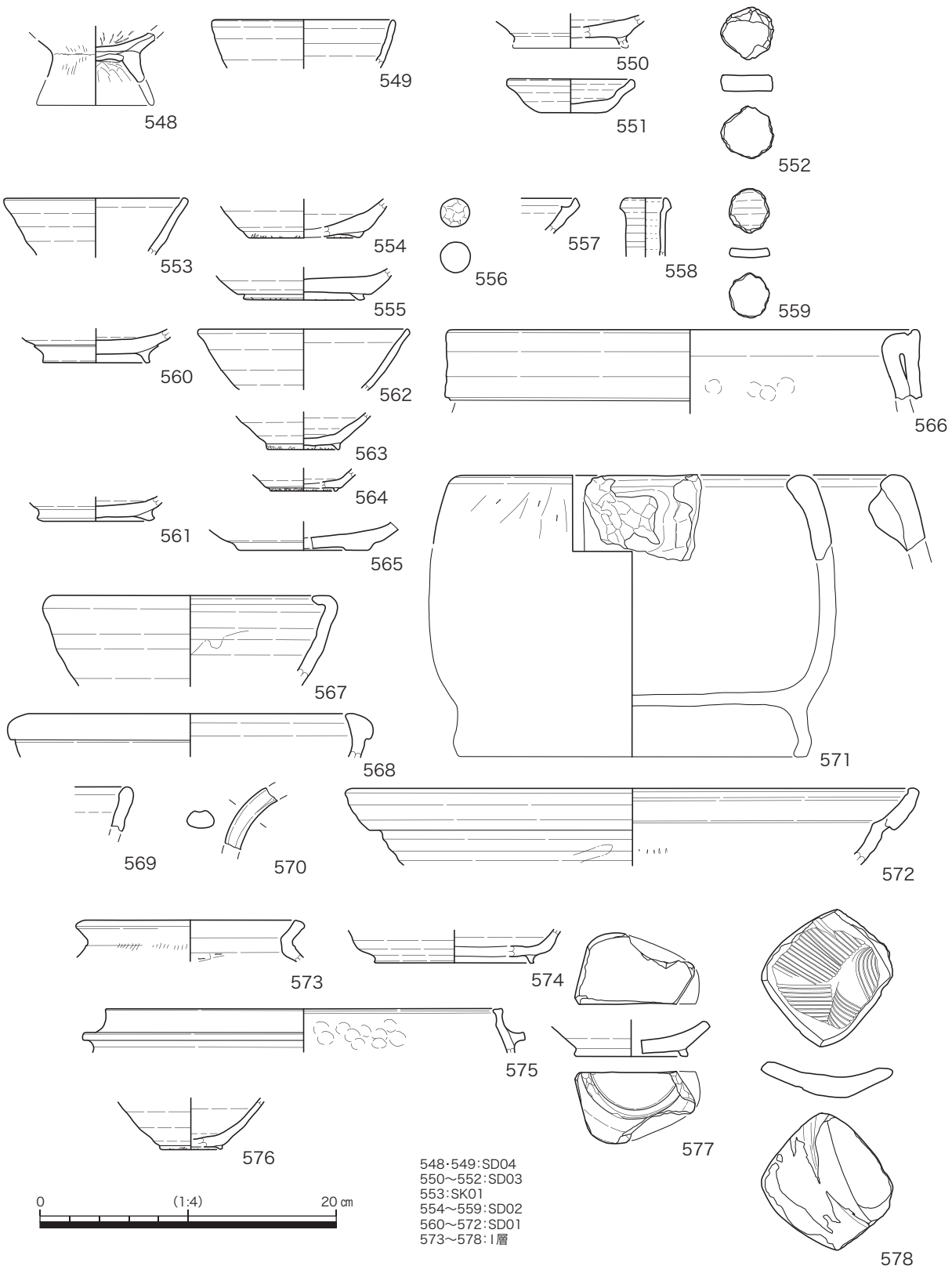


第197図　J区近世～近代遺構図（1:100）

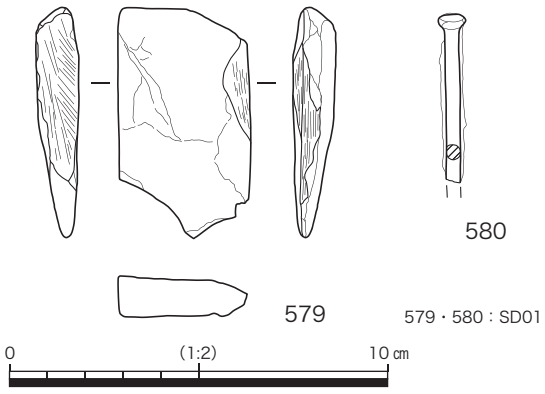


写真78　J区中世～近代遺構全景

1：西半近世遺構全景　2：西半近代遺構全景



第198図　J区出土遺物実測図（1:4）



第199図　J区出土石製品・金属製品実測図（1:2）

549はSD04出土の無台杯で折戸10号窯式、550～552はSD03出土で、550は古瀬戸後Ⅱ期の折縁小皿、553はSK01から出土した尾張型第10型式の山茶碗である。SD01・02からは中世～近世の遺物が出土する。571は産地不明の陶器で、内面に煤が付着することから竈と考えられる。名古屋市名古屋城三の丸遺跡愛知県警察本部地点SK101などに類例がある。577は灰釉陶器、578は瀬戸美濃陶器擂鉢をそれぞれ利用した転用砥具である。

（12）K区

層序と検出遺構

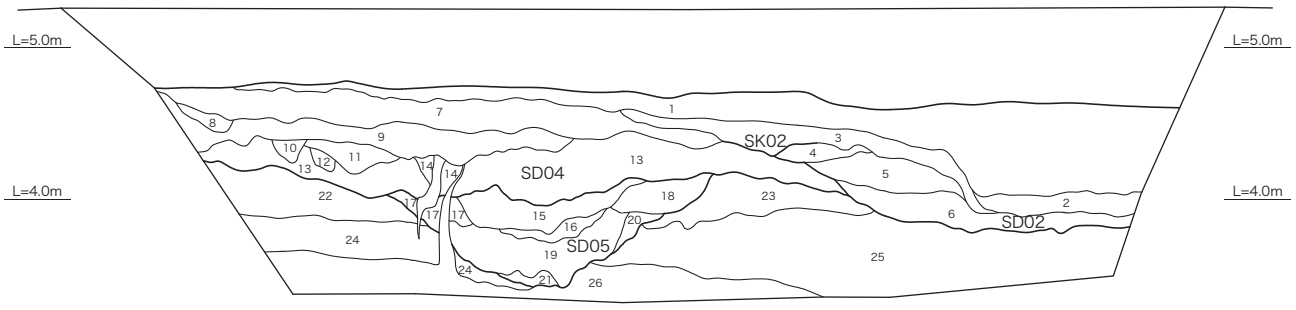
K区ではⅠ層に対応する暗灰黄色シルト層の上位で近世～近代の遺構、同層の下位で中世の遺構を検出したが、表土以下の各層は暗灰黄～黒褐色を呈していて、土壌が還元状況下にあったような状況を示していた（第200図）。

近世～近代

近世～近代の遺構は、南北に通じるSD01など、用水路とそれに関係する遺構を検出したのみで、その下位においても中世以降と推定される土坑（SK01～07）を検出したのみである（第201図）。出土遺物としてもⅠ層中から出土した東濃型大畑大洞窯式の山茶碗（581・582）、大洞東窯式の山茶碗（583）、古瀬戸後Ⅰ期の天目茶碗（584）などの中世陶器がわずかにあるにすぎない。

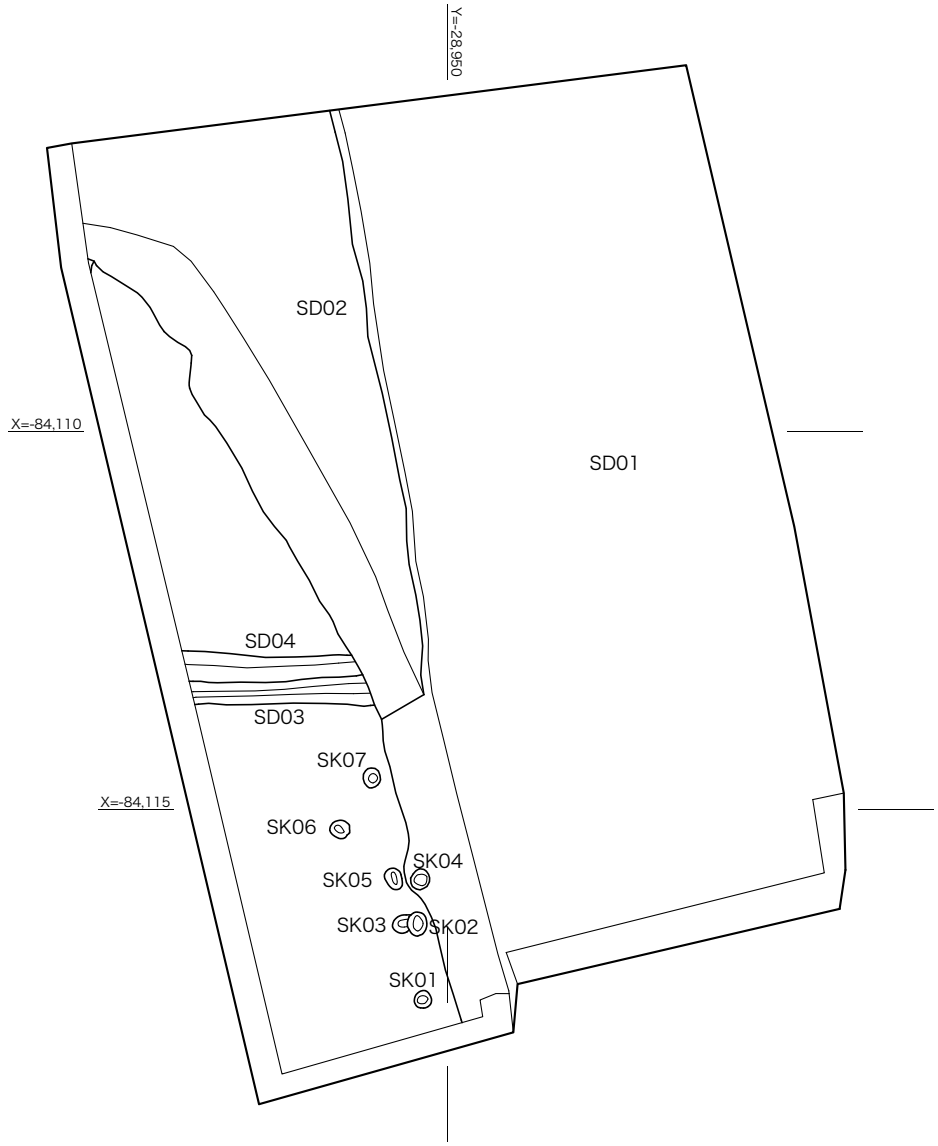
出土遺物

暗灰黄色シルト層の下位には灰色粘土層が厚く堆積していることを確認し、わずかに須恵器などの包含を確認したものの、激しい湧水によって、面的な調査は断念せざるをえなかった。



1　5Y5/1 灰色シルト
2　7.5Y3/1 オリーブ黒色粘土、5Y4/1 灰色シルト斑入
3　7.5Y4/1 灰色シルトと 5Y4/1 灰色シルトの斑土、炭化物少量混
4　7.5Y4/1 灰色粘土、5Y5/1 灰色粘土斑入
5　5Y4/1 灰色シルトと 7.5Y4/1 灰色シルトの斑土
6　7.5Y4/1 灰色粘土と 5Y4/1 灰色粘土の斑土
7　5Y4/1 灰色シルト、7.5Y4/1 灰色細粒砂斑入
8　5Y3/2 オリーブ黒色シルト、5Y6/1 灰色細粒砂斑入
9　5Y3/2 オリーブ黒色シルト
10　5Y5/1 灰色シルト、焼土混じる
11　5Y4/2 灰オリーブ色シルト
12　5Y4/1 黄灰色シルト、5Y5/1 灰色粘土斑入
13　2.5Y4/2 暗灰黄色細粒砂
14　10Y4/1 灰色シルト
15　7.5Y5/1 灰色砂質シルト
16　5YR5/1 褐灰色粘質シルト、5Y8/1 灰白色細粒砂斑入
17　5Y5/1 灰色粘質シルト
18　5Y5/1 灰色粘質シルト
19　5YR5/1 褐灰色粘質シルト
20　7.5Y5/1 灰色粗粒砂
21　7.5YR5/1 褐灰色中粒砂、5YR5/1 褐灰色粘質シルト斑入
22　5Y4/2 灰オリーブ色シルト
23　10YR4/4 褐色砂質シルト
24　5Y5/1 灰色細粒砂
25　7.5Y5/1 灰色粗粒砂
26　7.5Y5/1 灰色粗粒砂

第200図　K区西壁土層断面図（縦1:50／横1:100）

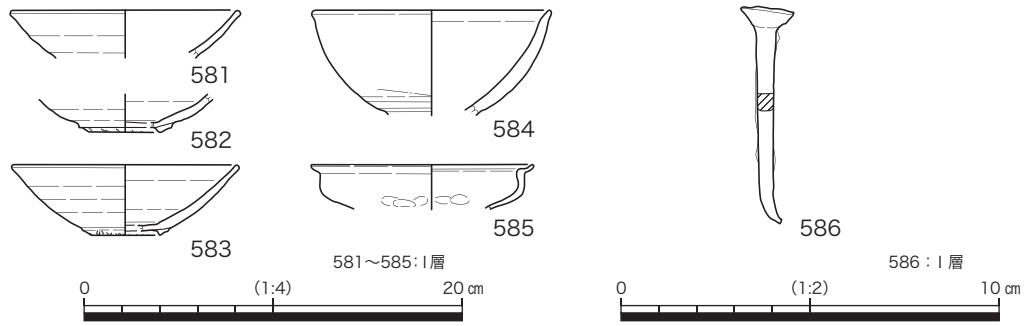


第201図　K区近世～近代遺構図（1:100）



写真79　K区近世～近代遺構／土層断面

1：近世～近代遺構全景　2：南壁土層断面



第202図　K区出土遺物実測図（1:4／1:2）

文献

楢崎彰一・斎藤孝正1983「猿投窯の編年について」『愛知県古窯跡群分布調査報告（Ⅲ）』愛知県教育委員会

斎藤孝正1989「古墳時代の猿投窯」『第６回東海埋蔵文化財研究会　断夫山古墳とその時代』愛知考古学談話会

赤塚次郎1990「考察」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集　財団法人愛知県埋蔵文化財センター

城ヶ谷和広他1990『清洲城下町遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第17集　財団法人愛知県埋蔵文化財センター

城ヶ谷和広1991「古代尾張の土師器～６世紀後半から11世紀の様相～」『年報』平成２年度　財団法人愛知県埋蔵文化財センター

藤澤良祐1991「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第３号　三重県埋蔵文化財センター

宮腰健司編1991『大淵遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第18集　財団法人愛知県埋蔵文化財センター

藤澤良祐1991「古瀬戸後期様式の編年」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ｘ』瀬戸市歴史民俗資料館

遠藤才文編1993『名古屋城三の丸遺跡（Ⅳ）―愛知県警察本部地点の調査―』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第44集　財団法人愛知県埋蔵文化財センター

赤塚次郎1994「松河戸様式の設定」『松河戸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第48集　財団法人愛知県埋蔵文化財センター

中野晴久1995「生産地における編年について」『常滑焼と中世社会』小学館

藤澤良祐1995「瀬戸古窯址群Ⅲ―古瀬戸前期様式の編年―」『財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第３輯　財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター

赤塚次郎・早野浩二2001「松河戸・宇田様式の再編」『研究紀要』第２号　財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター

蔭山誠一他2002『八王子遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第92集　財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター

藤澤良祐2002「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第10輯　財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター

財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター2002『江戸時代の瀬戸窯』